岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第559集

戸仲（とちゅう）遺跡第３次発掘調査報告書

一般国道106号簗川道路起点部改良工事関連遺跡発掘調査

２００９

岩手県盛岡地方振興局土木部
簗川ダム建設事務所

（財）岩手県文化振興事業団

戸仲遺跡第３次発掘調査報告書

一般国道106号簗川道路起点部改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道106号簗川道路起点部改良工事に関連して平成20年度に発掘調査された盛岡市戸仲遺跡第３次調査の成果をまとめたものです。本遺跡は縄文時代後期の配石遺構が存在することで知られておりましたが、今回の調査では縄文時代中期後葉から末葉の竪穴住居群が確認されました。これは、本遺跡のみならず、簗川流域における縄文期の集落様相や変遷を考える上で貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　武田牧雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県盛岡市川目第４地割51－３ほかに所在する戸仲遺跡第３次調査の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、一般国道106号簗川道路起点部改良工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所の委託を受けた(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡台帳における遺跡番号は「LE28－0232」、遺跡略号は「YTT－08－03」である。

4　調査に関わる期間、面積、担当者は次のとおりである。

野外調査

期間：平成20年４月11日～６月17日／面積：1,500㎡／担当者：丸山浩治、菅野紀子

室内整理

期間：平成20年５月27日～８月１日・９月16日～22日・10月１日～20日・11月４日～14日

担当者：不在（作業員２名のみ）

平成20年11月17日～平成21年２月13日／担当者：菅野紀子

5　報告書の執筆は、第Ⅰ章を岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所、Ⅱ～Ⅵ章の一部を丸山が行い、それ以外は編集・構成を含め菅野が担当した。

6　石器石材鑑定は、花崗岩研究会に委託した。

7　調査および報告書作成にあたり、次の方々及び機関から御指導・御助言をいただいた（順不同・敬称略）。

八木勝枝（岩手県立博物館）、菅野智則（東北大学）、盛岡市教育委員会

8　発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

9　調査成果は当センターホームページ、調査概報等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　　例

1　遺構実測図の用例は下記のとおりである。

（1）　遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

竪穴住居・土坑・陥し穴状遺構→1/50

焼土遺構・配石遺構・集石遺構・埋設土器遺構・柱穴状土坑→1/30

溝→1/100（平面）・1/50（断面）

（2）　推定線は破線で示した。

（3）　層位の表記には、基本層序にローマ数字、各遺構埋土に算用数字を使用した。

（4）　土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。混入物量（%）の目安もこれを参考にした。

（5）　図面中の土器は「p」、石器および礫は「s」の略号で表記した。

（6）　挿図中で使用した網掛けおよびスクリーントーンの主な用例は凡例図のとおりである。これ以外の使用箇所については各図に用例を表記した。

2　遺物実測図の用例は下記のとおりである。

（1）　各遺物の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

縄文土器→1/3、土製品→1/2

剥片石器→2/3、礫石器・石製品→1/3

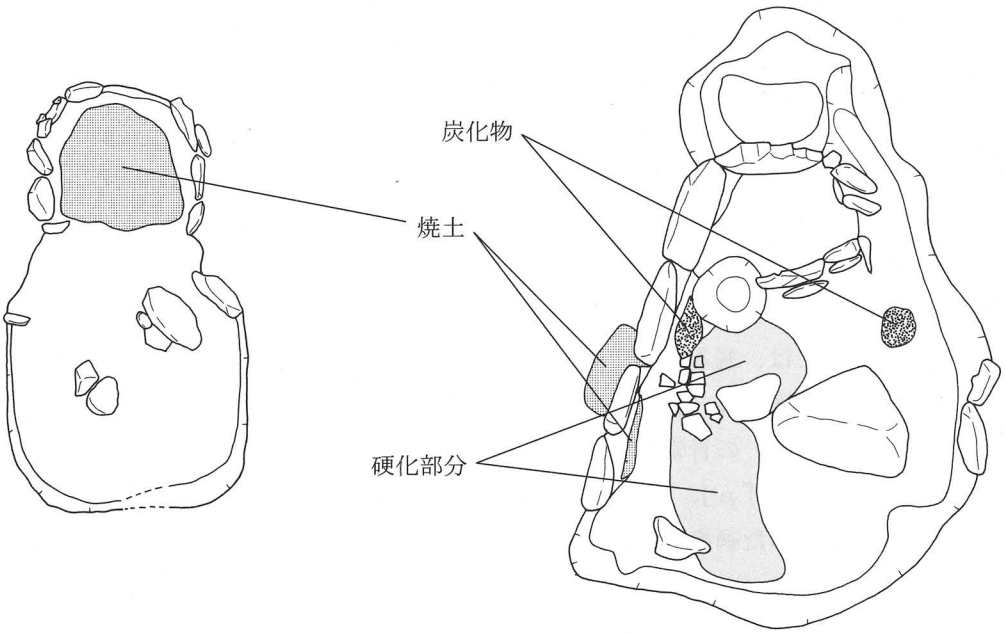
須恵器・陶器・鉄製品→1/1

（2）　遺物の計測位置およびスクリーントーンの用例は凡例図のとおりである。計測値は、残存値の場合（　）で表記した。

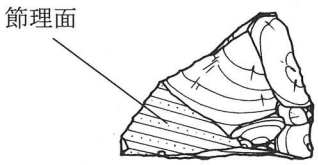
3　国土地理院発行の地形図を転載したものは、図中に図幅名と縮尺を付した。

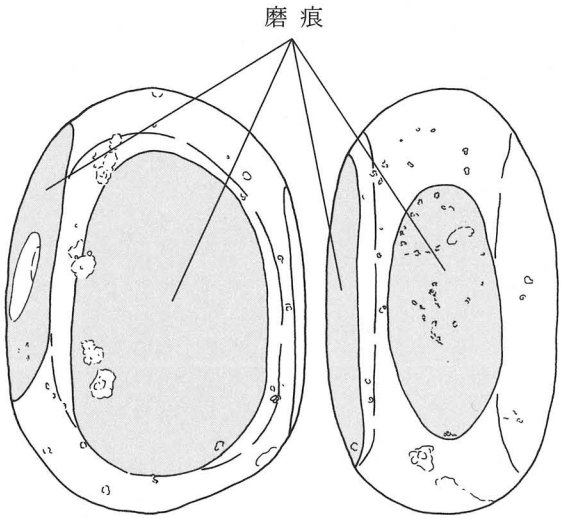
4　引用・参考文献は巻末にまとめて記した。

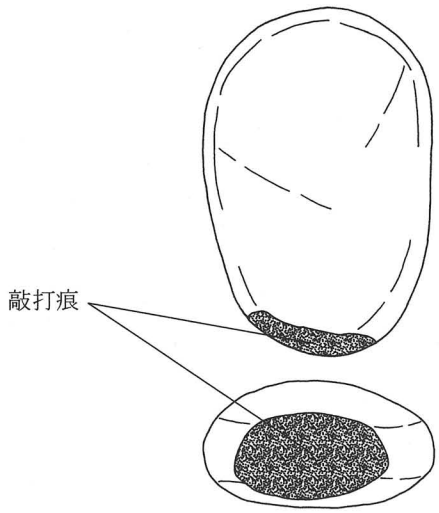
遺構図



遺物図







凡例図

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 1

1　遺跡の位置 …… 1
2　地形と地質 …… 1
3　基本層序 …… 3
4　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調査と整理の方法 …… 8

1　野外調査 …… 8
2　室内整理 …… 10

Ⅳ　検出遺構 …… 13

1　竪穴住居 …… 13
2　土坑・陥し穴状遺構 …… 18
3　焼土遺構 …… 27
4　配石・集石遺構 …… 28
5　埋設土器遺構 …… 29
6　柱穴状土坑 …… 30
7　溝 …… 30

Ⅴ　出土遺物 …… 49

1　概　　要 …… 49
2　縄文土器 …… 49
3　土製品 …… 52
4　石　　器 …… 53
5　石製品 …… 54
6　須恵器・陶器・銭貨・植物遺存体 …… 54

Ⅵ　総　　括 …… 85

1　遺　　構 …… 85
2　遺　　物 …… 86
3　選地について―今後の課題も含めて― …… 88
報告書抄録 …… 141

図版目次

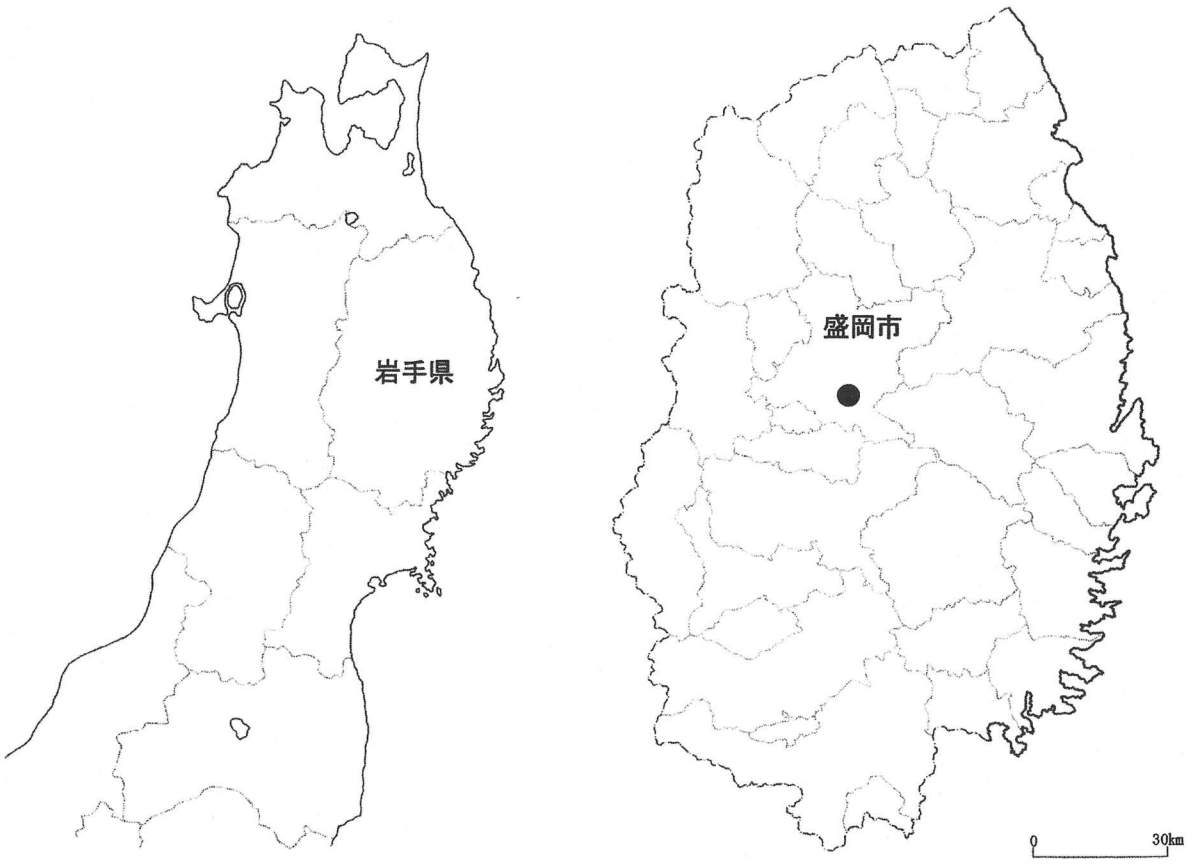
第１図　遺跡の位置
第２図　周辺の地形 …… 2
第３図　基本層序 …… 4
第４図　周辺の遺跡 …… 6
第５図　戸仲遺跡第３次調査遺構配置図 …… 12
第６図　ＲＡ001竪穴住居 …… 31
第７図　ＲＡ002竪穴住居 …… 32
第８図　ＲＡ003竪穴住居（１） …… 33
第９図　ＲＡ003竪穴住居（２） …… 34
第10図　ＲＡ004竪穴住居（１） …… 35
第11図　ＲＡ004竪穴住居（２） …… 36
第12図　ＲＡ005・006竪穴住居 …… 37
第13図　ＲＡ007竪穴住居 …… 38
第14図　ＲＡ008竪穴住居 …… 39
第15図　ＲＤ013～016土坑 …… 40
第16図　ＲＤ018～024陥し穴状遺構 …… 41
第17図　ＲＤ017土坑、ＲＤ025～027・031陥し穴状遺構、ＲＦ012焼土遺構 … 42
第18図　ＲＤ028～030・032・033陥し穴状遺構、柱穴状土坑（Ｐ７） …… 43
第19図　ＲＤ034～036陥し穴状遺構、ＲＤ037土坑 …… 44
第20図　ＲＦ009～011焼土遺構、ＲＨ011配石遺構 …… 45
第21図　ＲＨ012配石遺構、ＲＨ013集石遺構、ＲＰ002埋設土器遺構 …… 46
第22図　柱穴状土坑（Ｐ１～Ｐ６） …… 47
第23図　ＲＧ001溝 …… 48
第24図　遺構内出土土器（１） …… 55
第25図　遺構内出土土器（２） …… 56
第26図　遺構内出土土器（３） …… 57
第27図　遺構内出土土器（４） …… 58
第28図　遺構内出土土器（５） …… 59
第29図　遺構内出土土器（６） …… 60
第30図　遺構内出土土器（７） …… 61
第31図　遺構内出土土器（８） …… 62
第32図　遺構内出土土器（９） …… 63
第33図　遺構内出土土器（10） …… 64
第34図　遺構外出土土器 …… 65
第35図　土製品 …… 66
第36図　遺構内出土石器（１） …… 67
第37図　遺構内出土石器（２） …… 68
第38図　遺構内出土石器（３） …… 69
第39図　遺構内出土石器（４） …… 70
第40図　遺構内出土石器（５） …… 71
第41図　遺構内出土石器（６） …… 72
第42図　遺構内出土石器（７） …… 73
第43図　遺構内出土石器（８）、遺構外出土石器（１） …… 74
第44図　遺構外出土石器（２） …… 75
第45図　遺構外出土石器（３） …… 76
第46図　遺構外出土石器（４）、石製品（１） … 77
第47図　石製品（２）、須恵器、陶器、銭貨 …… 78

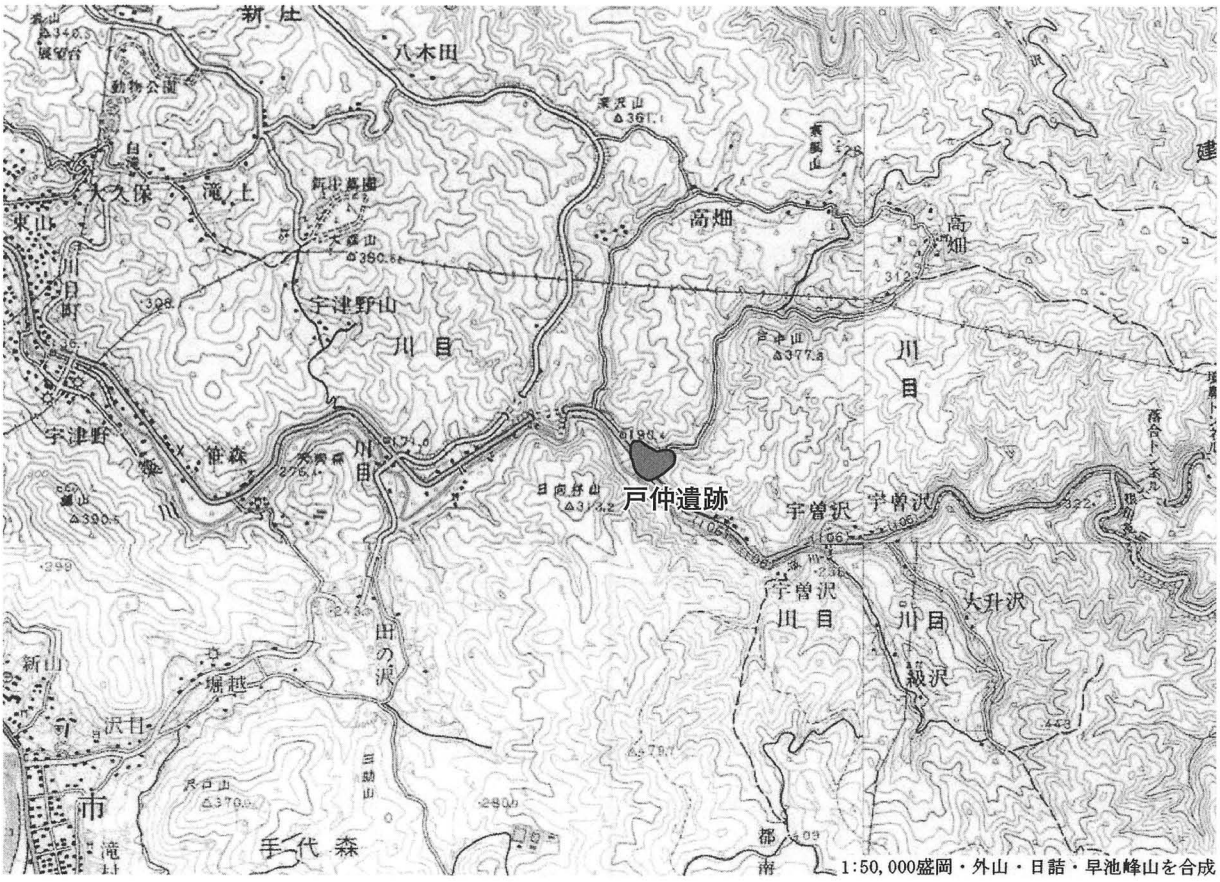
表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 7
第２表　第１～３次調査遺構番号表 …… 9
第３表　第３次調査における新旧遺構対照表 … 10
第４表　縄文土器観察表 …… 79
第５表　石器観察表 …… 82
第６表　土製品観察表 …… 84
第７表　石製品観察表 …… 84
第８表　須恵器観察表 …… 84
第９表　陶器観察表 …… 84
第10表　銭貨観察表 …… 84

写真図版目次

写真図版１　航空写真 …… 95
写真図版２　調査前風景、試掘風景、基本層序… 96
写真図版３　ＲＡ001竪穴住居 …… 97
写真図版４　ＲＡ002竪穴住居 …… 98
写真図版５　ＲＡ003竪穴住居（１） …… 99
写真図版６　ＲＡ003竪穴住居（２） …… 100
写真図版７　ＲＡ004竪穴住居（１） …… 101
写真図版８　ＲＡ004竪穴住居（２） …… 102
写真図版９　ＲＡ005竪穴住居 …… 103
写真図版10　ＲＡ006竪穴住居 …… 104
写真図版11　ＲＡ007竪穴住居 …… 105
写真図版12　ＲＡ008竪穴住居 …… 106
写真図版13　ＲＤ013～016土坑 …… 107
写真図版14　ＲＤ017土坑、
ＲＤ018～021・025陥し穴状遺構… 108
写真図版15　ＲＤ022～024・026陥し穴状遺構… 109
写真図版16　ＲＤ027～030陥し穴状遺構 …… 110
写真図版17　ＲＤ031～035陥し穴状遺構 …… 111
写真図版18　ＲＤ035・036陥し穴状遺構、
ＲＤ037土坑、ＲＦ009焼土遺構 … 112
写真図版19　ＲＦ010～012焼土遺構 …… 113
写真図版20　ＲＨ011・012配石遺構・
ＲＨ013集石遺構 …… 114
写真図版21　ＲＰ002埋設土器遺構、ＲＧ001溝、
現地公開風景 …… 115
写真図版22　遺構内出土土器（１） …… 116
写真図版23　遺構内出土土器（２） …… 117
写真図版24　遺構内出土土器（３） …… 118
写真図版25　遺構内出土土器（４） …… 119
写真図版26　遺構内出土土器（５） …… 120
写真図版27　遺構内出土土器（６） …… 121
写真図版28　遺構内出土土器（７） …… 122
写真図版29　遺構内出土土器（８） …… 123
写真図版30　遺構内出土土器（９） …… 124
写真図版31　遺構外出土土器 …… 125
写真図版32　土製品 …… 126
写真図版33　遺構内出土石器（１） …… 127
写真図版34　遺構内出土石器（２） …… 128
写真図版35　遺構内出土石器（３） …… 129
写真図版36　遺構内出土石器（４） …… 130
写真図版37　遺構内出土石器（５） …… 131
写真図版38　遺構内出土石器（６） …… 132
写真図版39　遺構内出土石器（７） …… 133
写真図版40　遺構内出土石器（８） …… 134
写真図版41　遺構内出土石器（９） …… 135
写真図版42　遺構内出土石器（10） …… 136
写真図版43　遺構外出土石器（１） …… 137
写真図版44　遺構外出土石器（２）、
石製品（１） …… 138
写真図版45　石製品（２） …… 139
写真図版46　須恵器、陶器、銭貨、植物遺存体… 140





第１図　遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経過

戸仲遺跡（第３次調査区）は、「道路改良事業簗川道路」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道106号は、宮古市を起点とし、盛岡市へ至る主要幹線道路であり、東北縦貫自動車道と三陸縦貫自動車道の高規格幹線道路と一体となって全国的な広域交通ネットワークを形成する地域高規格道路「宮古盛岡横断道路」に指定されている。

簗川道路は、簗川ダム建設に伴う付替国道としての位置付けのほか、現道の急カーブ・幅員狭小などの隘路を解消し、主要幹線道路としての機能確保のために平成７年度に整備区間に指定され事業着手したものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所から平成19年２月１日付盛地土簗第105号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成19年２月８日に試掘調査を実施し、工事着手するには戸仲遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成19年２月13日付教生第1510号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事務所へ回答をしてきた。

その結果を踏まえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成20年４月２日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡の位置（第１図）

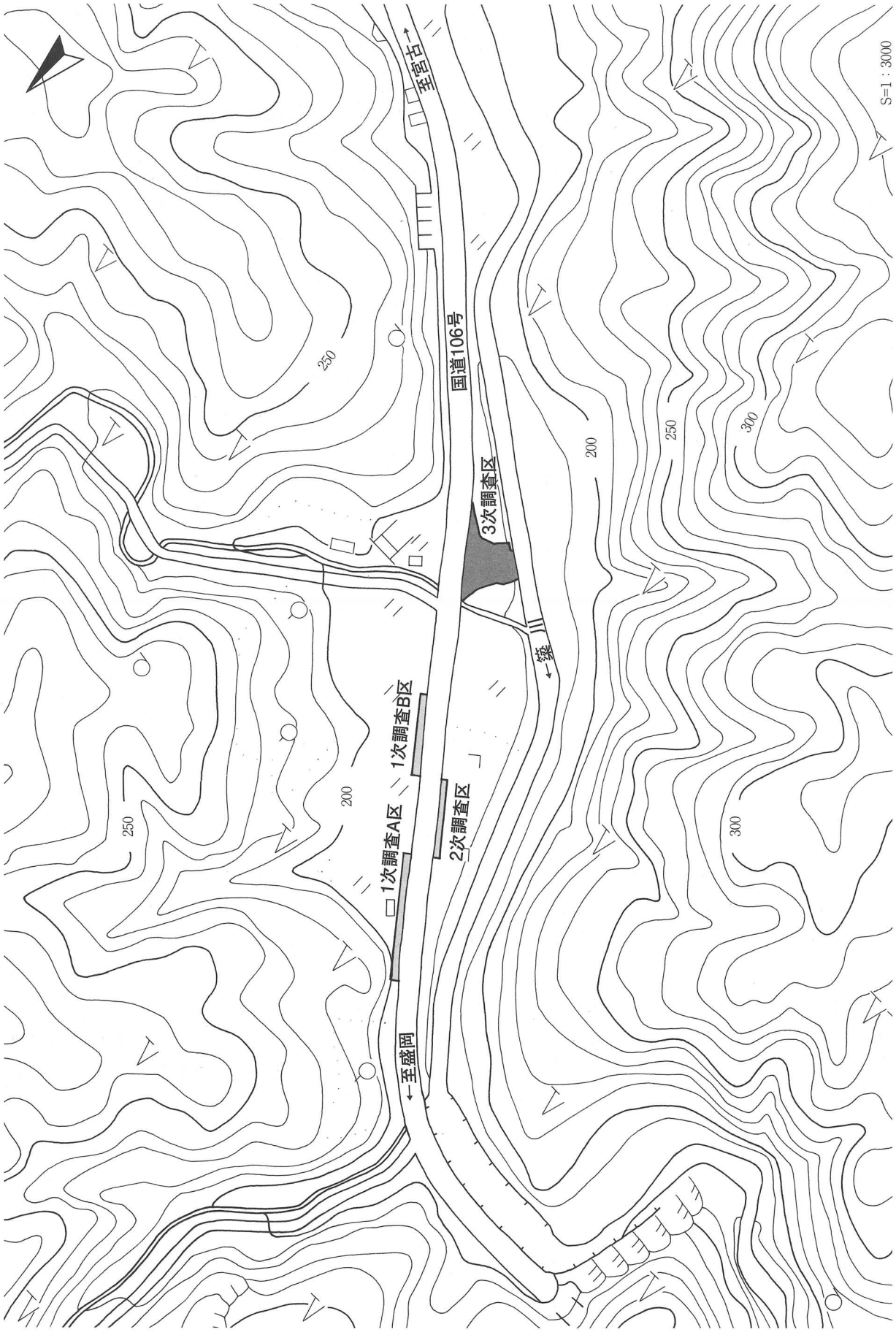
戸仲遺跡が所在する盛岡市は岩手県のほぼ中央に位置する。近世初期に盛岡藩が設置されて以来、その城下町として栄え、発展してきた街であり、岩手県の県庁所在地である。平成18年には北に隣接する玉山村と合併し、総面積888.47㎢、人口は30万人を越え、平成20年４月１日に中核市の指定を受けている。

遺跡は、盛岡市川目第４地割51－３ほかに所在し、JR東北本線盛岡駅の南東約8.7kmに位置する。川目地区は市の東部にあたり、北上山地の北西部に位置する。地形図上では、国土地理院発行の２万５千分の一地形図「盛岡」（ＮＪ－54－13－14－2）の図幅に含まれ、北緯39度40分25秒、東経141度13分45秒に位置している。

２　地形と地質（第２図）

（１）地　　形

戸仲遺跡のある盛岡市東部は、地質構造上、北上山地の主要な境界となる早池峰構造体の西縁部にあたる。盛岡市東部の早池峰構造体に属する山地は、高森山（標高626m）を中心とする高森山山地と、



第２図　周辺の地形

朝島山（標高607m）を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらに西に続く大日向山山地、岩山（標高341m）や大森山（標高381m）を含む建石山山地などの小起伏山地、および四十四田丘陵で構成される。これらの山地縁辺には、中津川・簗川・乙部川などの北上川支流の河川や、山間部から流れるその支流や沢などにより浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達する。

戸仲遺跡は、北に建石山山地、南に朝島山山地などの小・中起伏山地に囲まれ、これらの山間部を流れる簗川やその支流などによってできた小規模な低位段丘上にある。第３次調査区は、戸中山から流れる沢と簗川の合流地点に位置する。さらに詳述すると、調査区は、簗川によって形成された小規模な低位段丘の端にあたる上段部分と、簗川の旧河道にあたる下段部分とに分けられる。縄文時代の遺構を検出した上段部分は南西向きの緩斜面で、標高は190m前後である。

（２）地　　質

遺跡の所在する川目地区を含む盛岡市東部の早池峰構造体の古生界の岩層は、チャート・チャートラミナイト珪質頁岩などを伴う他地域と異なり、砂子沢層・川目層にみられるような、おもに頁岩・砂岩・塩基性の火山岩類で基盤が構成され、これに表層堆積物として泥岩・輝緑凝灰岩がみられる。

３　基　本　層　序（第３図）

本遺跡は簗川右岸からその北東側丘陵麓までが範囲とされており、立地は簗川の開析作用を基準としたばあい、３種に大別されるものと考えられる。すなわち、①簗川岸の河岸低地部、②その北東縁に広がる段丘部、③さらにその北東縁の丘陵麓部である。これに北東側丘陵から流れる小河川による開析・堆積作用が加わり、さらに近・現代の大規模な開田等による地形改変を受けた上で現地形が形成されている。今次調査区は前記の①と②にあたっており、これは現地形からも確認され、便宜的に①を下段、②を上段と呼称した。上段と下段では土層堆積様相が全く異なる。
以下、基本層序を示す。確認地点は第５図に記載している。

基本層序：上段（A－A'）

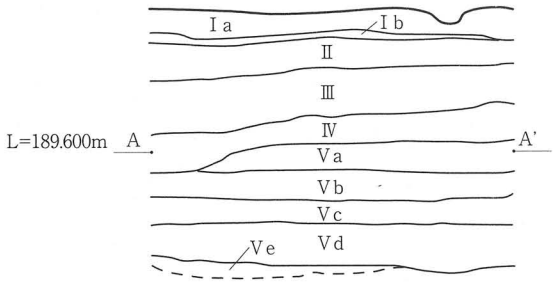
Ⅰａ層：10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 現表土
Ⅰｂ層：7.5YR3/2黒褐色シルト 粘性強・しまり強 水田床土 鉄分沈着
Ⅱ　層：10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中 破砕礫(～1cm)5% 旧表土
Ⅲ　層：10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
Ⅳ　層：10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土(5:5) 粘性中・しまり中
Ⅴａ層：10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト 粘性弱･しまり中
Ⅴｂ層：10YR3/1黒褐色シルト 粘性中・しまり中
Ⅴｃ層：10YR4/4褐色シルト 粘性中・しまり中
Ⅴｄ層：10YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中
Ⅴｅ層：7.5YR3/2黒褐色シルト 粘性中・しまり中
Ⅵ　層：砂礫層　層厚不明

基本層序：下段（B－B'）

Ⅰａ層：上段Ⅰａ層と共通
Ⅰｂ層：上段Ⅰｂ層と共通
*Ⅱａ*層：10YR4/2灰黄褐色砂質シルト 粘性弱・しまり中
*Ⅱｂ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中 円礫(～2cm)10%
*Ⅱｃ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中
*Ⅱｄ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中 円礫(～2cm)10%
*Ⅱｅ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中
*Ⅱｆ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中 円礫(～10cm)20%
*Ⅱｇ*層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中
Ⅲ　層：2.5Y4/2暗灰黄色砂 粘性なし・しまり中 円礫(～50cm)80% 河床面　層厚不明

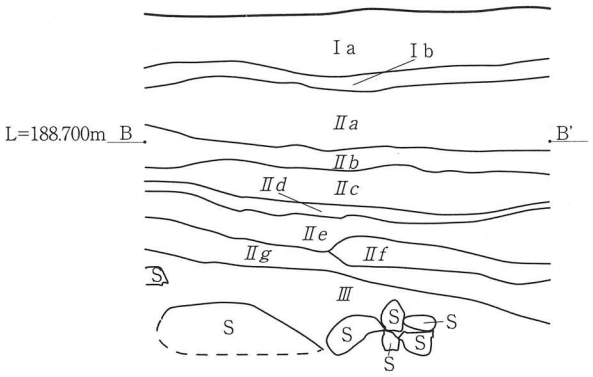
※下段Ⅱ層以下は上段と区別するため斜体で表記する。

基本層序　上段

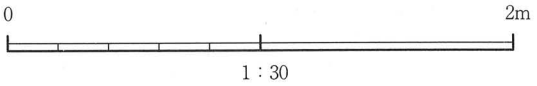


Ia.　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　現表土
Ib.　7.5YR3/2　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　水田床土　鉄分沈着層
Ⅱ.　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）5％
Ⅲ.　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
Ⅳ.　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中
Va.　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中
Vb.　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
Vc.　10YR4/4　褐色　シルト　粘性中・しまり中
Vd.　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
Ve.　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中

基本層序　下段



Ⅰa.　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　現表土
Ⅰb.　7.5YR3/2　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　水田床土　鉄分沈着層
Ⅱa.　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中
Ⅱb.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中　礫（～2cm）10%
Ⅱc.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中
Ⅱd.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中　礫（～2cm）10%
Ⅱe.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中
Ⅱf.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中　礫（～10cm）20%
Ⅱg.　2.5Y4/2　暗灰黄色　砂　粘性なし・しまり中
Ⅲ.　10YR4/2　灰黄褐色　砂　粘性なし・しまり中　礫（～50cm）80%　旧河床面



第3図　基本層序

上段はシルトから砂質シルトの堆積が連続しており、如実な不整合面はみられない。旧微地形は全体的に北東から南西へ緩く下る地形であり、現代の水田耕作に関わる地形改変により削平され、平坦化されている。よって、段丘縁である南西端（上段と下段の境）の残存状況が最も良好で、逆に北東端（国道106号脇）はⅡ～Ⅳ層が欠落している。上段における遺構検出面は、Ⅲ層からⅤ層の各層理面で、最終検出面はⅤ層上位である。いっぽう、下段は色調の異なる砂層の堆積が交互に続き、Ⅲ層で河床面と考えられる砂礫層となる。本層までの各層には縄文土器から近世陶磁器まで各時代の遺物が散在する。よって、下段は近世（のある時期）まで簗川河道であったと捉えられる。最終遺構検出面はⅢ層上面である。

4　周辺の遺跡（第4図、第1表）

平成20年3月現在、岩手県遺跡情報検索システムに登録されている盛岡市内の遺跡は740箇所である。このうち、縄文時代の遺跡は464箇所を数え、北上川やその支流の河川、山間部から流れる沢などにより浸食された丘陵地や中位・低位の段丘上で多く確認されている。

第4図および第1表には、簗川流域とその周辺地域において、縄文時代の遺構あるいは遺物が確認されている138箇所の遺跡の位置を示した。以降、縄文時代の遺跡について記述する。

簗川は、盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる桐ノ木山（1,209m）北西支陵より流れ、最大支流である根田茂川と合流して水量を増し、盛岡市安庭付近で北上川と合流する。簗川は急流で知られ、その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して、流域沿いに中・小規模な低位段丘面や谷底平野を形成する。

上流域の簗川地区や根田茂川流域では、小規模な谷底平野や崖水性扇状地などで遺跡が確認されている。現在まで本格的な調査は行われていないが、『盛岡市史』（草間1958）によると、簗川地区の待間口遺跡（93）、組木新田遺跡（94）からは晩期の土器が出土したことが知られている。根田茂川流域では、赤坂遺跡（104）で中期、手代木沢岩陰遺跡（106）で中～晩期、大上遺跡（107）で後期、鬼ヶ瀬山洞穴（90）で後期の土器などが出土している。この地域では、今後、新たな遺跡の存在や遺跡範囲の拡大が確認される可能性が十分に考えられる。

中～下流域では、小起伏山地の山麓や緩斜面地、中・小規模な低位～高位段丘上で遺跡が確認されている。早期～前期の遺跡では、宇曽沢遺跡（81）、川目A遺跡（75）、川目C遺跡（77）、小山遺跡（27）などがある。簗川左岸の低位段丘上に位置する川目A遺跡では、標高188～189mの高位面（第6次調査区）から、早期中葉（明神裏Ⅲ式）、前期前葉（大木2式）、前期後葉（大木5式）の竪穴住居、前期後葉（大木5式）を中心とする遺物包含層などが検出されている（岩文埋2009）。宇曽沢遺跡でも少量ながら早期中葉の土器が出土している（岩文埋2008）。

中期の遺跡では、川目C遺跡、川目A遺跡、小山遺跡、砂溜遺跡（28）、仁反田遺跡（41）などがある。簗川右岸の高位段丘上に位置する川目C遺跡では、大木7b～8b式期を主体とする多数の竪穴住居や土坑などが検出された。また、膨大な遺物とともに、ヒスイ製大珠やコハク原石、黒曜石製石器、天然アスファルトなど交易によってもたらされたと考えられるものも多数出土している。これらのことから、川目C遺跡は簗川流域における縄文時代中期の拠点的な集落と考えられている（津嶋1996）。簗川を挟んで対岸に位置する川目A遺跡でも、前述した第6次調査区から、複式炉を有する中期後葉～末葉の竪穴住居が検出されている。下流域に位置する小山・砂溜・仁反田・和田遺跡（41）は「小山遺跡群」として包括されているが、この遺跡群でも中期の遺構や遺物が多数確認されている。小山

第４図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	種別	特記事項
1	樋山田	散布地	縄文土器(後期)
2	薬師社脇	集落跡	縄文早期竪穴住居20棟、縄文土器(早・後・晩期)、99～01・07市教委により6次にわたる調査
3	アカトリ	散布地	縄文土器(中期)
4	前野	集落跡	縄文土器、土坑、95～97市教委調査
5	大塚	集落跡	縄文土器(後・晩期)
6	大久保	散布地	縄文土器(中・後期)
7	稲久保	集落跡	縄文土器(中期)、竪穴住居跡
8	柿ノ木平	集落跡	縄文中期の大集落、75～03まで市教委により40次にわたる調査
9	堰根	集落跡	縄文土器(早～晩期)、96～04市教委調査
10	向田	集落跡	縄文土器(早～晩期)、土坑、埋設土器、99～02市教委調査
11	寺沢	散布地	縄文土器(中・後期)
12	栗木平	散布地	縄文土器(中・後期)
13	エドコ山	散布地	縄文土器(中期)
14	大葛	集落跡	縄文後期竪穴住居3棟、縄文土器(早～後期)、87市教委調査
15	笹ノ平	散布地	縄文土器(早～晩期)
16	向	散布地	縄文土器
17	元信	散布地	縄文土器
18	よろこび	散布地	縄文土器
19	矢倉	散布地	縄文土器
20	小貝沢南	散布地	縄文土器
21	中津川Ⅲ	散布地	縄文土器
22	大慈寺	散布地	縄文土器
23	山王山	集落跡	縄文中期集落、縄文土器(中・後期)、98県埋文調査
24	鼻子	散布地	縄文土器(前期)
25	瀬戸	散布地	縄文土器(前期)
26	新庄	散布地	縄文土器(後期)
27	小山	集落跡	縄文土器(中期)、88市教委調査
28	砂溜	集落跡	縄文中期竪穴住居3棟、縄文土器(中期)、88市教委調査
29	金勢	散布地	縄文土器(中・後期)
30	見石	散布地	縄文土器(中・後期)
31	立石	散布地	縄文土器(中・後期)
32	沢田	散布地	縄文土器(前～晩期)
33	壇ケ森	散布地	縄文土器(中・後期)
34	門	散布地	縄文土器(中・後期)
35	宇津野	散布地	縄文土器
36	川目寺沢	散布地	縄文土器
37	たたら山	散布地	縄文土器
38	岩山南	散布地	縄文土器(早～後期)
39	白滝	散布地	縄文土器(中・後期)
40	和田	散布地	縄文土器
41	仁反田	集落跡	フラスコ状土坑、縄文土器(中期)、01市教委調査
42	滝ノ上A	散布地	縄文土器
43	滝ノ上B	散布地	縄文土器
44	下八木田	散布地	縄文土器(早～後期)
45	上八木田	散布地	縄文土器(中期)
46	八木田Ⅰ	集落跡	縄文前期～中期集落、縄文土器(前期)、91県埋文調査
47	八木田Ⅱ	集落跡	縄文土器(早・前・中・晩期)、91県埋文調査
48	八木田Ⅲ	集落跡	竪穴住居、縄文土器(後～晩期)、90県埋文調査
49	八木田Ⅳ	集落跡	土坑、縄文土器(中・後期)、90県埋文調査
50	八木田Ⅴ	集落跡	竪穴住居、フラスコ状土坑、縄文土器(早～晩期)、90県埋文調査
51	高畑A	散布地	縄文土器(中・後期)
52	高畑B	散布地	縄文土器(中・後期)
53	高畑C	散布地	縄文土器(前期)
54	泣坂	散布地	縄文土器(中・後期)
55	道違	散布地	縄文土器
56	ブナト	散布地	縄文土器(後期)
57	角下	散布地	縄文土器
58	新道Ⅰ	散布地	縄文土器、石鏃
59	新道Ⅲ	散布地	縄文土器(中期)
60	新道Ⅱ	散布地	縄文土器
61	都南学園	散布地	縄文土器(中期)
62	新山	散布地	縄文土器(早期)、石器
63	高寺Ⅰ	散布地	縄文土器
64	高寺Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)
65	金掘沢Ⅱ	散布地	縄文土器
66	金掘沢Ⅰ	散布地	縄文土器(後期)
67	堀越Ⅰ	散布地	縄文土器、土偶、石鏃
68	堀越Ⅱ	散布地	縄文土器
69	沢目	散布地	縄文土器(早・中期)
70	柳沢	散布地	縄文土器
71	手代森妻の神	散布地	縄文土器
72	田ノ沢A	散布地	縄文土器
73	田ノ沢B	散布地	縄文土器
74	田ノ沢C	散布地	縄文土器
75	川目A	集落跡	縄文早・前・中期集落、後晩期配石遺構、縄文土器(早～晩期)、00市教委、06～09県埋文調査
76	川目B	散布地	土坑、縄文土器(中・晩期)
77	川目C	集落跡	縄文中期大集落、94～95市教委調査
78	川目D	散布地	縄文土器
79	戸仲	集落跡	報告遺跡、06～08県埋文調査
80	小屋野	散布地	縄文土器(後期)、09県埋文調査
81	宇曽沢	散布地	縄文土器(早・前・後・晩期)、06県埋文調査
82	タキノ沢	散布地	縄文土器
83	大枡沢A	散布地	縄文土器
84	大枡沢B	散布地	縄文土器
85	大枡沢C	散布地	縄文土器
86	級沢A	散布地	縄文土器
87	級沢B	散布地	縄文土器
88	級沢C	散布地	縄文土器
89	級沢D	散布地	縄文土器
90	鬼ケ瀬山洞穴	洞穴	縄文土器(後期)
91	水沢	散布地	
92	沢口Ⅰ	散布地	縄文土器
93	待間口	散布地	縄文土器(晩期)
94	組木新田	散布地	縄文土器(晩期)
95	沢口Ⅱ	散布地	縄文土器
96	下片貝	散布地	縄文土器
97	ブスノ沢	散布地	縄文土器
98	根田茂沢	散布地	縄文土器
99	細野A	散布地	縄文土器
100	細野B	散布地	縄文土器
101	洗沢	散布地	縄文土器
102	相沢	散布地	縄文土器
103	葛	散布地	縄文土器
104	赤坂	散布地	縄文土器(中期)
105	下村	散布地	縄文土器
106	手代木沢岩陰	洞穴	縄文土器(中・後・晩期)
107	大上	散布地	縄文土器(後期)
108	高見	散布地	縄文土器(早・前・晩期)、石鏃、石匙
109	手代森	集落跡	縄文土器(前・晩期)、遮光器土偶、83～84県埋文調査
110	峰崎	散布地	縄文土器(晩期)
111	下道	散布地	縄文土器(後期)
112	高陣	散布地	縄文土器(後期)
113	達磨	散布地	縄文土器(時期不詳)
114	岡田	散布地	縄文土器(中期)
115	境	散布地	縄文土器、石匙、石皿
116	沢	散布地	縄文土器(早・中・後・晩期)
117	大沢田	散布地	縄文土器・石器
118	沢川目	散布地	縄文土器
119	乙部野	散布地	縄文土器(後・晩期)
120	町田	散布地	縄文土器(中・後・晩期)、石匙、石鏃、石斧、土偶
121	乙部方八丁	散布地	縄文土器(早・中・後・晩期)
122	草志田	散布地	縄文土器(中期)
123	高江柄	散布地	縄文土器(中期)
124	江柄	散布地	縄文土器
125	瀧源寺前	散布地	縄文土器、石棒、石皿
126	城内	散布地	縄文土器(晩期)
127	寺長根	散布地	縄文土器(中期)
128	世富亭田	散布地	縄文土器、石斧
129	重石	散布地	縄文土器(中・後期)
130	虫壁	散布地	縄文土器(中期)
131	東虫壁	散布地	縄文土器
132	南仙北	散布地	縄文土器
133	百目木	集落跡	縄文土器(中・後期)
134	坂の下	散布地	縄文土器
135	下永林	散布地	縄文土器(晩期)
136	三本柳幅	集落跡	縄文土器(晩期)
137	下谷地前	散布地	縄文土器(中期)
138	下通	散布地	縄文土器(早・前・中期)、石錐、石鏃、石匙

遺跡では大木7a～8b式を主体とした土器などが出土しており、砂溜遺跡では前期末葉～中期初頭の大形住居や遺物包含層などが検出されている。仁反田遺跡では前期末葉～中期の多数のフラスコ状土坑などが検出されている（盛岡市教委1989）。

後～晩期の遺跡では、川目A遺跡が特筆される。岩手大学の草間俊一教授による３度の調査により、後晩期の配石遺構や遺物が出土することが知られていた遺跡である（草間1954・1955・1958）。平成18年から当センターが行っている緊急発掘調査では、大規模な遺物包含層や多数の配石遺構などが確認されており、遺跡の内容が明らかにされつつある。

このほか、周辺地域には、中期後葉～後期初頭の拠点的な集落と考えられる柿ノ木平遺跡（８）、中期中葉の集落である山王山遺跡（23）、中期末葉の竪穴住居が検出された八木田Ⅰ遺跡（46）、後期初頭の竪穴住居などが検出された大葛遺跡（14）などが位置している。なお、柿ノ木平遺跡、山王山遺跡では、底部穿孔された「伏甕」を伴う竪穴住居が確認されている。

Ⅲ　調査と整理の方法

１　野　外　調　査

（１）作　業　経　過

平成20年４月11日　調査開始。
４月14日　国道106号脇に安全防護柵（単管）設置。試掘開始（17日まで）。
４月16日　重機による表土除去開始（梨子建設株式会社　22日まで）。
４月17日　遺構検出、精査開始。
４月21日　基準杭打設（株式会社　北日本朝日航洋）。
５月23日　空撮実施（東邦航空株式会社）。
５月25日　現地公開開催（10:30～12:00）。参加者数73名。
６月３日　調査終了確認。
６月13日　調査終了。
６月16～17日　重機による埋め戻し。撤収。

（２）グリッド・基準点の設定

戸仲遺跡第３次調査の調査座標原点は、第１次調査で採用した国土座標（世界測地系）Ｘ＝－35,800.000、Ｙ＝33,750.000を起点とした。その上で、盛岡市教育委員会の方針に準じ、50×50ｍの大グリッドを設定し、さらにこれを２×２ｍの小グリッドに区割りした。大グリッドは、原点を起点に西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・・・のアルファベット、北から南へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を付し、グリッドの呼称は「ⅧＥ」などのように、それらの組み合わせとした。小グリッドは、西から東をa～yのアルファベット、北から南を1～25の算用数字を付し、グリッドの呼称は「ⅧＥ１ｍ」などのように、それらの組み合わせとした。

遺構の実測に利用するために、調査区内に基準点２点と補助点２点を打設した。各基準点および補助点の座標値とそのグリッド名は以下の通りである。

基準点１　X＝－36,148.000、Y＝33,976.000、H＝190.584m（Ⅶ E 25 n グリッド）
基準点２　X＝－36,148.000、Y＝33,998.000、H＝190.878m（Ⅶ E 25 y グリッド）
補助点１　X＝－36,140.000、Y＝33,976.000、H＝190.210m（Ⅶ E 21 n グリッド）
補助点２　X＝－36,158.000、Y＝33,998.000、H＝190.737m（Ⅷ E ５ y グリッド）

（３）粗掘・遺構検出

最初に、県教委生文課により実施された試掘結果に基づき、その試掘坑（トレンチ）を再掘削し、遺構・遺物の検出層位と状態、旧地形とその堆積土層の確認と把握を行った。その上で、未試掘箇所に新規にトレンチを設定し、同様の作業を実施している。作業に際しては、遺構・遺物検出箇所付近はその検出面まで、それ以外の部分は最終遺構検出面とされる褐色土～黄褐色土を目安に掘り下げ、層理面にて順次検出を行った。結果、現地形は旧地形を反映しており、簗川側（南西）と国道106号側（北東）で段丘面が異なることが判明し、それぞれに別個の最終検出面を設定することとした。詳細はⅡ章３節のとおりである。

（４）遺構の調査方法

竪穴住居の調査は四分法を、その他の遺構については二分法を原則として、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については遺構名と出土層位名または相対的層位（上位、中位、下位、床・底面直上、床・底面）を記し、このうち床・底面直上以下出土分については個々に出土位置を記録した。遺構外出土分については、グリッド毎に層位を記して採取した。

（５）遺 構 の 名 称

野外調査で検出した遺構は、検出順に○号住居、△号土坑などと命名したが、報告書作成時に盛岡市教育委員会の方法に準じて、遺構名を付け直して掲載した。番号は、遺跡全体で遺構ごとに通し番号となっているが、柱穴状土坑のみ、調査次ごとにＰ１から遺構番号を付している。なお、野外調査、室内整理ともに旧遺構名のまま作業しており、図面表記、遺物注記などは旧名のまま変更していない。第１～３次調査の遺構番号表と、第３次調査における新旧遺構名対照表をそれぞれ第２・３表に示したので、参照していただきたい。

第２表　第１～３次調査遺構番号表

遺　　構	記号	１次調査	２次調査	３次調査
竪穴住居	ＲＡ	なし	なし	001～008
土坑・陥し穴状遺構	ＲＤ	001～006	007～012	013～037
炉・焼土	ＲＦ	001～006	007～008	009～012
溝	ＲＧ	なし	なし	001
配石・集石	ＲＨ	001～010	なし	011～013
遺物集中区・埋設土器	ＲＰ	001	なし	002
柱穴状土坑	Ｐ	1～23	1～17	1～7

第３表　第３次調査における新旧遺構名対照表

遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名
RA001	1号住居	RD018	2号陥し穴	RD030	15号陥し穴	RH011	1号配石
RA002	2号住居	RD019	1号陥し穴	RD031	16号陥し穴	RH012	2号配石
RA003	3・8号住居	RD020	8号陥し穴	RD032	14号陥し穴	RH013	2号集石
RA004	4号住居	RD021	9号陥し穴	RD033	12号陥し穴	RP002	1号埋設土器
RA005	5号住居	RD022	3号陥し穴	RD034	17号陥し穴	P1	5号土坑
RA006	6号住居	RD023	4号陥し穴	RD035	18号陥し穴	P2	PP4
RA007	7号住居	RD024	5号陥し穴	RD036	19号陥し穴	P3	PP6
RA008	9号住居	RD025	10号陥し穴	RD037	1号集石	P4	PP7
RD013	1号土坑	RD026	6号陥し穴	RF009	1号焼土	P5	PP8
RD014	2号土坑	RD027	11号陥し穴	RF010	2号焼土	P6	PP9
RD015	3号土坑	RD028	7号陥し穴	RF011	3号焼土	P7	PP3
RD016	4号土坑	RD029	13号陥し穴	RF012	4号焼土	RG001	1号溝
RD017	6号土坑						

（6）写　真　撮　影

写真撮影にあたっては、６×９判モノクロームのフィルムカメラ（FUJI　GSW690Ⅲ）とデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS 5D）を使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。その他、調査終了間際にセスナ機による航空写真撮影を実施している（平成20年５月23日）。

２　室　内　整　理

（1）作　業　経　過

作業人数や期間などの大まかな流れのみ記載する。

平成20年５月27日　整理作業開始。調査員付かず、作業員２名で実施（８月１日まで）。
９月16日　作業再開。調査員付かず、作業員２名で実施（９月22日まで）。
10月１日　作業再開。調査員付かず、作業員２名で実施（10月20日まで）。
11月４日　作業再開。調査員付かず、作業員２名で実施（11月14日まで）。
11月17日　調査担当者１名作業開始（２月13日まで）。
２月13日　作業終了。

（2）遺物の整理方法

遺物は、各種別に分類したのち出土地点ごとに重量計測を行い、接合作業を実施して掲載分と不掲載分に細分類し、前者については仮番号を付し登録を行った。登録にあたっては、種別ごとに異なる種類の番号を付している。その後、報告書掲載遺物が最終的に決定した段階で、新たに各種別共通となる算用数字の連番による掲載番号を付した。

なお、掲載遺物の選択に際しては、各遺物種別共通してまず第１に出土地点を優先し、Ⅰ層あるいは攪乱出土遺物は基本的に除外した。遺構別および遺物種別毎の出土量については次章に記述している。各遺物種別の掲載基準は下記のとおりである。

本報告書では、出土遺物量の記載を遺物種により３種類の方法で行っている。基本は「ｇ」あるいは「kg」単位での重量表記で、土器類はすべてこの方法である。前記のように出土地点単位で計量し全体量を把握するための重量台帳を作成した後、掲載分として抽出したものについては仮番号を付して個々に計量を行い、登録台帳を作成している。土製品、石器、石製品、鉄製品は点数記載を主とし、これに重量記載を併記している。土製品、石製品、鉄製品については全点に仮番号を付して個々に計量し、登録台帳を作成した。石器は事前にトゥールと剥片および素材に分類し、トゥールについては個々に仮番号を付して登録台帳作成と計量を行っている。剥片および素材については個々の計量はせず出土地点単位で計量し重量台帳を作成する段階までに留めた。

縄文土器

ａ　掲載遺物の選択基準･･･文様および形態変化が集中する口縁部が残存するものを優先している。胴部は器形を復元できるものおよび特徴的な文様を有するもの、底部は底径が復元できるものおよび底面に特徴的な痕跡が見られるものに限定して掲載している。

ｂ　実測･･･文様の表現については客観性を重要視し、拓本を多用した。径の推定可能なもの（１/４以上残存）は復元実測を行った。

石器

ａ　掲載遺物の選択基準･･･遺構内出土分以外は完形品を優先して掲載した。点数の多い器種については、完形品であっても不掲載としたものもある。

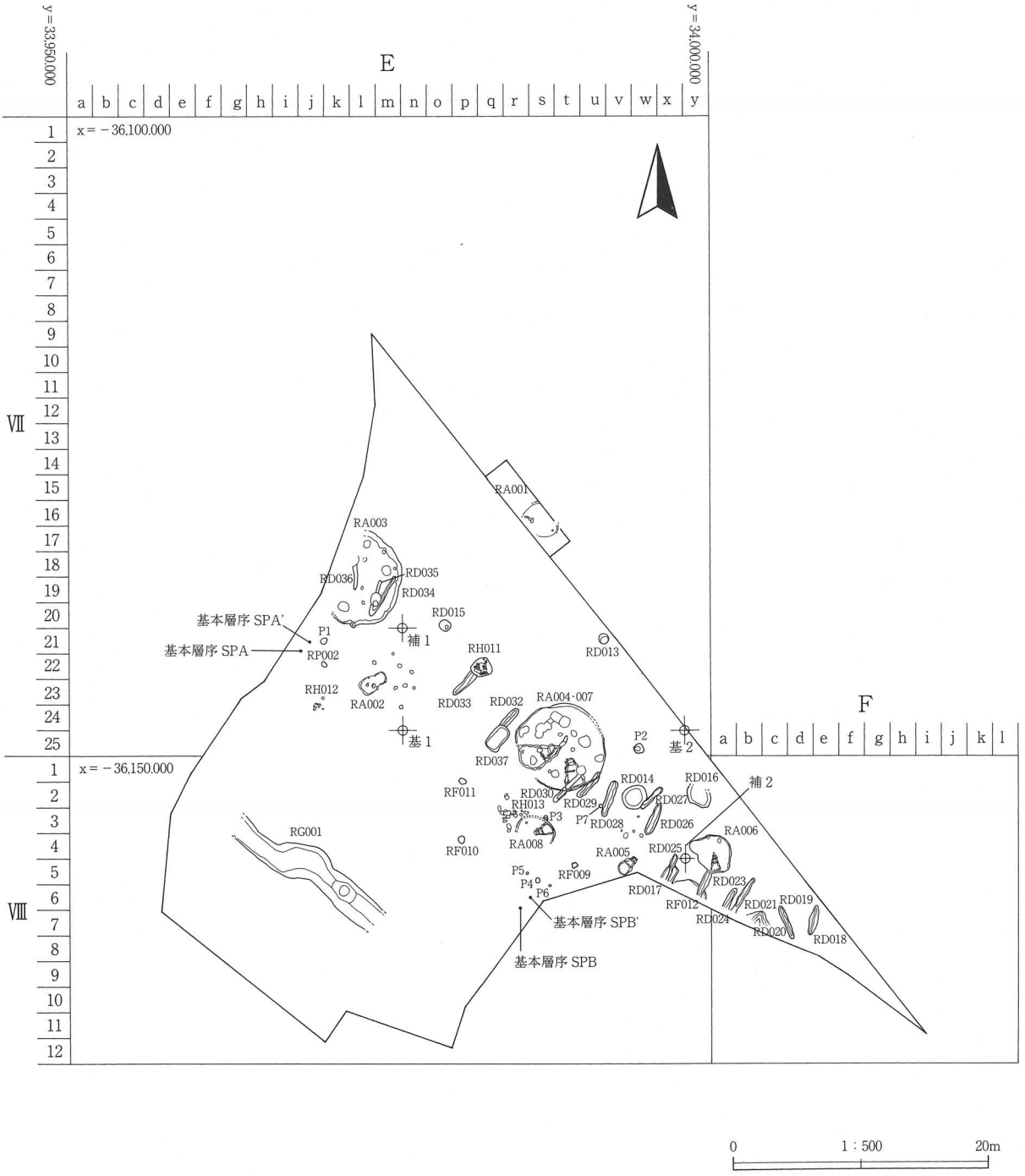
ｂ　実測･･･調整部位や打面・打点など、最低限必要と判断した部位のみ展開し、省力化に努めた。

土製品・石製品・須恵器・陶器・銭貨

掲載遺物の選択基準･･･全点掲載した。

（４）写　真　撮　影

当センター写真室において、専属の期限付職員がデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS1 MarkⅡ）を用い撮影した。



基準点１　X=-36,148.000　Y=33,976.000　H=190.584m（ⅦE25nグリッド）
基準点２　X=-36,148.000　Y=33,998.000　H=190.878m（ⅦE25yグリッド）
補助点１　X=-36,140.000　Y=33,976.000　H=190.210m（ⅦE21nグリッド）
補助点２　X=-36,158.000　Y=33,998.000　H=190.737m（ⅦE5yグリッド）

第５図　戸仲遺跡第３次調査遺構配置図

Ⅳ 検 出 遺 構

1 竪 穴 住 居

ＲＡ001竪穴住居

遺構（第６図、写真図版３）

[位置・検出状況] Ⅶ Ｅ16r ～ 17tグリッドに位置する。生文課試掘トレンチを再掘削した際、その北端で炉が見つかったことにより検出した。遺構はさらに工事用地内である調査区外北側へ延びており、可能な限り拡張して調査を行っている。

[重複関係] なし。

[平面形・規模] 規模は３ｍ以上で、平面形は円～楕円形を呈するものと思われる。

[埋土] 黒褐色シルト主体で、下位の一部に黒褐色シルトと褐色シルトの混合土が堆積している。

[床面･壁] Ⅴ層中を床面とし、自然地形に沿って南西側に緩く下傾している。壁の立ち上がりは北西側･南東側の一部で確認されたが、不明瞭な部分が多い。なお、北東側は調査できず不明、南西側は水田造成時の削平により破壊されている。

[炉] 石組があることから石囲炉もしくは石囲部を有する複式炉の可能性が考えられるが、炉の位置が西壁に近いことから複式炉の可能性が高い。平面規模は不明である。炉石には円礫が用いられ、その設置のための掘方が確認された。石囲内部には焼土が発達しており、最厚部で５㎝を測る。

[柱穴] なし。

[壁溝] なし。

遺物（第24・36図、写真図版22・33）

[土器] 埋土から2,435.4gが出土し、このうち３点・1,484.9gを掲載した（１～３）。１・２は床面から出土した。

[石器] 埋土１層から打製石斧（134）、磨製石斧（135）が出土した。重量は80.7gである。この他、炉構成礫に台石からの転用材が２点含まれており、これも掲載した（132･133）。重量は11.7kgである。

時期 出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

ＲＡ002竪穴住居

遺構（第７図、写真図版４）

[位置・検出状況] Ⅶ Ｅ22l ～ 23nグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層中である。Ⅲ層の掘り下げ中に炉石と考えられる石と焼土・炭化物の広がりを検出し、竪穴住居と判断した。

[重複関係] なし。

[平面形・規模] 炉と本遺構に付属すると考えられるピットの範囲から、直径3.9ｍほどの円形と推定される。

[埋土] 黒褐色シルトを主体とし、褐色砂質シルトブロックを少量含む。

[床面・壁] Ⅳ層中を床面とし、ほぼ平坦である。壁は、土層確認用ベルトの南・東側でわずかに立ち上がりを確認できたのみである。

[炉] 石囲部＋前庭部で構成される複式炉である。前庭部が住居壁際にあるとすれば、南西壁際に位

置することになる。炉の全長は225cm、最大幅は126cmである。石囲部の炉石は北西側と南東側のみで検出したが、掘方が全周することから、本来は設置されていたものと考えられる。平面形は不明であるが、検出した炉石と掘方から不整な円形を呈するものと考えられる。規模は、残存部で95×80cmを測る。炉石は、扁平な円礫や亜角礫などの自然礫を用いている。南東側では掘方内に自然礫を埋め、根固めが行われていた。石囲部の内部には全体的に焼土が発達しており、厚さは約５cmを測る。前庭部の規模は、145×126cmを測る。浅い掘り込みで、床面からの深さは約10cmである。硬化面は認められなかった。掘り込みの北東端の両側には約10～30cm程度の自然礫が設置されている。これより南西側には礫は並ばず、掘方や抜き取り痕も認められないので、もともと設置されていなかったものと思われる。

[柱穴] 本遺構に付属すると考えられるピットを８個検出した。開口部径は22～41cm、床面からの深さは７～30cmを測る。埋土は、Ｐ3は暗褐色シルト、それ以外は黒褐色シルトを主体とし、褐色砂質シルトブロックを少量含む。いずれのピットでも柱痕跡は認められなかった。Ｐ３・Ｐ７・Ｐ８は、床面からの深さが30cm近くあることから主柱穴であった可能性が考えられる。

[壁溝] なし。

遺物（第24・36図、写真図版22・33）

[土器] 埋土から1,637.2g出土したが、ほとんどが小片である。このうち、７点･617.4gを掲載した（４～10）。

[石器] 炉の前庭部埋土から出土した二次加工ある剥片１点・0.9gを掲載した。

時期　出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

ＲＡ003竪穴住居

遺構（第８・９図、写真図版５・６）

[位置・検出状況] ⅦＥ17l～20mグリッドに位置する。検出面はⅢ層中～Ⅳ層上面である。Ⅲ層の掘り下げ中に黒褐色の楕円形の広がりとして検出した。北西側は調査区外へ延びる。

[重複関係] ＲＤ034・035・036陥し穴状遺構を切る。

[建替え] 壁溝の検出面より約10cm上層で、焼土の広がりを検出した。この焼土は、主柱穴と考えられるＰ９に重なるように広がっていることから、本遺構は建て替えが行われた可能性が考えられる。

[平面形・規模] 平面形は、調査範囲からやや南北方向が長い楕円形基調と推定される。調査範囲での規模は、長軸7.34m×短軸4.72mを測る。

[埋土]10層に分層した。１～７層は黒褐色シルトを主体とする竪穴埋土、８～10層は周溝埋土である。

[床面･壁]掘削はⅤ層～Ⅵ層上面まで行われている。床面はやや凹凸がみられ、北東から南西に向かって緩く傾斜する。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは最深部で30cmを測る。

[炉] 調査区際の南西隅で、炭化物を含む焼土の広がりを確認した。焼土の厚さは約10cmである。

[柱穴] 10個（Ｐ１～10）検出した。開口部径は21～101cm、床面からの深さは６～84cmを測り、Ⅵ層中まで掘削が行われている。このうち、Ｐ１・４・５・８・９は、その規模と床面からの深さから主柱穴であった可能性が考えられる。埋土は、黒褐色シルトを主体とするものが多い。堆積様相については判断できなかったものが多いが、Ｐ８では柱痕跡が認められた。Ｐ５は人為堆積であると判断され、埋め戻しが行われた可能性が考えられる。

[壁溝] 壁溝は南西壁を除いてほぼ全周する。壁溝のほぼ全域の所々で、剥片石器・剥片14点が検出面から埋土上位にかけて出土した。このうち、南東側の壁溝で出土した剥片２点（156･157）が接合した。

[剥片集中地点（デポ）] 南側の壁溝の埋土から、剥片12点と石鏃１点（139）がまとまって出土した。剥片は12点のうち６点が接合した（140 ～ 145）。石材は、いずれも北上山地産の頁岩である。

遺物（第25・26・36 ～ 39・46・47図、写真図版22 ～ 24・33 ～ 35・44・45）

[土器] 埋土から11,645.2g出土し、このうち、15点・3,621.0gを掲載した（11 ～ 25）。

[石器] トゥール12点と剥片18点の30点・6,730.0gを掲載した（137 ～ 166）。うち、137の石鏃は床面出土である。

[石製品] 石棒2点・8,670.0gと石鉢1点・103.6gが出土した（253 ～ 255）。

時期　出土土器から縄文時代中期後葉～末葉と考えられる。

ＲＡ004竪穴住居

遺構（第10・11図、写真図版７・８）

[位置・検出状況] ⅦＥ24r ～ⅧＥ２uグリッドに位置する。Ⅲ層掘削中に遺物の集中範囲として検出した。

[重複関係] ＲＡ007竪穴住居と重複し、これに切られる。Ｐ４とＲＡ007竪穴住居炉の切りあい関係、すなわちＰ４埋土内にＲＡ007竪穴住居炉構築礫が整列していたことを判断基準としている。住居プラン自体の変形は確認されないことから、炉の移設による建て替え行為と見て取れる。また、本住居炉にも作り替えの痕跡があることから、最低でも３期の変遷がある。

[平面形・規模] 北西―南東6.92m、北東―南西6.80mの楕円形である。

[埋土] 下位に基本層序Ⅳ層起源の黒褐色シルトと褐色砂質シルトの混合土が堆積し、中～上位は黒褐色シルト主体となる。いずれにも遺物が多量に混入しており、人為的に廃棄された可能性がある。

[床面・壁] Ⅴ層中を床面とし、自然地形に沿って南西側にごく緩く下傾する。壁の立ち上がりは鈍角で緩く、どこまで本来の形状を残しているか不明である。

[炉] 南西壁付近に位置する。住居中央側から、掘込部＋石囲部＋掘込部（前庭部）で構成される複式炉である。軸線は全長･幅は325×227cmで､両側縁のなす角度は約40度である。各部の規模(開口部･底部）および床面から各部底面までの深さは、掘込部が106×72cm・78×66cm・21cm、石囲部が139×78cm・80×54cm・36cm、前庭部が226×179cm・174×161cm・27cmである。石囲部と前庭部左側の炉石設置部分にはいずれも掘方が確認される。前庭部右側には整列した炉石が存在しない。使用後、抜き取られたものと推定される。炉石には扁平な円礫を用いており､短軸を垂直に立てて設置されている。掘込部には焼土が発達しており、平面形・厚さは54×38cm・４cmである。また、石囲部には底面ほぼ全域に炭化物粒の堆積層が存在する。焼土は西側の一部に見られるのみである。前庭部は底面左半が硬化しており、右半中央には90cm以上の巨礫が存在する。人為的に設置したものではなく、元々ここにあったものである。

また、前庭部北側にはさらに炉石が１列埋設してあり、その南側（内側）には焼土が形成されている。これは１期前の炉の残骸と捉えられる。

[柱穴] 本遺構に付属すると考えられるピット５個（Ｐ１～５）と、ＲＡ007竪穴住居のいずれに所属するか不明なもの８個（Ｐ６～13）の13個を検出した。Ｐ５は本遺構とＲＡ007竪穴住居の両者で使用されたものと推定される。配置は、炉の長軸線上に頂点を持つ五角形を成し、左右の４個はこの軸線とほぼ平行に並列する。なお､Ｐ８およびＲＡ007竪穴住居Ｐ２も本遺構所属であった可能性があり、このばあいは柱穴数７で、炉の長軸線上に１個、その左右に３個ずつ並列という形になる。Ｐ８、ＲＡ007竪穴住居Ｐ２の２個は他の５個に比して浅い。

［壁溝］なし。
遺物（第26～31・39～41・47図、写真図版24～28・35～37・44・45）
［土器］出土した27,279.2gのうち、47点・16,679.7gを掲載した（26～72）。
［石器］トゥール20点、剥片３点の23点・41,588.7gを掲載した（167～189）。167～169は床面出土、170は床面直上出土、171はＰ１底面出土、172は炉構成礫で、台石が転用されたものである。
［石製品］床面から棒状礫（256・6.5kg）が、炉埋土から穿孔礫（257・8.0g）と石棒（258・18.6g）が出土した。
時期　出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。

ＲＡ005竪穴住居
遺構（第12図、写真図版９）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ４ｖ～５ｖグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層上面で、炉石の出土により竪穴住居と判断した。
［重複関係］なし。
［平面形・規模］ともに不明である。
［埋土］Ⅲ層と酷似する黒褐色シルトである。
［床面・壁］Ⅴ層上面を床面とし、南側にごく緩く下傾している。壁の立ち上がりは調査区際断面でわずかに確認できたのみで、判然としない。
［炉］石囲部１＋石囲部２＋掘込部（前庭部）で構成される複式炉である。前庭部が住居壁際にあるとすれば、南西壁に位置することになる。軸線はＮ－50°－Ｅを向く。全長・幅は168×106cmで、両側縁のなす角度は約35度である。各部の規模（開口部･底部）および床面から各部底面までの深さは、石囲部１が51×36cm・22×16cm・14cm、石囲部２が82×40cm・68×34cm・18cm、前庭部が106×92cm・82×81cm・12cmである。炉石設置部分にはいずれも掘方が確認される。炉石には扁平・棒状など様々な形状の円礫を用いており、短軸を垂直に立てて設置されている。焼土はいずれにも形成されていない。
［柱穴］炉北側から５個のピットを検出した。配置に規則性が見られず、柱穴とは断定できない。
［壁溝］なし。
遺物（第31・42図、写真図版28・37）
［土器］埋土より2,278.1g出土し、このうち、４点・1,307.0gを掲載した（73～76）。
［石器］２点・4,839.2gを掲載した（190・191）。190は炉構成礫で、台石が転用されたものである。
時期　出土土器から縄文時代中期後葉～末葉と考えられる。

ＲＡ006竪穴住居
遺構（第12図、写真図版10）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ４ｙ～Ⅷ Ｆ５ａグリッド付近に位置する。検出面はⅡ層直下のⅣ層中である。黒褐色シルトの不整円形プランとして確認した。
［重複関係］ＲＤ024土坑と重複し、これを切る。
［平面形・規模］北西―南東3.18m、北東―南西2.74mの楕円形である。北西部が瘤のように出っ張っているが、これは何らかの撹乱と考えられ、本来の形状を示すものではない。
［埋土］黒褐色シルトを主体とし、にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。

[床面・壁] Ⅴ層上面を床面とし、ほぼ平坦である。壁は全域で確認しているが、上位は消失し10cm程度を残すのみである。
[炉] 石囲部１＋石囲部２＋掘込部（前庭部）で構成される複式炉である。南壁際に位置している。軸線はＮ－０°－Ｅである。全長･幅は130×78cmで、両側縁のなす角度は約30度である。各部の規模（開口部・底部）および床面から各部底面までの深さは、石囲部１が35×32cm・22×22cm・20cm、石囲部２が52×34cm・30×29cm・９cm、前庭部が78×67cm・60×58cm・６cmである。炉石設置部分にはいずれも掘方が確認される。炉石には扁平・棒状など様々な形状の円礫を用いており、石囲部１の先端には棒状礫が突き出るように存在する。弱く薄い焼土が石囲部１・２に確認される。
[柱穴] 北壁付近からピットを２個検出したが、どのような性格か不明である。開口部径は22～30cm、床面からの深さは18・21cmを測る。柱痕跡は認められない。
[壁溝] なし。
遺物（第32図、写真図版29・37・38・45）
[土器] 床面および１層から1,746.9g出土し、このうち、４点・1,626.5gを掲載した（77～80）。
[石器] 炉構成礫のうち、台石が転用されたものが４点ありこれを掲載した（192～195）。
[石製品] 炉構成礫の１点・240.0gを掲載した（259）。棒状礫で、石棒の可能性がある。
時期　出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

ＲＡ007竪穴住居

遺構（第13図、写真図版11）
[位置･検出状況] ⅦＥ24r～ⅧＥ２uグリッドに位置する。Ⅲ層掘削中に遺物の集中範囲として検出し、精査の過程で炉を複数確認したことにより多棟数の存在を認識した。
[重複関係] ＲＡ004竪穴住居と重複し、これを切る。炉とＲＡ004竪穴住居Ｐ４の切りあい関係、すなわちＰ４埋土内に炉構築礫が整列していたことを判断基準としている。
[平面形・規模] 北西―南東6.92m、北東―南西6.80mの楕円形である。
[埋土・床面・壁] ＲＡ004竪穴住居と同様である。
[炉] 南壁付近に位置する。住居中央側から、石囲部１＋石囲部２＋掘込部（前庭部）で構成される複式炉である。軸線は全長・幅は231×160cmで、両側縁のなす角度は約35度である。各部の規模（開口部・底部）および床面から各部底面までの深さは、石囲部１が64×45cm・32×22cm・13cm、石囲部２が106×58cm・87×50cm・31cm、前庭部が166×135cm・148×123cm・27cmである。炉石設置部分にはいずれも掘方が確認される。炉石には扁平・棒状など様々な形状の円礫を用いており、短軸を垂直に立てて設置されている。石囲部１・２には焼土が発達しており、平面形・厚さはそれぞれ21cm・８cm、49×33cm・４cmである。
[柱穴] 本遺構に付属すると考えられるピットは６個（Ｐ１～６）検出された。Ｐ５は本遺構とＲＡ004竪穴住居の両者で使用されたものと推定される。また、Ｐ４・６は同一ピットの可能性があるが、明確な根拠を示せないため別個に登録した。配置は、炉の長軸線上に頂点を持つ末広がりの五角形を成す。Ｐ１・２の２個は他の４個に比して浅い。
[壁溝] なし。
遺物（第32・42図、写真図版29・38・39）
本遺構出土遺物としたものは、炉･ピット埋土および底面から出土したもののみである。これ以外は、重複するＲＡ004竪穴住居出土遺物として登録した。ただし、確実にＲＡ004竪穴住居に共伴すると断

言できるものではなく、逆に分離不可能であったことからより古期のＲＡ004竪穴住居に登録したものである。よって、ＲＡ004竪穴住居に登録した遺物にも本遺構に伴うものが含まれている可能性があることを付記しておく。
[土器] 炉の埋土および底面から1,374.0gが出土し、このうち、２点・65.7gを掲載した（81・82）。
[石器] ５点･49,022.6gを掲載した（196 ～ 200）。196･197は炉構成礫で､台石が転用されたものである。
時期　出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。

ＲＡ008竪穴住居

遺構（第14図、写真図版12）
[位置・検出状況] ⅧＥ４ｒ～ⅧＥ５ｔグリッド付近の上段際に位置する。検出面はⅢ層中である。礫とその周囲約2.8ｍに広がる炭化物の分布範囲として検出し、その精査の過程で竪穴住居と判断した。
[重複関係] なし。
[平面形・規模] 規模は3.1ｍ以上で、平面形は楕円形もしくは円形と推定される。
[埋土] 黒褐色シルトを主体とし、炭化物粒を顕著に含む。
[床面・壁] 床面はⅢ層中からＶ層上面で、地形に沿って南西方向へ緩く下傾する。壁は北東側で12cm残存するが、南西側は段丘縁に位置し、開田時の削平により消失している。
[炉] 東壁付近に位置する。住居中央側から、石囲部１＋石囲部２＋掘込部（前庭部）で構成される複式炉である。軸線は全長・幅は128×96cmで、両側縁のなす角度は約35度である。各部の規模（開口部・底部）および床面から各部底面までの深さは、石囲部１が38×31cm・27×20cm・２cm、石囲部２が54×30cm・43×25cm・３cm、前庭部が97×75cm・74×66cm・６cmである。炉石設置部分にはいずれも掘方が確認される。炉石には扁平・棒状など様々な形状の円礫を用いており、短軸を垂直に立てて設置されている。石囲部１および２の西半に焼土が発達している。前者は底部全域に広がり、厚さは４cmである。後者の範囲は31×10cmで、厚さは２cmである。
[柱穴] なし。
[壁溝] なし。
遺物（第32図、写真図版29・38・40）
[土器] １層および炉直上から399.5g出土し、このうち、４点・133.0gを掲載した（83 ～ 86）。
[石器] ６点・37.7kgを掲載した（201 ～ 206）。すべて台石で、201は床面出土、206は床面直上出土、202 ～ 205は炉構成礫である。
時期　出土土器から縄文時代中期末葉と考えられる。

２　土坑・陥し穴状遺構

ＲＤ013土坑

遺構（第15図、写真図版13）
[位置・検出状況] ⅦＥ21u ～ 21vグリッドに位置する。検出面はⅣ層中である。
[重複関係] なし。
[平面形・規模] 規模は、開口部径76 ～ 78cm、底部径46 ～ 52cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。
[埋土] 黒褐色シルトににぶい黄褐色砂質シルトが混じる単層である。
[床面・壁] 掘削はＶ層中まで行われており、底面はほぼ平坦である。壁は直立～外傾しながら立ち

上がる。検出面からの深さは25cmである。
遺物（第32・42図、写真図版29・40）
［土器］埋土から62.4g出土し、このうち、１点・33.9gを掲載した（87）。
［石器］埋土１層からトゥール２点・16.0gが出土した（207・208）。
時期　出土土器から縄文時代中期と考えられる。

ＲＤ014土坑
遺構（第15図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅧＥ２ｖ～２ｗグリッドに位置する。検出面はⅣ層中である。
［重複関係］ＲＤ027陥し穴状遺構を切る。
［規模･平面形］規模は、開口部径202×177cm、底部径139×121cmを測る。平面形は不整楕円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルトを主体とし、下位ほどにぶい黄褐色砂や褐色砂質シルトが多く混じる。
［床面･壁］掘削はⅥ層上面まで行われており、底面には凹凸がみられる。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは28cmである。
遺物（第32図、写真図版29）
［土器］１層から31.8g出土し、このうち、１点・22.0gを掲載した（88）。
時期　重複遺構と出土土器から縄文時代前期～中期と考えられる。

ＲＤ015土坑
遺構（第15図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅧＥ20o～21oグリッドに位置する。検出面はⅣ層中である。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］規模は、開口部径86～95cm、底部径28～33cmを測る。平面形は不整円形を呈する。
［埋土］上位から黒褐色シルト、暗褐色砂質シルト、褐色砂質シルト主体の３層に分層した。自然堆積と考えられる。
［床面･壁］掘削はⅥ層上面まで行われており、底面はほぼ平坦である。壁は外反しながら立ち上がる。検出面からの深さは38cmである。
遺物　なし。
時期　検出面と埋土の様相から縄文時代中期と考えられる。

ＲＤ016土坑
遺構（第15図、写真図版13）
［位置・検出状況］ⅧＥ２ｙグリッドに位置する。検出面はⅣ層中である。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］北壁は撹乱により壊されている。残存部分の規模は、開口部径203×145cm、底部径146×103 cmを測る。平面形は不整な楕円形を呈する。
［埋土］暗赤褐色シルト主体で、上位に黒色シルト、下位に黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土が堆積する。各層とも様々な土壌が混在しており、人為堆積の様相を呈する。
［床面・壁］掘削はＶ層中まで行われており、底面には凹凸がある。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは30cmである。

遺物（第32図、写真図版29）
［土器］埋土から184.4g出土し、このうち、１点・31.4gを掲載した（89）。
時期　検出面と出土土器から縄文時代中期と考えられる。

ＲＤ017土坑

遺構（第17図、写真図版14）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ ４ｘ～５ｘグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
［重複関係］ＲＤ025陥し穴状遺構を切る。
［規模・平面形］平面形は長方形を呈し、南西側は調査区外へ延びる。調査区範囲での規模は、開口部径135×92cm、底部径74×72cmを測る。
［埋土］黒～黒褐色シルト主体である。
［床面･壁］掘削はＶa層中まで行われており、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ直立して立ち上がる。検出面からの深さは41cmである。
遺物
［土器］埋土から466.4g出土したが、細片のためすべて不掲載とした。
時期　検出面から縄文時代と考えられるが、判然としない。

ＲＤ018陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版14）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｆ ６ｅ～７ｅグリッドに位置する。検出面はＩ層直下のⅣ層中である。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］規模は、開口部径238×49cm、底部径217×12cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。
［埋土］下位から壁際にかけて灰黄褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混土が堆積する。崩落土と考えられる。上位は黒褐色シルト主体である。全体的に自然堆積と推定される。
［床面・壁］掘削はＶ層中まで行われている。底面には凹凸があるが、ピットなどの底部施設は認められない。断面形は逆台形状を呈し、壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、外傾しながら開く。検出面からの深さは56cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ019陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版14）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｆ ６ｅ～７ｅグリッドに位置する。検出面はＩ層直下のⅣ層中である。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］規模は、開口部径276×35cm、底部径247×16cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－22°－Ｗである。
［埋土］下～中位から壁際にかけて暗褐色砂質シルトと黒褐色シルトの混土が堆積する。崩落土と考えられる。上位は黒褐色シルト主体である。全体的に自然堆積と推定される。
［床面・壁］掘削はＶ層中まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどは認められない。壁は

底面よりほぼ垂直に立ち上がり、上部では外傾気味に開く。検出面からの深さは56cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ020陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版14）
[位置・検出状況] ⅧＦ７ｂ～７ｃグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] ＲＤ021陥し穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。
[規模･平面形] 平面形は溝形を呈すると考えられ、南東側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径104×53cm、底部径101×20cmを測る。長軸方向はＮ－10°－Ｗである。
[埋土] 下位に暗褐色シルト、中位に褐色砂質シルト、上位に黒褐色シルトが堆積する。途中に崩落土と考えられるにぶい黄褐色砂質シルトが挟まる。全体的に自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ層中まで行われている。底面は北西側に向かってやや傾斜する。ピットなどは認められない。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり、漏斗状に外傾しながら開く。検出面からの深さは65cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ021陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版14）
[位置・検出状況] ⅧＦ７ｂグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] ＲＤ020陥し穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。
[規模･平面形] 平面形は溝形を呈すると考えられ、南西側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径113×39cm、底部径93×14cmを測る。長軸方向はＮ－48°－Ｅである。
[埋土]大半が黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土で、崩落土が大半を占めると考えられる。全体的に自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ層中まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどは認められない。壁はほぼ直立して立ち上がり、上部では外傾気味に開く。検出面からの深さは69cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ022陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版15）
[位置・検出状況] ⅧＦ５ｂ～６ａグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] なし。
[規模･平面形] 平面形は溝形を呈すると考えられ、南西側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径312×38cm、底部径253×18cmを測る。長軸方向はＮ－33°－Ｅである。
[埋土] 壁際に黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂の混土が堆積し、その他は黒褐色シルト主体である。前者は崩落土と考えられる。全体的に自然堆積と推定される。
[床面･壁] 掘削はⅤ層中まで行われている。底面には凹凸がみられるが、ピットなどは認められない。

壁は底面より直立～内傾気味に立ち上がり、上部では外傾しながら開く。検出面からの深さは58cmである。

遺物　なし。

時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ023陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版15）

［位置・検出状況］Ⅷ Ｆ６ａグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。

［重複関係］なし。

［規模･平面形］平面形は溝形を呈すると考えられ、南西側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径177×33cm、底部径159×20cmを測る。長軸方向はＮ－29°－Ｅである。

［埋土］黒褐色シルト主体で、褐色砂質シルトが混在する。全体的に自然堆積と推定される。

［床面・壁］掘削はⅤ層中まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどは認められない。壁はほぼ直立して立ち上がる。検出面からの深さは56cmである。

遺物　なし。

時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ024陥し穴状遺構

遺構（第16図、写真図版15）

［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ５ｙ～６ｙグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。

［重複関係］ＲＡ006竪穴住居、ＲＦ012竪穴住居と重複し、これらに切られる。

［規模･平面形］平面形は溝形を呈すると考えられ、南西側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径222×67cm、底部径208×22cmを測る。長軸方向はＮ－24°－Ｅである。

［埋土］下位は黒～黒色シルトとにぶい黄褐色砂の混土で、崩落土と考えられる。上位は黒褐色シルト主体である。全体的に自然堆積と推定される。

［床面･壁］掘削はⅤ層中まで行われている。底面は北東側でやや凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、ピットなどは認められない。壁は直立～内湾気味に立ち上がり、上部では外傾しながら開く。検出面からの深さは66cmである。

遺物　なし。

時期　重複関係から縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ025陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版14）

［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ５ｘグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。

［重複関係］ＲＤ017土坑に切られる。

［規模・平面形］平面形は溝形を呈し、南側は調査区外へ延びる。調査範囲での規模は、開口部径217×40cm、底部径208×19cmを測る。長軸方向はＮ－21°－Ｅである。

［埋土］ＲＤ017土坑との重複により上位がほとんど残存しない。下位は黒褐色シルト主体で、自然堆積と推定される。

［床面・壁］掘削はⅤ層中まで行われている。底面は北東側に向かってやや傾斜する。ピットや凹凸

などは認められない。壁はほぼ直立して立ち上がる。検出面からの深さは42cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ026陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版15）
[位置・検出状況] Ⅷ Ｅ３ｗグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] なし。
[規模・平面形] 規模は、開口部径265×52cm、底部径240×20cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－22°－Ｅである。
[埋土] 黒褐色シルト主体で、にぶい黄褐色砂が混じる。自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ～Ⅵ層（礫層）上面まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどは認められない。断面形は逆台形状で、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは52cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ027陥し穴状遺構

遺構（第17図、写真図版16）
[位置・検出状況] Ⅷ Ｅ２ｗグリッド付近に位置する。検出面はⅣ層上面からⅤ層上面である。
[重複関係] ＲＤ014土坑に切られる。
[規模・平面形] 規模は、開口部径218×32cm、底部径193×23cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－47°－Ｅである。
[埋土] 下位に褐色砂質シルトが、中～上位に黒褐色シルトが堆積する。全体的に自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ層中まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどは認められない。壁はほぼ直立～内傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは30cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ028陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版16）
[位置・検出状況] Ⅷ Ｅ２ｖ～３ｗグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] P7に切られる。
[規模・平面形] 規模は、開口部径289×31cm、底部径270×25cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－19°－Ｅである。
[埋土] 黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂、もしくは褐色砂質シルトとの混土である。全体的に自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ～Ⅵ層（礫層）上面まで行われている。底面は所々で礫が露出しているがほぼ平坦で、ピットなどの底部施設は認められない。壁はほぼ直立～内湾気味に立ち上がる。検出面からの深さは42cmである。

遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ029陥し穴状遺構
遺構（第18図、写真図版16）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ １ｕ～２ｔグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
［重複関係］ＲＡ004竪穴住居に切られる。
［規模・平面形］規模は、開口部径255×48cm、底部径226×14cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－38°－Ｅである。
［埋土］黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルト、もしくは灰黄褐色シルトとの混土である。全体的に自然堆積と推定される。
［床面・壁］掘削はⅤ～Ⅵ層（礫層）中まで行われている。北東端では礫層が露出しているが、底面はほぼ平坦である。ピットなどの底部施設は認められない。壁はほぼ直立して立ち上がり、上部では外傾しながら開く。検出面からの深さは59cmである。
遺物　なし。
時期　ＲＡ004竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ030陥し穴状遺構
遺構（第18図、写真図版16）
［位置・検出状況］Ⅷ Ｅ １ｔ～３ｔグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
［重複関係］ＲＡ004竪穴住居に切られる。
［規模・平面形］規模は、開口部径297×35cm、底部径262×24cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－44°－Ｅである。
［埋土］黒褐色シルト主体である。下位にはにぶい黄褐色砂質シルトが混在する。全体的に自然堆積と推定される。
［床面・壁］掘削はⅤ～Ⅵ層（礫層）上面まで行われている。北東端では礫層が露出しているが、底面はほぼ平坦である。ピットなどの底部施設は認められない。壁はほぼ直立して立ち上がる。検出面からの深さは34cmである。
遺物　なし。
時期　ＲＡ004竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代後期中葉以前と考えられる。

ＲＤ031陥し穴状遺構
遺構（第17図、写真図版17）
［位置・検出状況］Ⅶ Ｅ25ｔ～Ⅷ Ｅ １ｓグリッドに位置する。ＲＡ004・007竪穴住居精査中にその床面で検出した。
［重複関係］ＲＡ004竪穴住居に切られる。
［規模・平面形］規模は、開口部径263×34cm、底部径228×10cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－38°－Ｅである。

[埋土] 黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルトが混じる。
[床面･壁] 掘削はⅥ層（礫層）上面まで行われている。底面は礫層が露出しているが、ほぼ平坦である。ピットなどの底部施設は認められない。壁はほぼ直立して立ち上がる。検出面からの深さは51cmである。
遺物　なし。
時期　ＲＡ004竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ032陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版17）
[位置・検出状況] ⅦＥ24r ～ 25qグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] なし。
[規模・平面形] 規模は、開口部径283×56cm、底部径248×18cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－44°－Ｅ である。
[埋土] 下～中位は黒褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの混土、上位は黒褐色シルトと褐色砂質シルトの混土で、崩落土が多くを占めるものと考えられる。全体的に自然堆積と推定される。
[床面･壁] 掘削はⅤ層中まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどの底部施設は認められない。断面形は逆台形状を呈し、壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは39cmである。
遺物　なし。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ033陥し穴状遺構

遺構（第18図、写真図版17）
[位置・検出状況] ⅦＥ22p ～ 23pグリッドに位置する。検出面はⅣ層上面である。
[重複関係] ＲＨ011配石遺構に切られる。
[規模・平面形] 規模は、開口部径292×49cm、底部径272×19cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はＮ－32°－Ｅである。
[埋土] 大半が黒褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルトの混土で、崩落土が多くを占めるものと考えられる。全体的に自然堆積と推定される。
[床面・壁] 掘削はⅤ～Ⅵ層（礫層）上面まで行われている。底面はほぼ平坦で、ピットなどの底部施設は認められない。
遺物（写真図版40）
[土器] 不掲載としたが、埋土から43.7g出土した。
[石器] 埋土から剥片１点・16.2g（209）、台石１点・317.4g（210）が出土した。
時期　一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ034陥し穴状遺構

遺構（第19図、写真図版17）
[位置・検出状況] ⅦＥ19m～ 20lグリッドに位置する。ＲＡ003竪穴住居の床面で検出した。
[重複関係] ＲＡ003竪穴住居に切られる。また、ＲＤ035陥し穴状遺構と重複するが、新旧関係は不

明である。
［規模・平面形］規模は、開口部径371×26cm、底部径319×11cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はN－30°－Eである。
［埋土］黒褐色シルト、黒褐色砂質シルト、にぶい黄褐色砂質シルトの混土である。
［床面・壁］掘削はⅥ層（礫層）上面まで行われている。底面は礫層が露出しており、北東側にやや傾斜している。ピットなどの底部施設は認められない。壁は直立～やや外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは26cmである。
遺物　なし。
時期　ＲＡ003竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ035陥し穴状遺構

遺構（第19図、写真図版17・18）
［位置・検出状況］ⅦＥ19m～20lグリッドに位置する。ＲＡ003竪穴住居の床面で検出した。
［重複関係］ＲＡ003竪穴住居に切られる。また、ＲＤ034陥し穴状遺構と重複するが、新旧関係は不明である。
［規模・平面形］規模は、開口部径291×26cm、底部径249×16cmを測り、平面形は溝形を呈する。長軸方向はN－15°－Eである。
［埋土］にぶい黄褐色～灰黄褐色砂質シルト主体である。
［床面・壁］掘削はⅥ層（礫層）上面まで行われている。底面は礫層が露出しているが、ほぼ平坦である。ピットなどの底部施設は認められない。壁はやや外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは22cmである。
遺物　なし。
時期　ＲＡ003竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ036陥し穴状遺構

遺構（第19図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅦＥ18l～19lグリッドに位置する。ＲＡ003竪穴住居の床面で検出した。
［重複関係］ＲＡ003竪穴住居に切られる。
［規模・平面形］平面形は溝形を呈し、北側は調査区外へさらに延びると考えられる。調査範囲での規模は、開口部径188×31cm、底部178×13cmを測る。長軸方向はN－1°－Wである。
［埋土］黒褐色シルトとにぶい黄褐色シルトの混土である。
［床面・壁］掘削はⅥ層（礫層）上面まで行われている。床面は礫層が露出しているが、ほぼ平坦である。ピットなどの底部施設は認められない。壁はやや外傾しながら立ち上がる。
遺物　なし。
時期　ＲＡ003竪穴住居との重複関係から、少なくとも縄文時代中期末葉以前、さらには一連の構築と考えられる同種遺構の年代から、縄文時代中期後葉以前と考えられる。

ＲＤ037土坑

遺構（第19図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅧＥ１q～２qグリッドに位置する。Ⅲ層中で埋土上位の礫を検出し、遺構の存在を確認した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］規模は、開口部径215×120cm、底部径189×91cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ－40°－Ｅである。
［埋土］黒褐色シルト主体で、褐色砂質シルトが混じる。
［床面･壁］掘削はⅤ層中まで行われており、平面はほぼ平坦である。壁はやや外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは36cmである。
遺物（第33・42図、写真図版30・40）
［土器］１層から402.9gが出土し、このうち、１点・33.9gを掲載した（90）。
［石器］１層から石篦１点・11.4gが出土した（211）。
時期　不明であるが、ＲＡ004・007竪穴住居と同一層位で検出したことから、これと近似する時期の可能性が高い。

３　焼　土　遺　構

ＲＦ009焼土遺構

遺構（第20図、写真図版18）
［位置・検出状況］ⅧＥ５tグリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］平面範囲は48×45cmを測り、不整形に広がる。厚さは最大８cmである。
［焼土の様相］黒褐色シルトおよびにぶい黄褐色シルトと焼土の混土であり、異地性である。
遺物　なし。
時期　不明であるが、ＲＡ004・007竪穴住居と同一層位で検出したことから、これと近似する時期の可能性が高い。

ＲＦ010焼土遺構

遺構（第20図、写真図版19）
［位置・検出状況］ⅧＥ４pグリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］焼土範囲は57×52cmを測り、不整円形に広がる。厚さは最大13cmである。
［焼土の様相］植物痕などの撹乱が激しい。現地性の焼土であり、燃焼面上に粘土塊が堆積している。
遺物
［土器］焼土層の直上から18.9g出土したが、細片のため不掲載とした。
時期　不明であるが、ＲＡ004・007竪穴住居と同一層位で検出したことから、これと近似する時期の可能性が高い。

ＲＦ011焼土遺構

遺構（第20図、写真図版19）

［位置・検出状況］ⅧＥ１ｐ～２ｐグリッドに位置する。Ⅲ層中で検出した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］平面範囲は開口部径63×42cmの不整楕円形で、厚さは最大10cmである。
［焼土の様相］黒褐色シルトおよび黒褐色砂質シルトと焼土の混土であり、異地性である。
遺物（第33図・写真図版30）
［土器］１層から54.1g出土し、このうち１点・32.0gを掲載した（91）。
時期　不明であるが、ＲＡ004・007竪穴住居と同一層位で検出したことから、これと近似する時期の可能性が高い。

ＲＦ012焼土遺構
遺構（第17図、写真図版19）
［位置・検出状況］ⅧＥ５ｘ～６ｙグリッドに位置する。Ⅲ層中で焼土ブロックの点在範囲として検出した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］南西側は調査区外へ延びる。調査範囲での掘り込みは開口部径281×91cmを測る。平面形は円形基調と考えられる。
［焼土の様相］黒褐色シルトおよびにぶい黄褐色砂質シルトが焼土および炭化物粒と混在する状態で、異地性と考えられる。
［床面･壁］掘削はＶａ層中まで行われており、底面には凹凸がある。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。
遺物（第33・42・47図、写真図版30・40・45）
［土器］埋土から204.8g出土し、このうち、２点・202.8gを掲載した（92・93）。
［石器］底面から両面礫器１点・1,145.5gが出土した（212）。
［石製品］底面で石棒１点・８kgが出土した（260）。
時期　底面出土遺物から縄文時代と考えられる。竪穴住居からも同様の石棒が出土していることを考慮すれば、これらと同時期の可能性が高い。

4　配石・集石遺構

ＲＨ011配石遺構
遺構（第20図、写真図版20）
［位置・検出状況］ⅦＥ22ｃ～ｄグリッドに位置する。Ⅲ層中で礫集中として検出した。
［重複関係］ＲＤ033陥し穴状遺構を切る。
［規模・平面形］礫集中は139×127cmの範囲に広がる。範囲中央付近に扁平礫を立位に埋設した箇所が確認される。これ以外に規則性は認識できない。礫群の下部からは土坑が確認され、開口部径157×148cm、底部径105×93cmを測り、平面形は不正楕円形、断面形は椀状を呈する。
［埋土］下～中位は黒褐色シルトと褐色砂の混土である。上位は黒褐色シルトで、礫を埋設している。
遺物（第33・43図、写真図版30・40～42・45）
［土器］下部土坑の埋土から1,725.6gが出土し、このうち、４点・440.8gを掲載した（94～97）。
［石器］構成礫のうち石器が転用された７点･28,004.9gを掲載した（213～219）。この他、構成礫４点･25,530.0gも掲載している（220～223）。

［石製品］構成礫のうち、棒状で石棒の可能性があるもの１点・2,792.0gを掲載した（261）。
時期　出土遺物から縄文時代中期後～末葉と考えられる。

ＲＨ012配石遺構
遺構（第21図、写真図版20）
［位置・検出状況］ⅦＥ23k ～ 24kグリッドに位置する。同付近は上段から下段にかけての傾斜部分にあたる。検出面はⅣ層中である。
［重複関係］なし。
［規模･平面形］直径25 ～ 40cmの６個の自然礫が、長軸64×短軸59cmの「コ」字形に埋設されている。
［埋土］２･３層は礫埋設のための掘方と考えられ、５層には焼土ブロックが含まれる。このことから、本遺構は後世の削平によって破壊された竪穴住居の炉であった可能性が考えられる。
遺物（第33・43図、写真図版30・42）
［土器］検出面から34.3gが出土した。これと周辺から出土した土器片が接合し、１点・189.1gを掲載した（98）。
［石器］構成礫のうち石器が転用された３点・15,020.0gを掲載した（224 ～ 226）。
時期　出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。

ＲＨ013集石遺構
遺構（第21図、写真図版20）
［位置・検出状況］ⅧＥ２ｒ～３ｒグリッド付近に位置する。Ⅲ層中で、礫集中として検出した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］3.0×2.3mの範囲に集中する。規則的なものかは不明であるが、「Ｔ」字形に配置されているようにも見える。
時期　不明である。

５　埋設土器遺構

ＲＰ002埋設土器遺構
遺構（第21図、写真図版21）
［位置・検出状況］ⅦＥ22j ～ 22kグリッドに位置する。検出面はⅣ層中で、掘り方と考えられる黒褐色の楕円形プランと土器のまとまりを検出したことから、埋設土器と判断した。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］掘方は楕円形を呈する。規模は上端82×55cm、下端36×21cm、検出面からの深さは14cmを測る。
［出土状況］99が斜位に埋設されていた。
［埋土］内部には黒褐色砂質シルトが堆積している。掘方埋土は、黒褐色砂質シルトを主体とし、褐色砂質シルトブロックを少量含む。
遺物（第33図、写真図版30）
［土器］1,091.1gが出土し、99の埋設土器１点・828.00gを掲載した。
時期　出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

6　柱穴状土坑（第22・33図、写真図版30）

開口部径50cm以下の土坑で、柱穴の可能性があるものをここに登録した。７個確認されている（Ｐ１～７）。Ⅷ Ｅ３ｓ～４ｓ付近に比較的密集するが、配置・平面規模・深さとも様々で、規則性は見出せない。埋土はいずれも黒褐色シルト主体である。

7　溝

ＲＧ001溝

遺構（第23図、写真図版21）

［位置・検出状況］下段部分のⅧ Ｅ３ｈ～Ⅷ Ｅ７1グリッド付近に位置し、Ⅱ層中で検出した。西北端は調査区外へ続くものと考えられる。なお、精査は、下段部分中央付近のⅧ Ｅ７1グリッド付近まで行い、それより南東にあたる部分についてはプランを確認するのみにとどめた。下段部分で検出した遺構はＲＧ001溝のみである。

［重複関係］なし。

［規模･平面形］精査を行った部分について記述する。長さは124.8m、幅は、上端15.8～27.2m、下端7.5～15.8mを測る。北西-南東方向に蛇行しながら延びる。

［埋土］黒褐色砂を主体とし、６層に分層した。自然堆積と考えられる。

［底面・壁］Ⅵ層中まで掘削が行われている。底面は凹凸がみられ、起伏が大きい。壁は直立～外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは、21.7～77.7cmを測る。大きく窪んだ最深部では96.7cmを測る。

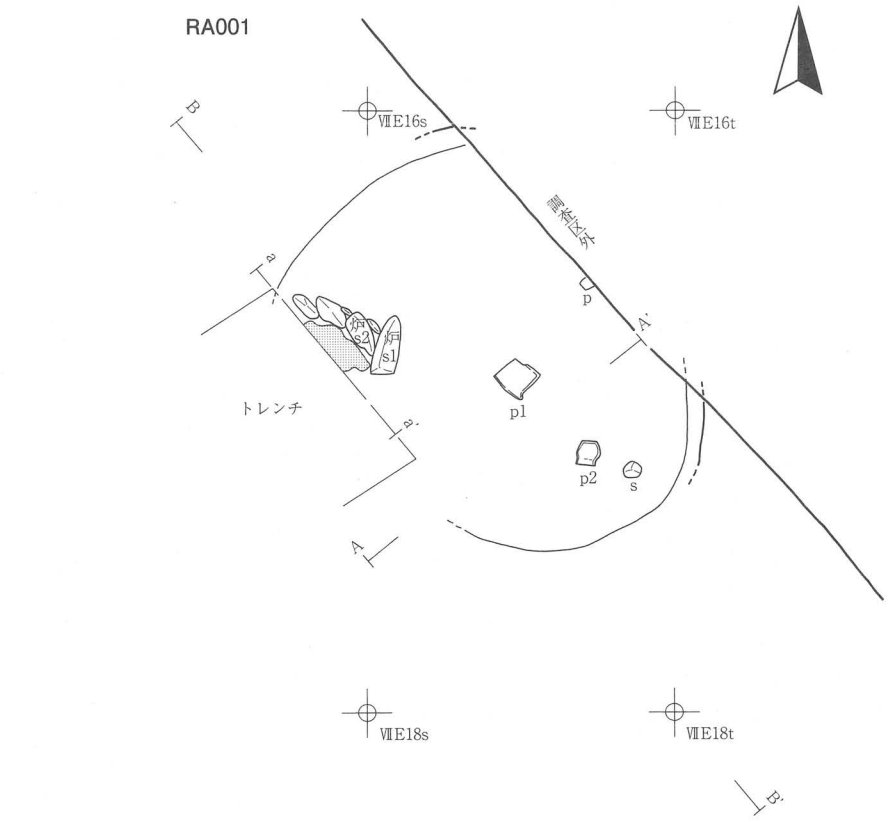
遺物（第33・43・47図、写真図版30・42・46）

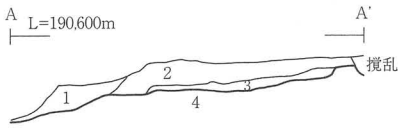
［銭貨］大きく窪んだ最深部の最下層より１点出土し、これを掲載した（264）。

［土器］埋土から1,659.6g出土し、このうち２点・75.6gを掲載した（101・102）。

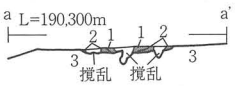
［石器］埋土からトゥール２点・542.1gが出土した（227・228）。

時期　埋土の最下層から出土した銭貨の様相から、近世以降と考えられる。

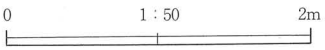




RA001 A－A'・B－B'
1　2.5Y4/1　黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　酸化鉄斑状に10%　水田造成土（床土）
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒１%
3　10YR3/1黒褐色シルトと 10YR4/4 褐色シルトの混土（6：4）粘性中・しまり中
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅲ層
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　褐色砂質シルトブロック30%
人為堆積

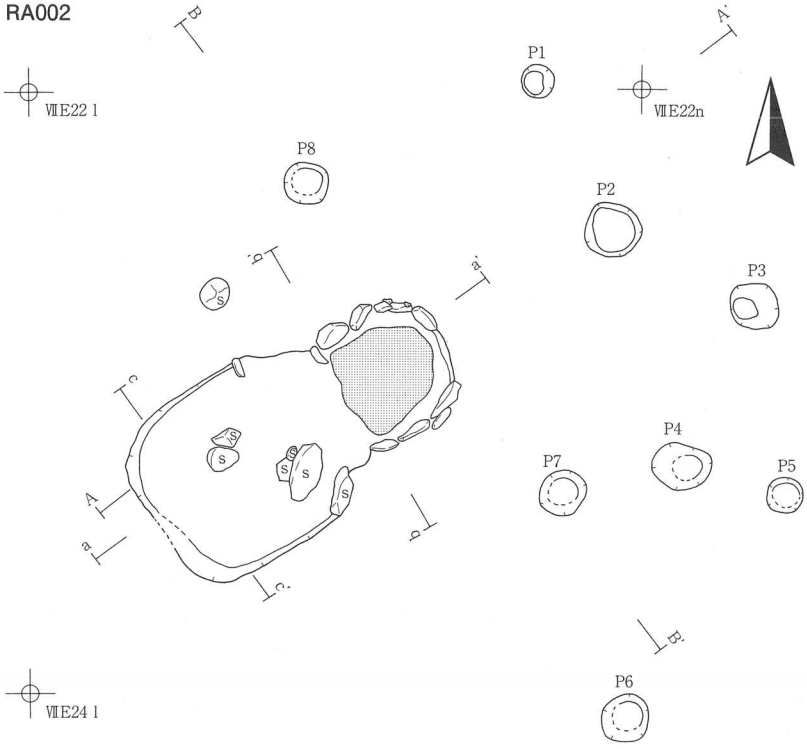


RA001 炉 a－a'
1　5YR5/6　明赤褐色　シルト　粘性弱・しまり強　焼土（強）
2　5YR3/2　暗赤褐色　シルト　粘性弱・しまり強　焼土（弱）
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/3　暗褐色シルト



第６図　RA001竪穴住居

RA002



柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）
P1	23×22	7
P2	38×37	7
P3	35×32	26
P4	41×30	8
P5	24×24	7
P6	34×32	16
P7	32×29	29
P8	31×30	30

RA002　P1
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト5%（下位に多い）　焼土粒（～2mm）1%　炭化物粒（～2mm）3%

RA002　P2
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト7%

RA002　P3
1　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト7%　炭化物粒（～2mm）2%

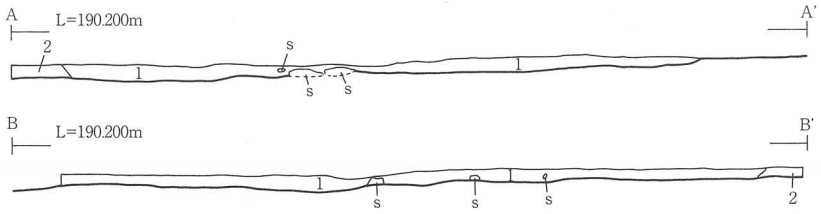
RA002　P4
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト5%　炭化物粒（～2mm）1%

RA002　P5
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト3%

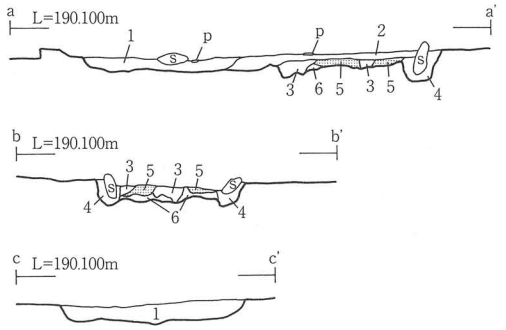
RA002　P7
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　褐色砂質シルトブロック2%　炭化物粒（～3mm）3%

RA002　P8
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　褐色砂質シルト3%　炭化物粒（～3mm）2%

※RA002　P6は記録なし

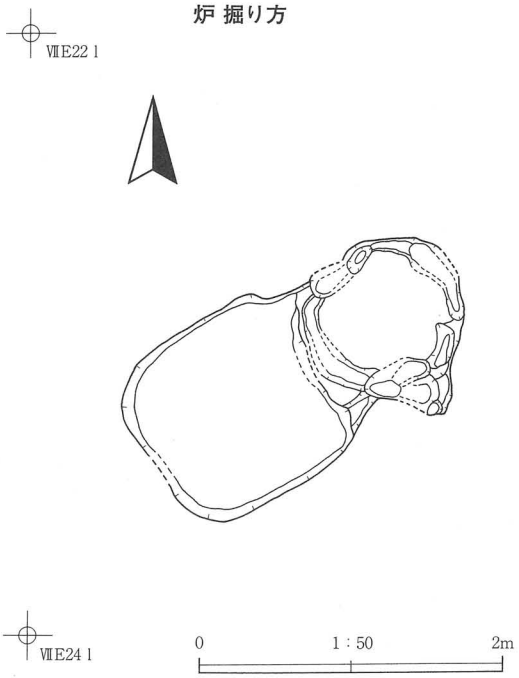


RA002　A－A'・B－B'
1　10YR2/2～2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物粒（～5mm）5%　焼土粒（～2mm）3%　10YR4/4褐色砂質シルトブロック5%
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中（基本層序Ⅲ層に相当）

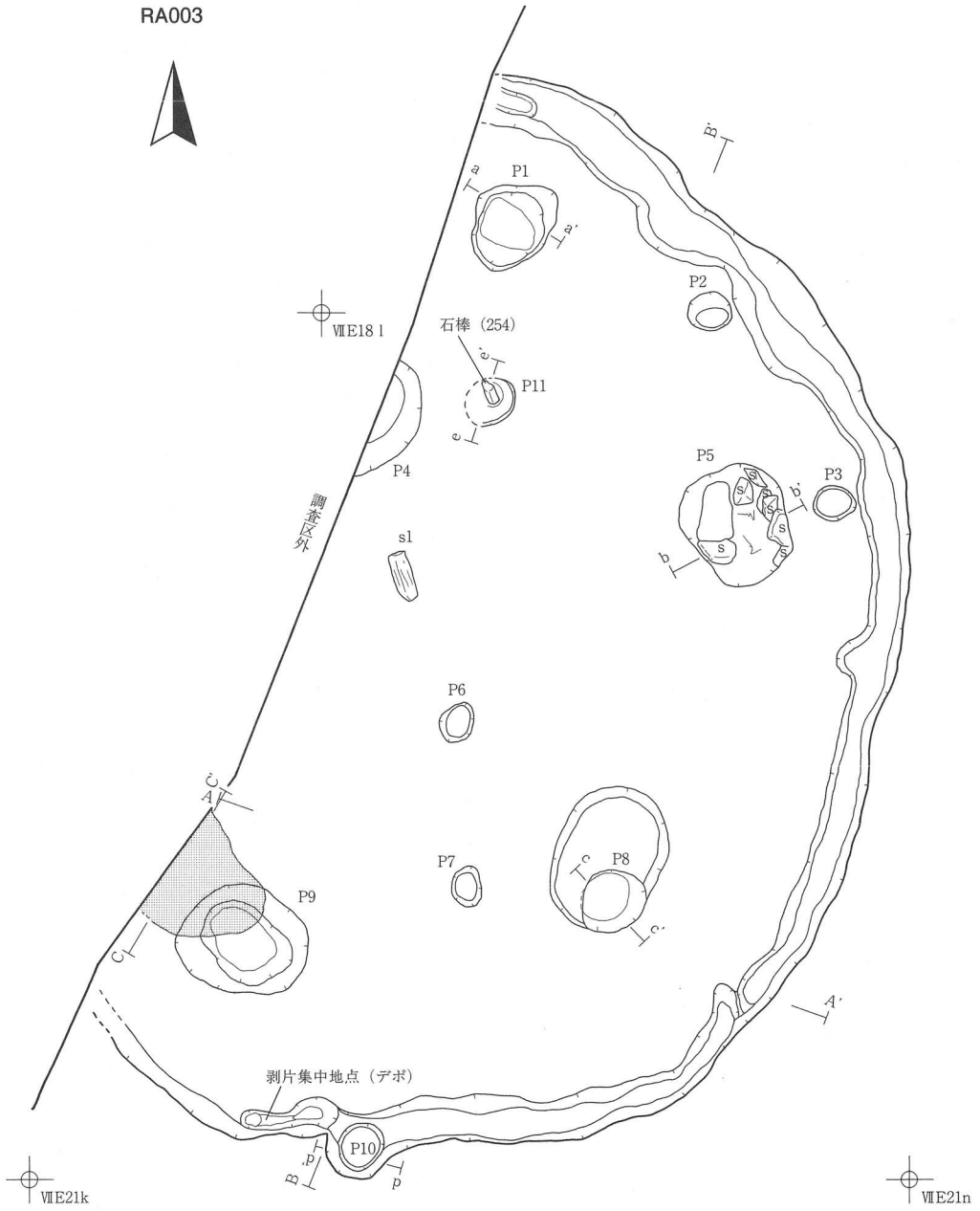


RA002　炉　a－a'・b－b'・c－c'
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　暗褐色砂質シルト5%　焼土粒（～2mm）1%　炭化物粒（～3mm）3%
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　5YR4/6 赤褐色焼土7%　炭化物粒5%
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　5YR4/8 赤褐色焼土3%　炭化物粒（～3mm）3%
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中～強　暗褐色砂質シルトブロック5%　炭化物粒（～3mm）5%
5　5YR4/8　赤褐色　焼土　粘性弱・しまり強（※現地性焼土）
6　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　焼土（5層起源と考えられる）10%　炭化物粒（～2mm）3%

炉 掘り方



第７図　RA002竪穴住居



RA003

柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）	備考
P1	70×55	74	
P2	30×27	22	
P3	29×25	6	
P4	(86)×(30)	(26)	調査分
P5	82×71	71	
P6	30×23	11	
P7	28×21	64	
P8	101×53	83	
P9	78×74	22	
P10	34×31	20	

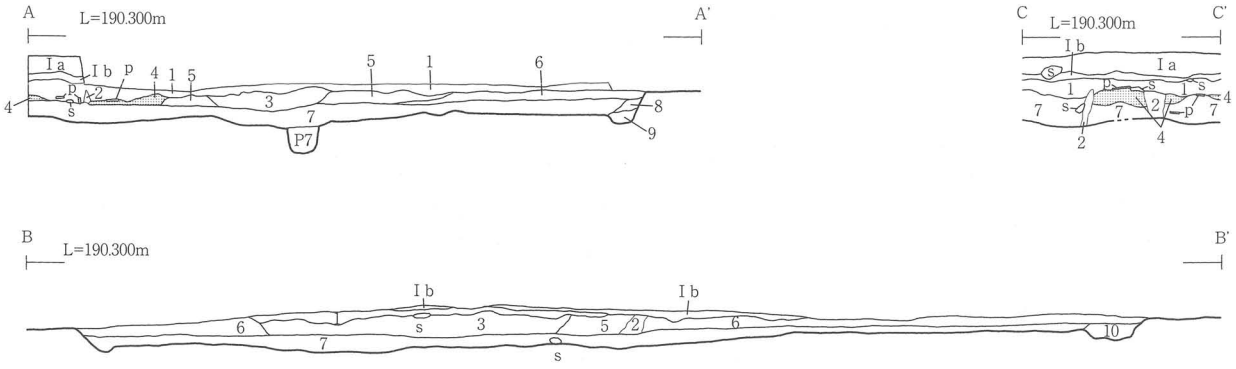
RA003　P2
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　褐色砂質シルト2%

RA003　P7
1　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱

※RA003 P3・4・6・9は記録なし

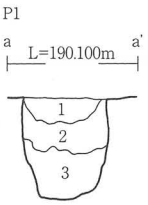
0　1：50　2m

第８図　RA003竪穴住居（1）



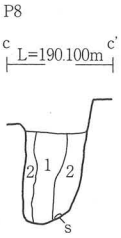
RA003　A－A'・B－B'・C－C'

1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫（～2mm）3%
2　10YR2/2～2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物粒（～1mm）1%（※木痕撹乱か）
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック7%
4　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　5YR4/6赤褐色焼土ブロック10%　炭化物粒（～3mm）2%
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック3%　炭化物粒（～1mm）1%
6　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック5%
7　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルトブロック10%
8　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルトブロック15%
9　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルトブロック10%　炭化物粒（～1mm）1%
10　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　褐色砂質シルトブロック5%



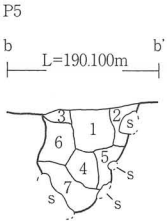
RA003　P1

1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　褐色砂質シルトブロック2%
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　褐色砂質シルトブロック10%（※壁際に多い）
3　10YR4/4　褐色　砂　粘性なし・しまり弱
　黒褐色シルトブロック5%



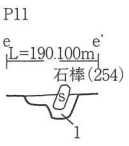
RA003　P8

1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　褐色シルトブロック2%　炭化物粒(～1mm)1%
2　10YR4/4　褐色　砂　粘性なし・しまり弱
　黒褐色シルトブロック5%・礫（～5cm）3%



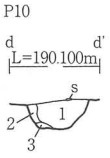
RA003　P5

1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中
　褐色砂質シルト3%
2　10YR2/3　黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂5%
3　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強
　褐色砂質シルト2%
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　褐色シルト7%
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
6　10YR4/6　褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　褐色シルト15%
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強・しまり中
　褐色シルト15%



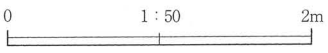
RA003　P11

1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　褐色砂質シルトブロック3%



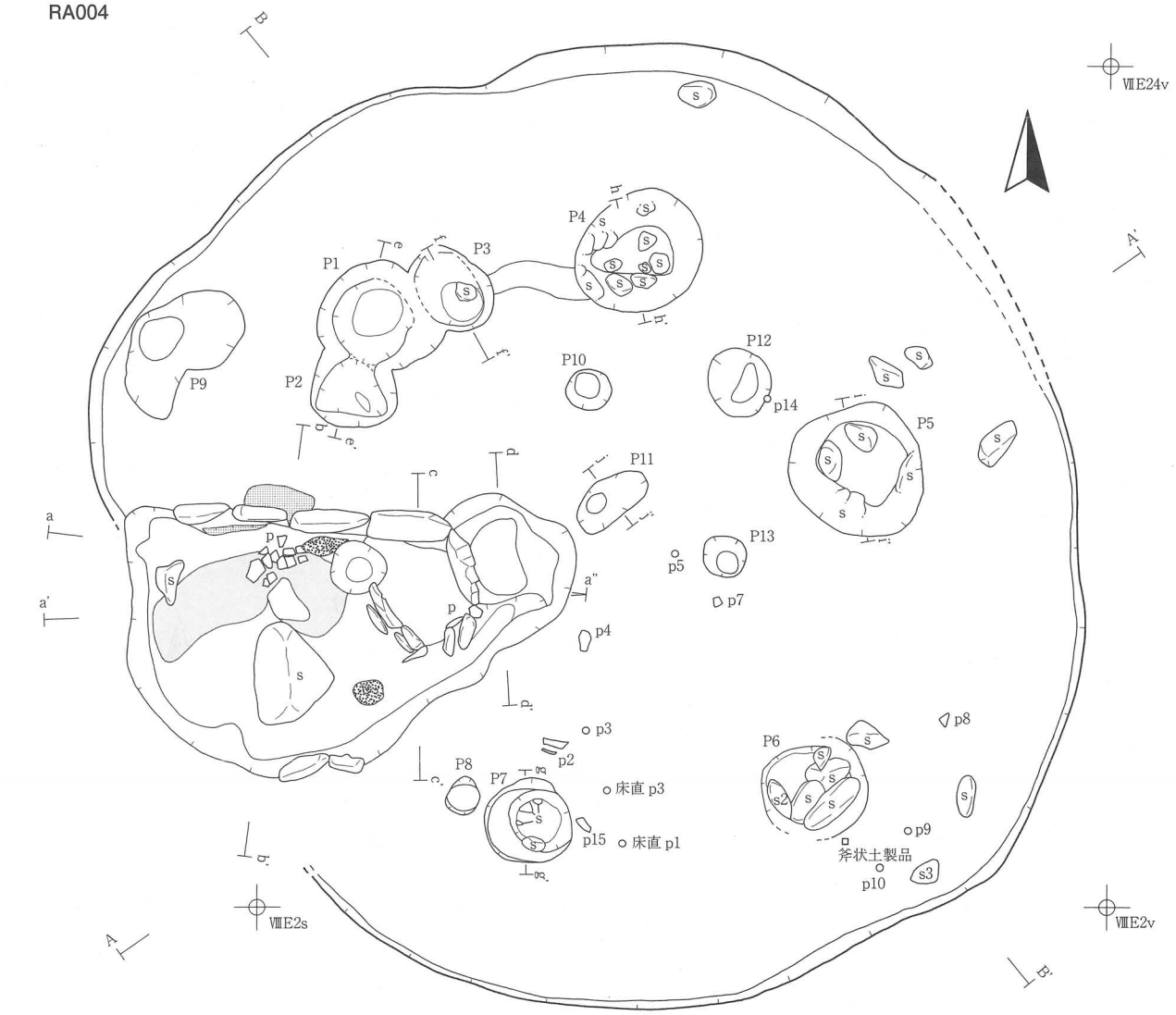
RA003　P10

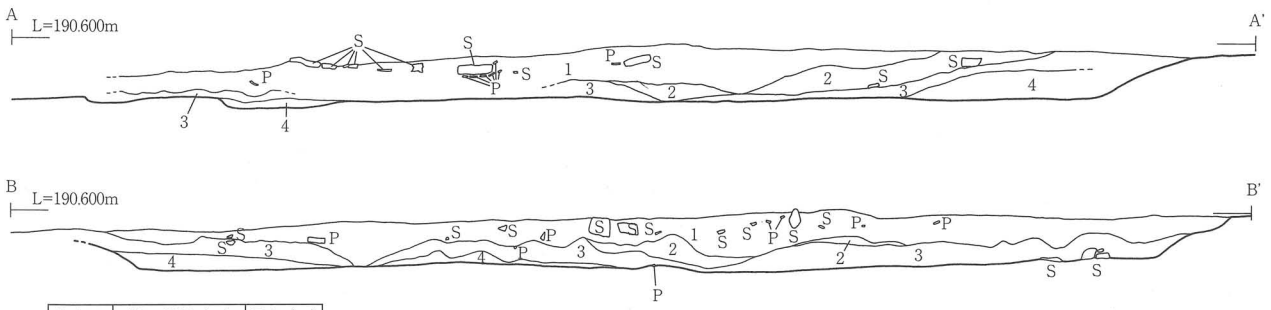
1　10YR3/4　暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中
　黒褐色シルトブロック7%
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中
　褐色砂質シルトブロック3%
3　10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中



第９図　RA003竪穴住居（２）

RA004



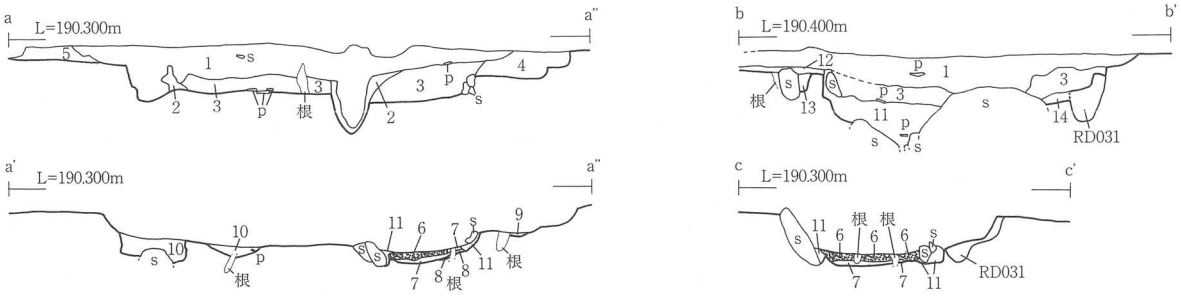


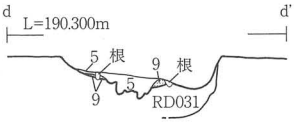
柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）
P1	91×78	67
P2	62×－	42
P3	66×－	65
P4	94×82	74
P5	102×50	65
P6	75×75	68
P7	62×60	73
P8	26×22	47
P9	102×50	34
P10	33×30	44
P11	56×30	57
P12	48×44	47
P13	32×30	42

RA004　A-A'・B-B'
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭・焼土粒1%
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/6褐色砂質シルトの混土（7:3）粘性弱・しまり弱　炭・焼土粒5%
3　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性弱・しまり中
4　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（3：7）粘性弱・しまり中

0　1：50　2m

第10図　RA004竪穴住居（1）

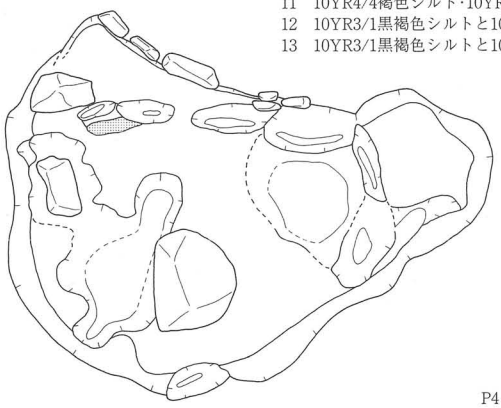




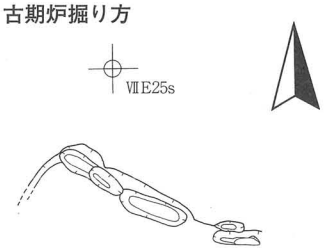
RA004　炉　a-a''・a'-a''・b-b'・c-c'・d-d'

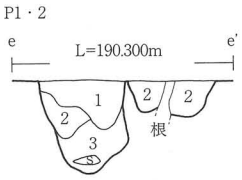
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト粒7%　炭化物粒10%　焼土粒1%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック20%
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト粒7%　炭化物粒20%　焼土粒1%
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト粒・炭化物粒各20%　焼土粒5%
5　2.5YR4/4にぶい赤褐色シルト・10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト・10YR3/1 黒褐色シルトの混土（3：5：2）粘性弱･しまり中　後世の撹乱
6　10YR1.7/1黒色炭化物と10YR3/1黒褐色シルトの混土　粘性中･しまり弱
7　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
8　5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性弱･しまり弱　焼土
9　2.5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性弱･しまり中　焼土
10　10YR3/1黒褐色シルト･10YR3/2黒褐色シルト･10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混土（4:5:1）粘性中･しまり強　貼床？
11　10YR4/4褐色シルト･10YR3/2黒褐色シルト･10YR3/1黒褐色シルトの混土（4:4:2）粘性中･しまり強　掘り方埋土
12　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混土（5：5）粘性中･しまり中　貼床？
13　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色シルトの混土（8：2）粘性中･しまり中　古期炉掘り方埋土

炉掘り方



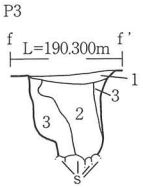
古期炉掘り方





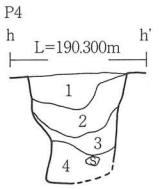
RA004　P1・2

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%　炭化物粒1%
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中･しまり中
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（5：5）粘性中･しまり中



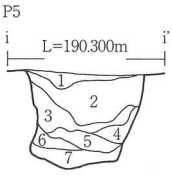
RA004　P3

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂ブロック（～5cm）10%　柱当たり？
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（5：5）粘性中･しまり中



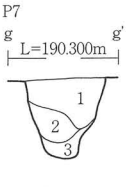
RA004　P4

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%　炭化物粒5%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
3　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%　焼土粒5%



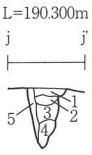
RA004　P5

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト20%　炭化物粒5%
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%　炭化物粒5%
4　10YR4/4　褐色　砂　粘性なし･しまり弱　Ⅴ層崩落土
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%　炭化物粒10%
6　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中･しまり中
7　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト5%



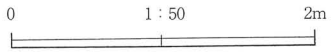
RA004　P7

1　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック（～5cm）20%　炭化物粒10%
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック（～5cm）20%
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（5：5）粘性弱・しまり弱



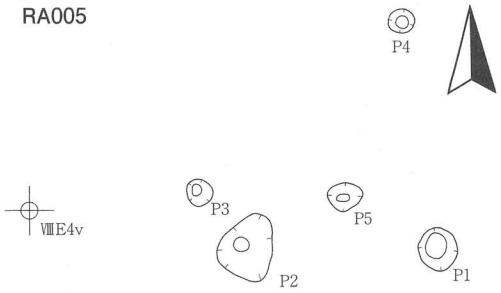
RA004　P11

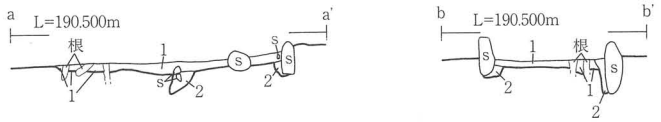
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
3　10YR3/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
4　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（7：3）粘性中・しまり中
4　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（5：5）粘性弱・しまり中



第11図　RA004竪穴住居（2）

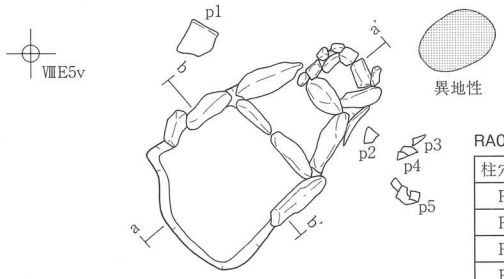
RA005

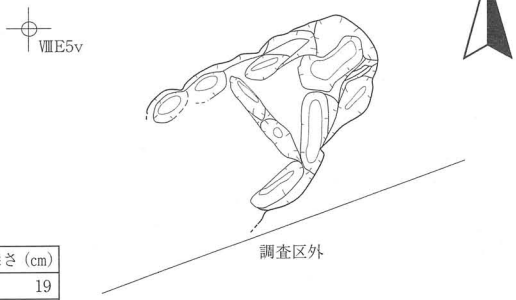




RA005　炉　a-a'・b-b
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック5%
掘り方埋土

炉掘り方

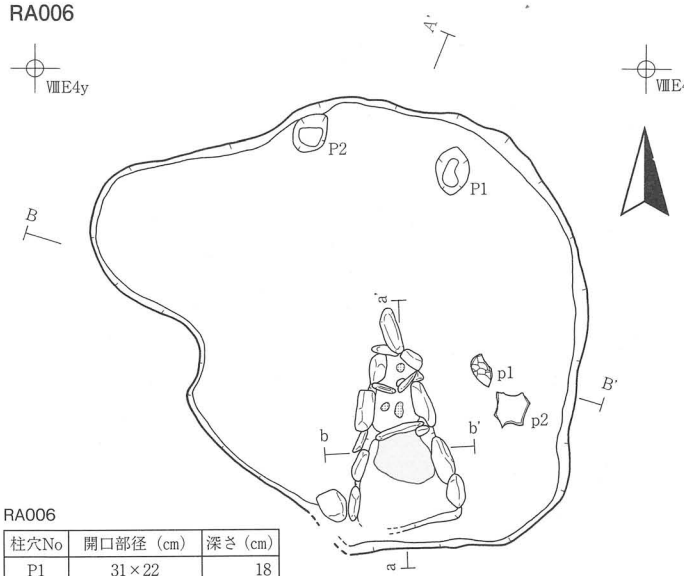




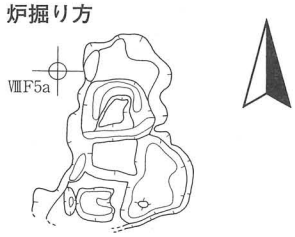
RA005

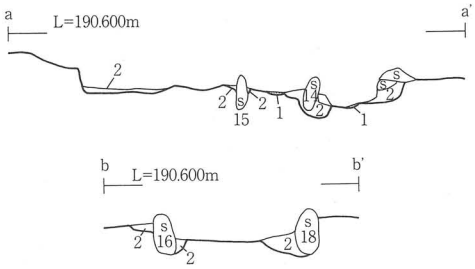
柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）
P1	29×25	19
P2	43×36	32
P3	18×16	13
P4	16×16	10
P5	23×17	19

RA006



炉掘り方

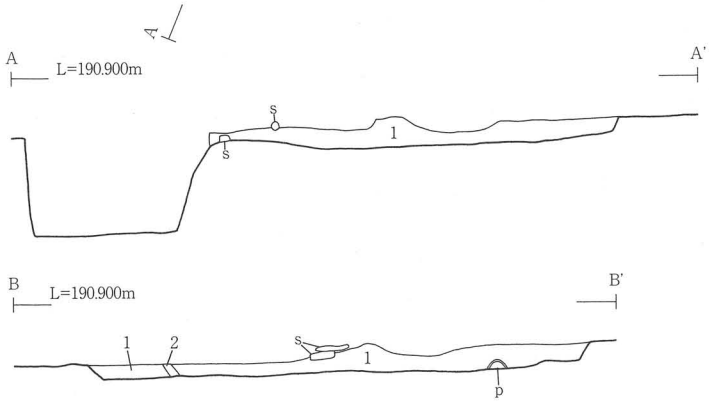




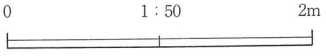
RA006

柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）
P1	31×22	18
P2	27×22	21

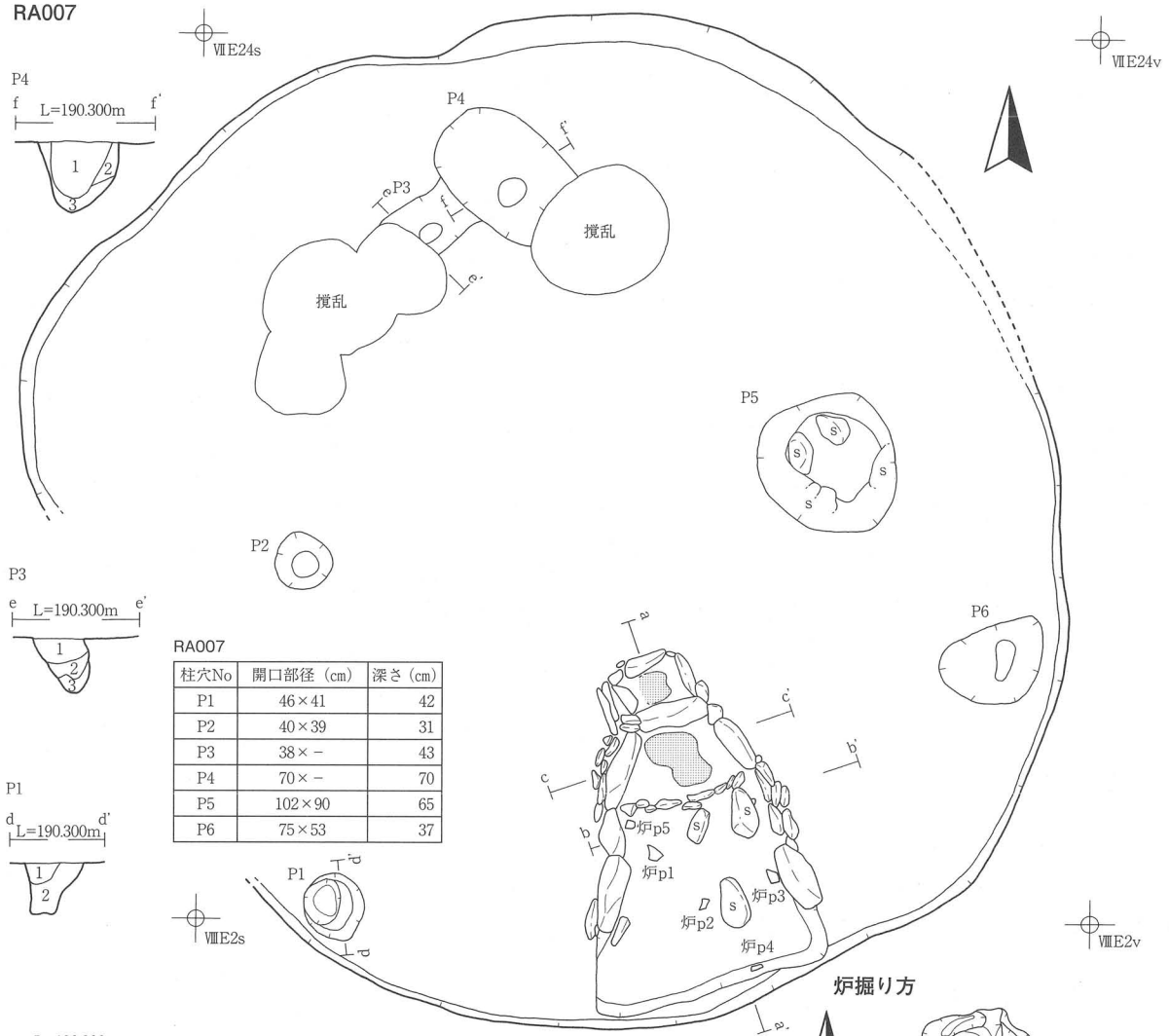
RA006　炉　a-a'・b-b'
1　5YR4/4　にぶい赤褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　焼土
2　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中
10YR5/6黄褐色砂質シルトブロック10%　掘り方埋土



RA006　A-A'・B-B'
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック10%
2　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中



第12図　RA005・006竪穴住居



柱穴No	開口部径（cm）	深さ（cm）
P1	46×41	42
P2	40×39	31
P3	38×－	43
P4	70×－	70
P5	102×90	65
P6	75×53	37

RA007　炉　a-a'・b-b'・c-c'

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　炭化物粒5%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒1%
3　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック3%　炭化物粒3%
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック7%　炭化物粒10%
5　10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中
6　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック7%　炭化物粒10%
7　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　焼土・炭化物粒10%
8　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　焼土・炭化物粒10%
9　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性弱・しまり中
10　2.5YR4/4　にぶい赤褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　焼土
11　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（4：6）粘性弱・しまり中　焼土粒10%　掘り方埋土
12　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　掘り方埋土
13　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルトの混土　粘性中・しまり中　掘り方埋土
14　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　柱抜取痕埋土　RA004PP8
15　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（4：6）粘性中・しまり強　掘り方埋土　RA004PP8

RA007　P1

1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック7%　炭化物粒1%
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック（～5cm）20%　炭・焼土粒1%

RA007　P3

1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトの混土　粘性中・しまり中
2　10YR3/1黒褐色シルト・10YR3/2黒褐色砂質シルト・10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（2：5：3）粘性弱・しまり中
3　10YR3/1黒褐色シルト・10YR3/2黒褐色砂質シルト・10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（1：4：5）粘性弱・しまり中

RA007　P4

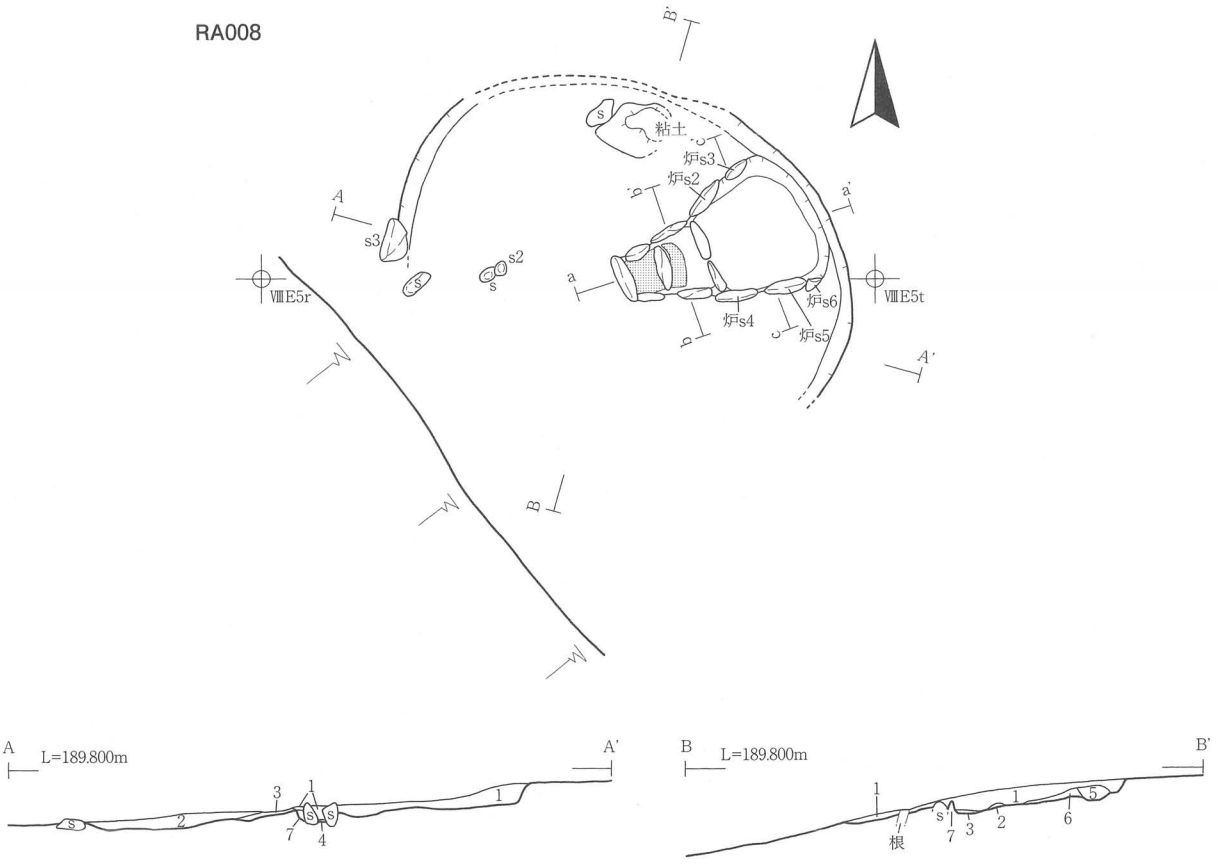
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトの混土(7:3) 粘性弱・しまり中　炭化物粒1%以下
2　10YR4/2灰黄褐色砂と10YR3/1黒褐色砂質シルトの混土(8：2) 粘性弱・しまり中
3　10YR3/1黒褐色シルト・10YR3/2黒褐色砂質シルト・10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土(5：3：2) 粘性中・しまり中

RA007　P6

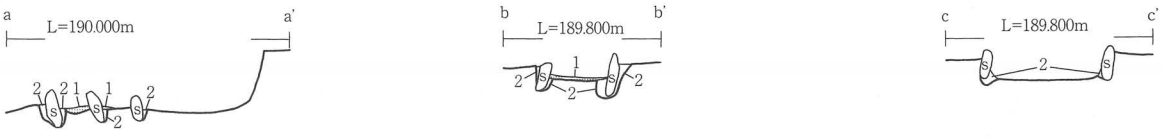
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂の混土(6：4) 粘性中・しまり中　炭化物粒5%

0　1：50　2m

第13図　RA007竪穴住居

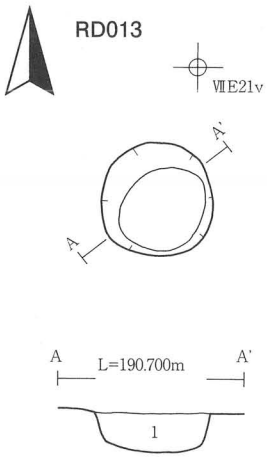


RA008　A-A'・B-B'
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　炭・炭化物粒3%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　炭化物粒15%　焼土粒5%
3　2.5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性弱･しまり中　焼土
4　2.5YR3/2　暗赤褐色　シルト　粘性弱･しまり中　焼土
5　2.5YR5/6　黄褐色　粘土　粘性強･しまり強
6　10YR3/1黒褐色シルトと2.5YR5/6黄褐色粘土の混土　粘性中･しまり中　炭化物粒1%
7　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり強　炉構成土

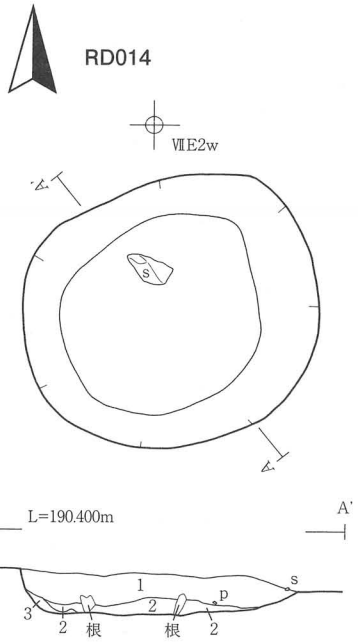


RA008　炉　a-a'・b-b'・c-c'
1　5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性弱･しまり中　焼土
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色シルト粒1%　掘り方埋土

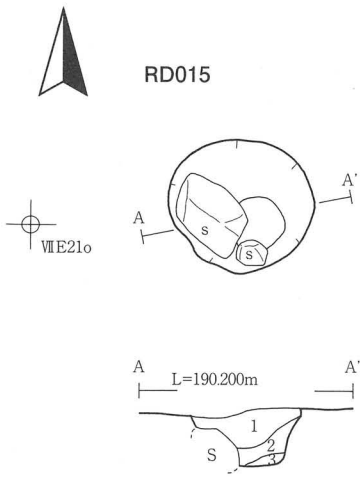
第14図　RA008竪穴住居



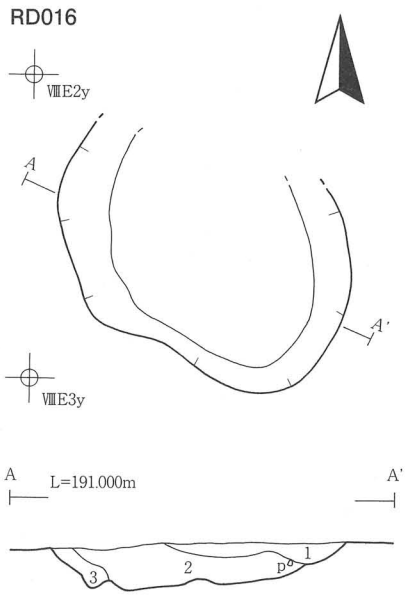
RD013
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり強
　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　焼土・炭化物粒5%



RD014
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
　10YR4/4褐色砂質シルト（Ⅴ層起源）ブロック（～1cm）5%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
　10YR5/4にぶい黄褐色砂（Ⅵ層起源）ブロック（～3cm）10%
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混土（5：5）
　粘性弱･しまり中



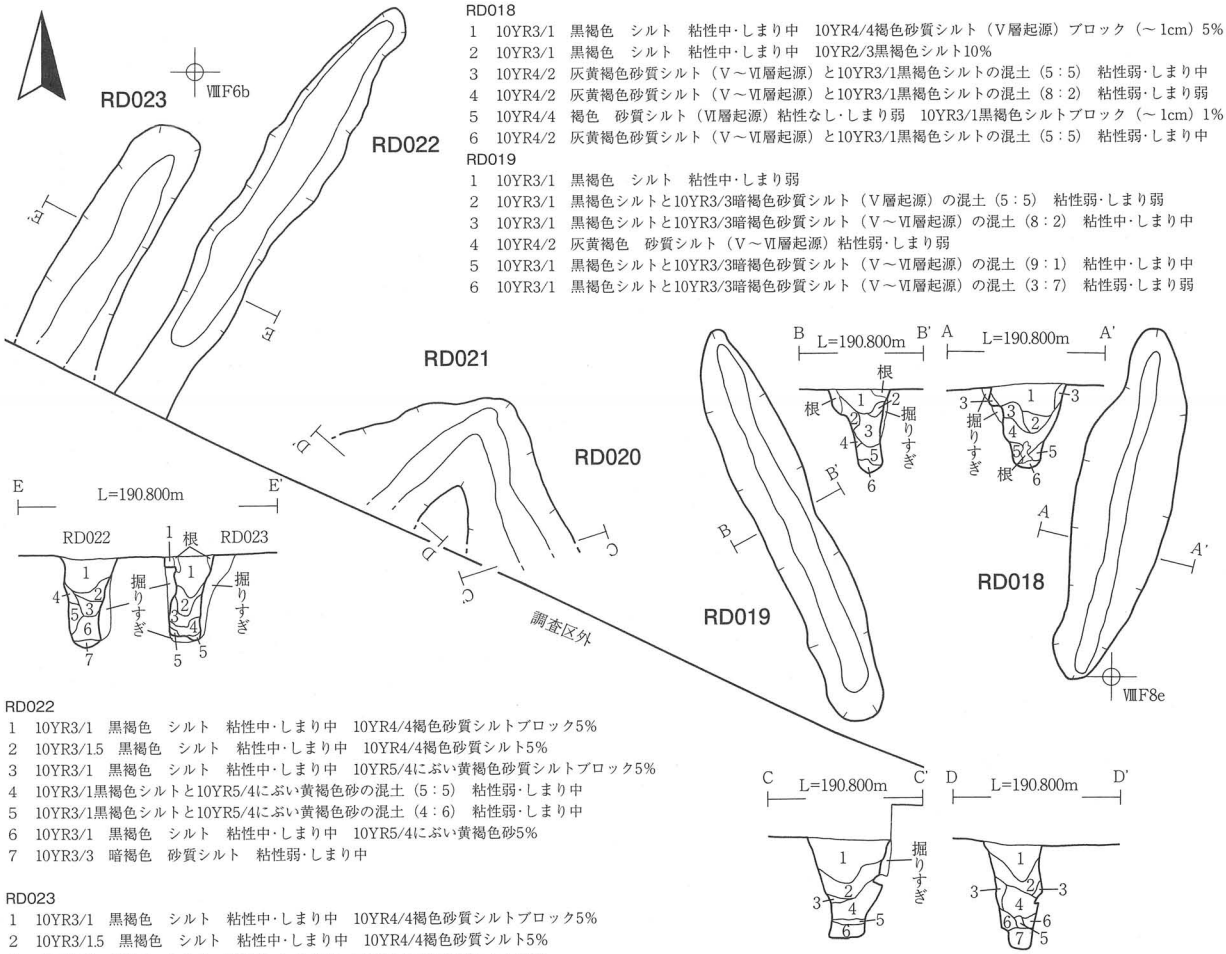
RD015
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
　10YR4/4褐色砂質シルトブロック7%混入
2　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり弱
　黒褐色砂質シルトブロック3%混入
3　10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中



RD016
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性中･しまり中
　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%
2　5YR3/2　暗赤褐色　シルト　粘性中･しまり中
　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%　焼土・炭化物粒20%
3　10YR3/1黒褐色シルト・10YR3/2黒褐色シルト・10YR5/4にぶい黄褐色砂質
　シルトの混土（3：4：3）粘性弱･しまり中　炭化物粒1%

0　1：50　2m

第15図　RD013～016土坑



RD018
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルト（Ⅴ層起源）ブロック（～1cm）5%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR2/3黒褐色シルト10%
3　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）と10YR3/1黒褐色シルトの混土（5：5）　粘性弱･しまり中
4　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）と10YR3/1黒褐色シルトの混土（8：2）　粘性弱･しまり弱
5　10YR4/4　褐色　砂質シルト（Ⅵ層起源）粘性なし･しまり弱　10YR3/1黒褐色シルトブロック（～1cm）1%
6　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）と10YR3/1黒褐色シルトの混土（5：5）　粘性弱･しまり中

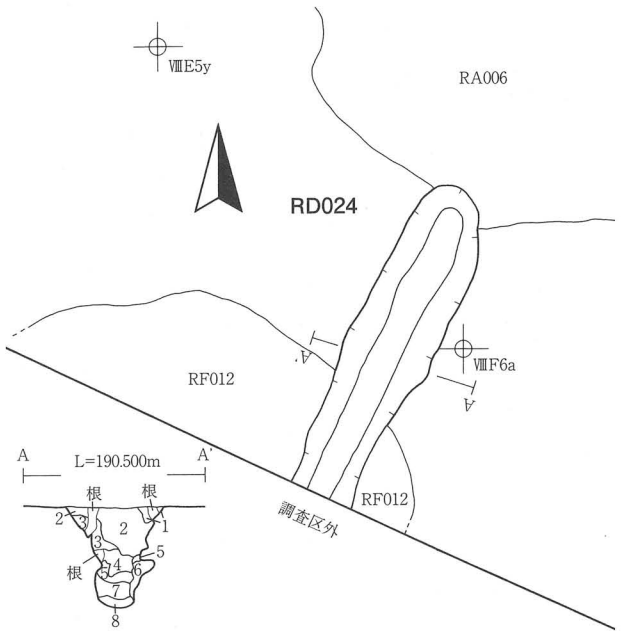
RD019
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり弱
2　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルト（Ⅴ層起源）の混土（5：5）　粘性弱･しまり弱
3　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）の混土（8：2）　粘性中･しまり中
4　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）粘性弱･しまり弱
5　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）の混土（9：1）　粘性中･しまり中
6　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルト（Ⅴ～Ⅵ層起源）の混土（3：7）　粘性弱･しまり弱

RD022
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルトブロック5%
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルト5%
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%
4　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（5：5）　粘性弱･しまり中
5　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（4：6）　粘性弱･しまり中
6　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂5%
7　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり中

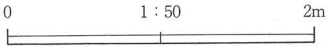
RD023
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルトブロック5%
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルト5%
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルト10%
4　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂7%
5　10YR5/4にぶい黄褐色砂と10YR3/1黒褐色シルトの混土（5：5）粘性中･しまり中

RD020
1　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%
3　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり中　Ⅴ～Ⅵ層崩落土
4　10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
6　10YR3/3　暗褐色　砂質シルト　粘性中･しまり中

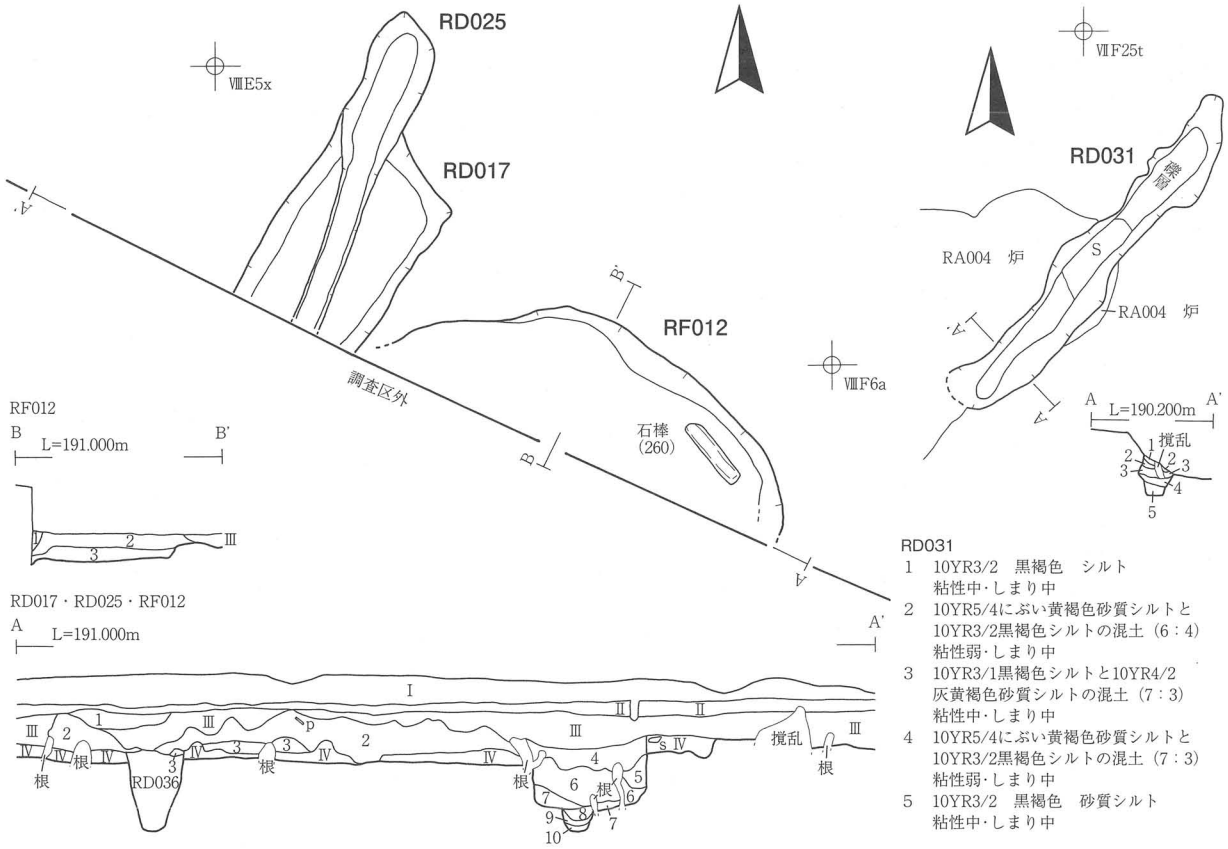
RD021
1　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%
2　10YR3/1.5黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中･しまり中
3　10YR3/1.5黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混土（3：7）粘性弱･しまり中
4　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
6　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり中　Ⅴ～Ⅵ層崩落土
7　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%



RD024
1　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルトブロック5%
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色砂質シルトの混土
4　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（8：2）粘性中･しまり中
5　10YR3/2　黒褐色　砂質　粘性弱･しまり中
6　10YR2/1黒色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（7：3）粘性弱･しまり中
7　10YR2/1黒色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（8：2）粘性弱･しまり中
8　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（6：4）粘性弱･しまり弱

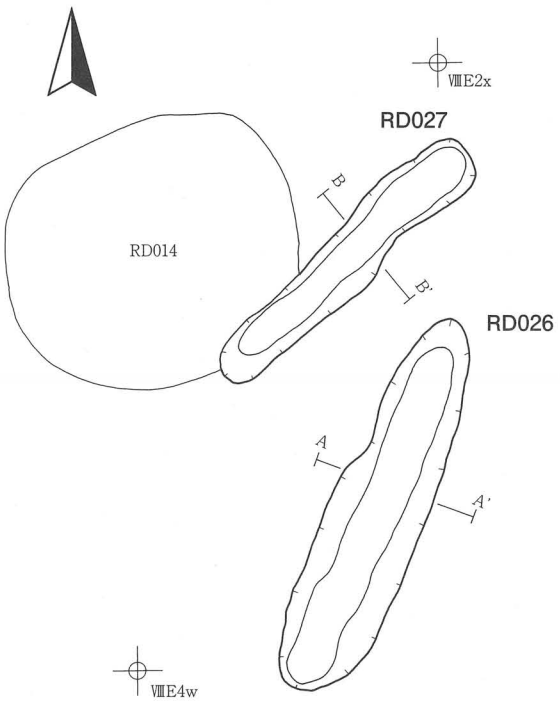


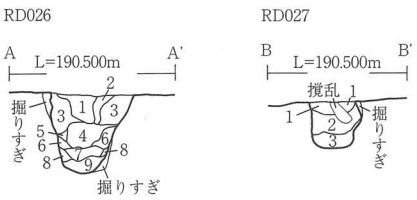
第16図　RD018～024陥し穴状遺構



RD031
1 10YR3/2 黒褐色 シルト
粘性中·しまり中
2 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと
10YR3/2黒褐色シルトの混土（6：4）
粘性弱·しまり中
3 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2
灰黄褐色砂質シルトの混土（7：3）
粘性中·しまり中
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと
10YR3/2黒褐色シルトの混土（7：3）
粘性弱·しまり中
5 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト
粘性中·しまり中

RD017・RD025・RF012
1 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混土（7：3）粘性中·しまり中
2 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック5% 焼土ブロック 炭化物粒10% 廃棄土（※RF012）
3 10YR3/1黒褐色シルトと5YR4/6赤褐色シルト（焼土）と炭の混土（3：4：3）粘性中·しまり中 廃棄土（※RF012）
4 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック5%（※RD017）
5 10YR2.5/1 黒～黒褐色 シルト 粘性中·しまり中（※RD017）
6 10YR2.5/1 黒～黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR4/4褐色砂質シルトブロック7%（※RD017）
7 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混土（6：4）粘性中·しまり中（※RD017）
8 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中（※RD025）
9 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性中·しまり中（※RD025）
10 10YR3/1.5 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中（※RD025）



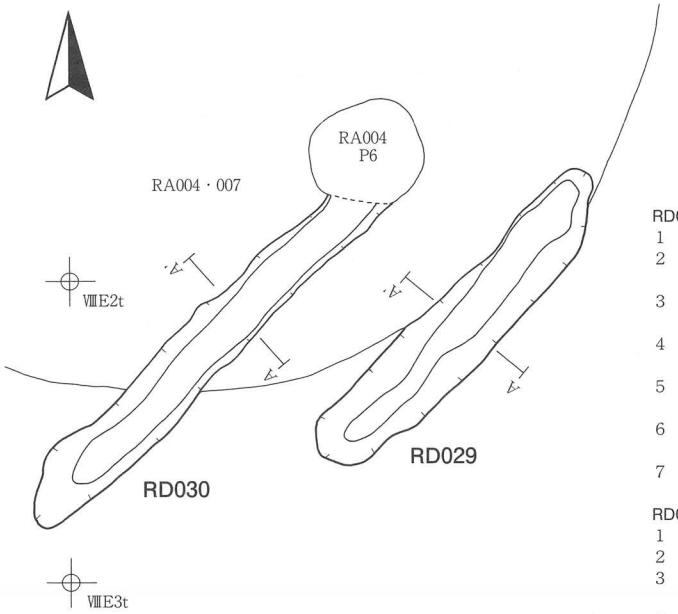


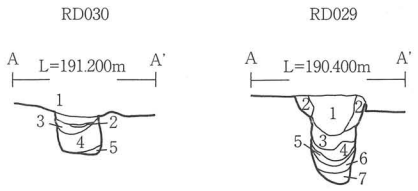
RD026
1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中·しまり中 10YR4/4褐色砂質シルト粒3%
2 10YR2.5/1 黒～黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR4/4褐色砂質シルト粒7%
3 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（3：5：2）粘性弱·しまり中
4 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR5/4にぶい黄褐色砂粒7%
5 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR5/4にぶい黄褐色砂粒10%
6 10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（3：3：4）粘性弱·しまり中
7 10YR3/2 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%
8 10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（2：8）粘性弱·しまり中
9 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR5/4にぶい黄褐色砂粒10%

RD027
1 10YR3/1.5 黒褐色 シルト 粘性中·しまり弱
2 10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中·しまり中 10YR4/4褐色シルトブロック5%
3 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性弱·しまり中 10YR3/1黒褐色シルトブロック10%

0 1：50 2m

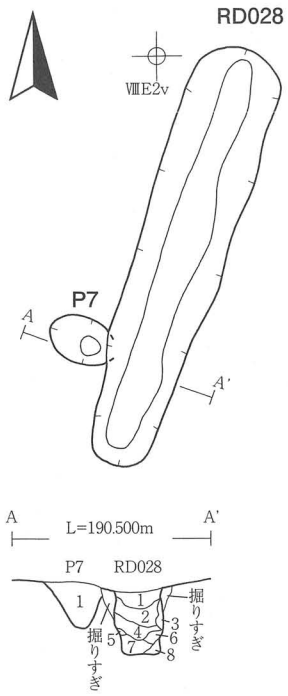
第17図 RD017土坑、RD025～027・031陥し穴状遺構、RF012焼土遺構

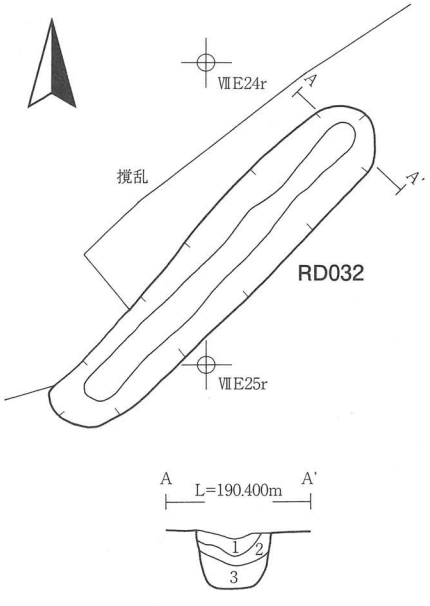


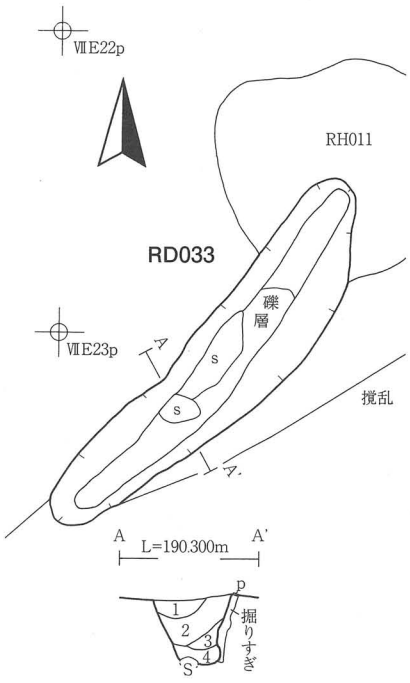


RD029
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルト粒3%
2　10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（7：3）
　粘性中・しまり中
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4黄褐色砂質シルト粒7%
4　10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（7：3）
　粘性中・しまり中
5　10YR4/2灰黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（8：2）
　粘性中・しまり中
6　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　10YR3/1黒褐色シルト粒3%
7　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中

RD030
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒1%
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
3　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土（8：2）
　粘性中・しまり中
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト粒5%
5　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土
　粘性弱・しまり中







RD028
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　10YR4/4褐色砂質シルトブロック10%
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　10YR4/4褐色砂質シルトブロック20%
3　10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）　粘性中・しまり中
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　10YR4/4褐色砂質シルトブロック5%
5　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　Ⅴ～Ⅵ層崩落土
6　10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）　粘性中・しまり中
7　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
8　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（5：5）　粘性弱・しまり中

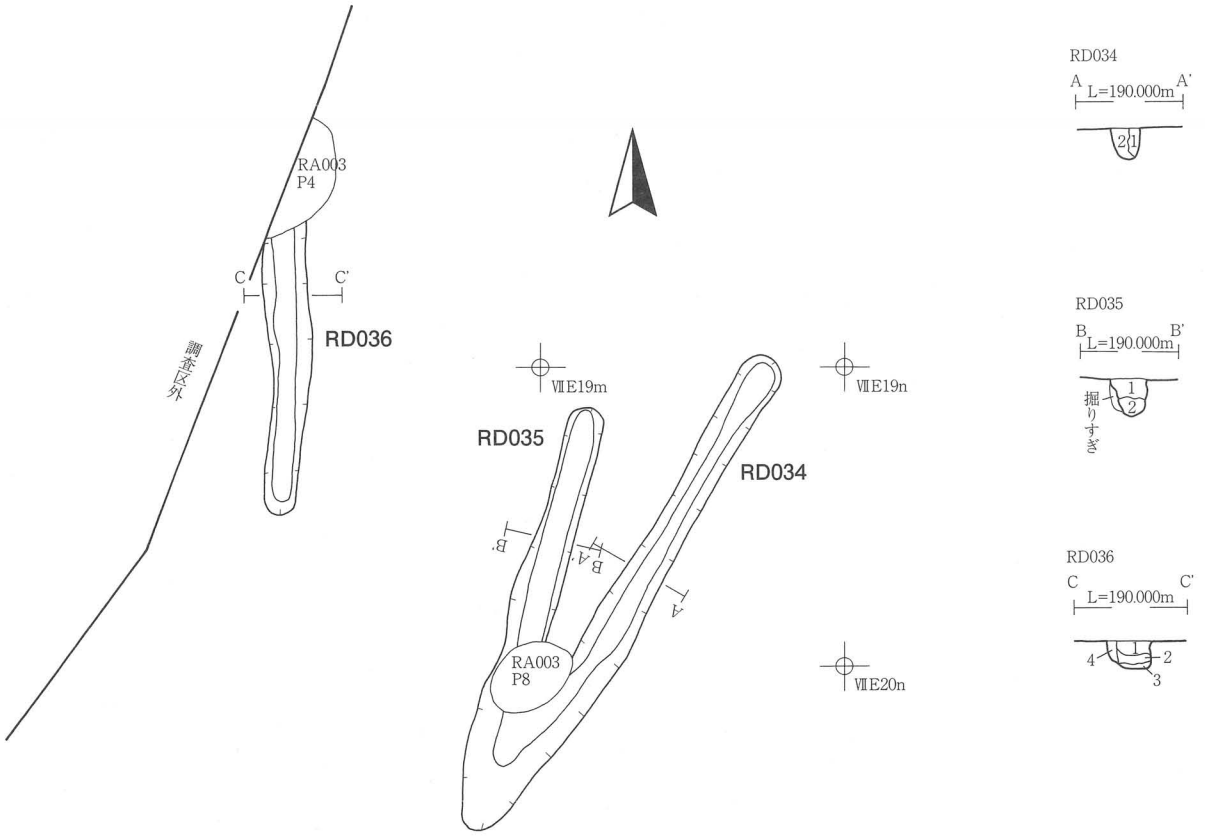
P7
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　褐色砂質シルトブロック7%・炭化物粒（～3mm）2%

RD032
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混土（7：3）　粘性中・しまり中
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂の混土（4：6）　粘性弱・しまり中
3　10YR5/4にぶい黄褐色砂と10YR3/1黒褐色シルトの混土（8：2）　粘性弱・しまり中

RD033
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土（4：6）　粘性中・しまり中
2　10YR3/1黒褐色シルト・10YR3/2黒褐色シルト・10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（3:5:2）　粘性中・しまり中
3　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（8：2）　粘性中・しまり中
4　10YR3/2黒褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（8：2）　粘性弱・しまり中

0　1：50　2m

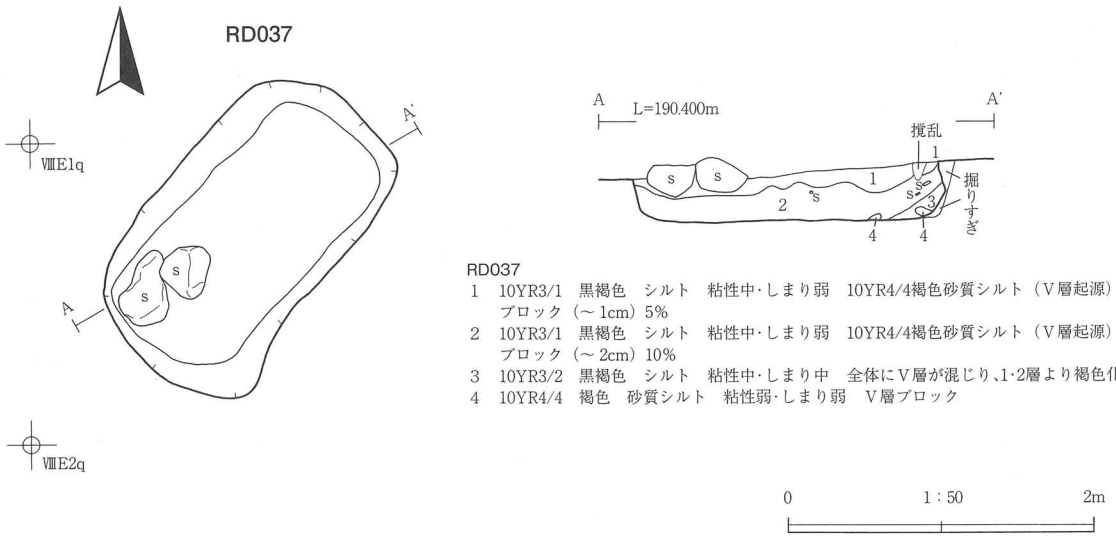
第18図　RD028～030・032・033 陥し穴状遺構、柱穴状土坑（P7）



RD036
1　10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混土（6：4）
　粘性中・しまり中
2　10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中
　10YR3/1黒褐色シルト粒5%
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　10YR5/4黒褐色シルト粒5%
4　10YR3/2黒褐色シルトと10YR5/4にぶい黄褐色シルトの混土（8：2）
　粘性中・しまり中　礫（φ5mm）5%

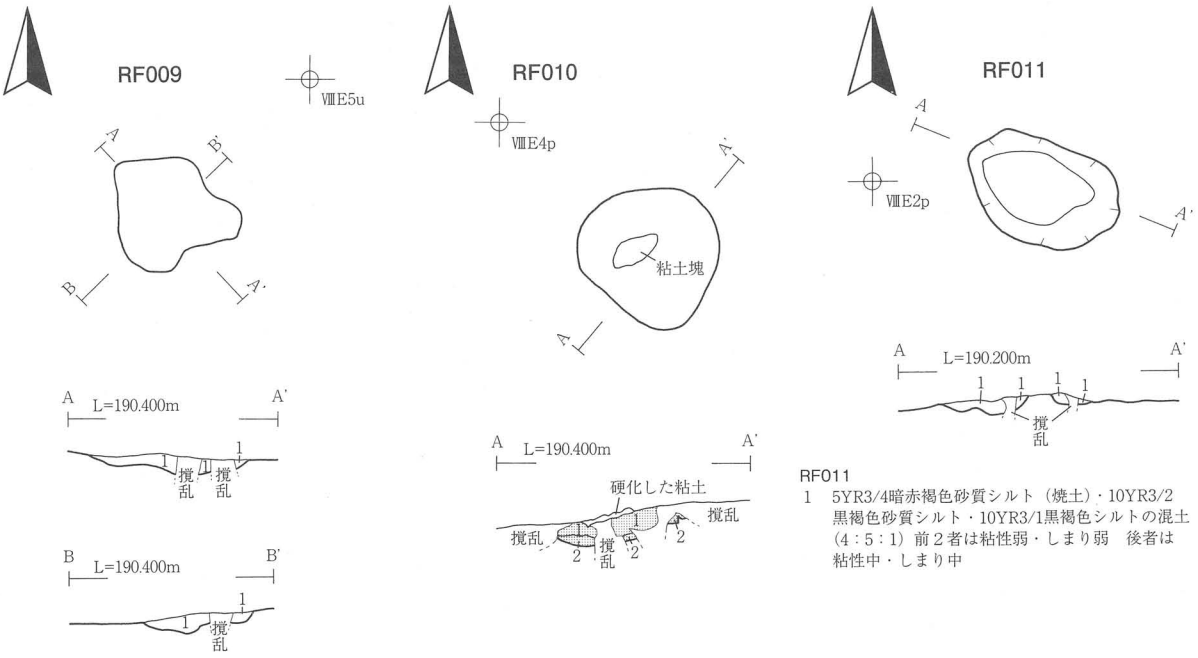
RD034
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：4：1）粘性弱・しまり中
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色砂質シルトと10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトの混土（2：2：6）粘性弱・しまり中

RD035
1　10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土（8：2）
　粘性弱・しまり強
2　10YR4/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　礫（φ1cm）10%



RD037
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/4褐色砂質シルト（V層起源）ブロック（～1cm）5%
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/4褐色砂質シルト（V層起源）ブロック（～2cm）10%
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　全体にV層が混じり、1・2層より褐色化
4　10YR4/4　褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　V層ブロック

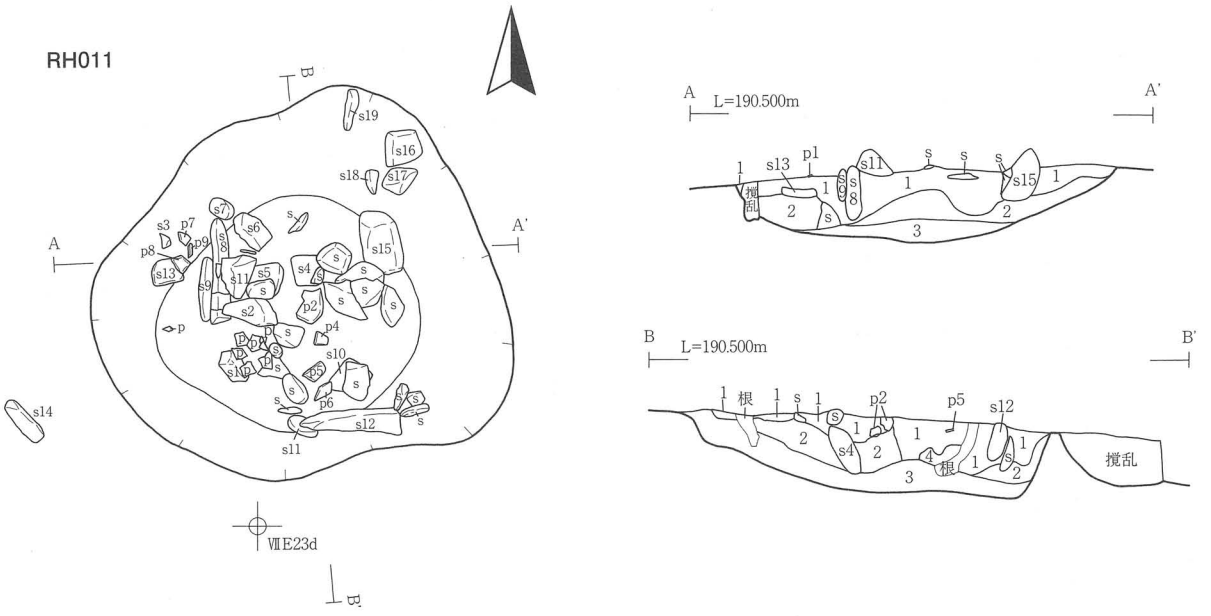
第19図　RD034～036陥し穴状遺構、RD037土坑



RF009
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中･しまり弱
10YR4/3にぶい黄褐色シルト（Ⅴ層起源）ブロック10%　10YR6/2.5灰黄褐色～にぶい黄橙色シルトブロック3%　全体に焼土粒・炭化物粒5%

RF010
1　2.5YR4/6　赤褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり強
焼土（強）
2　5YR3/4　暗赤褐色　砂質シルト　粘性弱･しまり中
焼土（弱）

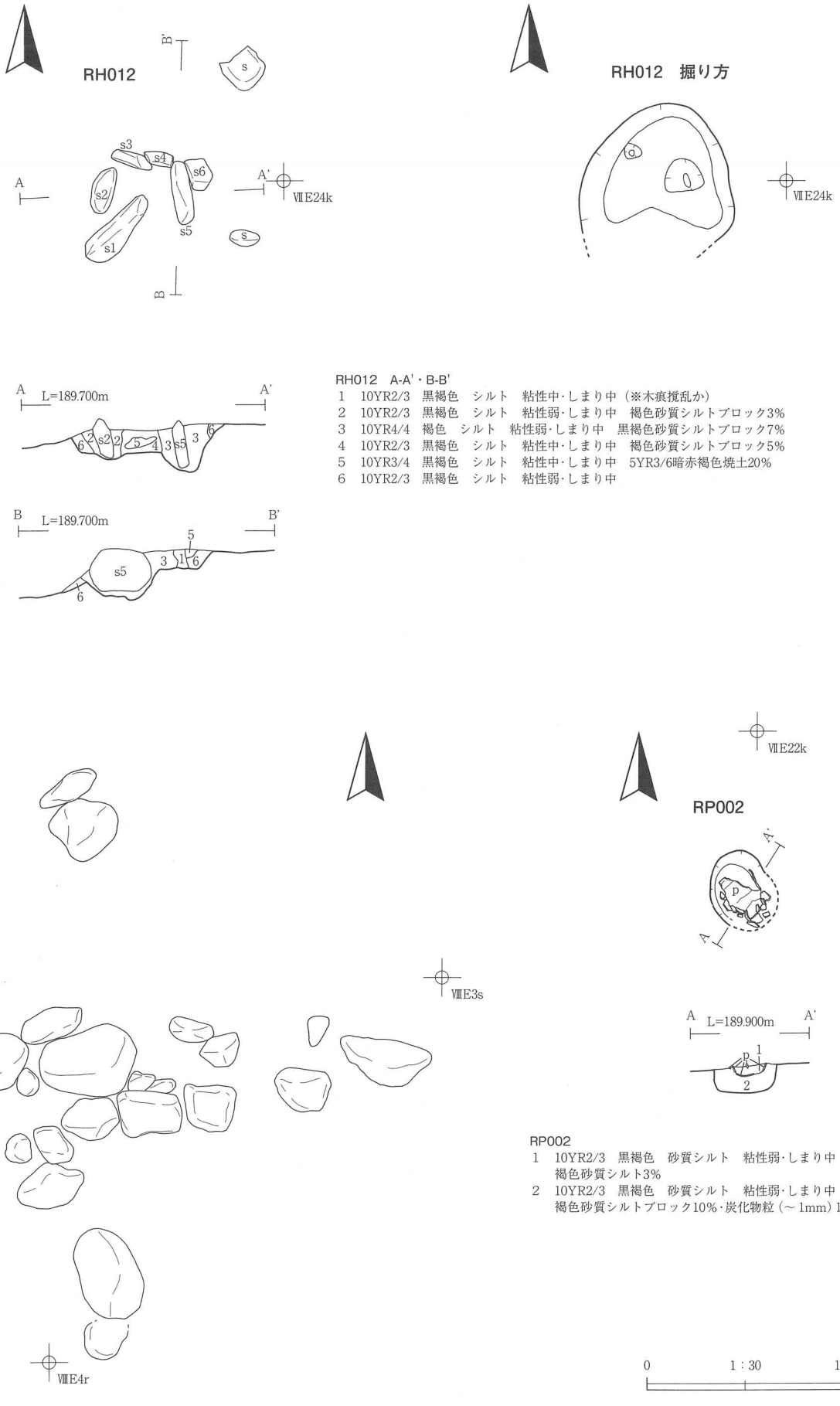
RF011
1　5YR3/4暗赤褐色砂質シルト（焼土）・10YR3/2黒褐色砂質シルト・10YR3/1黒褐色シルトの混土（4：5：1）前２者は粘性弱・しまり弱　後者は粘性中・しまり中



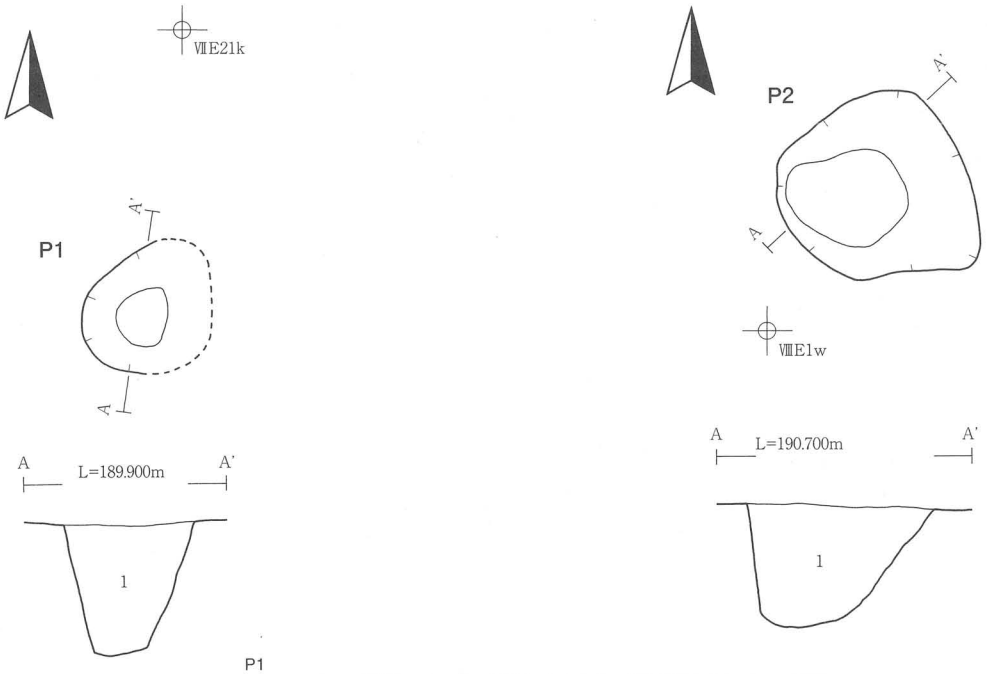
RH011　A-A'・B-B'
1　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中･しまり強　焼土粒1%
2　10YR3/1.5黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（6：4）粘性中･しまり強
3　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂の混土（4：4：2）粘性中･しまり強　焼土ブロック（～5cm）7%
4　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　粘性なし･しまり強

0　1：30　1m

第20図　RF009～011焼土遺構、RH011配石遺構

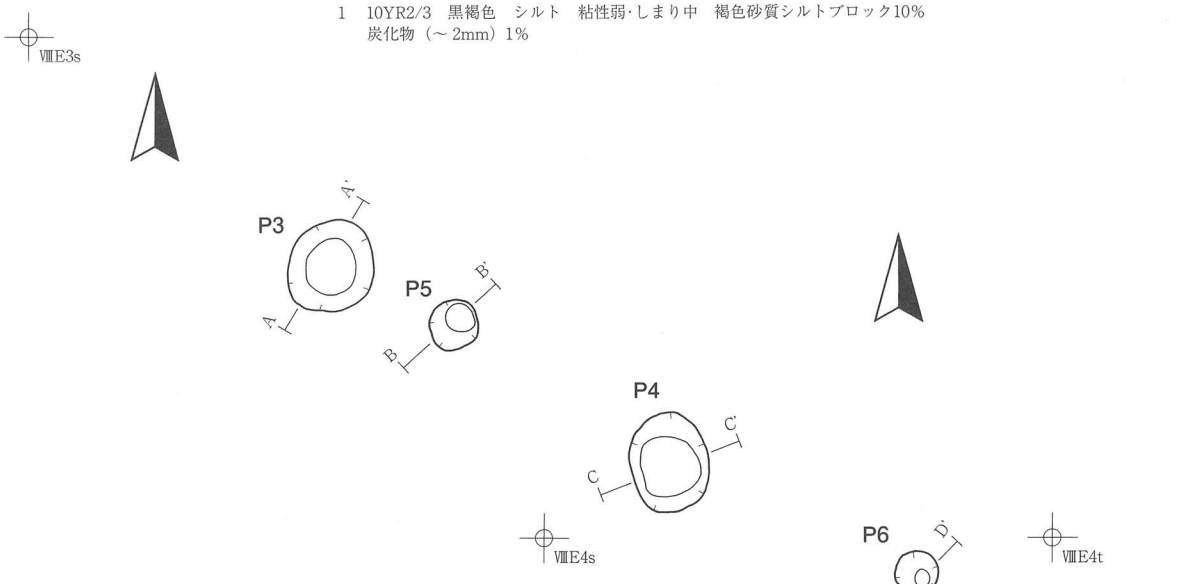


第21図　RH012配石遺構、RH013集石遺構、RP002埋設土器遺構



P1
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中·しまり中　褐色砂質シルトブロック5%
　　炭化物（～5mm）1%

P2
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱·しまり中　褐色砂質シルトブロック10%
　　炭化物（～2mm）1%

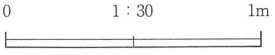


P3
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中·しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色
　　シルト粒5%

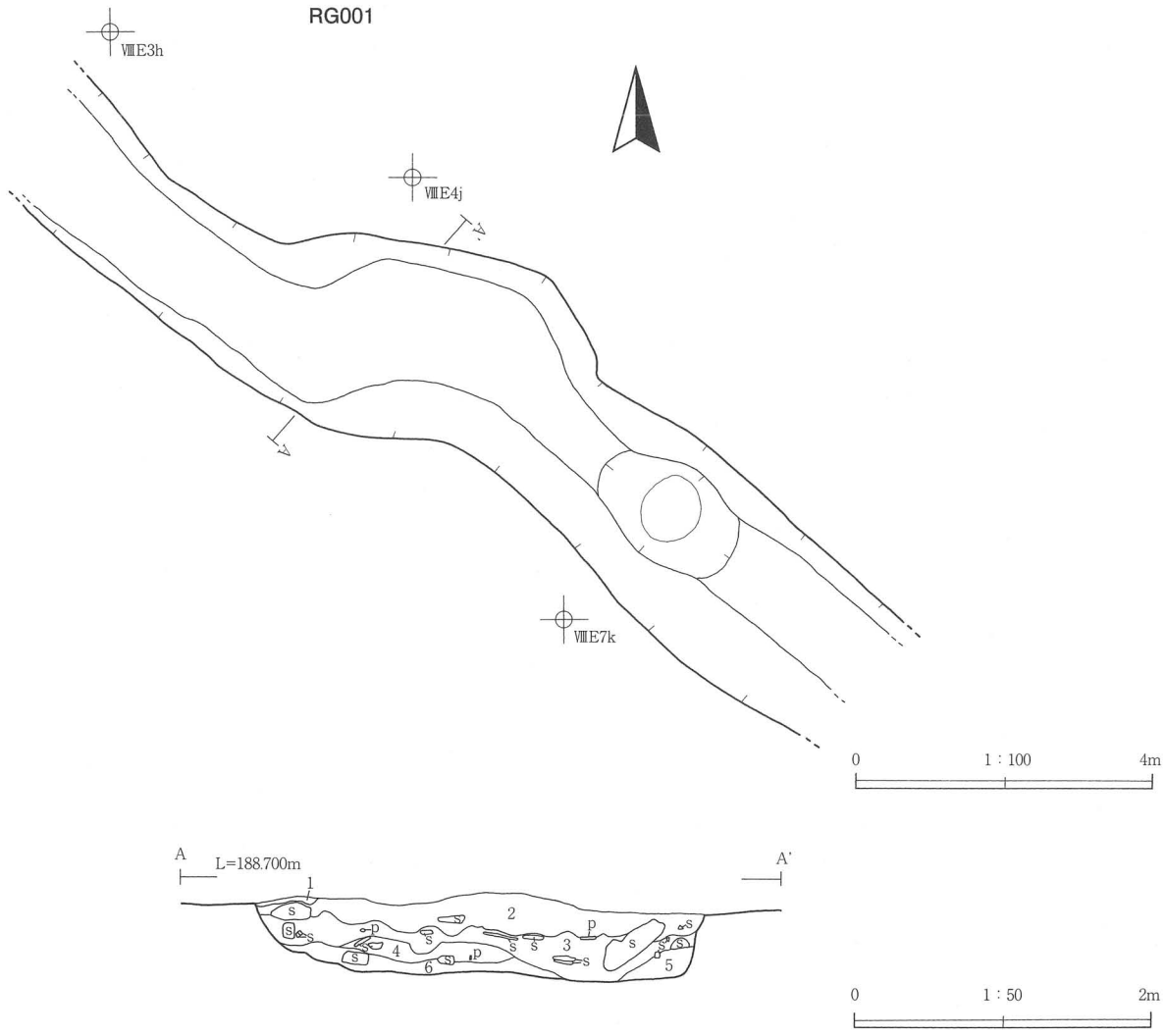
P5
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中·しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色
　　シルト粒5%

P4
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中·しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色
　　シルト粒5%

P6
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中·しまり中



第22図　柱穴状土坑（P1 ～ P6）



RG001

1	10YR3/3	暗褐色	砂	粘性なし･しまり弱
2	10YR2/2	黒褐色	砂	粘性なし･しまり弱　礫（～20cm）2%（※土器含む）
3	10YR2/3	黒褐色	砂	粘性なし･しまり弱　礫（～50cm）30%（※土器含む）
4	10YR2/3	黒褐色	砂	粘性なし･しまり中　10YR4/4褐色砂質シルトブロック15%　礫（～10cm）5%（※土器含む）
5	10YR3/2	黒褐色	砂	粘性なし･しまり中　礫（～3cm）5%
6	10YR2/3	黒褐色	砂	粘性なし･しまり中　礫（～20cm）20%

第23図　RG001溝

Ⅴ 出 土 遺 物

1 概　　要

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器大コンテナ（42×32×30cm）換算約７箱（約118kg）、土製品６点（181.6g）、石器中コンテナ（42×32×30cm）換算約15箱（約294kg）、石製品９点（約26kg）、須恵器１点（15.3g）、陶器１点（3.0g）、銭貨１点（1.9g）、植物遺存体である。以下、遺物の種別ごとに概要・出土状況・代表的な遺物などについて記述する。

2 縄 文 土 器（第24～34図、第４表、写真図版22～31）

（1）概　　要

出土した縄文土器の総重量117,957.2gのうち、遺構内出土は54,829.4g（46.5％）、遺構外出土は63,127.8g（53.5％）であり、遺構内・遺構外出土土器の割合はほぼ半数である。遺構内出土土器について、種別ごとに重量分布をみてみると、竪穴住居48,796.3g（89.0％）、土坑1,206.1g（2.2％）、焼土遺構277.8g（0.5％）、配石・集石遺構1,759.9g（3.2％）、埋設土器遺構1,091.1g（2.0％）、柱穴状土坑31.9g（0.1％）、溝1,666.3g（3.0％）となっており、竪穴住居からの出土が９割近い。このうち、ＲＡ004竪穴住居からの出土量が多く、竪穴住居出土土器の約６割を占める。

全体の器形を窺える資料は非常に少なく、残存状態は良好ではない。竪穴住居などの遺構内出土土器はある程度復元できたが、小破片が大半を占め、完形、略完形のものはごくわずかである。

時期別にみてみると、中期後葉～末葉のものが主体を占めるが、早期中葉、前期前葉、前期後葉～末葉、後期初頭、晩期前葉～中葉のものも少量出土している。

個々の土器の特徴については、縄文土器観察表（第４表）に記載しているので、そちらを参照いただきたい。

（2）観 察 項 目

以下の項目で、縄文土器の観察を行い、観察表へ記載した。

a) 器種
b) 残存部位
c) 口縁形態
d) 文様（各部位の縄文原体、施文方法、底部痕跡など）
e) 内面調整
f) 時期

今回の調査で出土した土器は、早期・前期・中期・後期・晩期に属するものがあり、以下のように時期ごとに大別して群を設定し、大局的な時期を示すことにした。出土土器の中で主体を占める中期に属するものについては、さらに細分を行った。なお、Ⅲ・Ⅳ群とした中・後期の縄文土器の特徴については、Ⅵ章で若干述べることとしたい。

Ⅰ群　縄文時代早期に属するもの
Ⅱ群　縄文時代前期に属するもの

Ⅲ群　縄文時代中期に属するもの
　1類　中期後葉に属するもの
　2類　中期末葉に属するもの
　3類　器面に地文のみが施文されるもの、もしくは無文のもの
Ⅳ群　縄文時代後期に属するもの
Ⅴ群　縄文時代晩期に属するもの
Ⅵ群　ミニチュア土器
g)　備考　その他特筆すべきこと

（3）遺構内出土土器

竪穴住居出土の土器

ＲＡ001：１・２は床面から出土した。１は頸部がくびれる壺に近い器形の深鉢である。胴部には隆沈線（隆線の断面形は山形状を呈する）による小渦巻文・楕円区画文が描かれる。地文には複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に施文される。また、胴部には横位の把手が付く。２は口縁がやや外反する深鉢で、器面には複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に施文される。３は１層から出土した台付鉢である。波状口縁を呈し、波頂部には孔が施される。また、口縁には円形の刺突が施される。地文には単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。隆沈線（隆線の断面形は山形状を呈する）による逆Ｕ字状文が描かれた後、一部の地文は磨り消されている。

ＲＡ002：４・５は床直出土の深鉢の胴部片である。６は炉の前庭部埋土から出土した、波状口縁を呈する深鉢である。胴部には沈線による逆Ｕ字状文が描かれ、文様区画内には複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に充填施文される。

ＲＡ003：11・12は埋土下位の７層から出土した深鉢である。12は平縁を呈する深鉢の口縁部片で、複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に施文される。16は口縁がわずかにすぼむ器形の深鉢である。器面には単節縄文（ＬＲ）が施文され、口縁部には磨消により無文帯がつくられている。18は口縁が緩やかに外反し、胴部が膨らむ深鉢である。器面には口縁まで単節縄文（ＬＲ）が施文され、16や17のような無文帯はつくられていない。21は台付土器の台部片である。複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に施文された後、沈線による逆Ｕ字状文・区画文が描かれる。文様区画内には孔が穿たれている。24は壺形のミニチュアで、器面には単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。

ＲＡ004：27は炉の底面から出土した深鉢である。平縁を呈し、やや外反しながら開く器形である。器面には沈線による逆Ｃ字状の区画文が描かれ、文様区画内には単節縄文（ＲＬ）が充填施文される。38は平縁を呈する浅鉢である。地文には複節縄文（ＲＬＲ）が縦方向に施文され、隆沈線による楕円形文・波状文が描かれる。色調は黄橙色で、他のものに比べて器厚が薄いことが特筆される。43は平縁を呈すると考えられる深鉢で、頸部に１条の沈線がめぐり、胴部には単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。44は底部下半を欠く深鉢である。平縁を呈し、胴部に膨らみを持ち、口縁はやや外反しながら開く器形である。器面には単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。62・68は埋土から出土した深鉢の口縁部片である。胴部には網目状撚糸文（単軸絡条体第5類）が施される。

ＲＡ004竪穴住居の１層上位からはⅣ群に相当する土器（37・60・63・64・65・66）も出土している。37は波状口縁を呈する深鉢の口縁～胴部片である。口縁部には沈線による渦巻状の文様が加飾された山形状の突起が付く。波状口縁の頂下からは、器面を押し出すようにして作られた連鎖状隆線が垂下する。胴部の地文には沈線による網目状の文様が施文され、沈線による幾何学的なモチーフが描かれ

る。60は平縁を呈する深鉢の口縁部片である。地文には単節縄文（ＬＲ）が施文された後、口縁部は磨消が行われ、沈線文が描かれる。63は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。口縁部には連鎖状隆帯がめぐる。胴部は地文に単節縄文（ＬＲ）が施文され、沈線による曲線的なモチーフが描かれる。64は波状口縁を呈する深鉢の胴部片である。地文には単節縄文（ＲＬ）が縦方向に施文され、沈線による渦巻・幾何学的なモチーフが描かれる。

底部痕跡は、網代（50）、笹（42・43・47・56）、網代＋笹（49）、網代→ナデ調整（49）がみられる。

ＲＡ005：73は炉の底面から出土した略完形の深鉢である。口縁は平縁を呈する。頸部には２条の沈線文がめぐり、その間に刺突が施される。胴部の地文には単節縄文（ＬＲ）が施文される。74・75は床面から出土した。74は器面に単節縄文（ＲＬ）が縦方向に施文される。75は器面に櫛目文が施される深鉢の胴部片である。

ＲＡ006：77・78は床面から出土した。77は波状口縁を呈する深鉢で、胴部上半を一部欠く。地文に単節縄文（ＬＲ）が施文され、沈線による逆Ｕ字状の区画文が描かれた後、文様区画外の地文は磨り消されている。78は胴部が膨らむ深鉢の胴部片で、単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。79は小型深鉢で胴部上半を欠く。沈線によるＣ字状･波状の区画文が描かれ、文様区画内には単節縄文（ＬＲ）が充填施文される。

ＲＡ007：81は炉の底面出土の深鉢の胴部片である。82は炉の埋土最上位出土の深鉢の胴部片で、沈線による区画文が描かれ、文様区画内には単節縄文（ＲＬ）が残される。

ＲＡ008：83・84は炉直上より出土した深鉢の胴部片である。85・86は１層より出土した。85は平縁を呈する深鉢の胴部片で、頸部には刺突が施され、胴部には単節縄文（ＲＬ）が施文される。86は口縁が外反する器形の深鉢で、沈線による区画文が描かれた後、文様区画内に単節縄文（ＲＬ）が施文される。

土坑・陥し穴状遺構出土の土器

検出した24基のうち、土器が出土したのは７基である。破片が多く、出土量も少ない。

88は深鉢の胴部片で、網目状撚糸文（単軸絡条体第５類）が施文される。90はＲＤ037土坑から出土した深鉢の胴下半～底部である。底部には網代の圧痕跡をナデにより調整した痕がみられる。

焼土遺構出土の土器

焼土遺構から出土した土器も破片が多く、出土量も少ない。

91はＲＦ011焼土遺構の１層から出土した深鉢の胴部片で、単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文される。92・93はＲＦ012焼土遺構から出土した深鉢の口縁部片と底部片である。

配石遺構出土の土器

ＲＨ011：下部土坑の埋土からは中期後半のものと考えられる土器が出土している。すべて破片である。97は深鉢の底部片で、笹の圧痕がみられる。

ＲＨ012：98はＲＨ012配石遺構周辺のⅢ～Ⅳ層から出土した深鉢で、胴部下半から底部を欠く。３単位の波状口縁を呈し、キャリパー形の胴部が屈曲する器形である。胴部には沈線による逆Ｕ字状文が描かれ、文様区画内には単節縄文（ＬＲ）が充填施文される。

埋設土器遺構出土の土器

99は斜位の状態で埋設された深鉢で、口縁～胴部上半を欠く。沈線による逆U字状文や楕円形文が描かれ、文様区画内には単節縄文（ＲＬ）が縦方向に充填施文される。底部には笹の圧痕がみられる。

柱穴状土坑出土の土器

柱穴状土坑から出土した土器は、Ｐ１の１層出土の１点（100）のみである。100は深鉢の胴部片で、単節縄文（ＲＬ）が横方向に施文される。縄文原体は太さの異なる１段の縄（Ｌ）を撚り合わせたものを使用したと考えられる。

（４）遺構外出土土器

調査区上段部分のⅢ～Ⅳ層、下段部分のⅡ層相当からは、主に中期後葉～末葉、後期初頭のものと考えられる土器が出土している（105～120）。この他に、早期中葉、前期、晩期の土器が少量出土している。

103は調査区の東部にあたるⅧＦグリッドⅠ層から出土した深鉢の胴部片である。器面には縦方向にミガキが沈施され、沈線文と、これに沿うように貝殻腹縁文が施されており、早期中葉のものと考えられる。

104はⅧEグリッドのⅢ層から出土した深鉢の口縁～胴部片である。口縁が外反する器形であると考えられ、山形状口縁を呈する。口唇には平坦面をもち、刺突と沈線が施されている。口端には斜位方向の刻みが施される。胴部には「縄に付けられた結節」（山内1979）が横方向に施文されており、前期前葉のものと考えられる。

122は調査区下段のⅧEグリッドから出土した鉢？の口縁部片である。末端の噛み合わない羊歯状文が施され、晩期前葉のものと考えられる。121・124は頸部にくびれを持つ器形を呈し、胴部上半に最大径が認められる深鉢の口縁～胴部片である。口縁端部に刻み、頸部には数条の横沈線が施される。124は胴部に単節縄文（ＬＲ）が横方向に施文される。晩期中葉のものと考えられる。

３　土　製　品（第35図、第６表、写真図版32）

（１）斧 状 土 製 品

１点出土し、これを掲載した。

126は、ＲＡ004竪穴住居の床直・埋土１層・ＲＡ007竪穴住居の炉の前庭部東壁際埋土から出土した破片が接合したものである。基部と先端部を欠くが、ほぼ完形に近い。平面形は斧状を呈する。基部～中央部までは長方形を呈し、先端部は欠損しているが、先端に向かって斧状に細くなるようである。頂部には凹みがあり、二股状に分かれる。断面形は扁平な楕円形を呈する。両面（表裏面）に単節縄文（ＬＲ）が縦方向に施文され、沈線による逆U字状文が描かれる。その沈線文の外側にあたる頂部の両面と中央部の両側面には刺突が施される。さらに、基部の側面には貫通孔が穿たれている。なお、この孔の断面には、擦痕（紐ずれのような使用痕）は認められなかった。

（２）土 器 片 円 板

４点出土し、すべて掲載した。

あらかじめ円形を意図して作成された土製円板と異なり、土器片を転用して円形に作出されたもの

を土器片円板（八木2002・2006）とする分類に従い、この名称を用いた。作図方法もこれに従い、径の曲面を優先して提示した。なお、土器片円板をめぐる研究史上の問題点については、（八木2002・2006）に詳しくまとめられている。

周縁の痕跡には、打ち欠きが認められるもの（127・130）とスレ痕が認められるもの（128・129）がある。後者のうち、128は全周にスレ痕が認められるが、129は部分的である。127・128は竪穴住居の埋土、129･130は調査区下段のⅡ層相当（黒褐色砂層）から出土している。使用部位はすべて胴部片である。長さは2.4 ～ 3.9cm、幅3.5 ～ 3.9cm、厚さ0.8 ～ 1.1cm、重さ9.9 ～ 16.9gと、計測値は非常に近似した値となり、大きさにはまとまりがみられる。

（3）土　　偶

1点出土し、これを掲載した。

131は、調査区下段のⅡ層相当（黒褐色砂層）から出土した土偶の脚？である。後期のものと考えられる。なお、第1次調査においても後期の土偶が8点出土している。

4　石　　器（第36 ～ 46図、第5表、写真図版33 ～ 44）

（1）概　　要

出土した石器の総重量は294,132.9gで、その内訳は、トゥール182点・265,013.9g、剥片および素材29,119.0gである。

ここでは、遺構共伴資料として確実に提示できるものや、特殊な出土状況を呈する資料を重点的に提示することとする。個々の遺物属性については、石器観察表（第6表）を参照いただきたい。

（2）遺構内出土石器

竪穴住居出土分

床面・床面直上出土遺物はＲＡ003・004・008竪穴住居で確認された。

137はＲＡ003竪穴住居床面出土の頁岩製石鏃で、凹基無茎である。床面出土はこれのみであるが、本遺構ではデポと思われるピットおよび壁溝埋土から剥片がまとまって出土している。139 ～ 145はそのピットから出土したもので、剥片6点の接合資料（140 ～ 145）および石鏃（139）である。前者の接合はいずれも剥離面接合であり、円礫面を打面とし同一方向から連続して剥離作業がなされている。後者は凹基無茎である。デポの位置は住居南際である。壁溝埋土からは、凹基無茎の石鏃、両側縁に刃部を持つ削器、二次加工ある剥片、剥片が出土している。剥離面接合した接合資料（156＋157）も存在する。剥片石器の出土率は、住居中央部より壁溝が明らかに高い。この現象は、当時の何らかの行為の結果を反映したものと考えられる。

167 ～ 173の7点はＲＡ004竪穴住居出土分である。167は床面出土の赤色頁岩製石鏃で、凹基無茎である。168･169は床面の石器集中に含まれていた頁岩製の剥片で、いずれも石核の作業面剥片である。この2点の存在は、本遺構内に石核を持ち込んでの剥片剥離作業が行われていたことを示唆するものである。170は床面直上出土の削器で、端部が嘴状を呈する。錐とするには刃部形成が弱いが、その可能性も考慮しておく必要がある。171はピット底面出土の削器で、円礫面が残存する。170・171いずれも頁岩製の縦長剥片が素材である。

201・206はＲＡ008竪穴住居出土分である。いずれも台石で、出土層位・石材は、201が床面・アプ

ライト、206は床面直上出土・玢岩である。

このほか、台石が炉石に転用された例が多くみられる。すなわち、ＲＡ001の132・133、ＲＡ004の172、ＲＡ005の190、ＲＡ006の192～195、ＲＡ007の196・197、ＲＡ008の202～205である。いずれの炉も大形の扁平礫を縦位に設置しており、台石がその形状に適っているようである。石材は、アプライトと花崗閃緑岩が多く、そのほか玢岩、チャート、閃緑岩、蛇紋岩が用いられている。

焼土遺構出土分

212はＲＦ012焼土遺構の底面から出土した両面礫器である。扁平な円形礫が素材である。

配石・集石遺構出土分

213～219はＲＨ011配石遺構で、224～226はＲＨ012配石遺構でそれぞれ構成材として用いられていた礫である。213は磨石？を、これ以外は台石を転用したものである。台石の石材は、前述の炉石転用品と同じくアプライトと花崗閃緑岩が多く、そのほかには蛇紋岩、閃緑岩、安山岩が用いられている。

（３）遺構外出土石器

平基有茎・平基無茎の石鏃（229・230）、涙粒形の尖頭器（231）、片面調整の石錐（232・233）、横型三角形の石匙未製品（234・235）、頁岩製のピエス・エスキーユ（242）、めのう製の石核（243）、溝状の砥痕のある砥石（251）、１面が磨れて広く凹むスコリア製の台石（252）などが出土している。

５　石　製　品（第46～47図、第７表、写真図版44～45）

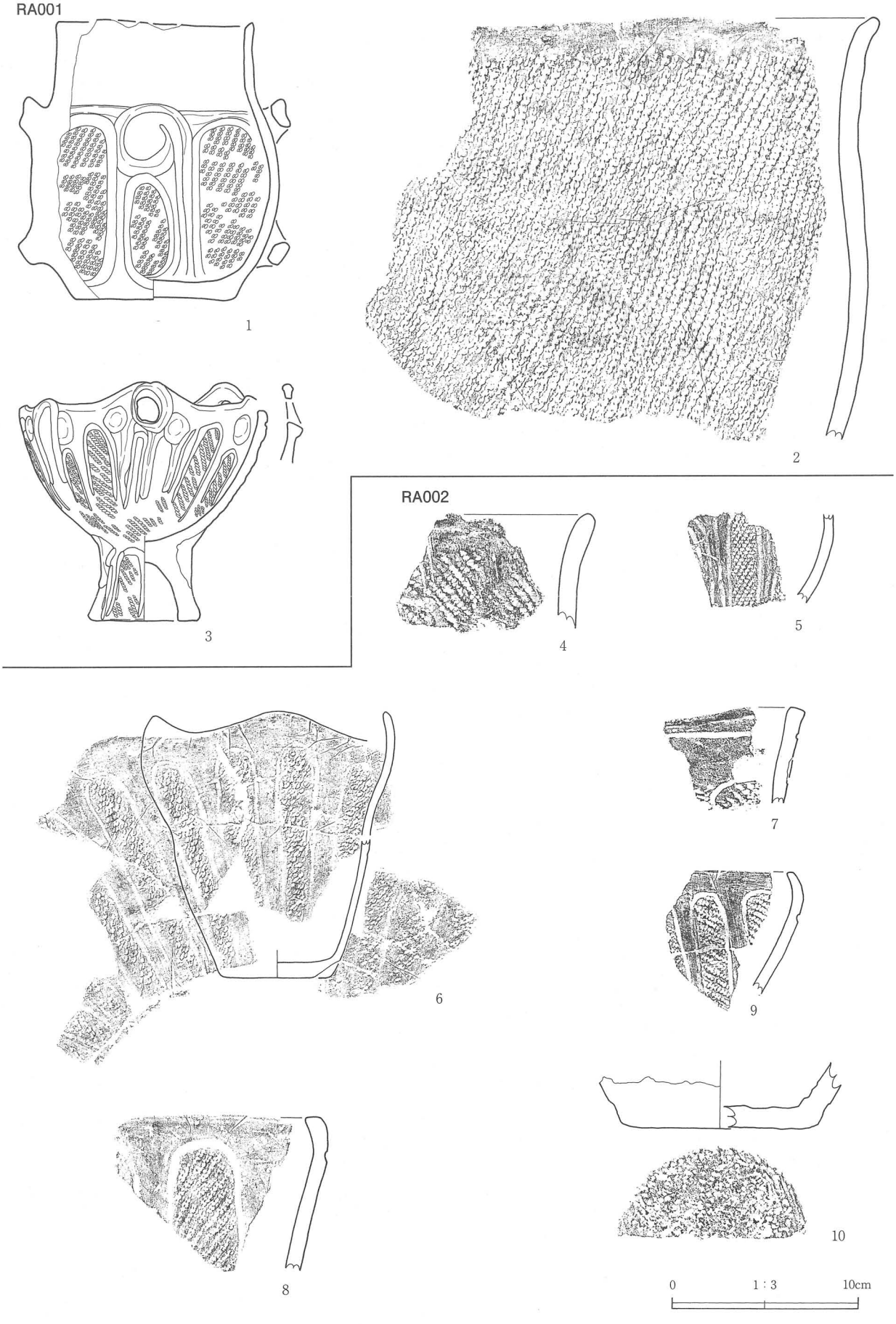
９点すべて遺構内からの出土である。器種は、石棒および石棒の可能性のある棒状礫、石鉢、穿孔礫である。石棒類は大きさで２種に大別される。１種は、ＲＡ004竪穴住居炉前庭部埋土から出土したもので、直径３cm前後である（258）。もう１種は、ＲＡ003・004・006竪穴住居、ＲＦ012焼土遺構、ＲＨ011配石遺構から出土したもので、直径10cm前後と大形である（253・254・256・258～261）。これらのうち、254はＲＡ003竪穴住居の床面ピットに立位状態で埋設してあり、259はＲＡ006竪穴住居の炉石囲部１の頂部に配置されていた。これらの設置理由には言及しかねるが、意図的な設置であることには間違いない。

255は口縁部に２条の溝が横走する石鉢で、口縁端部が外反する。257はTo-HもしくはTo-Ofと考えられる軽石製の穿孔礫である。

６　須恵器・陶器・銭貨・植物遺存体（第47図、第８～10表、写真図版46）

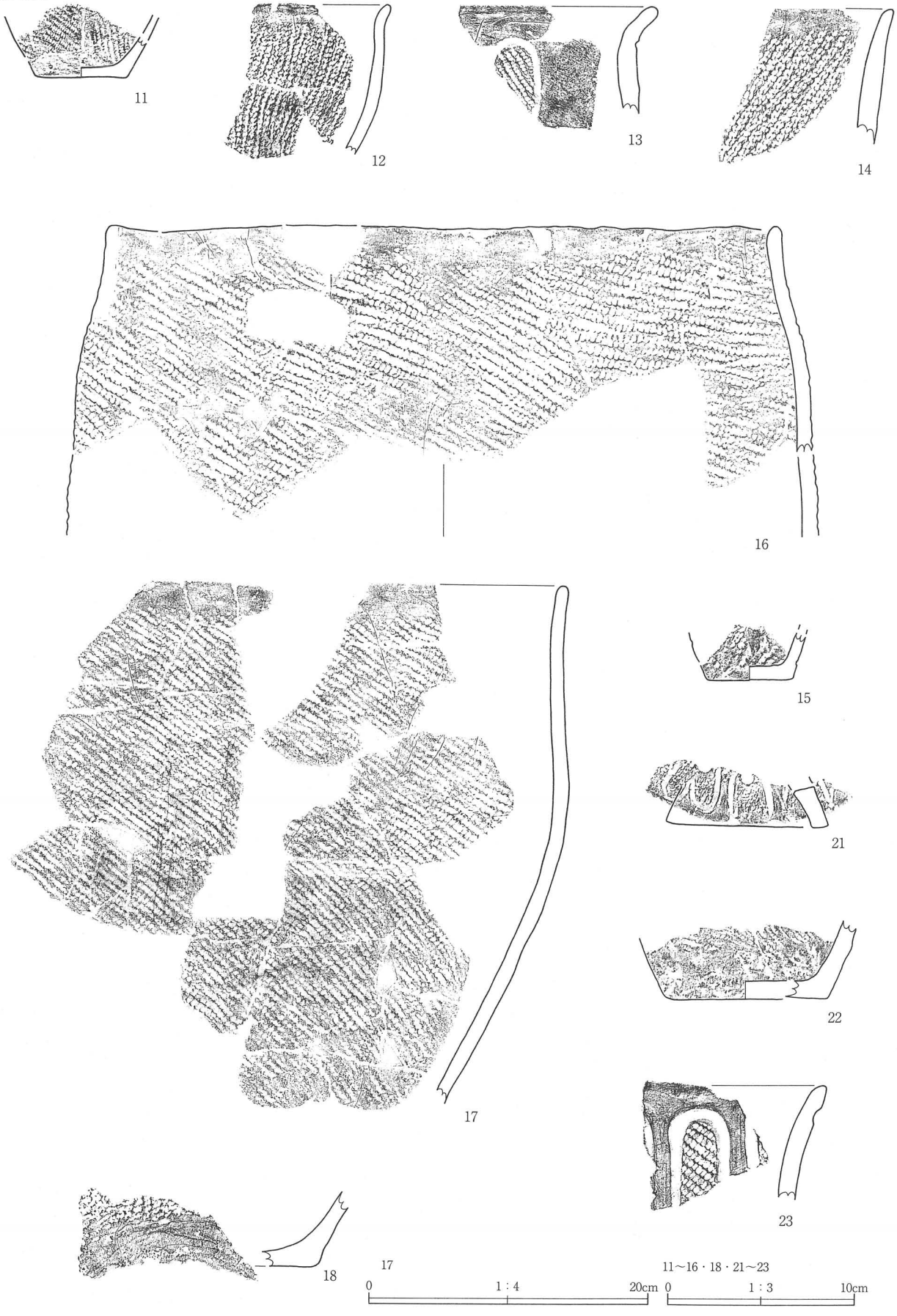
いずれも１点ずつの出土である。262は須恵器壺類の口縁部片である。263は美濃産と推定される灰釉折縁皿の口縁部片で、江戸時代頃のものと推定される。264はＲＧ001溝埋土最下層出土の至道元寶である。至道元寶は初鋳年995年の北宋銭である。本遺物は文字が潰れていること、厚さが1㎜と薄いことから、模鋳銭の可能性が高い。

炭化種子（265）はＲＡ001竪穴住居の炉付近埋土２層から出土したもので、マメ類と考えられる。



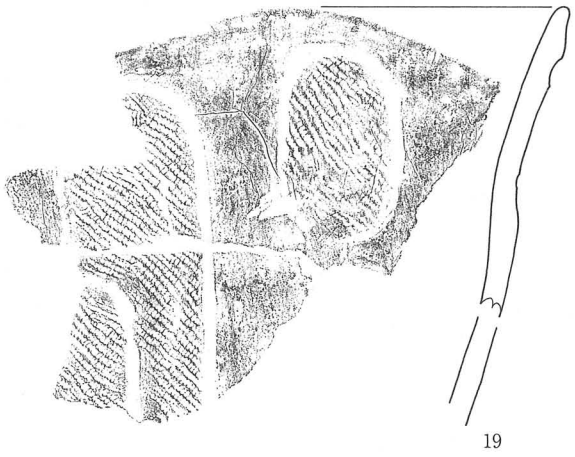
第24図　遺構内出土土器（1）

RA003

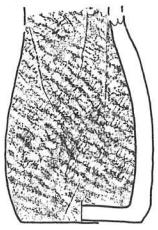


第25図　遺構内出土土器（2）

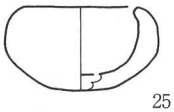
RA003



19



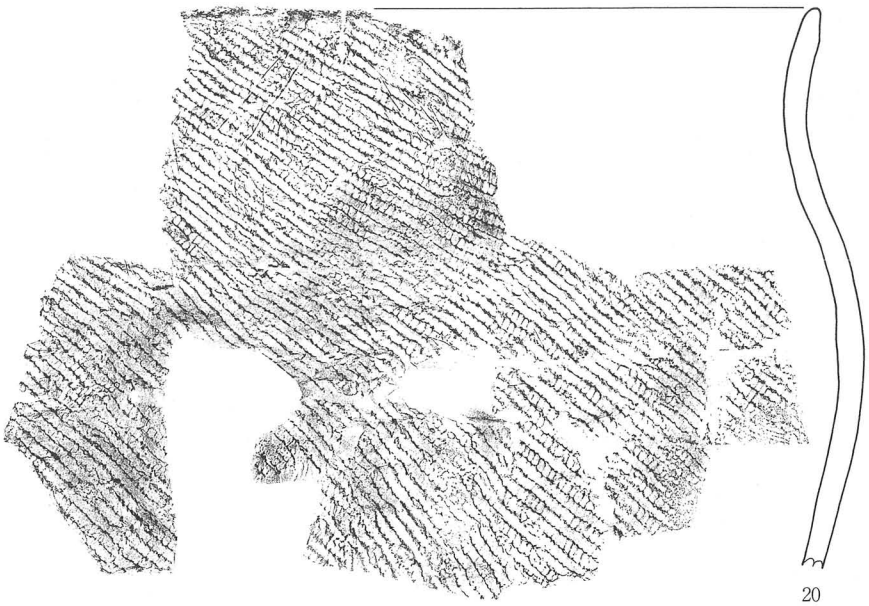
24



25

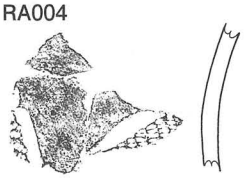
24・25

0　1：2　5cm

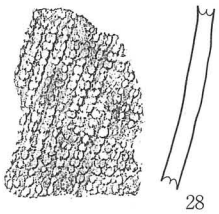


20

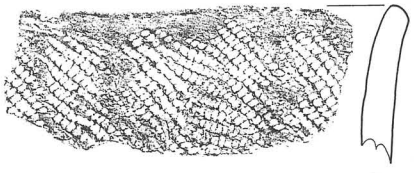
RA004



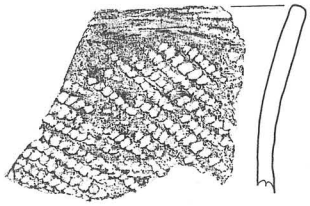
26



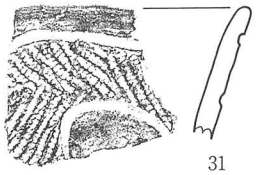
28



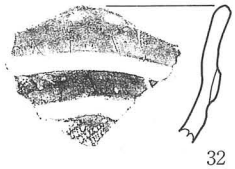
29



30



31



32

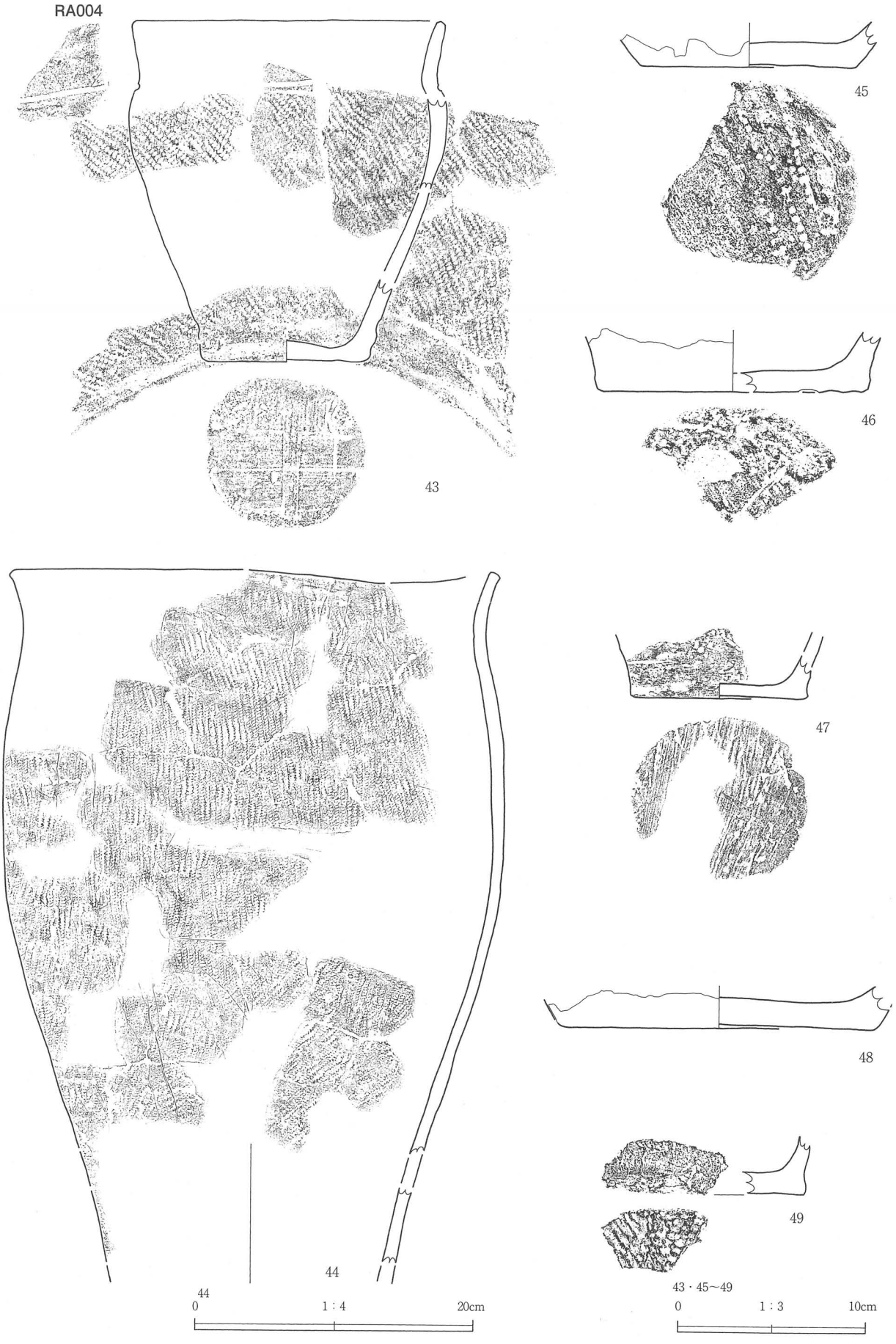
19・20・26・28～32

0　1：3　10cm

第26図　遺構内出土土器（3）

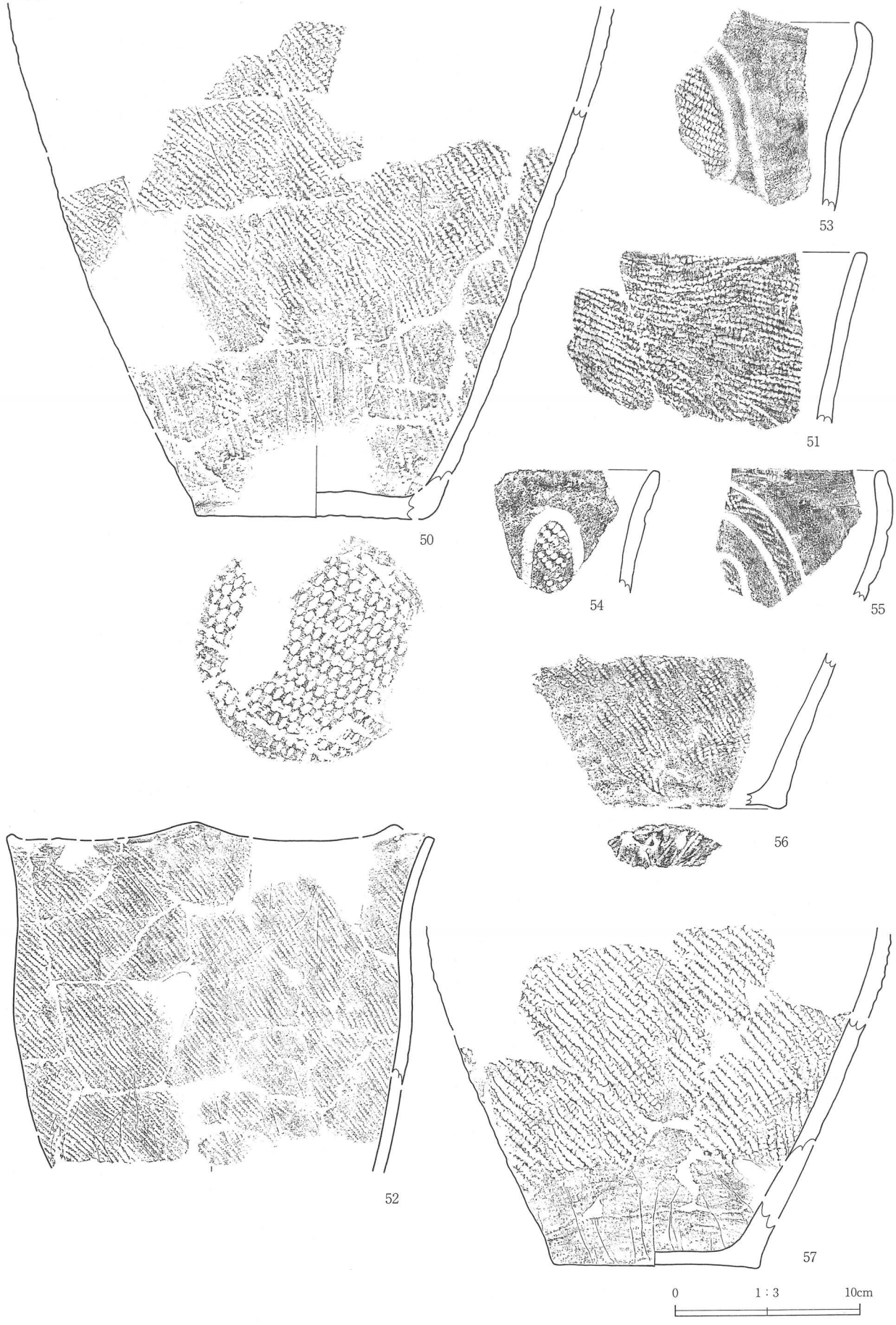
RA004

第27図　遺構内出土土器（4）

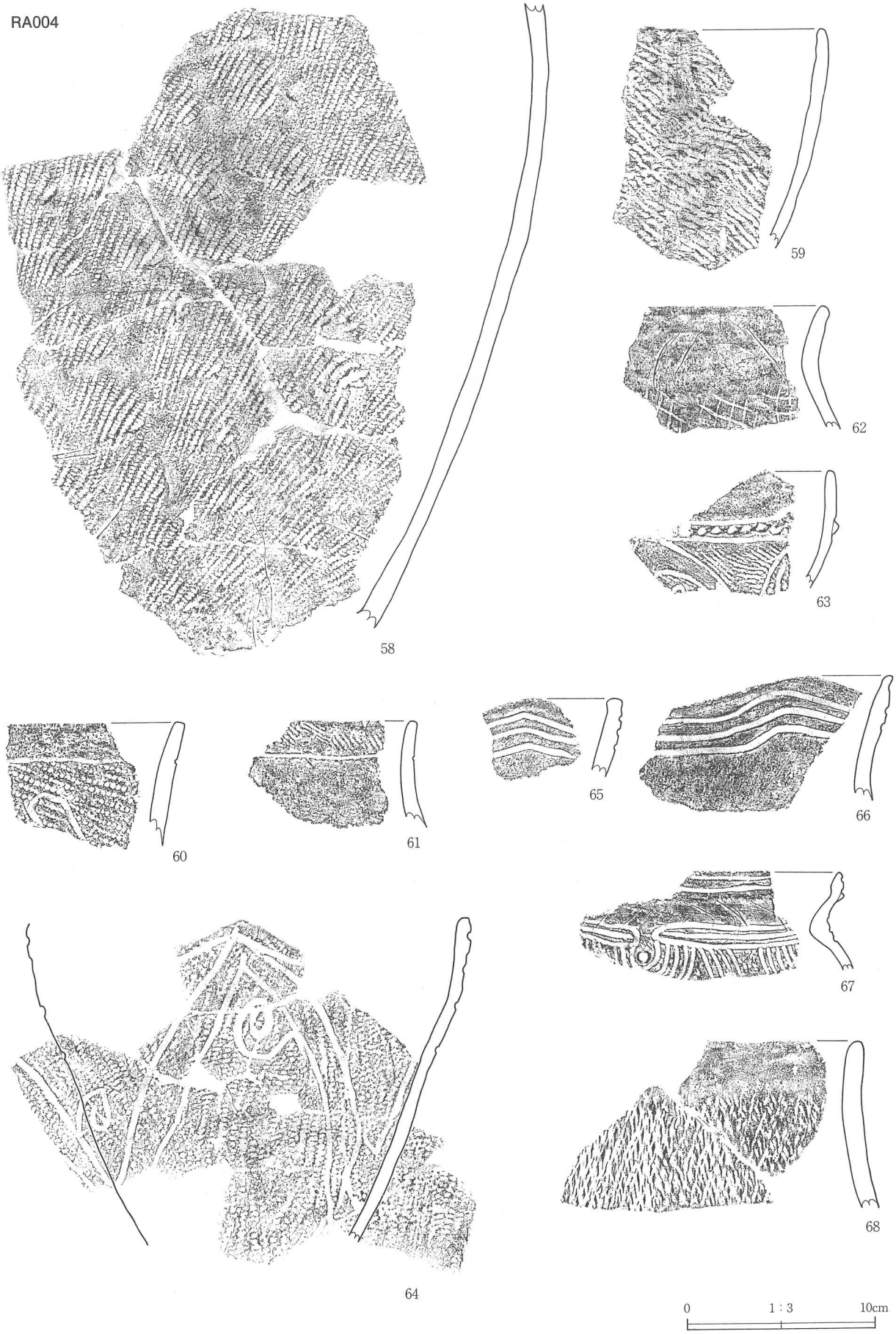


第28図　遺構内出土土器（5）

RA004

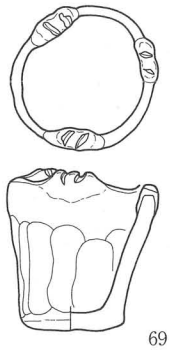


第29図　遺構内出土土器（6）

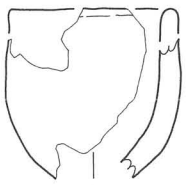


第30図　遺構内出土土器（7）

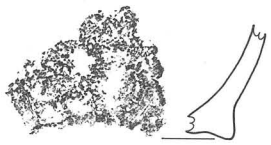
RA004



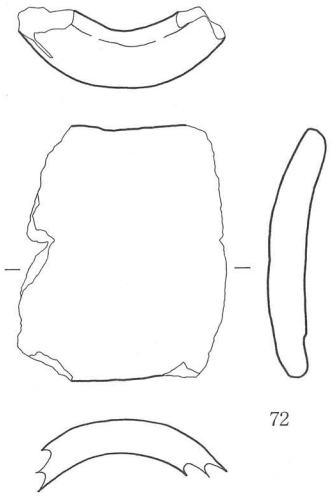
69



70



71

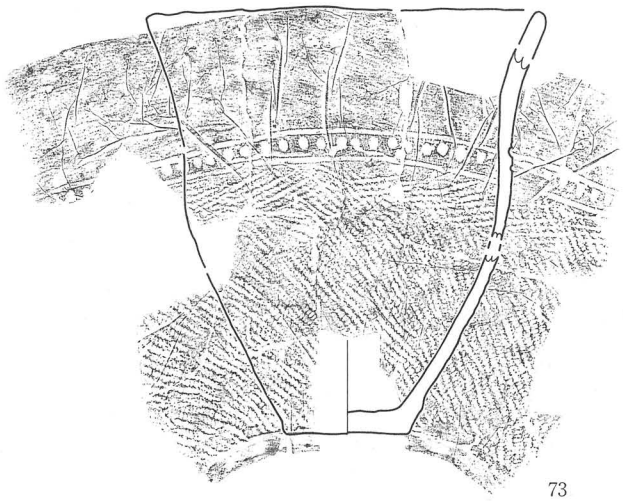


72

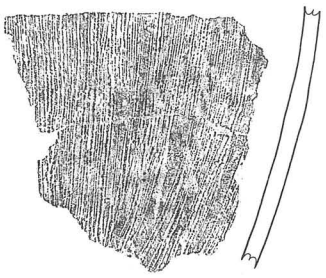
69～72

0　1：2　5cm

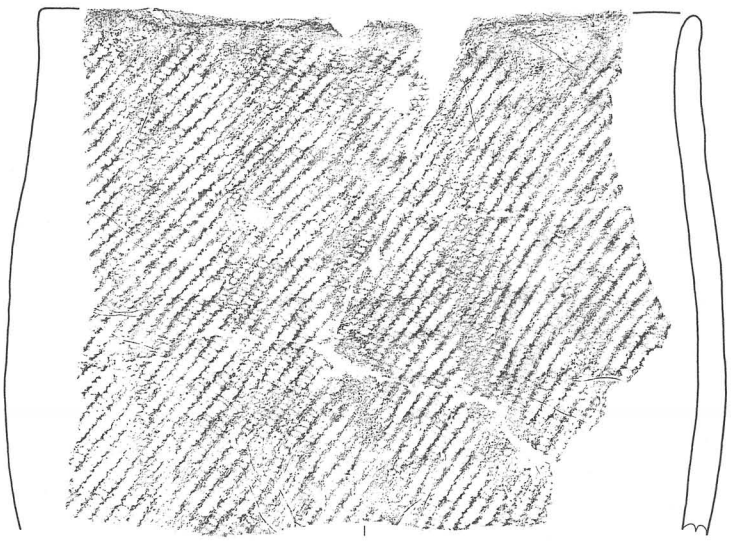
RA005



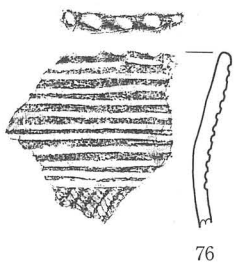
73



75



74

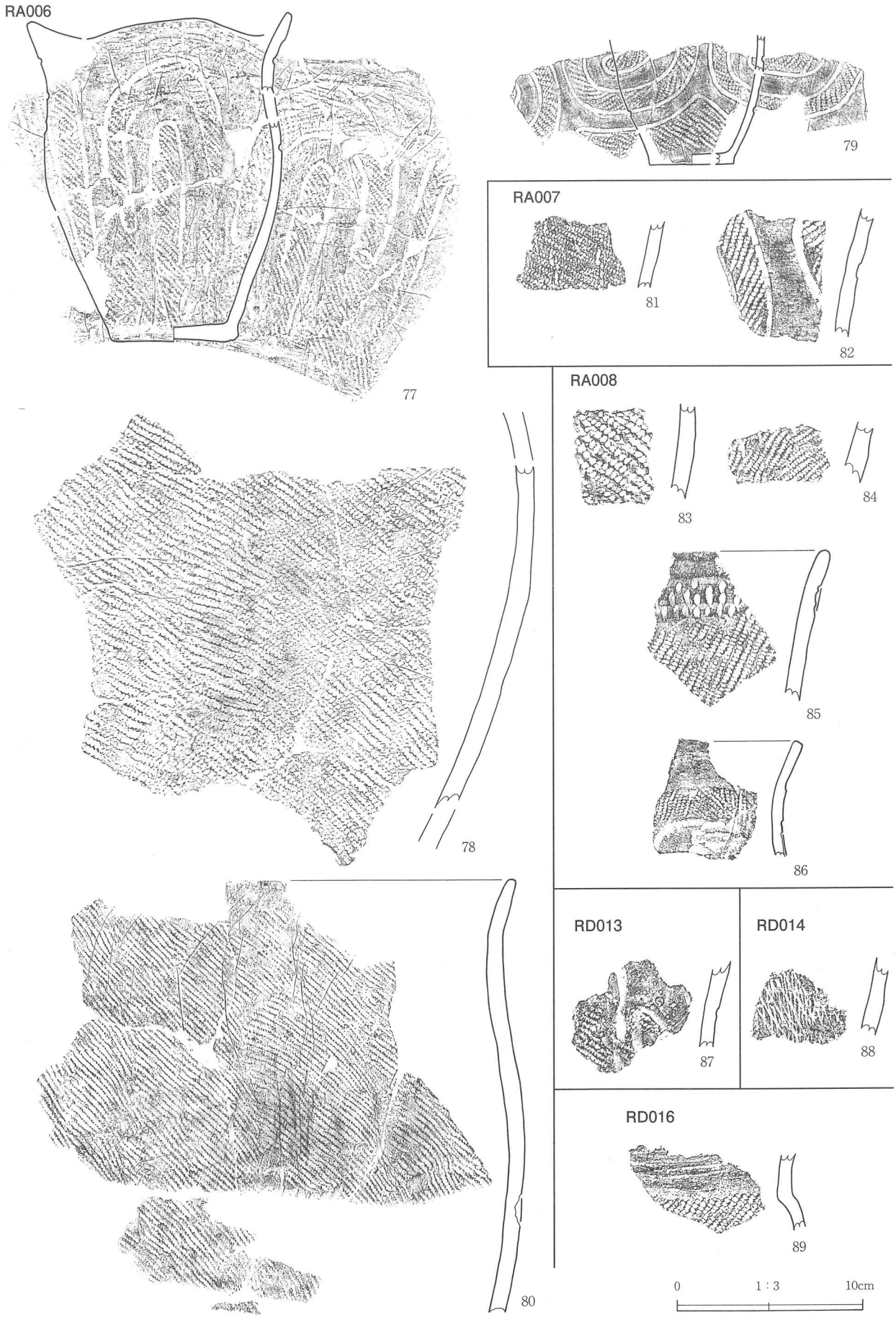


76

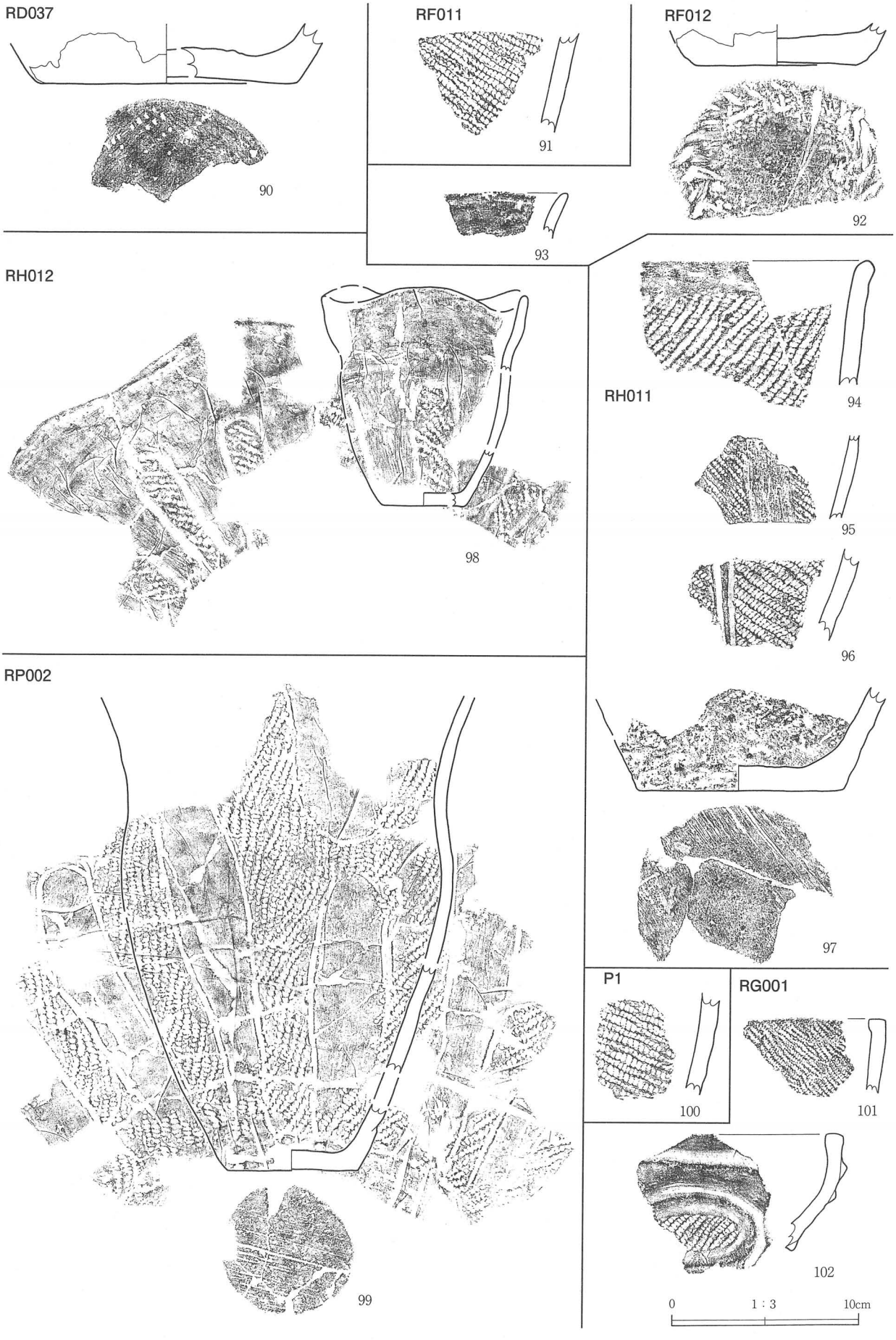
73～76

0　1：3　10cm

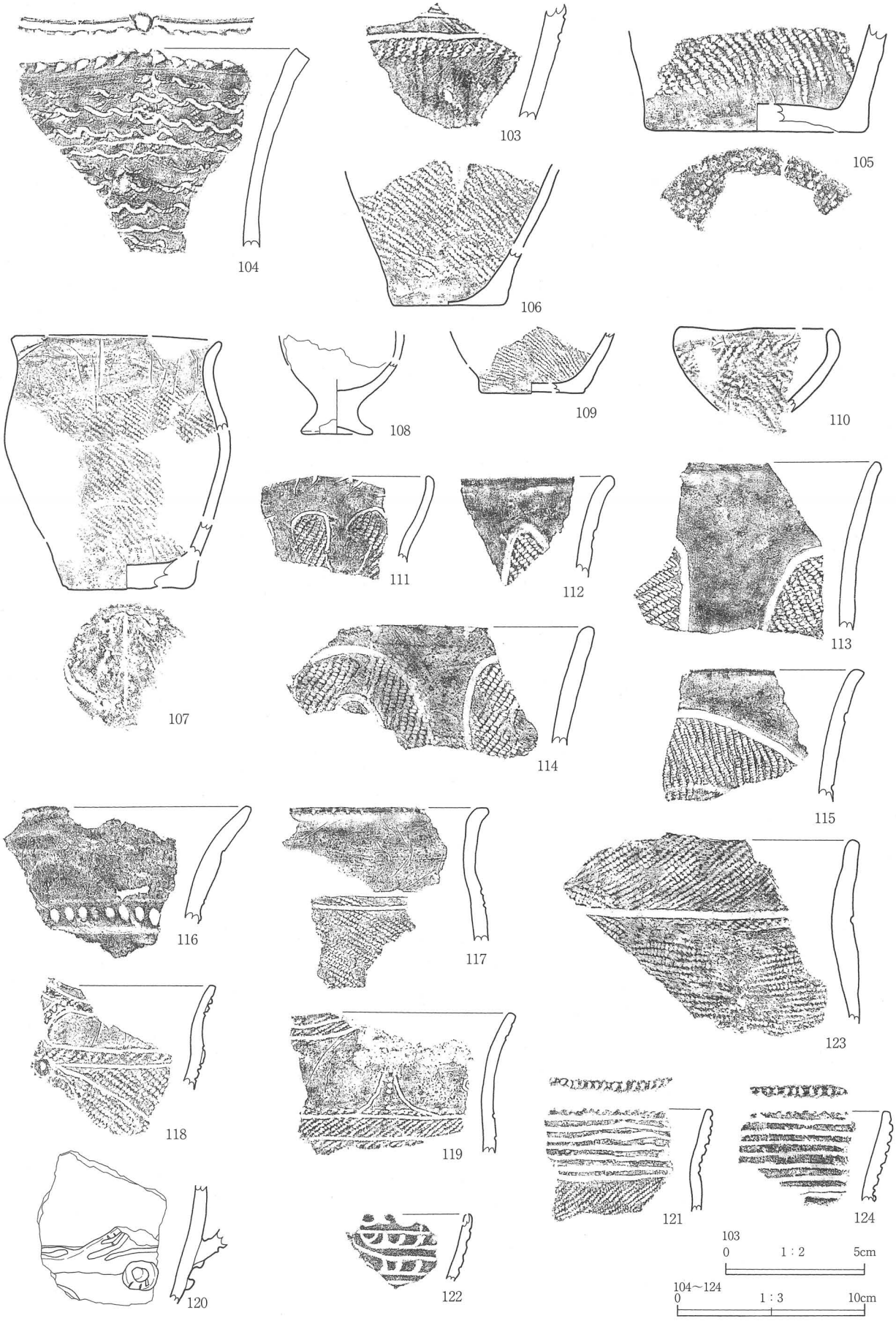
第31図　遺構内出土土器（8）



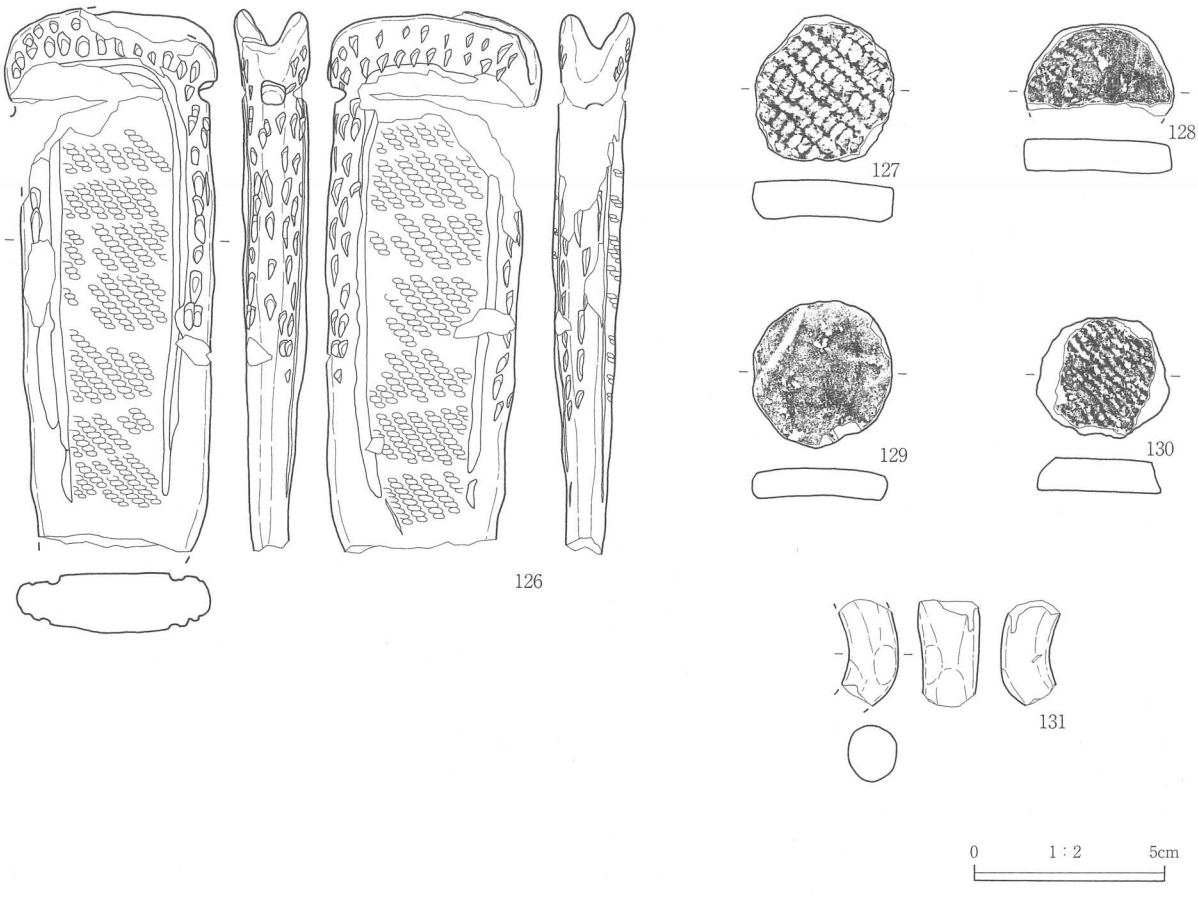
第32図　遺構内出土土器（9）



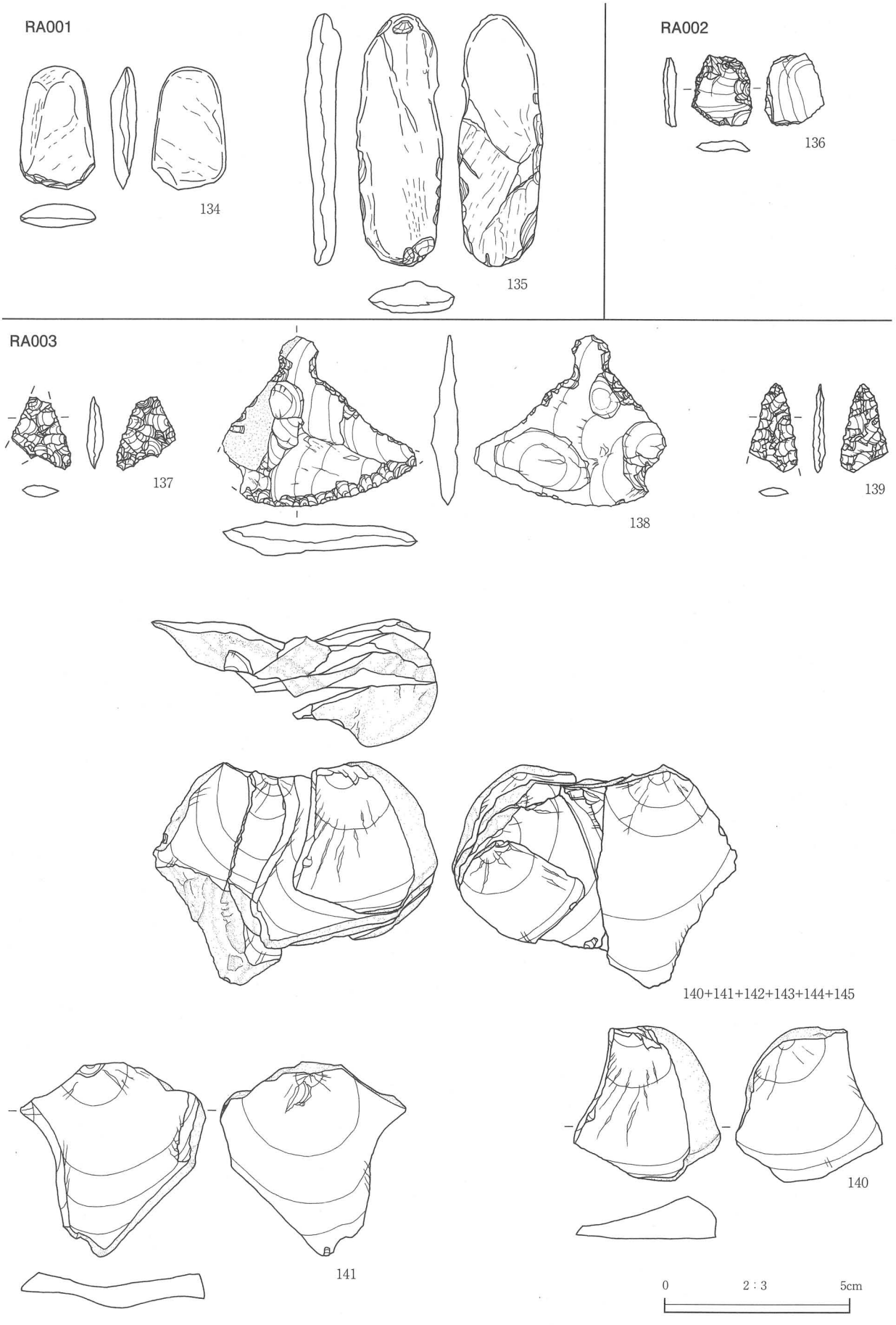
第33図　遺構内出土土器（10）



第34図　遺構外出土土器

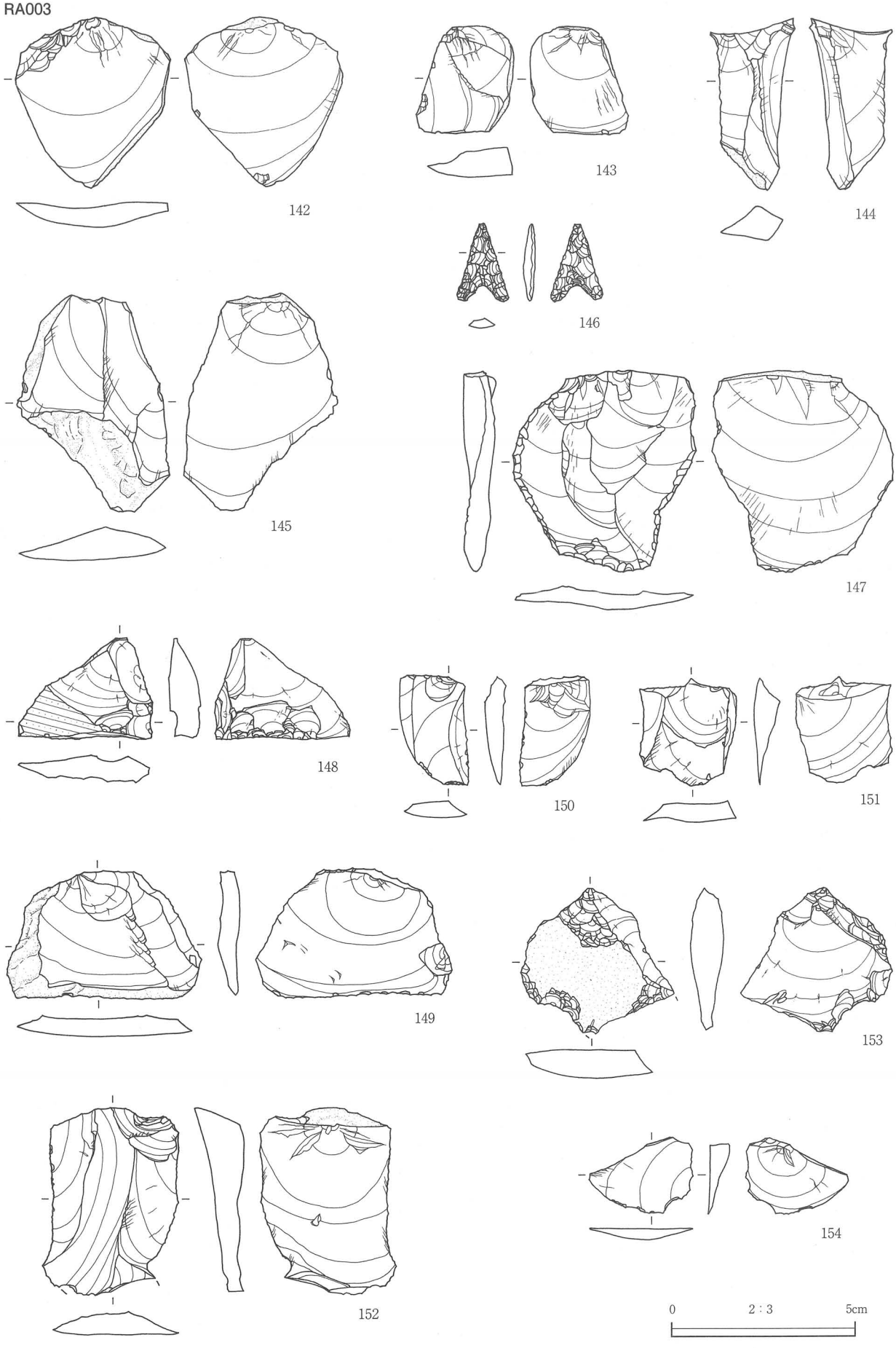


第35図　土製品

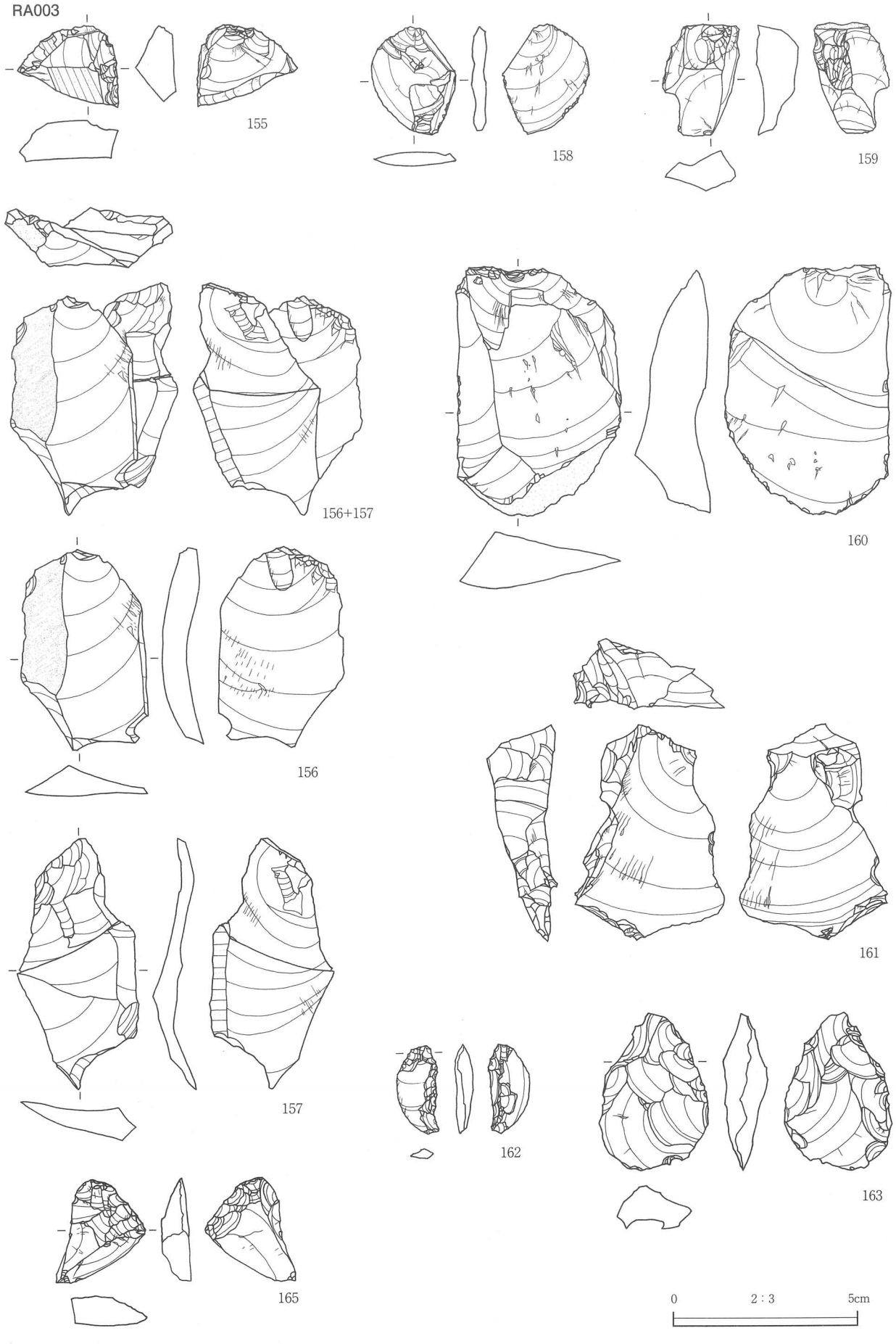


第36図　遺構内出土石器（1）

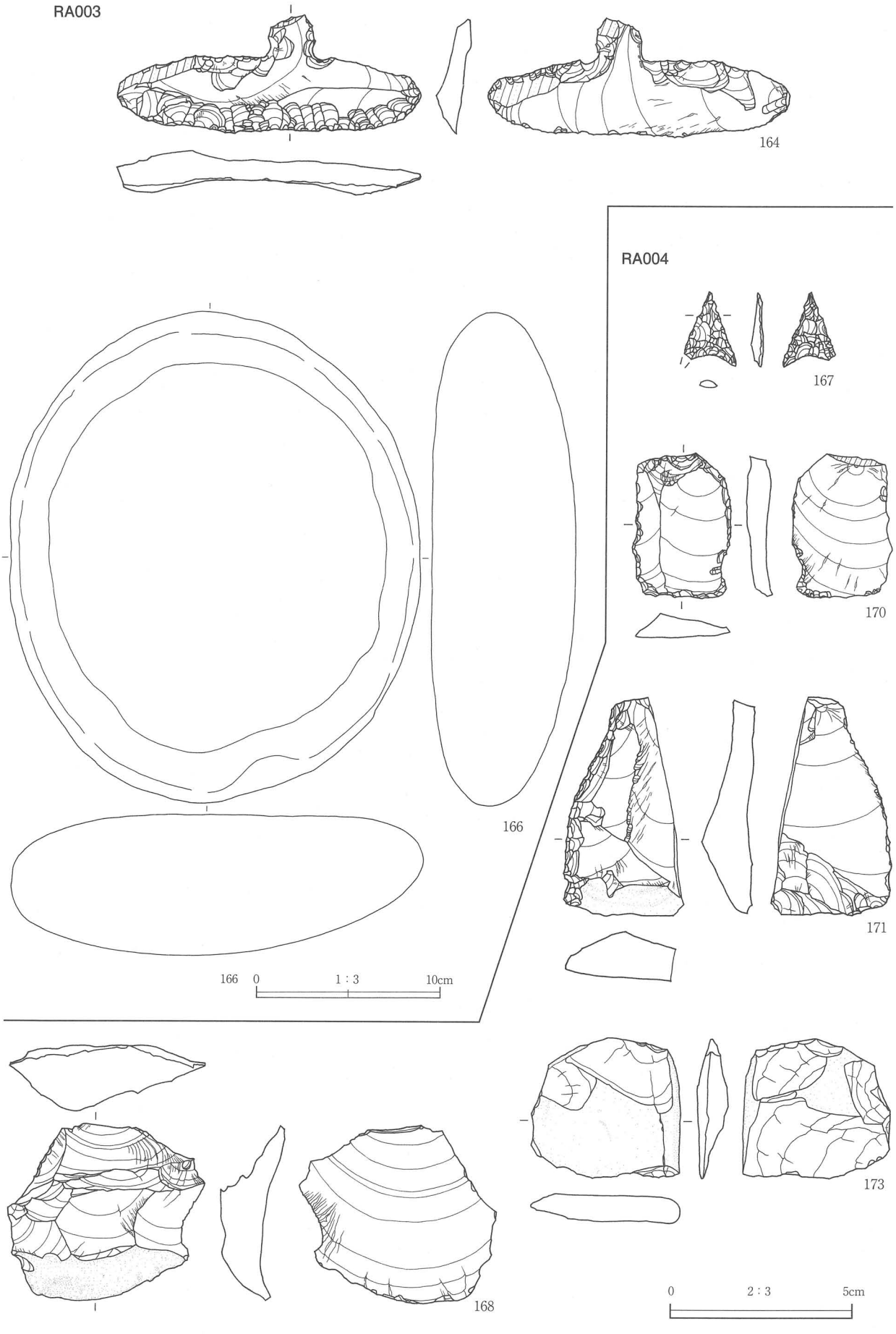
RA003



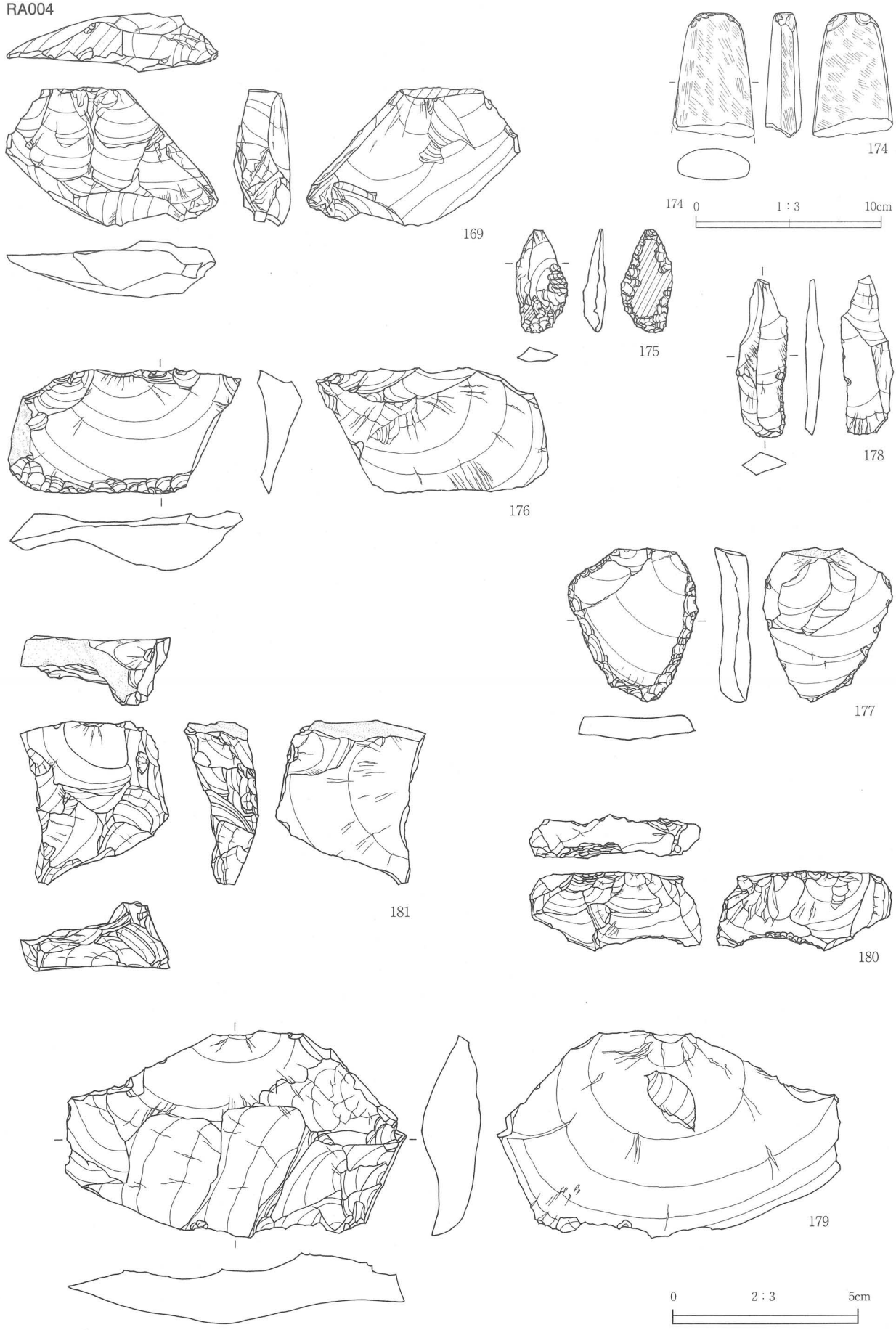
第37図　遺構内出土石器（2）



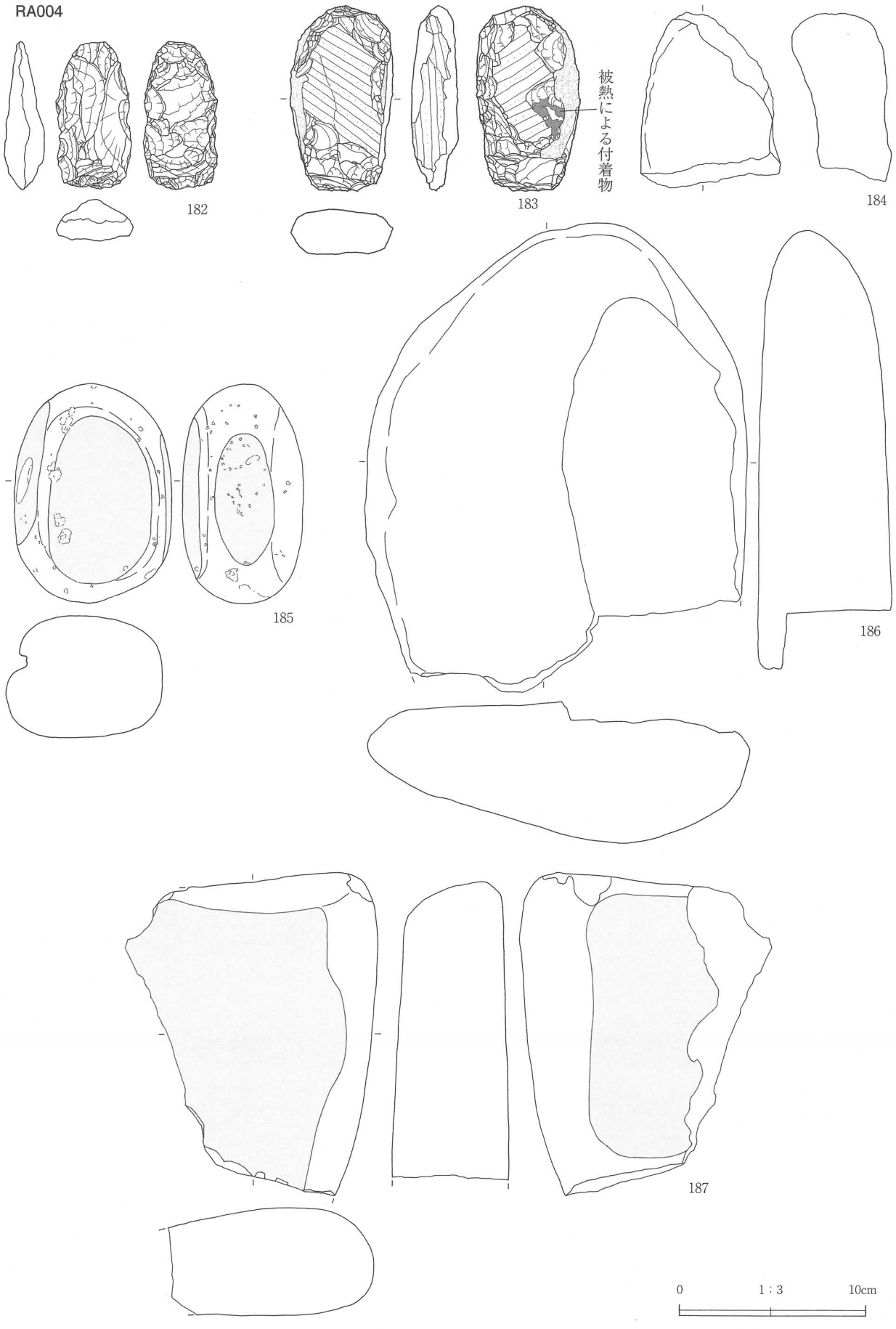
第38図　遺構内出土石器（3）



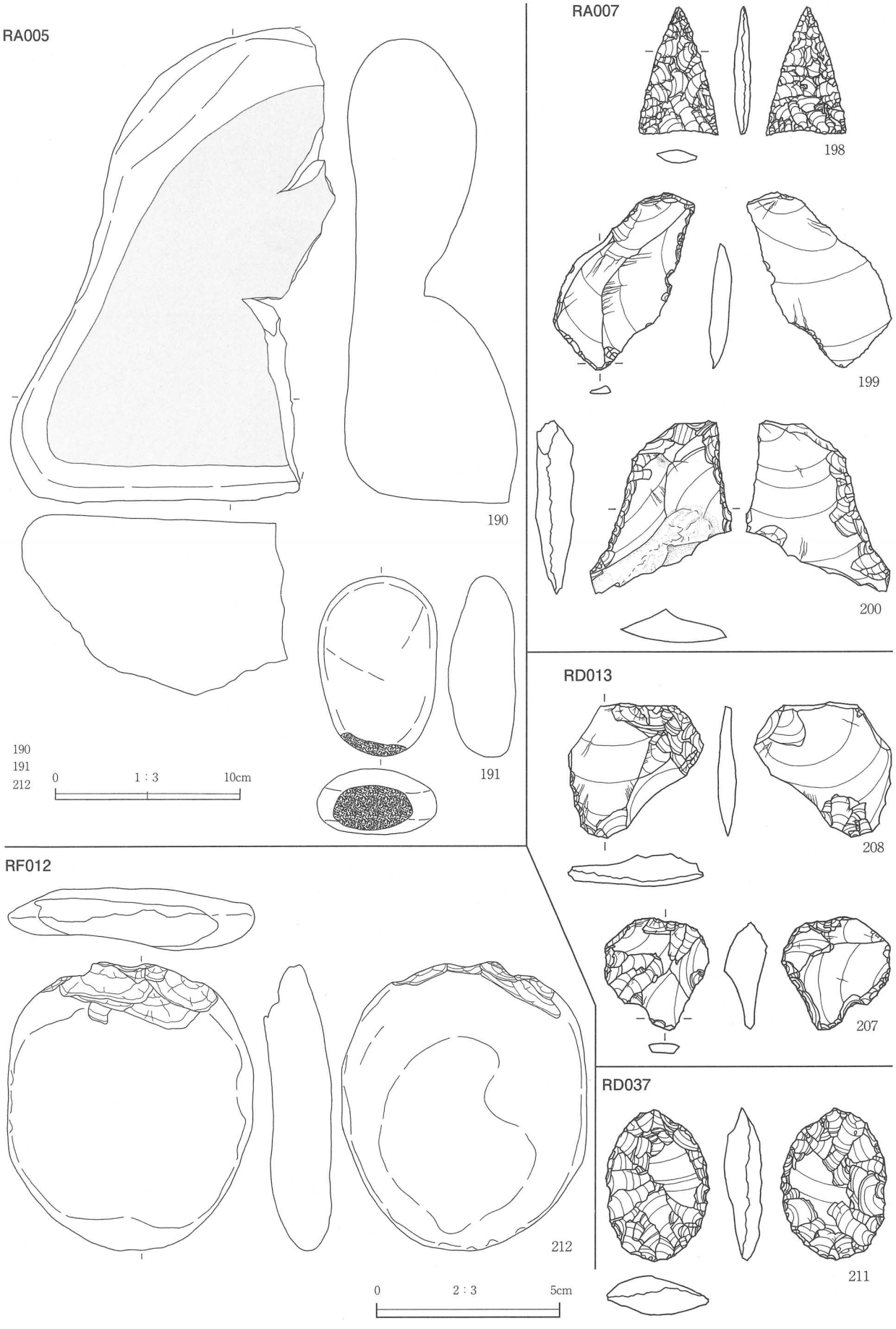
第39図　遺構内出土石器（4）



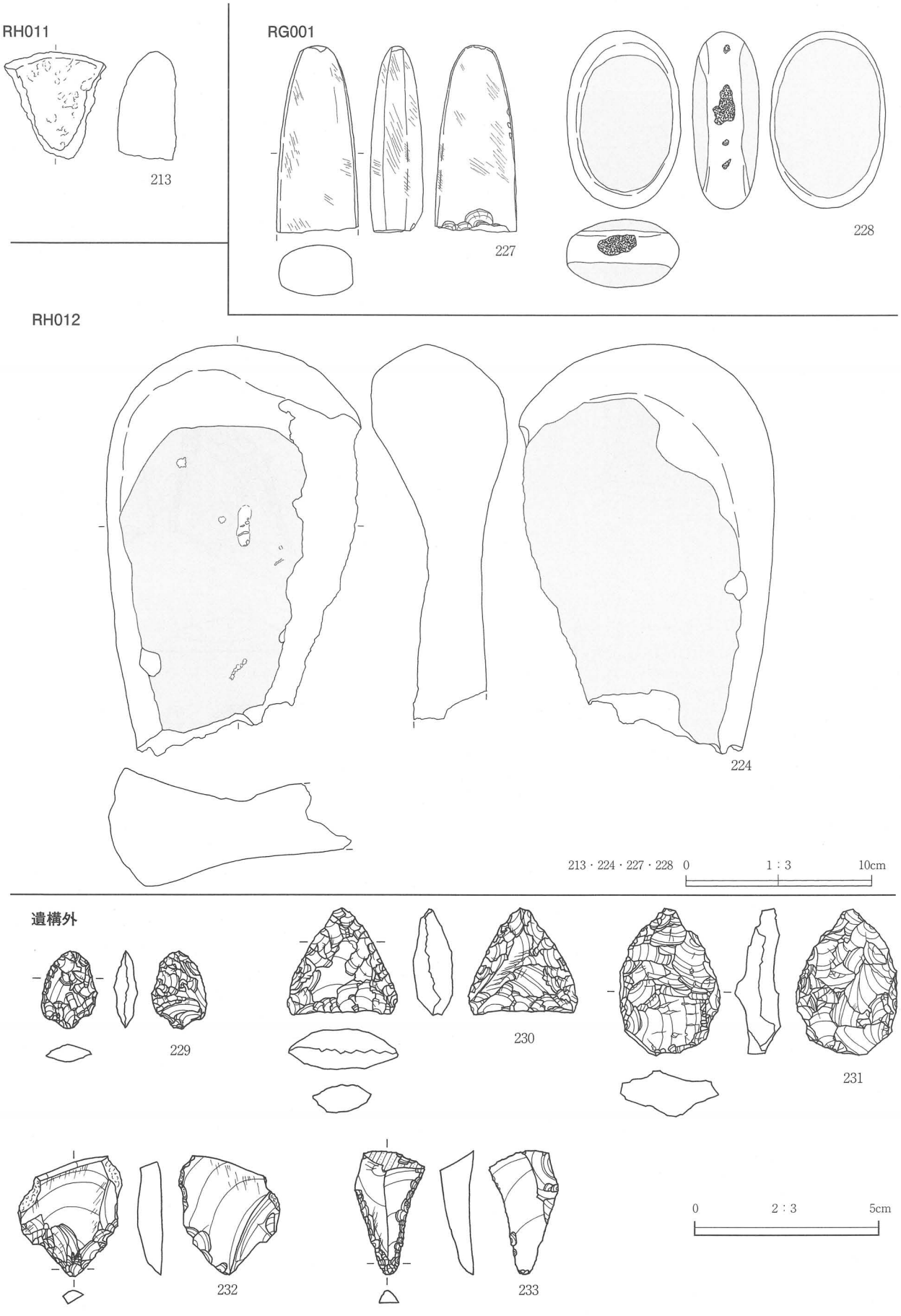
第40図　遺構内出土石器（5）



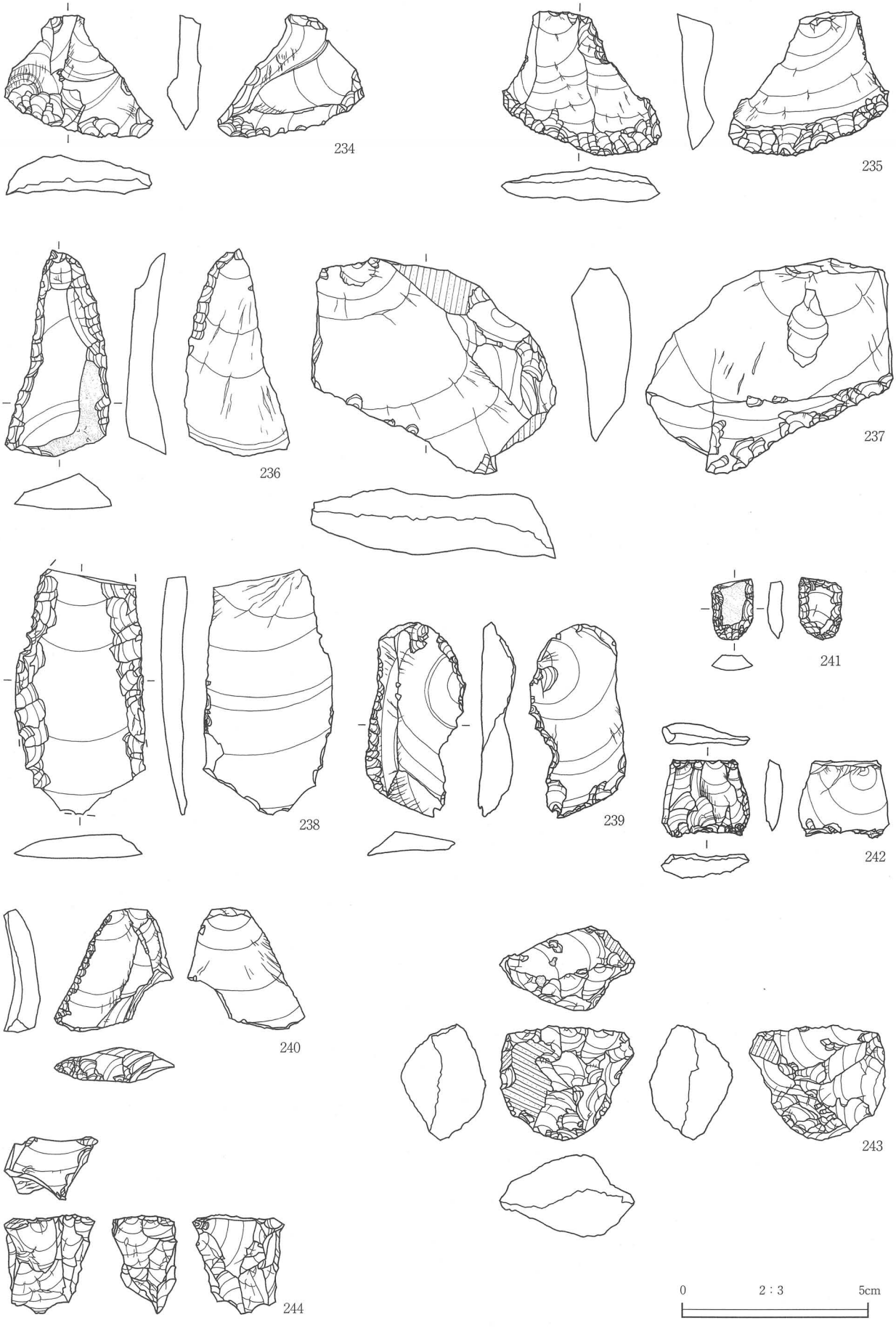
第41図　遺構内出土石器（6）



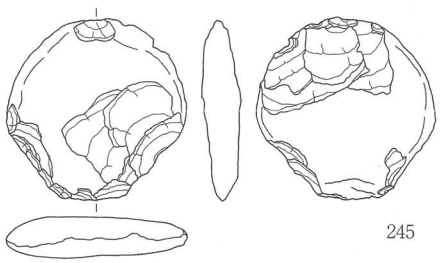
第42図　遺構内出土石器（7）

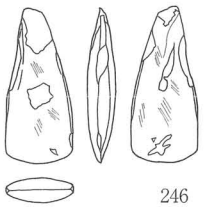


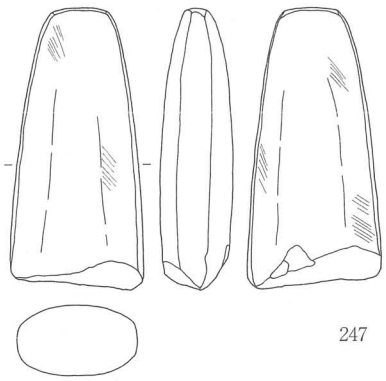
第43図　遺構内出土石器（8）・遺構外出土石器（1）

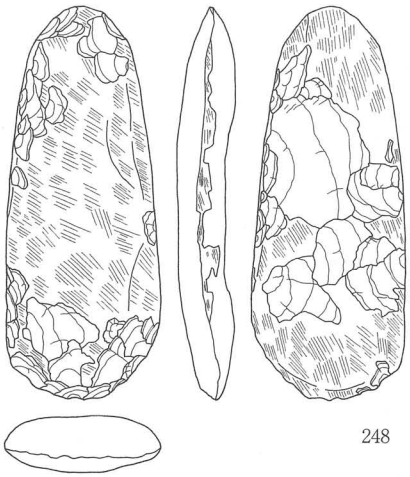


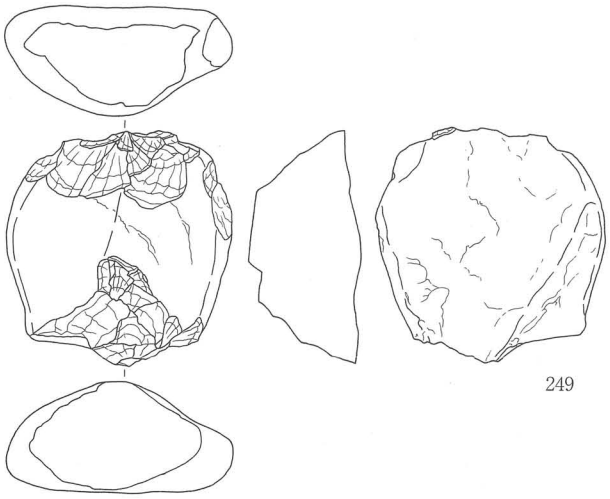
第44図　遺構外出土石器（2）

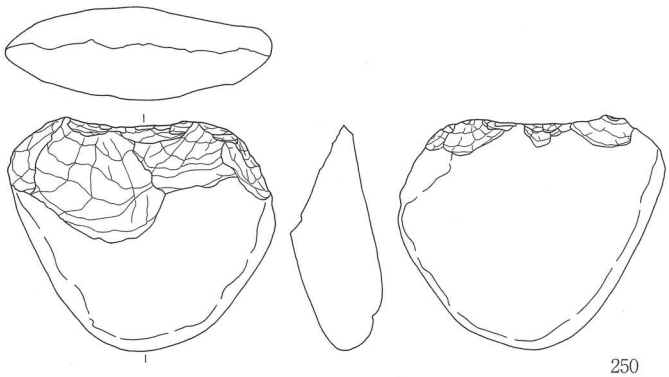


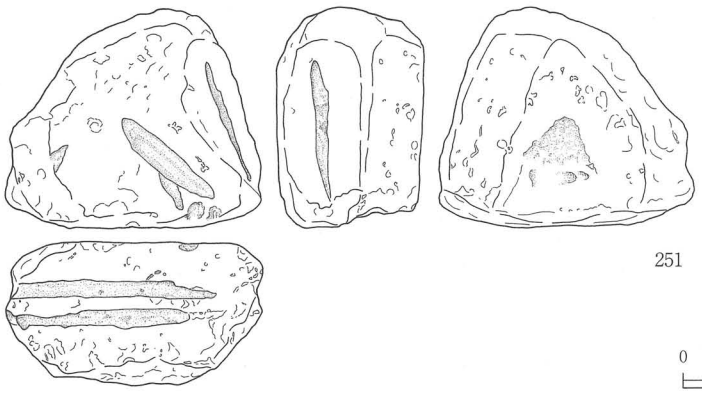


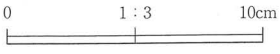




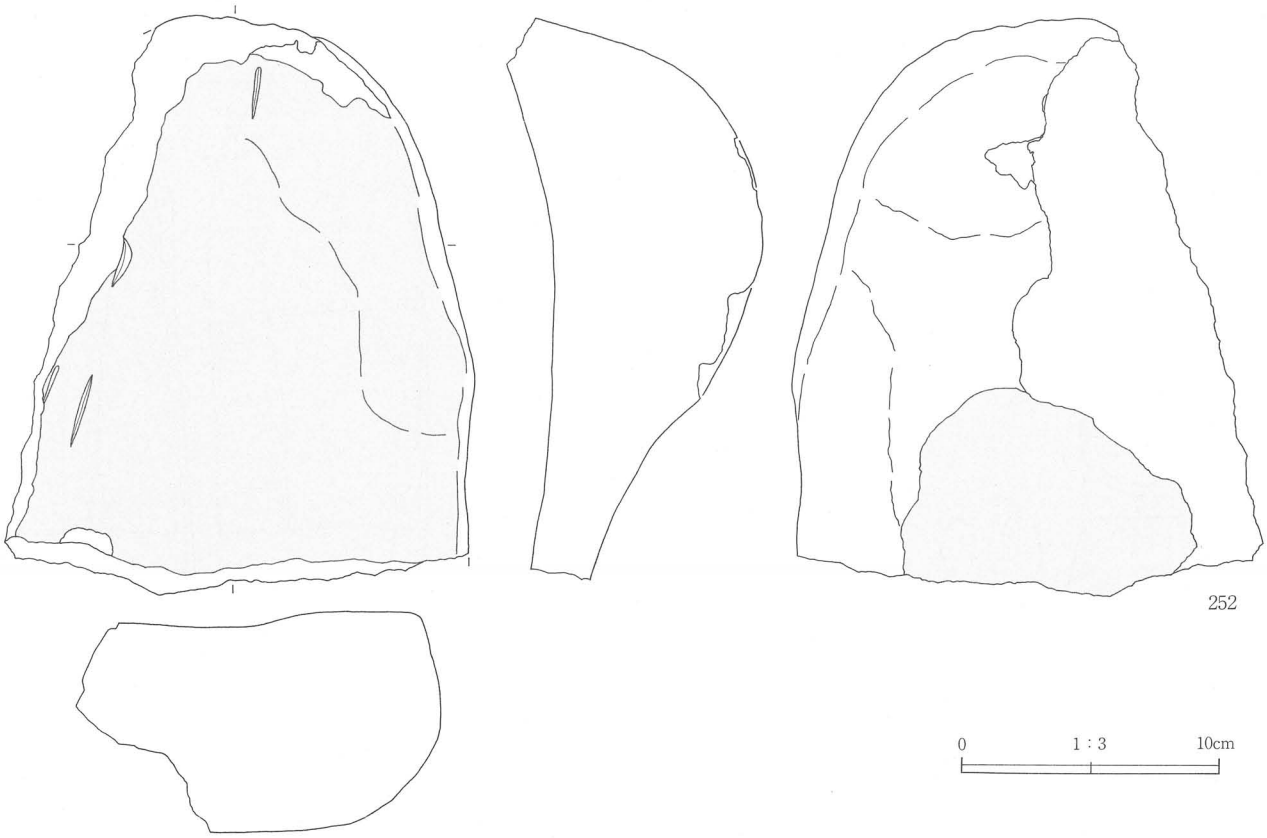




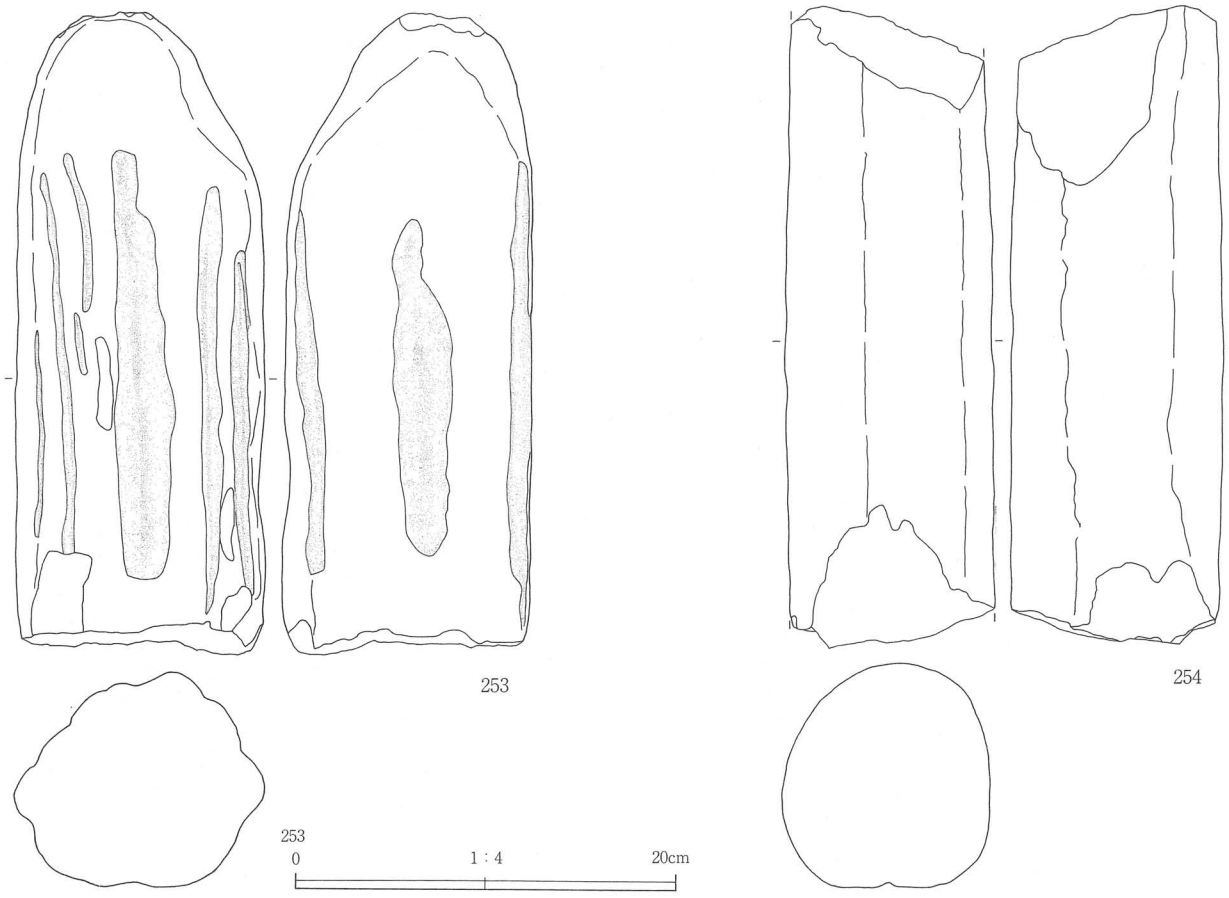




第45図　遺構外出土石器（3）

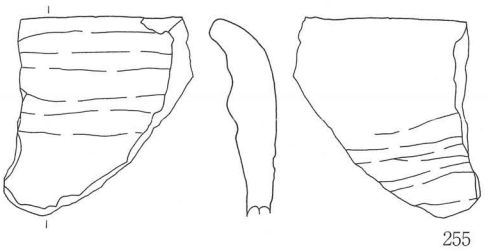


RA003

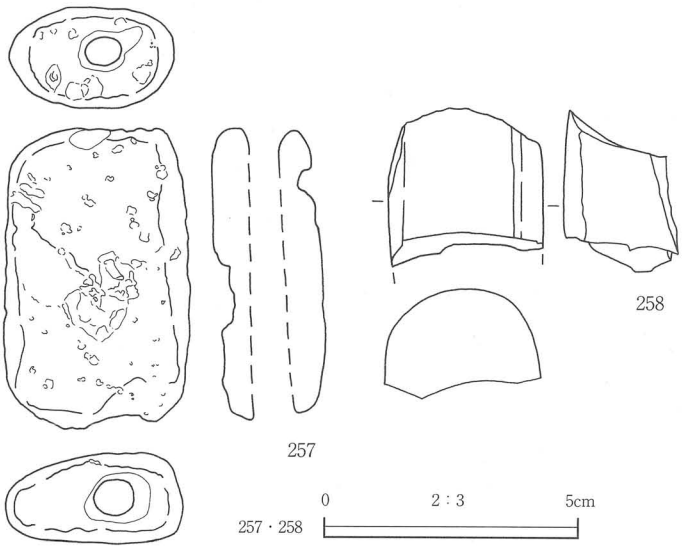


第46図　遺構外出土石器（4）、石製品（1）

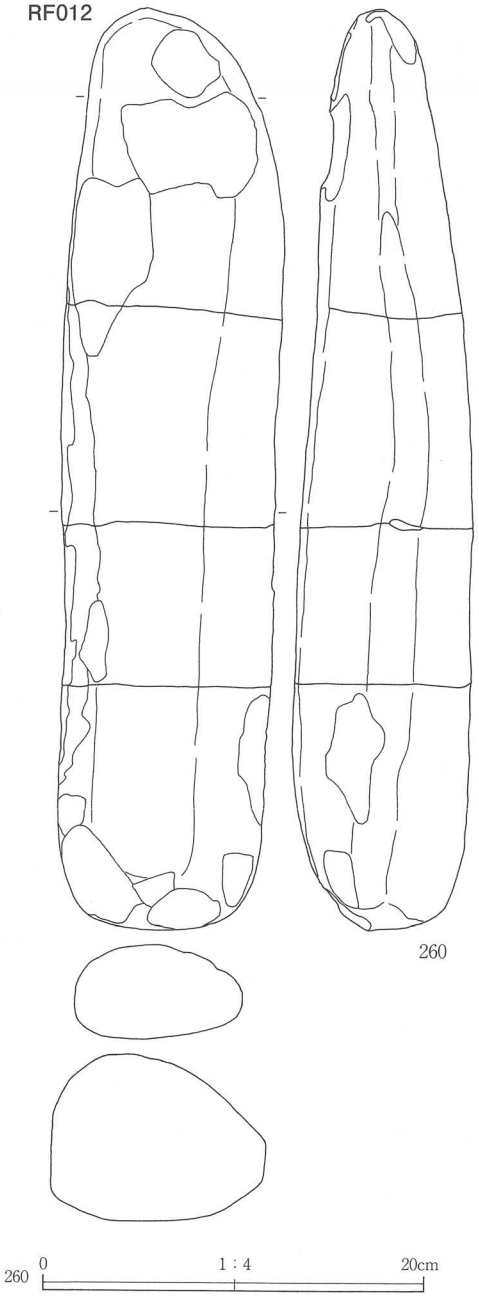
RA003

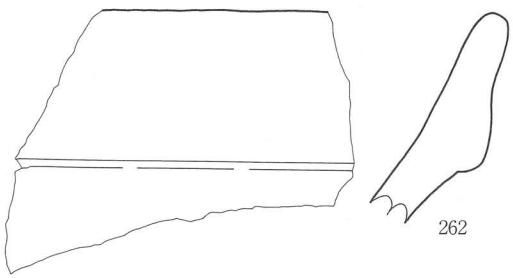


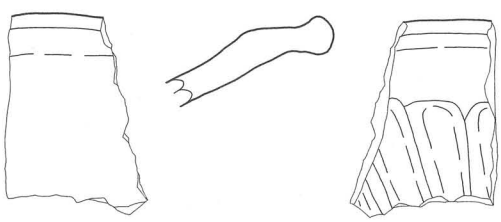
RA004



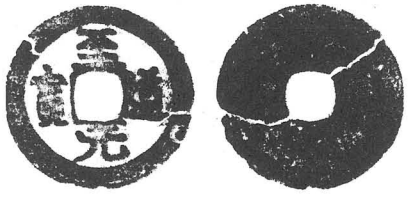
RF012







RG001



第47図　石製品（2）、須恵器、陶器、銭貨

第４表　縄文土器観察表

No 掲載	No 図	No 写図	出土地点・層位	重量(g)	器種	残存部位	口縁形態	文様(縄文原体・施文要素)	内面調整	分類	備考
1	24	22	RA001床面P2	358.9	深鉢	1/2完形	平縁	胴:隆沈線・隆帯貼付→RLR縦	口～胴上半:ミガキ、胴下半～底:ナデ	Ⅲ1	
2	24	22	RA001床面P1	734.0	深鉢	口～胴部	平縁	胴:RLR縦	口:ナデ	Ⅲ3	
3	24	22	RA001 1層	392.0	台付鉢	略完形	波状口縁(3単位?)	口～胴:LR縦→隆沈線・円形刺突	ミガキ	Ⅲ1	磨消縄文
4	24	22	RA002 QW 床直	59.1	深鉢	口～胴部	平縁?	頸～胴:LR縦→沈線	ミガキ？	Ⅲ	
5	24	22	RA002 QW 床直	20.3	深鉢	胴部		胴:RLR縦、沈線	ナデ	Ⅲ1	沈線浅い
6	24	22	RA002 炉前庭部 埋土	268.0	深鉢	1/2完形	波状口縁	胴:沈線→RLR縦		Ⅲ1	磨消縄文か
7	24	22	RA002 炉 掘り方埋土	28.7	深鉢	口～胴部	波状口縁	口:沈線、胴:LR縦？→沈線		Ⅲ1？	
8	24	22	RA002 炉 1層	71.6	深鉢	口縁部	平縁	胴:RLR縦→沈線		Ⅲ1	磨消縄文
9	24	22	RA002 石囲炉 1層	28.2	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦→沈線	ミガキ	Ⅲ1	磨消縄文
10	24	22	RA002 QE 1層	141.5	深鉢	胴下半～底部		底:網代→ナデ	ナデ	Ⅲ3	
11	25	22	RA003 QN・QW 7層	50.6	深鉢	胴下半～底部		胴:RL横・沈線	ナデ	Ⅲ	
12	25	22	RA003 QE 7層	38.8	深鉢	口～胴部	平縁	胴:RLR縦	ナデ	Ⅲ3	
13	25	22	RA003 P8 埋土	48.5	深鉢	口～胴部	平縁	頸～胴:LR縦・沈線	ミガキ	Ⅲ1	文様区画外ミガキ？
14	25	23	RA003 焼土周辺	58.5	深鉢	口～胴部	平縁	胴:RLR縦	ナデ	Ⅲ3	
15	25	23	RA003 ベルトA-A´E 5層	33.7	深鉢	胴下半～底部		胴:RLR縦・沈線	ナデ	Ⅲ3	
16	25	23	RA003 QW・QN・ベルトA-A´W 焼土直上～1層	965.7	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦・斜	ナデ	Ⅲ3	口縁:磨消による無文帯
17	25	23	RA003 QS・QW・QN・QE 埋土上～中位	1218.0	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦		Ⅲ3	口縁:磨消による無文帯
18	25	23	RA003 QE 1層	71.4	深鉢	胴下半～底部		胴:RLR縦	ナデ	Ⅲ3	
19	26	23	RA003 QN・QE・ベルトA-A´E 1層	300.0	深鉢	口～胴部	波状口縁	胴:LR縦→沈線	ミガキ	Ⅲ1	磨消縄文
20	26	24	RA003 QE 1層	613.8	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
21	25	23	RA003 QE 埋土中位	29.8	台付土器	台部		台:RLR縦→沈線	ナデ	Ⅲ1	穿孔あり
22	25	23	RA003 QE 埋土	88.5	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
23	25	23	RA003 焼土付近 埋土上位	47.4	深鉢	口～胴部	波状口縁？	胴:LR縦→沈線		Ⅲ1	磨消縄文
24	26	24	RA003 QN 埋土中位	48.7	ミニチュア(壺？)	胴上半～底部		胴:LR縦	ナデ	Ⅵ	
25	26	24	RA003 ベルトB-B´N 1層	7.6	ミニチュア(浅鉢)	1/2完形	平縁		ナデ	Ⅵ	外面ナデ
26	26	24	RA004 炉底面第2石組部左側	22.9	深鉢	胴部		胴:LR縦→沈線	ナデ	Ⅲ2？	
27	27	24	RA004 炉 底面P1	725.4	深鉢	口～胴部	平縁	胴:沈線→RL	ナデ	Ⅲ2	充填縄文。内面スス付着。
28	26	24	RA004 床面P10	37.7	深鉢	胴部		胴:RLR縦		Ⅲ3	
29	26	24	RA004 炉 1層	137.4	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦・斜	ナデ	Ⅲ3	
30	26	24	RA004 QE 床直	67.7	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
31	26	24	RA004 QS 埋土下位	40.5	深鉢	口縁部	波状口縁	胴:沈線→RL→沈線引き直し	ナデ	Ⅲ2？	充填縄文
32	26	24	RA004 QE 埋土下位	23.9	深鉢	口縁部	波状口縁	胴:隆沈線、LR横	ミガキ	Ⅲ1	
33	27	24	RA004 QE 埋土下位	41.0	深鉢	口縁部	波状口縁	口:沈線(幅の広い)、胴:RL縦・斜→沈線	ナデ	Ⅲ1	
34	27	24	RA004 QW 埋土下位	32.9	深鉢	口～胴部	平縁	頸～胴:L縦	ナデ	Ⅲ3	
35	27	24	RA004 QS 埋土下位	36.0	深鉢	口～胴部	波状口縁？	胴:LR縦→沈線	ナデ	Ⅲ1	磨消縄文
36	27	25	RA004 床面P15・床直P11・12・13・QS1層上～下位	372.5	深鉢	口～胴下半	平縁	口～胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	口縁:磨消による無文帯
37	27	25	RA004 ベルトB-B´SE・QW1層上位	473.0	深鉢	口～胴部	波状口縁	口:突起＋沈線、隆線＋隆線上に刺突、円形刺突、胴:沈線	ナデ	Ⅳ	
38	27	25	RA004 床面P2・床直P13・QW1層上位	143.2	鉢	1/4完形	平縁	胴:RLR縦→隆沈線	口:ナデ	Ⅲ1	色調黄橙色
39	27	25	RA004 QS埋土下位、RA007炉内P1(底上5cm)	113.2	深鉢	胴部		胴:単軸絡条体第1類	ナデ	Ⅲ3	
40	27	25	RA004 QS 1層下位	76.4	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦	胴:ナデ	Ⅲ3	
41	27	25	RA004 QW 1層上位	63.7	深鉢	胴下半～底部		胴:LR横	ナデ	Ⅲ3	

No 掲載	No 図	No 写図	出土地点・層位	重量(g)	器種	残存部位	口縁形態	文様(縄文原体・施文要素)	内面調整	分類	備考
42	27	25	RA004 QE 1層上位	58.2	深鉢	底部		底:笹葉	ナデ	Ⅲ3	
43	28	25	RA004 QW・ベルトA-A´SW・B-B´NW・QW 埋土上～下位	485.1	深鉢	1/4完形	平縁	頸:沈線、胴:LR縦、底:笹葉	ナデ	Ⅲ～Ⅳ	
44	28	26	RA004 QS・QN・QE・QW1層上位	3835.6	深鉢	口～胴下半	平縁	口～胴:LR縦	口～胴上半:ナデ	Ⅲ3	
45	28	25	RA004 QN 1層上位	211.0	深鉢	底部		底:網代→ナデ調整	ナデ	Ⅲ3	
46	28	25	RA004 QN 1層上位	163.9	深鉢	胴下半～底部			ナデ	Ⅲ3	外面横ナデ
47	28	25	RA004 1層上位	125.2	深鉢	底部		底:笹葉	ナデ	Ⅲ3	
48	28	25	RA004 QN 1層	659.4	深鉢	底部			ナデ	Ⅲ3	
49	28	25	RA004 QE 1層上位	57.4	深鉢	胴下半～底部		底:網代＋笹葉	ナデ	Ⅲ3	
50	29	27	RA004 QS 1層上位	2066.2	深鉢	胴～底部		胴:LR縦、底:網代	ナデ	Ⅲ3	胴部下半にケズリ状の痕跡あり
51	29	27	RA004 QS 1層上位	2066.2	深鉢	口～底部	平縁	胴:LR縦・斜	ナデ	Ⅲ3	50と同一個体だが接点なし
52	29	26	RA004 QW 1層上位	1114.0	深鉢	口～胴上半	波状口縁(5単位)	口～胴:LR縦	口:ケズリ・ナデ、胴:ケズリ	Ⅲ3	
53	29	26	RA004 QW 1層上位	82.3	深鉢	口～胴部	波状口縁	胴:沈線・LR縦		Ⅲ1	磨消縄文
54	29	26	RA004 QN 1層上位	39.6	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦→沈線	ナデ	Ⅲ1	磨消縄文
55	29	26	RA004 ベルトB-B´NW 埋土	53.7	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR・沈線	ミガキ	Ⅲ	色調黄橙色
56	29	26	RA004 1層上位	160.1	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦、底:笹葉	ナデ	Ⅲ3	底:指の圧痕もあり
57	29	26	RA004 QN・QW 1層上位	1224.3	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
58	30	27	RA004 1層上位	842.0	深鉢	胴部		胴:RL縦	ナデ	Ⅲ3	
59	30	27	RA004 QS・QE・ベルトB-B´NW 1 層上位	80.8	深鉢	口～胴部	平縁	胴:L縦	ナデ	Ⅲ3	
60	30	27	RA004 1層上位	56.2	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR斜→沈線	ナデ	Ⅲ～Ⅳ	口縁磨消
61	30	27	RA004 QN 1層上位	44.9	深鉢	口～胴部	平縁	口:LR縦、沈線	ナデ	Ⅲ～Ⅳ	後期初頭？
62	30	27	RA004 ベルトB-B´SW 埋土	76.5	深鉢	口～胴部	平縁	胴:単軸絡条体第5類	ミガキ	Ⅱ？	大木5？
63	30	27	RA004 QS 1層上位	41.8	深鉢	口～胴部	波状口縁	口:隆帯＋隆帯上に刺突→沈線、胴:LR縦・斜→沈線	口:ナデ	Ⅳ	
64	30	28	RA004 QS・ベルトA-A´SW・SE 1層上位	301.1	深鉢	口～胴部	波状口縁	口～胴:RL縦→沈線	ナデ	Ⅳ	
65	30	28	RA004 QS 1層上位	24.4	深鉢	口縁部	波状口縁	沈線	ナデ	Ⅳ	
66	30	28	RA004 1層上位	81.0	深鉢	口～頸部	波状口縁	口:沈線	ナデ	Ⅳ	
67	30	28	RA004 QN 1層上位	64.6	深鉢	口～胴部	平縁	口:沈線、頸～胴:沈線・円形刺突		Ⅱ	大木6
68	30	28	RA004 床面P8・QE1層上位	148.5	深鉢	口～胴部	平縁	胴:単軸絡条体第5類	ナデ？	Ⅱ	大木5～6
69	31	28	RA004 QW 1層上位	31.6	ミニチュア(深鉢)	完形		口:突起(3単位)＋刻み	ナデ	Ⅵ	外面指ナデ。大木5？
70	31	28	RA004 ベルトA-A´NE・B-B´SE 埋土	18.0	ミニチュア(深鉢?)	口～胴部	平縁		ナデ	Ⅵ	外面ナデ
71	31	28	RA004 QW 1層上位	8.1	ミニチュア(深鉢)	胴下半～底部			ナデ	Ⅵ	外面ナデ
72	31	28	RA004 QS 1層	50.6	？				ナデ		土製品？外面ナデ
73	31	28	RA005 第2石組部炉底面P1・2・3・4・5・炉1層	454.0	深鉢	略完形	平縁	胴:LR縦・横→沈線→刺突	ミガキ	Ⅲ	
74	31	28	RA005 床面P1	730.5	深鉢	口～胴部	平縁	頸～胴:RL縦	ナデ、ケズリ	Ⅲ3	
75	31	28	RA005 床面P2	88.1	深鉢	胴部		胴:平行沈線(櫛目状)	ナデ	Ⅲ3	
76	31	28	RA005 炉西側 Ⅲ層	34.5	深鉢	口縁部		口唇:刻み、口～頸:沈線、胴:LR横	ナデ	Ⅴ	
77	32	29	RA006 床面P1	498.7	深鉢	2/3完形	波状口縁	胴:LR縦・斜→沈線	ナデ	Ⅲ1	磨消縄文
78	32	29	RA006 床面P2	604.4	深鉢	胴部		胴:LR縦	ナデ	Ⅲ	
79	32	29	RA006 QE 植物撹乱	59.6	深鉢	胴下半～底部		胴:沈線→LR縦・横	ミガキ	Ⅲ2	充填縄文
80	32	29	RA006 QN・QE 1層	463.8	深鉢	口～胴部	平縁？	頸～胴:LR斜	ナデ	Ⅲ3	
81	32	29	RA007 炉底面P5	23.0	深鉢	胴部		胴:LR(結節)縦		Ⅲ3	
82	32	29	RA007 炉埋土最上位	42.7	深鉢	胴部		胴:RL縦→沈線	ナデ	Ⅲ2？	磨消縄文
83	32	29	RA008 炉第1石組部直上	29.3	深鉢	胴部		胴:LR縦		Ⅲ3	
84	32	29	RA008 炉前庭部直上	25.9	深鉢	胴部		胴:RL縦		Ⅲ3	
85	32	29	RA008 1層	54.2	深鉢	口～胴部	平縁	頸部:刺突、胴:RL縦	ナデ、ミガキ	Ⅲ～Ⅳ	

No			出土地点・層位	重量(g)	器種	残存部位	口縁形態	文様(縄文原体・施文要素)	内面調整	分類	備考
掲載	図	写図									
86	32	29	RA008 1層	23.6	深鉢	口～胴部	平縁	胴:沈線、RL縦・横		Ⅲ～Ⅳ	
87	32	29	RD013 1層	33.9	深鉢	胴部		胴:沈線→LR縦	ナデ	Ⅲ	
88	32	29	RD014 1層	22.0	深鉢	胴部		胴:単軸絡条体第5類	ナデ	Ⅱ？	大木5？
89	32	29	RD016 埋土	31.4	深鉢	頸～胴部		胴:RL縦	ナデ	Ⅲ3	
90	33	30	RD037 1層	169.5	深鉢	胴下半～底部		底:網代→ナデ	ナデ	Ⅲ3	
91	33	30	RF011 1層	32.0	深鉢	胴部		胴:LR縦		Ⅲ3	端を重ねてLR縦を施文
92	33	30	RF012 1層(焼土面上10cm)	194.3	深鉢	底部			ナデ？	Ⅲ3	底:上げ底気味
93	33	30	RF012 焼土層	8.5	深鉢	口縁部	平縁		ナデ	Ⅲ3	外面横ナデ
94	33	30	RH011 P6 1層	75.1	深鉢	口～胴部	平縁	胴:RL縦		Ⅲ3	
95	33	30	RH011 P7	23.4	深鉢	胴部		胴:LR縦→沈線	ナデ？	Ⅲ	磨消縄文。沈線浅い。
96	33	30	RH011 P4	41.5	深鉢	胴部		胴:沈線→LR縦	ナデ	Ⅲ	
97	33	30	RH011 P2	300.8	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦、底:笹葉		Ⅲ3	
98	33	30	RH012周辺・ⅦE22w・ⅦE25l Ⅲ～Ⅳ層	181.9	深鉢	口～胴下半	波状口縁(3単位)	胴:沈線→LR縦	ナデ	Ⅲ1	充填縄文
99	33	30	RP002	828.0	深鉢	胴～底部		胴:沈線→RL縦、底:笹葉	ナデ	Ⅲ1	充填縄文
100	33	30	P1 1層	31.9	深鉢	胴部		胴:RL横		Ⅲ？	異なる太さの1段の縄(L)を撚り合わせている
101	33	30	RG001 埋土下位	26.4	深鉢	口～胴部	平縁	口～胴:RL横	ナデ	Ⅲ3	
102	33	30	RG001 黒褐色砂層	49.2	深鉢	口縁部	平縁	口～胴:RL縦→隆沈線	ミガキ	Ⅲ	
103	34	31	ⅧF Ⅰ層	18.9	深鉢	胴部		胴:沈線・貝殻腹縁		Ⅰ	外面ミガキ、早期中葉
104	34	31	ⅧE Ⅲ層	127.5	深鉢	口～胴部	平縁	口:刺突、沈線→口端に刻み、胴:結節横回転(RL)	ナデ	Ⅱ	前期前葉
105	34	31	ⅧE7q Ⅲ層相当	159.2	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦、底:網代	ナデ	Ⅲ3	
106	34	31	ⅧE7w 黒褐色土層	165.8	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
107	34	31	ⅧE4r・4w Ⅲ層	249.9	深鉢	1/4完形	平縁	胴:LR縦、底:木葉	ナデ	Ⅲ3	
108	34	31	ⅧE(下段)トレンチ南 黒褐色砂層	47.4	台付鉢？	胴下半～台部			ナデ	Ⅲ1	外面ナデ
109	34	31	ⅧE3q Ⅲ層	39.2	深鉢	胴下半～底部		胴:LR縦	ナデ	Ⅲ3	
110	34	31	ⅧE4u Ⅲ層	8.2	鉢？	口～胴部	平縁	口～胴:LR横・縦	ナデ	Ⅵ	
111	34	31	ⅧE2o Ⅲ層	25.1	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦→沈線	ミガキ	Ⅲ1	磨消縄文
112	34	31	ⅧE4r Ⅲ層	28.9	深鉢	口～胴部	平縁	胴:LR縦→沈線	ナデ	Ⅲ1	
113	34	31	ⅧE3r Ⅲ層、ⅧE6rⅣ層	92.9	深鉢	口縁部	平縁	胴:沈線→LR縦	ナデ	Ⅲ2	充填縄文
114	34	31	ⅦE25l Ⅲ層	96.0	深鉢	口～胴部	平縁	胴:沈線→RL縦	ナデ	Ⅲ2	充填縄文
115	34	31	ⅧE7q Ⅲ層相当	58.4	深鉢	口縁部	平縁	胴:沈線→LR縦	ナデ	Ⅲ2	充填縄文か
116	34	31	ⅧE1s Ⅲ層	76.5	深鉢	口縁～頸部	波状口縁	頸:沈線・刺突		Ⅲ	
117	34	31	ⅧE2q Ⅲ層	64.5	深鉢	口～胴部	平縁	口唇:刻み、胴:LR縦→沈線	ミガキ	Ⅲ～Ⅳ	
118	34	31	ⅧE(下段) 砂礫層上位	46.3	深鉢	口～胴部	波状口縁	口:隆帯＋隆帯上に刺突・RL圧痕→沈線、胴:LR縦→沈線、ボタン状貼付		Ⅳ	
119	34	31	ⅧE 黒褐色砂	63.3	深鉢	口～胴部	波状口縁	口:LR横→沈線、頸:沈線＋刺突、胴:LR横→沈線	ナデ	Ⅳ	
120	34	31	ⅧE Ⅲ～Ⅳb層	69.3	深鉢	口～胴部		口:把手＋沈線、胴:R→沈線、ボタン状貼付	ナデ	Ⅳ	
121	34	31	ⅧE(下段) Ⅲ～Ⅳ層	32.6	深鉢	口～胴部		口唇:刻み、口～頸:沈線、胴:LR横	ナデ	Ⅴ	
122	34	31	ⅧE(下段) 黒褐色砂層	10.5	鉢？	口縁部		口:羊歯状文		Ⅴ	
123	34	31	出土地点不明	159.8	深鉢	口～胴部	平縁	口～胴:LR横・斜→沈線	ナデ	Ⅲ～Ⅳ	
124	34	31	出土地点不明	25.1	深鉢	口～頸部		口唇:刻み、口～頸:沈線		Ⅴ	
125		31	ⅧE5r Ⅲ層	109.0	粘土塊？						

第５表　石器観察表

No			出土地点	器種	残存状態	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特記事項
掲載	図	写図									
132		33	RA001 炉石1	台石	1/2欠	チャート	(18.2)	(23.5)	(11.7)	7200.0	
133		33	RA001 炉石2	台石	完形	閃緑岩	30.3	13.4	6.7	4500.0	
134	36	33	RA001 1層	磨製石斧	完形	ホルンフェルス	5.0	3.0	1.0	20.1	小形
135	36	33	RA001 1層	打製石斧	完形	頁岩	10.3	3.5	1.2	60.6	未製品　磨製石斧未製品の可能性有
136	36	33	RA002 炉前庭部？ 埋土	二次加工ある剥片	完形	頁岩	2.0	1.6	0.3	0.9	
137	36	33	RA003 床面	石鏃	一部欠	頁岩	(2.0)	(1.6)	0.4	1.0	凹基無茎
138	36	33	RA003 炉 埋土	石匙	略完形	頁岩	4.7	(5.1)	0.7	12.6	横型三角形　被熱・剥落
139	36	33	RA003 剥片集中	石鏃	一部欠	頁岩	(2.4)	(1.3)	0.4	0.8	凹基無茎
140	36	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	4.3	4.0	1.2	20.5	
141	36	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	5.3	5.0	1.0	15.4	
142	37	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	4.7	4.2	0.7	12.6	接合資料
143	37	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	3.0	2.7	0.8	6.3	打面は1面　円礫面残存
144	37	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	4.7	2.3	1.0	6.9	
145	37	33	RA003 剥片集中	剥片	完形	頁岩	5.9	4.1	0.9	21.6	
146	37	34	RA003 壁溝埋土	石鏃	完形	頁岩	2.2	1.4	0.3	0.5	凹基無茎
147	37	34	RA003 壁溝埋土	削器	完形	頁岩	5.5	4.9	0.9	18.0	両側縁に浅い調整
148	37	34	RA003 QS 壁溝埋土	二次加工ある剥片	完形	頁岩	2.8	3.6	0.8	6.7	
149	37	34	RA003 QE 壁溝埋土	剥片	完形	頁岩	3.5	5.3	0.5	11.3	円礫面残存
150	37	34	RA003 QE 壁溝埋土	剥片	完形	頁岩	3.0	1.9	0.5	2.9	
151	37	34	RA003 QE 壁溝埋土	剥片	完形	頁岩	2.9	2.5	0.7	4.6	
152	37	34	RA003 QE 壁溝埋土	剥片	略完形	頁岩	(5.1)	3.6	1.1	16.3	
153	37	34	RA003 QN 壁溝埋土	剥片	一部欠	頁岩	(4.0)	(4.1)	0.9	12.1	角礫面残存
154	37	34	RA003 QE 壁溝埋土	剥片	1/2欠	頁岩	2.2	(2.7)	0.5	1.6	
155	38	34	RA003 QS 壁溝検出面	二次加工ある剥片	1/2欠	頁岩	(2.3)	(2.8)	1.0	5.8	両極打法による剥片
156	38	34	RA003 QS 壁溝検出面	剥片	完形	頁岩	5.5	3.3	0.9	15.8	接合資料　縦長剥片
157	38	34	RA003 QS 壁溝検出面	剥片	完形	頁岩	6.8	3.2	0.9	15.0	
158	38	34	RA003 QS 壁溝検出面	剥片	完形	頁岩	2.9	2.3	0.4	2.6	
159	38	34	RA003 QS 壁溝検出面	剥片	完形	頁岩	3.1	2.1	1.0	5.8	両極打法による剥片
160	38	34	RA003 P6 2層	剥片	完形	頁岩	6.8	4.5	1.6	56.3	円礫面残存
161	38	34	RA003 P6 1層	剥片	完形	頁岩	5.9	4.0	1.6	25.7	
162	38	34	RA003 QE 埋土下位	石鏃	完形	頁岩	2.4	1.1	0.5	1.1	未製品
163	38	34	RA003 QE 10層	尖頭状	完形	頁岩	4.3	2.9	1.2	11.1	涙粒形　調整大きい
164	39	34	RA003 QE 10層	石匙	完形	頁岩	3.2	8.2	1.1	14.5	横型棒形　つまみ部にアスファルト付着
165	38	34	RA003 Q5 10層	二次加工ある剥片	1/3以下	頁岩	(2.8)	(2.4)	(0.8)	4.7	両面調整　削器的
166	39	35	RA003 B-B'ベルト	台石	完形	閃緑岩	26.9	21.2	7.8	6400.0	
167	39	35	RA004 床面 S1	石鏃	略完形	赤色頁岩	1.7	1.3	0.3	0.5	凹基無茎
168	39	35	RA004 床面 石器集中	剥片	完形	頁岩	4.9	5.1	1.5	29.9	石核作業面剥片
169	40	35	RA004 床面 石器集中	剥片	完形	頁岩	3.8	5.7	1.5	26.7	石核作業面剥片
170	39	35	RA004 QS 床面直上	削器	完形	頁岩	4.0	2.6	0.7	9.2	嘴形石錐？
171	39	35	RA004 P1 底面	削器	1/2欠	頁岩	(6.0)	(3.3)	1.2	21.9	左側縁に刃部
172		37	RA004 炉石S1	台石	1/2欠	アプライト	(55.2)	(31.3)	10.4	19100.0	炉石転用時に打ち欠き
173	39	35	RA004 炉前庭部貼床内	磨製石斧？	1/3欠	頁岩	(3.9)	(4.0)	(0.8)	15.0	扁平
174	40	35	RA004 炉北脇床面直上	磨製石斧	1/2欠	頁岩	(6.8)	(4.3)	(2.0)	86.8	撥形
175	40	35	RA004 QE 1層上位	石鏃	完形	めのう	2.8	1.4	0.6	2.1	未製品
176	40	35	RA004 P3 埋土	削器	一部欠	頁岩	3.4	(5.7)	1.0	19.4	末端に刃部
177	40	35	RA004 QE 埋土下位	掻器	完形	頁岩	4.2	3.5	0.8	11.7	両側縁から末端に刃部
178	40	35	RA004 P9 埋土	使用痕ある剥片	1/2欠	頁岩	(4.3)	1.3	0.6	2.5	右側縁下半に微細剥離痕
179	40	35	RA004 P12 埋土	剥片	一部欠	頁岩	5.7	(9.2)	1.6	835.0	石核作業面剥片
180	40	36	RA004 QW 1層上位	石核	完形	頁岩	2.2	4.7	1.0	10.9	板形　作業面2面
181	40	36	RA004 QE 1層上位	石核	1/2欠	頁岩	(4.5)	(4.0)	1.8	25.1	作業面2面
182	41	36	RA004 QN 1層上位	打製石斧	完形	蛇紋岩	8.1	3.9	2.3	78.9	
183	41	36	RA004 ベルトA-A'NE 埋土	打製石斧	完形	チャート	10.1	5.5	2.5	211.5	被熱による付着物有
184	41	36	RA004 QE 埋土上位	凹＋磨石	1/2欠	安山岩	(7.5)	(9.5)	(4.7)	232.9	
185	41	36	RA004 P2埋土最上位	磨石	完形	安山岩	12.0	8.4	6.7	867.4	4面
186	41	36	RA004 炉1層	台石	1/2欠	玢岩	(25.5)	20.6	(7.7)	4500.0	
187	41	36	RA004 炉西端1層上位	台石	2/3以上欠	玢岩	(17.6)	(13.6)	6.1	2051.2	平面に磨面形成
188		36	RA004 QE 埋土下位	台石	完形	花崗閃緑岩	21.9	16.2	4.5	2950.1	
189		36	RA004 QW 1層上位	台石	1/2欠	花崗閃緑岩	(31.8)	(20.4)	9.9	10500.0	
190	42	37	RA005 炉S3	台石	1/2欠	花崗閃緑岩	(25.5)	(15.2)	(10.7)	4500.0	1面平坦化
191	42	37	RA005 1層下位(炉上位)	敲石	完形	蛇紋岩	9.8	6.4	3.6	389.2	
192		37	RA006 炉石6	台石	完形	アプライト	25.2	16.7	5.6	4100.0	
193		37	RA006 炉石10	台石	1/2欠	花崗閃緑岩	24.7	(26.2)	(10.8)	10400.0	
194		38	RA006 炉石11	台石	完形	花崗閃緑岩	17.1	34.4	8.8	6800.0	

No			出土地点	器種	残存状態	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特記事項
掲載	図	写図									
195		38	RA006 炉石14	台石	2/3欠	花崗閃緑岩	(13.6)	(14.4)	(3.1)	1120.0	
196		39	RA007 炉石S1	台石	完形	玢岩	35.4	37.0	9.1	17700.0	
197		39	RA007 炉石S3	台石	完形	蛇紋岩	39.6	55.0	11.4	31300.0	
198	42	38	RA007 P2埋土	石鏃	完形	頁岩	3.6	2.2	0.5	2.7	平基無茎
199	42	38	RA007 炉 埋土最上位	石錐	完形	頁岩	4.9	3.8	0.6	7.0	嘴形
200	42	38	RA007 炉 埋土最上位	削器	完形	珪質頁岩	3.8	3.2	0.9	12.9	両側縁に刃部
201		38	RA008 床面S3	台石	完形	アプライト	19.7	26.3	6.4	3600.0	
202		38	RA008 炉石2	台石	完形	玢岩	27.6	33.2	8.4	12000.0	被熱・変色
203		38	RA008 炉石3	台石	一部欠	アプライト	(20.5)	(25.1)	6.9	4200.0	
204		38	RA008 炉石4	台石	略完形	アプライト	18.7	28.5	6.0	5100.0	
205		40	RA008 炉石5	台石	完形	アプライト	21.6	28.4	6.3	6100.0	
206		40	RA008 QS 床面直上	台石	1/2欠	玢岩	(17.6)	(29.6)	9.4	6700.0	
207	42	40	RD013 1層	石錐	完形	頁岩	3.1	2.8	1.1	7.2	刃部調整は背面側のみ　摩耗し鈍化
208	42	40	RD013 1層	削器	一部欠	頁岩	3.6	3.6	0.8	9.8	左側縁と末端に刃部
209		40	RD033 埋土	剥片	完形	頁岩	3.7	2.8	1.5	16.2	分厚い
210		40	RD033 埋土	台石	1/2欠	安山岩	(12.2)	(9.8)	4.2	317.4	
211	42	40	RD037 1層	石篦	完形	頁岩	4.2	2.8	1.0	11.4	アスファルト微量付着
212	42	40	RF012 底面S1	両面礫器	完形		15.8	13.2	3.2	1145.5	
213	43	40	RH011 S3	磨石？	砕片	安山岩	(5.8)	(5.5)	(3.2)	65.3	
214		40	RH011 S1	台石	砕片	花崗閃緑岩	(12.7)	(11.2)	(6.7)	1309.6	
215		41	RH011 S3	台石	一部欠	アプライト	17.6	(22.1)	7.8	4800.0	
216		41	RH011 S4	台石	一部欠	花崗閃緑岩	(18.4)	(21.6)	3.9	1900.0	
217		41	RH011 S5	台石	完形	蛇紋岩	20.2	19.7	5.1	3500.0	
218		41	RH011 S8	台石	一部欠	閃緑岩	21.9	(41.3)	7.9	11500.0	
219		41	RH011 S9	台石	完形	アプライト	11.5	26.4	4.3	1930.0	
220		41	RH011 S11	配石構成礫	完形	花崗閃緑岩	9.4	15.3	3.9	980.0	
221		41	RH011 S12	配石構成礫	完形	頁岩	21.6	42.8	6.4	9500.0	
222		42	RH011 S15	配石構成礫	完形	蛇紋岩	24.7	30.5	7.9	11900.0	
223		41	RH011 S16	配石構成礫	完形	チャート	13.7	18.4	7.6	3150.0	
224	43	42	RH012	台石	1/2欠	安山岩	(22.6)	(13.8)	(7.2)	1420.0	2面磨れて凹む　砥石的用途
225		42	RH012 S2	台石	一部欠	アプライト	(21.8)	27.2	(7.1)	6500.0	被熱・変色
226		42	RH012 S5	台石	完形	アプライト	23.4	31.0	6.2	7100.0	
227	43	42	RG001 黒褐色砂層	磨製石斧	一部欠	閃緑岩	(10.2)	(4.3)	2.8	221.3	撥形
228	43	42	RG001 黒褐色砂層	磨石	完形	花崗閃緑岩	9.7	5.2	3.7	320.8	扁平　2面
229	43	43	ⅧE4u Ⅲ層	石鏃	完形	珪質頁岩	2.2	1.5	0.7	1.8	平基有茎
230	43	43	ⅧE下段 Ⅲ層相当黒褐色砂層	石鏃	完形	頁岩	2.9	3.0	1.1	8.9	平基無茎
231	43	43	ⅧE下段 黒褐色砂層	尖頭器	完形	めのう	4.0	2.8	1.2	11.6	涙粒形
232	43	43	ⅧE20w・21w Ⅳ層	石錐	完形	頁岩	3.3	2.8	0.7	6.3	刃部調整は背面側のみ
233	43	43	ⅧE25r Ⅳ層	石錐	完形	頁岩	3.4	1.9	0.8	3.4	刃部調整は背面側のみ
234	44	43	ⅧE2r Ⅲ層	石匙	完形	頁岩	3.1	3.5	0.9	9.3	未製品　横型三角形
235	44	43	ⅧE5s Ⅲ層	石匙	完形	頁岩	3.7	4.0	0.9	12.1	未製品　横型三角形
236	44	43	ⅧE上段 Ⅲ～Ⅳb層	削器	完形	頁岩	5.7	2.6	1.0	14.3	両側縁に刃部
237	44	43	ⅧE3r Ⅲ層	削器	完形	頁岩	5.9	6.6	1.9	59.4	左側縁に刃部
238	44	43	ⅧE下段 黒褐色砂層	削器	一部欠	頁岩	(6.6)	3.5	0.6	19.2	両側縁に刃部
239	44	43	ⅧE1g Ⅱ層	削器	完形	頁岩	5.3	2.7	1.0	8.4	両側縁と末端に刃部
240	44	43	ⅧE4s Ⅲ層	削掻器	一部欠	頁岩	3.4	(3.2)	1.0	6.0	末端に急斜度調整　左側縁に浅い調整
241	44	43	ⅧE20y Ⅲ層	石篦？	1/2欠	めのう	(1.7)	1.1	0.4	1.2	
242	44	43	ⅧE4w Ⅲ層	ピエス・エスキーユ	完形	頁岩	1.9	2.4	0.6	3.0	一対　右側縁に微細調整有
243	44	43	ⅧE24x Ⅳ層	石核	完形	めのう	3.2	3.7	2.3	20.2	サイコロ形　作業面4面
244	44	43	ⅧE24o Ⅱ層	石核	完形	頁岩	2.6	2.5	1.8	9.9	両極打法　サイコロ形　被熱・白濁
245	45	44	ⅧE25p Ⅲ層	打製石斧	完形	頁岩	7.3	7.1	1.7	95.3	円盤状
246	45	44	ⅧE1x Ⅲ層	磨製石斧	完形	蛇紋岩	5.2	2.6	1.1	24.8	小形　剥離調整痕残存
247	45	44	ⅧE3t Ⅲ層	磨製石斧	一部欠	閃緑岩	(11.2)	(5.3)	2.8	281.9	撥形
248	45	44	ⅧE23w Ⅰ層	磨製石斧	完形	蛇紋岩	15.7	6.1	2.3	306.4	扁平　剥離調整痕残存
249	45	44	ⅧE下段 黒褐色砂層	片面礫器	完形	蛇紋岩	9.4	9.4	4.4	487.5	両端に刃部
250	45	44	ⅧE3g Ⅲ層	両面礫器	完形	蛇紋岩	9.0	9.9	3.3	393.3	
251	45	44	ⅧE4v Ⅲ層	砥石	完形	砂岩	8.3	10.0	5.8	495.8	溝状の砥痕
252	46	44	ⅧE3g Ⅲ層	台石	完形	軽石	(22.8)	(18.4)	(8.5)	2170.0	1面磨れて凹む　砥石的用途

第６表　土製品観察表

No			出土地点・層位	器種	残存部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
掲載	図	写図								
126	35	32	RA004 床直・QN1層上位、RA007 炉前庭部東壁際 埋土	斧状土製品	一部欠	14.5	5.55	1.65	123.40	頂部に凹み。両面にLR縦・沈線。両面の基部と側面に刺突。側面に貫通孔あり。
127	35	32	RA001 1層上位	土器片円板	完形	3.9	3.6	1.1	16.90	打ち欠き、胴:LR(太さの異なる1段の縄Rを撚り合わせている)、内面ナデ
128	35	32	RA004 QE 1層上位	土器片円板	1/2欠	(2.4)	3.9	1.0	9.90	スレ痕(全周)、胴:縄文磨耗
129	35	32	Ⅷ E(下段部分)黒褐色砂層	土器片円板	完形	3.8	3.6	0.8	13.60	スレ痕(部分)、胴:沈線、内面ナデ
130	35	32	Ⅷ E(下段部分)黒褐色砂層	土器片円板	完形	3.2	3.5	0.9	11.60	打ち欠き、胴:L？、内面ナデ？
131	35	32	Ⅷ E(下段部分)黒褐色砂層	土偶？	脚？	(2.8)	(1.6)	(1.5)	6.20	つくり:中実、残存部位脚？？

第７表　石製品観察表

No			出土地点	器種	残存状態	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特記事項
掲載	図	写図									
253	46	45	RA003 S1	石棒	1/2欠	安山岩	(34.1)	(13.2)	(11.3)	5600.0	溝状の砥痕有
254	46	45	RA003 P11	石棒	1/2欠	アプライト	(25.4)	(8.2)	(8.8)	3070.0	
255	47	44	RA003 炉付近埋土上位	石鉢	口縁部	礫岩	(7.9)	(6.7)	1.9	103.6	口唇外反　口縁に溝2条
256		45	RA004 床面S2	棒状礫	完形	花崗閃緑岩	27.8	12.0	11.1	6500.0	石棒の可能性有
257	47	44	RA004 炉1層	穿孔礫	完形	軽石	6.0	3.7	2.1	8.0	縦位に穿孔
258	47	44	RA004 炉前庭部北東隅埋土下位	石棒	砕片	頁岩	(3.2)	(3.0)	(2.2)	18.6	被熱・黒色化
259		45	RA006 炉石1	棒状礫	完形	アプライト	30.8	8.8	7.0	240.0	石棒の可能性有
260	47	45	RF012 底面S1	石棒	略完形	花崗閃緑岩	49.0	11.2	8.9	8000.0	剥離後磨り調整　被熱・変色
261		45	RH011 S7	棒状礫	一部欠	閃緑岩	(24.4)	9.8	6.7	2792.0	石棒の可能性有

第８表　須恵器観察表

No			出土地点	器種	部位	調整		重量	特記事項
掲載	図	写図				外面	内面	(g)	
262	47	46	Ⅷ E　撹乱	壺類	口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	15.3	

第９表　陶器観察表

No			出土地点	器種	部位	調整		重量	特記事項
掲載	図	写図				外面	内面	(g)	
263	47	46	Ⅷ E下段 黒褐色砂層	灰釉折縁皿	口縁		ソギ	3.0	美濃産と推定

第10表　銭貨観察表

No			出土地点	種別	残存状態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	特記事項
掲載	図	写図								
264	47	46	RG001 最下層	至道元寶	完形(折損)	24.40	24.72	1.03	1.91	

Ⅵ 総　　括

今回の調査で検出された遺構・遺物についてまとめ、それぞれに対し若干の考察を行う。

1 遺　　構

今回の調査では、調査区上段部分から縄文時代の竪穴住居８棟、土坑６基、陥し穴状遺構19基、焼土遺構４基、配石遺構２基、集石遺構１基、埋設土器遺構１基、柱穴状土坑７基、調査区下段部分から近世以降の溝１条を検出した。

ここでは、縄文時代の竪穴住居、陥し穴状遺構の特徴についてまとめる。

（1）竪　穴　住　居

時期

各住居の帰属時期をまとめてみると、中期後葉（大木９式期）３棟（ＲＡ001・002・006）、中期末葉（大木10式期）３棟（ＲＡ004・007・008）、中期後葉～末葉２棟（ＲＡ003・005）となる。

平面形・規模

今回の調査で検出した８棟のうち、平面形や規模がわかるものは、ＲＡ004・006・007竪穴住居の３棟のみである。ＲＡ004・007竪穴住居は長軸6.92mを測る大形の住居、ＲＡ006竪穴住居は長軸3.18mを測る小形の住居である。平面形は楕円形を呈するものが多い。全体としては、おおむね直径３～７mほどの円形もしくは楕円形を呈するものが多いと考えられる。

炉

８棟のうち６棟が複式炉を伴い、複式炉には次の３つの形態が見られる。

① 石囲部+前庭部（ＲＡ002）
② 石囲部+石囲部+前庭部（ＲＡ005・006・007・008）
③ 掘込部+石囲部+前庭部（ＲＡ004）

特徴として埋設土器を伴わないことが挙げられよう。石囲部を採用する頻度が強いことが窺える。

竪穴住居内における複式炉の位置は、５棟（ＲＡ002・004・005・006・007）が南～南西壁に位置し、前庭部が斜面下方側に向いている。しかし、ＲＡ008竪穴住居だけが北東壁に位置し、前庭部は斜面上方側に向く。

重複関係

ＲＡ004・007竪穴住居は、炉の作り替えに伴い、少なくともＲＡ004竪穴住居旧炉段階→ＲＡ004竪穴住居新炉段階→ＲＡ007竪穴住居の３期にわたる変遷があることを看取できた。また、ＲＡ003竪穴住居は、主柱穴と考えられるピットに重複して焼土が広がっていることから、竪穴住居の建て替えが行われた可能性が考えられる。これらの住居は、今回の調査で検出した住居のなかでは大形の部類である。これに対し、それ以外の３～４mほどの規模をもつと考えられる住居では、このような建て替え行為はみられない。

剥片集中遺構（デポ）

ＲＡ003竪穴住居の南側の壁溝の埋土から、北上山地産の頁岩を石材とする剥片と石鏃がまとまっ

て出土した。岩手県における縄文時代の剥片集中遺構については阿部勝則氏により詳しくまとめられており（阿部2003）、竪穴住居からの出土事例は縄文時代中期末葉及びその前後の時期に多いことが知られている。本事象については後述する。

（2）陥し穴状遺構

平面形は溝形を呈し、底部施設は見られない。検出した19基のうち17基が、長軸方向を北東－南西に向けて列状に構築されており、長軸方向はおおむね等高線に直交する。遺跡南側にある簗川とも直交する方向である。

構築時期について、出土遺物からの推定は不可能であるが（出土遺物があったのはＲＤ033陥し穴状遺構のみ）、ＲＤ029～031・034～036陥し穴状遺構が竪穴住居に切られることから、縄文時代中期後葉以前の遺構群であることが考えられる。

2　遺　　物

今回の調査では、縄文土器、土製品、石器、石製品、須恵器、陶器、銭貨、植物遺存体、動物遺存体が出土した。

ここでは、縄文土器、土製品、石器について若干の検討を行う。

（1）縄　文　土　器

縄文土器は早期中葉から晩期中葉までのものが断続的に出土しているが、主体を占めるのは、中期後葉～末葉のものである。ここでは、Ⅲ・Ⅳ群土器とした中・後期の縄文土器の特徴についてまとめる。

中期後葉

Ⅲ群１類が相当する。小破片が多く、全体の器形が窺える資料は少ないが、文様の特徴から大木９式に比定されると考えられる。器形や文様の特徴が窺える資料として、次のものが挙げられる。１は頸部がややくびれる壺に近い器形の深鉢で、胴部に隆沈線による小渦巻文や区画文が描かれる。３・６・98は逆Ｕ字状文や区画文を主文様とする。隆沈線による逆Ｕ字状文が描かれ、磨消により無文部が表出されているもの（３）、沈線による逆Ｕ字状文が描かれるもの（６・98）がある。さらに、77・99は沈線による逆Ｕ字状文が描かれた後、文様区画内に地文が充填施文されるようになる。これらの土器は、盛岡市柿ノ木平遺跡出土のⅤ～Ⅶ群土器（神原2008）に相当すると考えられる。地文は、ＬＲ、ＲＬＲが多用される。

中期末葉

Ⅲ群２類が相当する。27や79にみられるように、沈線による曲線的なモチーフが描かれ、文様区画内に縄文が充填施文されることから、大木10式に比定されると考えられる。小破片が多く、器形を窺える資料は非常に少ないが、27は平縁を呈する深鉢で、胴部下半に膨らみをもち、口縁がやや外反しながら開く器形と考えられる。地文はＲＬとＬＲが多用される。これらの土器は、花巻市大迫町観音堂遺跡出土の第Ⅲ群土器（中村1986）に類似すると考えられる。

Ⅲ群３類土器

中期後葉～末葉に伴うと考えられるもののうち、地文のみのもの、もしくは無文のものを一括してⅢ群３類とした。掲載した土器でⅢ群とした99点のうち、Ⅲ群３類に該当するものは50点あり、約５

割を占める。なかには、より細かい縄文原体を用いて施文しているものがあり、それらは後期に属する可能性も考えられるが、今回の分類ではすべて一括した。Ⅲ群土器で用いられている縄文原体には、Ｌ、ＲＬ、ＬＲ、ＲＬＲ、単軸絡条体第1類があるが、ＬＲ、ＲＬＲが圧倒的に多く用いられている。縄文以外の地文では、櫛目文を用いるものが１点ある。Ⅲ群１・２類と３類の共伴例についてみてみると、ＲＡ001竪穴住居の床面からは大木９式に比定される２とともにＲＬＲが施文される１が出土している。また、ＲＡ006竪穴住居の床面からは、大木９式に比定される77とともに78が出土している。ほかに、ＲＡ005竪穴住居の炉の底面からは73が、床面からは75と74が出土している。

後期初頭

Ⅳ群が相当し、ＲＡ004竪穴住居の１層上位からの出土が多い。器形や文様の特徴を窺える資料として、37や64が挙げられる。37は、口縁に山形状の突起が付き、波状口縁の頂下からは連鎖状隆線が垂下する。地文には沈線による網目状の文様が施文された後、沈線による幾何学的なモチーフが描かれる。64はＲＬを縦方向に施文した後、沈線による渦巻や幾何学的なモチーフが描かれる。これらの土器は、盛岡市川目Ａ遺跡（岩文埋2008）や柿ノ木平遺跡（前掲）、滝沢村卯遠坂遺跡（石川1979）出土土器などに類似する。

（２）土　製　品

今回の調査で出土した土製品では、ＲＡ004・007竪穴住居から出土した斧状土製品（126）が特筆されよう。筆者が管見した限りでは、盛岡市内の斧状土製品の出土事例として、８遺跡・63点（川目Ａ遺跡６次調査・２点、小山遺跡・１点、柿ノ木平遺跡・28点、上米内遺跡・14点、向館遺跡・１点、大館町遺跡・10点、繋Ⅴ遺跡・５点、繋Ⅲ遺跡・２点）を確認している。いずれも縄文時代中期中葉～末葉を主体とする遺跡からの出土である。竪穴住居や土坑、掘立柱建物を構成する柱穴の埋土、遺物包含層などから、ほとんどが破損した状態で出土している。完形での出土は柿ノ木平遺跡出土の５点のみである。このほかに、岩手町秋浦Ⅰ遺跡では、竪穴住居の床上から出土した２点が接合後に完形となった例が見られる。また、今回出土した斧状土製品は、頂部に凹みがあり二股状に分かれるような形態をしているが、これに類似するものは柿ノ木平遺跡などで出土している。

（３）石　　器

製作時期の帰属が可能な住居内床面等出土の剝片石器に限ってその石材種と形態的・技術的特徴をまとめる。

石器石材

すべて北上山地産の頁岩が用いられている。

石鏃の形態的特徴

ＲＡ003および004竪穴住居で床面から１点ずつ（137・167）、ＲＡ003竪穴住居内のデポから１点（139）出土している。いずれも凹基無茎である。長さ：幅比は1.6～1.2：１で、基部抉りの深さは長さの1/5以下と浅い。３点だけではあるが、その形態は近似しており、縄文時代中期後葉～末葉の石鏃の特徴を示す資料といえる。

接合資料と石核作業面剝片から看取される剝離方法

ＲＡ003竪穴住居内のデポから接合資料が（140～145）、ＲＡ004竪穴住居の床面石器集中から石核作業面剝片２点（168・169）が出土している。これらの形態は、例えば147・171の削器や177の掻器と大きさや厚さの面で大差なく、いずれもトゥールの素材剝片とみてよいだろう。石核は出土してい

ないものの、これらの存在はそれぞれの場所で素材剥片剥離作業が行われていた可能性を強く示唆するものである。逆に、石核の不在からは、素材剥片剥離後の外部への持ち出しが推測される。

これら資料から看取される剥片剥離方法の共通性として、次の２点が挙げられる。一つは、すべて通常剥離であること。もう一つは、169が打面２箇所（約90°転移）である以外、すべて打面が単一であることである。当該期における北上山地産の頁岩に対する剥離方法の一傾向として、指摘しておきたい。

デポの性格

ＲＡ003竪穴住居南壁際で確認された。炉の東側にあたる地点である。レベル的には床面ではなく埋土中にあたるため、ＲＡ003竪穴住居機能時のものか、廃棄以後のものか断言できないが、縄文時代中期後葉～末葉と言って差し支えない。また、本遺構の性格は、前述のように石器トゥール素材剥片を複数含むことからその貯蔵が目的であったと見てよい。当該期に同様の現象が多いことは以前から指摘されているところである（阿部2003）。その性格については様々な見解があるが、本遺構については石器トゥール素材剥片貯蔵施設といえる。

３　選地について―今後の課題も含めて―

これまでの第１～３次調査成果から、遺跡全体における縄文時代中～晩期の時期ごとの選地の違いについて、簡単にまとめてみたい。

推定される戸仲遺跡の範囲は、戸中山から流れる２つの沢と簗川によって形成された小規模な低位段丘上の、簗川右岸からその北東側の丘陵麓までの東西約500m、南北約300mの範囲と考えられる。

今回調査を行った第３次調査区は遺跡の南東側にあたり、戸中山の南東から流れくる沢と簗川の合流地点付近に位置する。南西向きの緩斜面である調査区上段部分からは縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居が複数検出され、この付近には当該期に集落が存在していたことが明らかとなった。同付近の標高は189.8～190.5m前後である。なお、第３次調査区の北東側、国道106号北側の道路のそばには小さな祠が立っているが、『盛岡市史』によると、かつて、岩手大学の草間俊一教授が、この祠付近の畑地で大木９式に比定される深鉢や石皿を表採したとされている（草間1958）。よって、中期後葉～末葉の遺構は、第３次調査区のさらに北東側に広がっていると考えられる。

第１・２次調査区は、遺跡の北西側にあたる。戸中山の南西から流れる小さな沢が、ちょうど第１次調査Ａ区と第２次調査区の間を通り、簗川に合流する。この沢を挟んで、第１次調査Ａ区のある西側（簗川下流域）と第２次調査区のある東側（簗川上流域）では地形が異なる。

第１次調査Ｂ区・第２次調査区は、第1次調査Ａ区側より一段高い段丘となっており、標高189.2～189.7m前後をはかる。この段丘面からは、後期後葉～晩期中葉を主体とした遺物が出土するとともに、配石遺構、土坑、柱穴状土坑などが検出されている。また、第１次調査Ｂ区の東側では、大木９式に比定される土器が少量出土しているとともに、この時期と考えられる焼土遺構が検出されていることから、この時期の集落の縁辺部であった可能性が考えられる。

第１次調査Ａ区側（簗川下流域）は一段低い段丘となっており、標高は188.6m前後である。近年まで洪水の影響を大きく受けた箇所で、昭和40年代以降に実施された国道の改良工事に伴って盛土造成が行われ、現在のような地形になったという。第１次調査Ａ区では、これを裏付けるように、厚く盛られた土砂や、縄文時代後期以前の洪水堆積層と考えられる、にぶい黄褐色火山灰層（十和田中掫テフラ）が確認されている。この一段低い段丘の切れ目にあたるＡ区東端では、廃棄されたと考えら

れる多量の晩期中葉の遺物が出土している。

以上の調査結果からは、以下の事が指摘できる。

①　標高値からみた場合、中期から晩期へ時代が下るにつれて、低位部への進出があったことが窺える。ただし、段丘レベルでの大きな動きではなく、あくまで微地形レベルでの事象である。

②　俯瞰的な位置関係でみた場合、次の２点が指摘できる。

Ａ：中期後～末葉集落範囲の縁辺は簗川に極めて近接しており、それは第１次調査Ｂ区・第２次調査区の後期後葉～晩期中葉遺構群よりも際立っている。

Ｂ：中期後～末葉遺構群と後期後葉～晩期中葉遺構群との重複範囲は極めて少なく、その選地に差異が看取される。これには、戸仲山南西から流下する沢が関係しているものと考えられる。

以上のように、本遺跡では時期による選地の特徴が複数の視点で確認された。これが何を示すものなのか、少し考えてみたい。

まず、①に関して、段丘レベルでの大きな変遷についてはごく一般的に指摘されるところであるが、微地形レベルでの話はその形成過程で受ける様々な要因の影響比率が極めて大きく、より慎重に考えなくてはならない。同列には扱えない問題であり、よって、両者が同傾向を示すとは必ずしもいえない。

本遺跡のように水平方向への開析が弱く、段丘面の発達に乏しい中・小河川流域に立地する遺跡のばあい、基本的に選地変遷を追うことは難しい。すなわち、このような地形に立地する遺跡にあっては、選地の選択肢の乏しさから各時代の遺構が重複する傾向が多いためである。しかしながら、②に指摘したとおり、本遺跡においては、遺跡範囲の一部ではあるものの、時期ごとに明瞭な選地の違いが確認された。①の事象だけを取り上げれば、偶然の結果という可能性も否定できないが、②からそれは払拭されよう。①の事象は、②の事象と組み合わせたとき初めて具体的・現実的な可能性を帯びるのである。つまり、本遺跡に関しては、明らかに中期と後～晩期で選地場所が異なっており、そこには標高差が関係していると見て取ることが可能である。単純に②－Ａをみれば、古→新の順に河川際へ近づく＝標高値高位→低位へ進出するという「実理」から外れているようであるが、事はそれほど単純ではない。中期後～末葉集落範囲は確かに河川間際であるが、標高値は逆に高いのである。発掘調査前、同区域が河川間際にあることから、ここに当該期の集落が形成されていようとは、調査担当者も含め、誰も思っていなかったようである。結果的に、この事象も選地における標高値の重要性を示す結果と捉えられる。

なお、このような微地形をめぐる事象は、本遺跡のような立地条件であるからこそ検討可能となるのではないか、とも考えられる。

以上のように、本遺跡のような段丘発達の弱い（細かい）中・小河川流域に立地する遺跡における選地行為に関しては、様々な微細要因が複雑に絡み合い、各時期における選地行為がなされたものと推定される訳であるが、その1つに標高値が関係しているという基本的な要因をこのような立地環境においても確認することができた。この手の課題は、対象が「ミクロ」であるからこそ、基本的かつ具体的な要因を抽出できるのではないかと考える。今後の野外調査時における視点として、微地形の観察と検討がさらに重要となろう。

引用・参考文献

相原淳一　1999「仙台湾周辺（早期～中期）」『縄文時代』第10号第1分冊　縄文時代文化研究会

相原淳一　2005「宮城県における複式炉と集落の様相」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料』
日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会

阿部勝則　2003「岩手県における縄文時代中期の剥片集中遺構について」『紀要ＸＸⅡ』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

新井達哉　2005「福島県における複式炉と集落の様相―中通り地方の集落について―」
『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料』　日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会

石川長喜ほか　1979「卯遠坂遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅰ―』　岩手県文化財調査報告書第31集
岩手県教育委員会

今村啓爾　1973「霧ヶ丘遺跡の土壙群に関する考察」『霧ヶ丘』　霧ヶ丘遺跡調査団

今村啓爾　2004「箱根南西山麓先土器時代陥穴の使用方法」『考古学研究』第51巻第１号　考古学研究会

岩手県埋蔵文化財センター　1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（つなぎⅢ，つなぎⅥ，上野，南の又，堂ヶ沢Ⅰ・
Ⅱ遺跡）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集

岩手県埋蔵文化財センター　1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（昭和48年度・49年度）』
岩手県埋文センター文化財調査報告書第30集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1994『向館遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第206集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1995『上米内遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第220集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『上野場３遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第477集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2007『里古屋遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第499集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2007『平成18年度発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008『戸仲遺跡第１次・宇曽沢遺跡第２次発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第519集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008『袈帯遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第522集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008『平成19年度発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2009『川目Ａ遺跡第６次発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第525集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2009『平成20年度発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集

大迫町教育委員会　1986『観音堂遺跡―第１次～６次発掘調査報告書―』　大迫町埋蔵文化財報告第11集

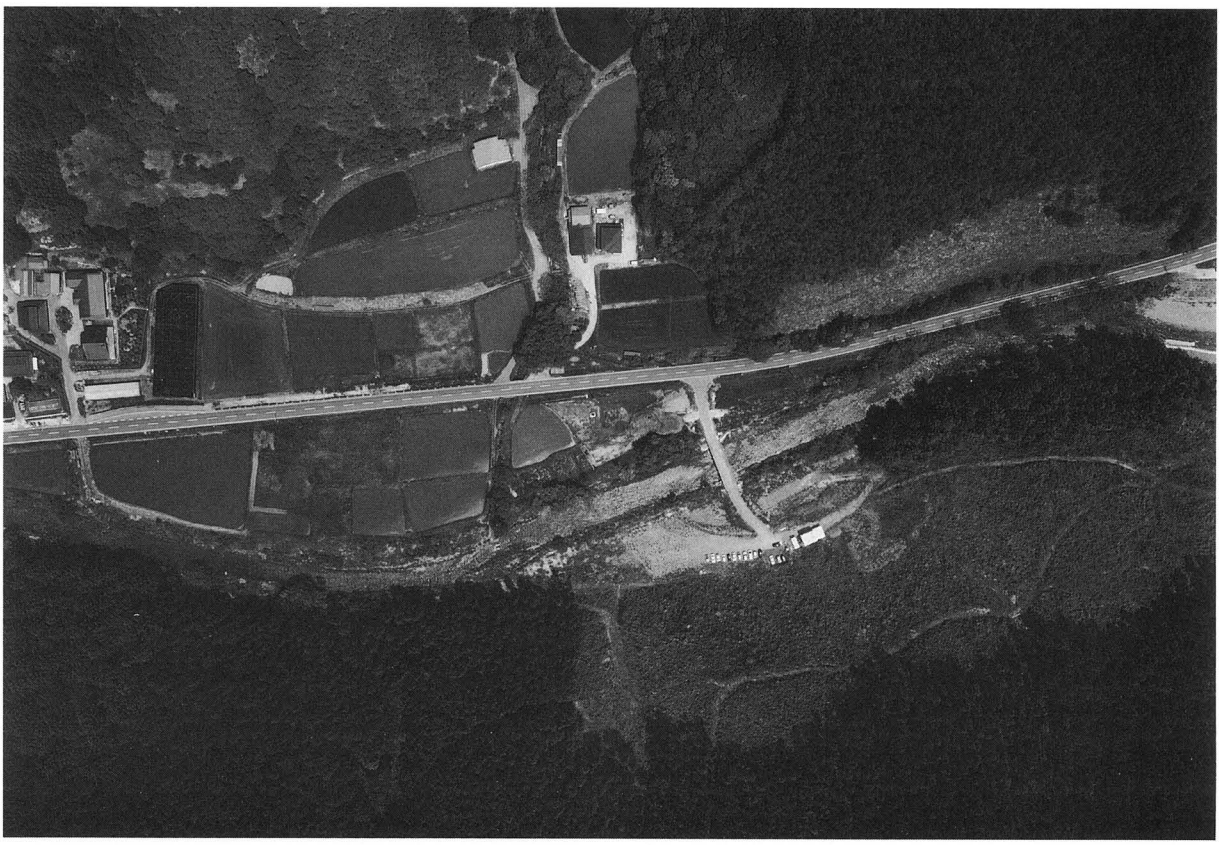
小保内裕之　2008「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木10式併行土器）」『総覧　縄文土器』　(株) アム・プロモーション

菅野智則　2006「北上川流域における中期後半集落の研究―炉構造における住居跡形態の差異―」
『宮城考古学』第８号　宮城考古学会
菅野智則　2007a「北上川流域における縄文集落の構造―複式炉と構成単位―」『日中交流の考古学』同成社
菅野智則　2007b「東北地方縄文時代中期後半土器の研究―器形変化に属する属性分析―」『考古学談叢』六一書房
菅野智則　2007c「北上川流域における縄文時代中期後半集落の地域性」『博古研究』第34号　博古研究会
菅野智則　2008「北上川流域の縄文社会―立地と分布からみた集落の変化―」『東北縄文社会の歴史動態的研究―河川流域における縄文集落の考古学的研究―』東北芸術工科大学東北文化研究センター
北上市教育委員会　1988・1989『南部工業団地内遺跡Ⅰ』北上市埋蔵文化財調査報告書第9集
興野義一　1968「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』№16
興野義一　1996「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画龍点睛』山内先生没後25年記念論集刊行会
草間俊一　1954「岩手県川目遺跡調査概報」『岩手大学学芸学部研究年報』第７巻　岩手大学学芸学部学会
草間俊一　1955「岩手県川目遺跡調査報告（第二報）」『岩手大学学芸学部研究年報』第９巻　岩手大学学芸学部学会
草間俊一　1978「先史期」『盛岡市史』復刻版第一巻　盛岡市
熊谷常正　1986「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』第４号　岩手県立博物館
駒木野智寛　2005「複式炉の地域的諸様相　岩手」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料』
日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
杉山武　1989「白座遺跡」『白座遺跡・野場遺跡(３)発掘調査報告書』青森県階上町教育委員会
田村壮一　1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』Ⅶ　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
溜浩二郎　2008「戸仲遺跡　第２次調査」『平成19年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第524集
茅野嘉雄　2008「円筒下層式土器」『総覧　縄文土器』(株)アム・プロモーション
千葉孝雄　1995『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第227集
津嶋知弘　1996「盛岡市川目Ｃ遺跡」『第16回岩手考古学会研究大会発表資料』岩手考古学会
谷口康浩ほか　2007『下野原遺跡　奥多摩町海沢チャート原産地における縄文時代集落の発掘調査』下野原遺跡調査会
中村良幸　1982「「複式炉」について―岩手県を中心として―」『考古風土記』第７号
丹羽茂　1981「大木式土器」『縄文文化の研究』第４巻　雄山閣出版
丹羽茂　1989「中期大木土器様式」『縄文土器大観１』小学館
早瀬亮介・菅野智則・須藤隆　2006「東北大学文学研究科　考古学陳列館所蔵大木囲貝塚出土基準資料―山内清男編年基準資料―」『東北大学総合学術博物館紀要』第６号　東北大学総合博物館
早瀬亮介　2008「前期大木式土器」『総覧　縄文土器』(株)アム・プロモーション
平野　祐　2007「東北地方南部における縄文時代陥し穴の形態と特色」『紀要』ＸＸⅥ　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
星雅之・茅野嘉雄　2006「十和田中掫テフラからみた円筒下層ａ式土器成立期の土器様相」
『三内丸山遺跡の生態系史』植生史研究特別第２号　日本植生史学会
宮城県教育委員会　1978『上深沢遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第52集
宮城県教育委員会　1987『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ　小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集
宮城県教育委員会　1988「大梁川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第126集
盛岡市教育委員会　1983『大館遺跡群　大新町遺跡　―昭和57年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　1983『柿ノ木平遺跡―昭和59年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　1984『繋遺跡―昭和58年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　1989『小山遺跡群―昭和63年度発掘調査報告書―』
盛岡市教育委員会　1995『小屋塚遺跡―第１～27次発掘調査報告書―』

盛岡市教育委員会　1995　『大葛遺跡　第１次発掘調査報告書』
盛岡市教育委員会　1997　『大館遺跡群　大館町遺跡―平成６・７年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　2000　『盛岡市内遺跡群―平成11年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　2003　『盛岡市内遺跡群―平成14年度発掘調査概報―』
盛岡市教育委員会　2008　『薬師社脇遺跡』
盛岡市教育委員会　2008　『柿ノ木平遺跡・堰根遺跡』第１～５分冊
盛岡市教育委員会　2009　『川目Ａ遺跡』
盛岡市教育委員会　2009　『盛岡市遺跡地図（2008年版）』
森　幸彦　2008　「大木９・10式土器」『総覧　縄文土器』 (株) アム・プロモーション
八木勝枝　2002　「５　Ｄ土器片円板」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）　奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ』
朝日村文化財報告書第22集　新潟県朝日村教育委員会
八木勝枝ほか　2006　『大橋遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第481集
山内清男　1937　「縄紋土器型式の大別と細別」『先史考古学』第１巻第１号
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会

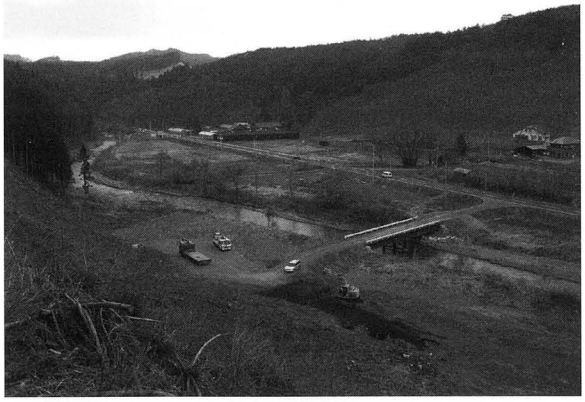
写　真　図　版

調査区遠景と周辺の地形（東から）

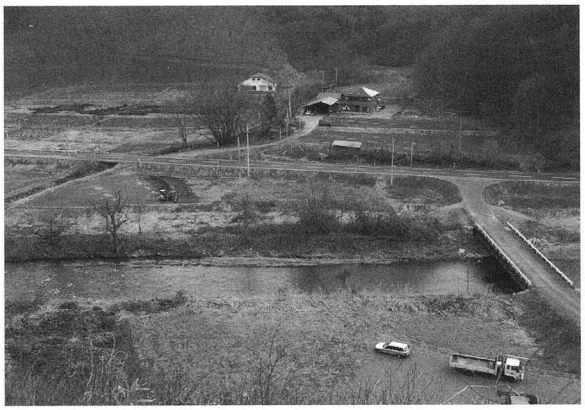


調査区遠景（南西から）

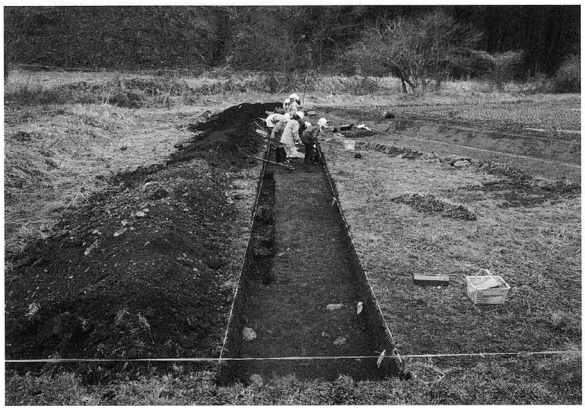
写真図版１　航空写真



調査前風景（南から）



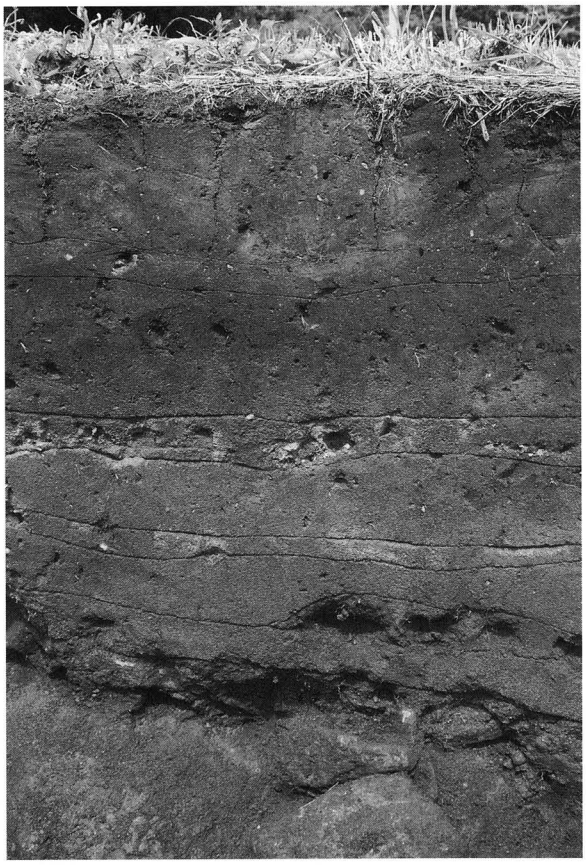
調査前風景（南西から）



試掘風景（北東から）

試掘風景（南から）

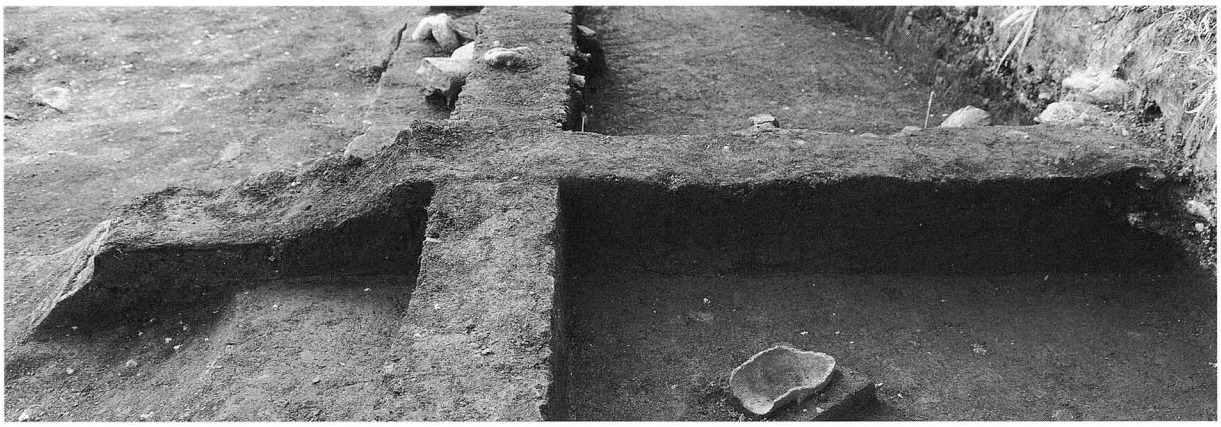
基本層序上段（南東から）



基本層序下段（南東から）

写真図版２　調査前風景、試掘風景、基本層序

平面（西から）



断面（南東から）

炉断面（南西から）

２層出土遺物（3）（南から）

写真図版３　RA001竪穴住居

平面（南西から）

断面（北東から）

炉平面（南西から）

炉断面（北東から）

写真図版４　RA002竪穴住居

平面（南東から）

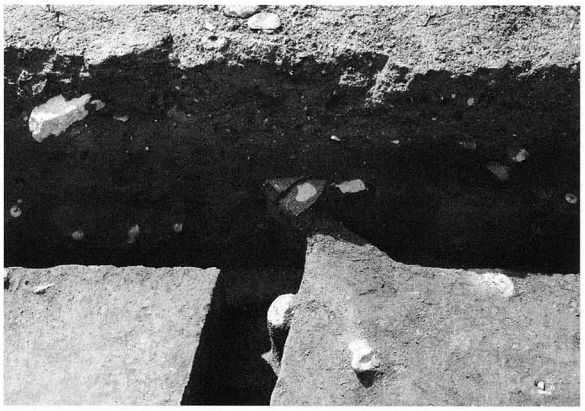
断面（南西から）

断面（東から）

断面（北東から）

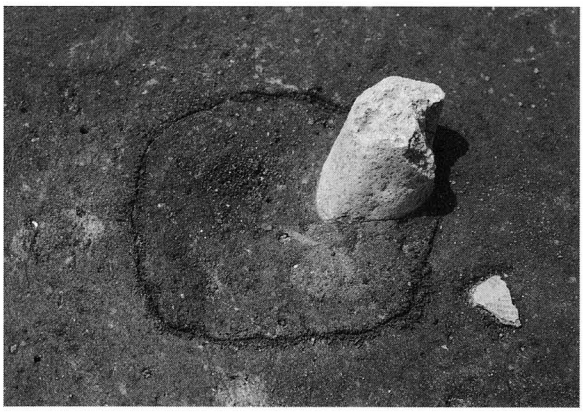
写真図版５　RA003竪穴住居（1）

遺物出土状況（南から）



焼土断面（南東から）

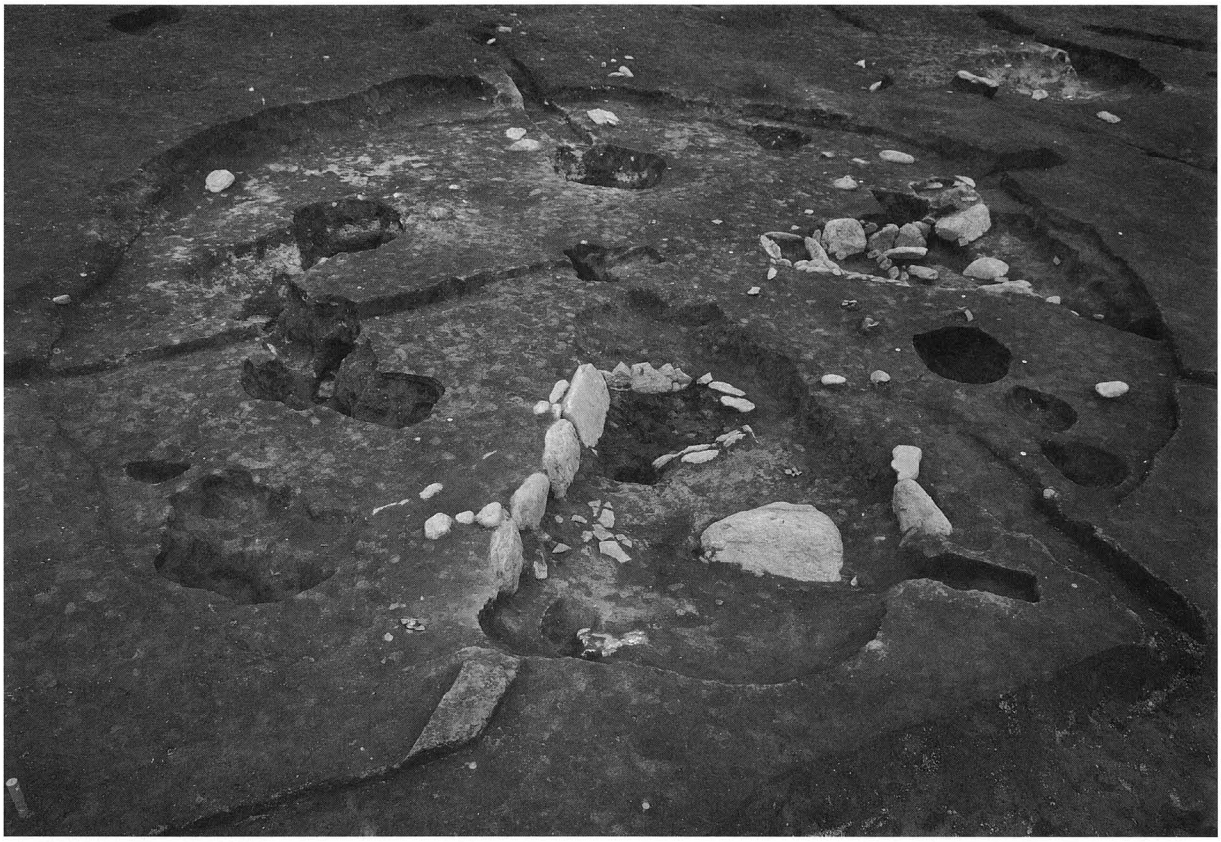
焼土断面（南西から）



石棒254検出状況（東から）

剥片集中遺構（北から）

写真図版６　RA003竪穴住居（2）



平面（西から）

断面（南東から）

遺物出土状況埋土上半（南東から）

QS埋土上半（南東から）

写真図版７　RA004竪穴住居（1）

炉平面（西から）

炉掘り方平面（西から）

炉断面a-a'（西から）

炉断面c-c'（西から）

炉（古）平面（西から）

炉（古）掘り方平面（西から）

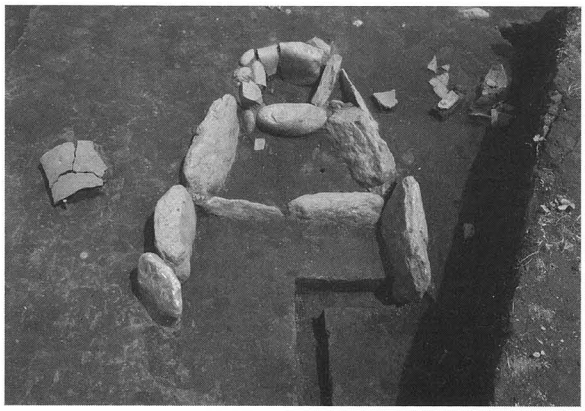
P7断面（南西から）

P9断面（南西から）

写真図版８　RA004竪穴住居（2）

平面（南西から）

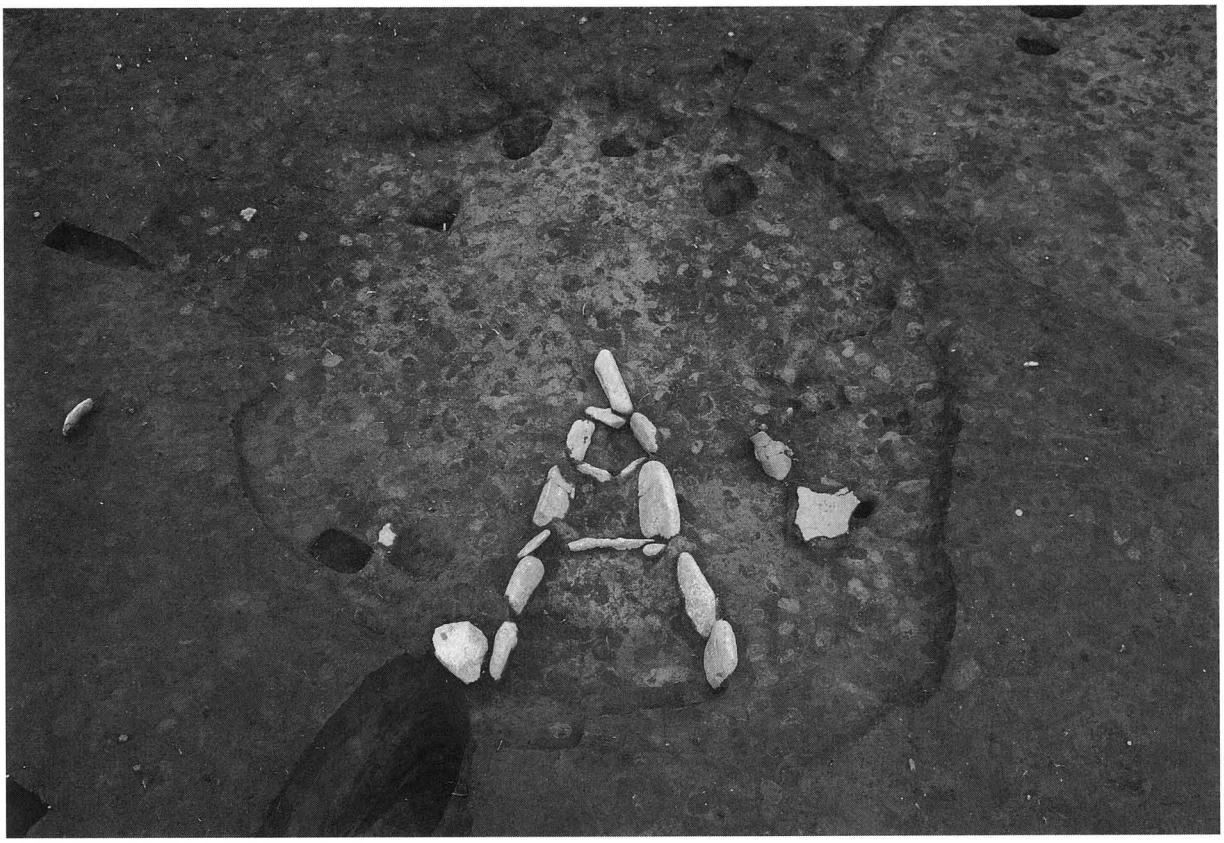
断面（南から）



炉平面（南西から）

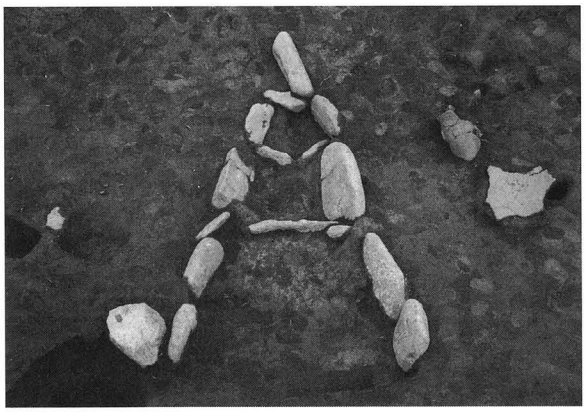
炉b-b' 断面（南西から）

写真図版９　RA005竪穴住居

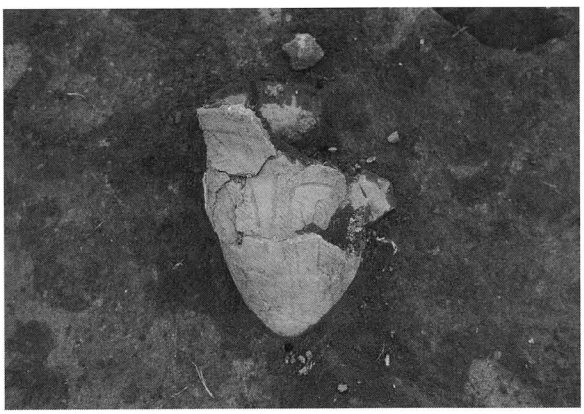


平面（南西から）

断面（南東から）



炉平面（南西から）

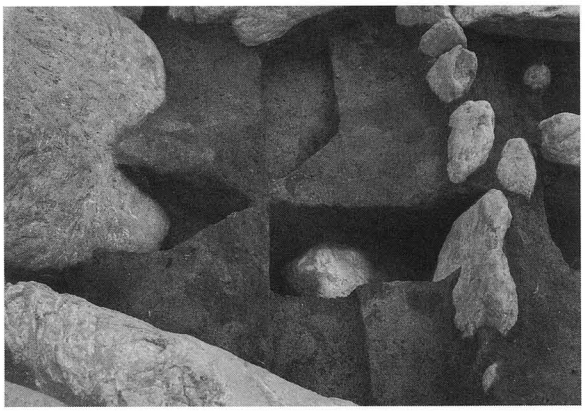


床面出土遺物77（南西から）

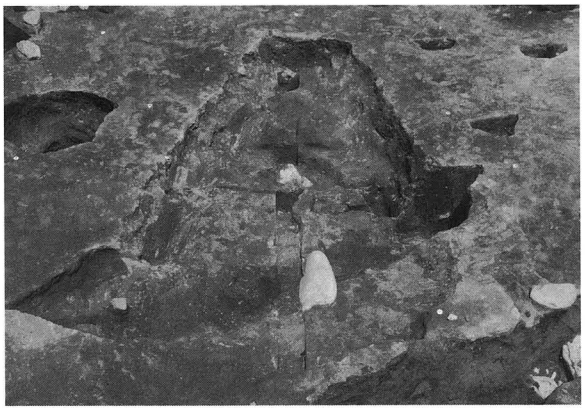
写真図版10　RA006竪穴住居

平面（南から）

炉平面（南から）



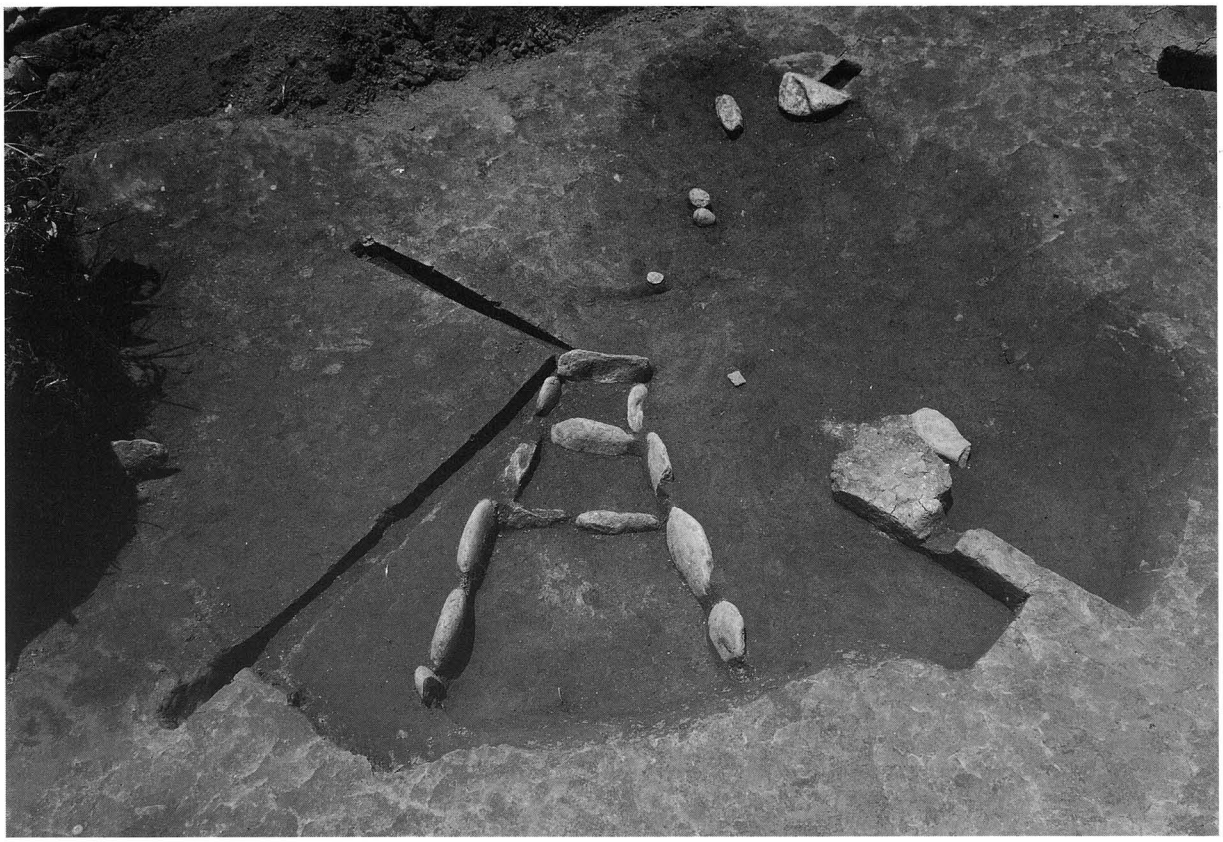
炉第２石組部断面（西から）



炉掘り方断面（南から）

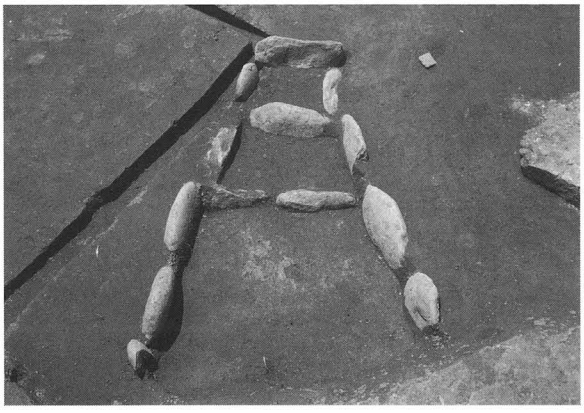
P7断面（南西から）

写真図版11　RA007竪穴住居



平面（東から）

断面（東から）

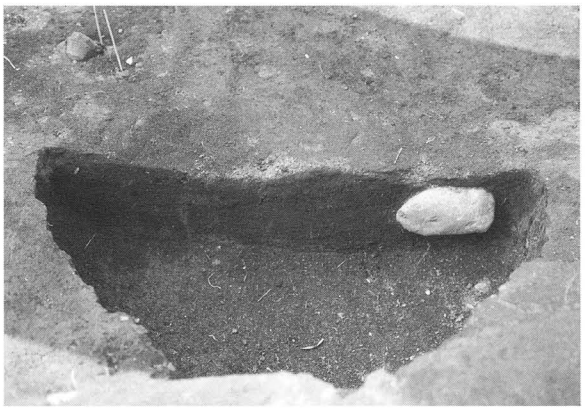


炉平面（東から）

炉第１石組部断面（南から）

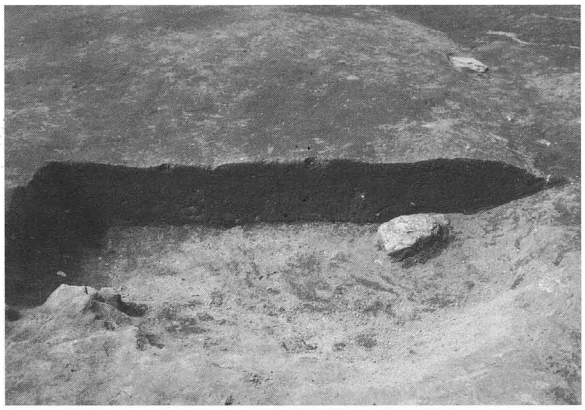
写真図版12　RA008竪穴住居

RD013平面（南西から）



RD013断面（南東から）

RD014平面（北東から）



RD014断面（北東から）

RD015平面（南東から）

RD015断面（南から）

RD016平面（南西から）

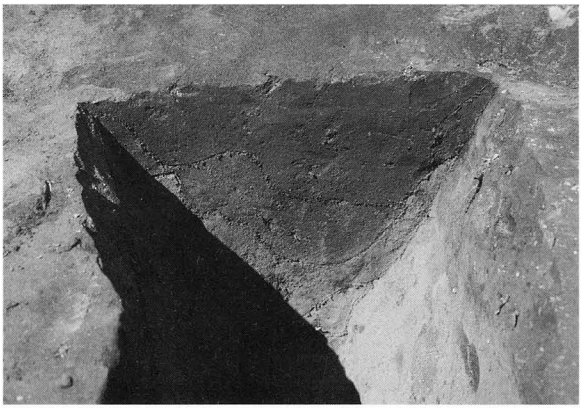
RD016断面（南西から）

写真図版13　RD013～016土坑

RD017・025平面（南東から）

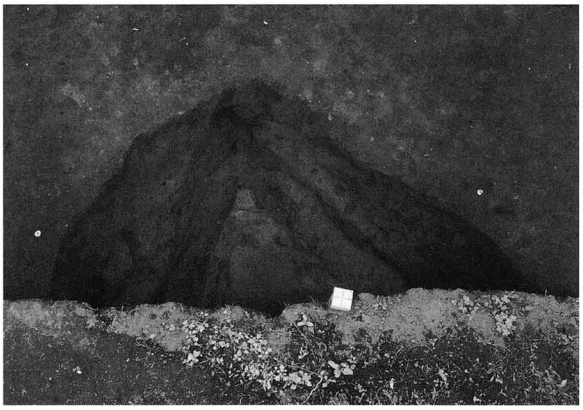
RD017・025断面（北東から）

RD018・019平面（南から）



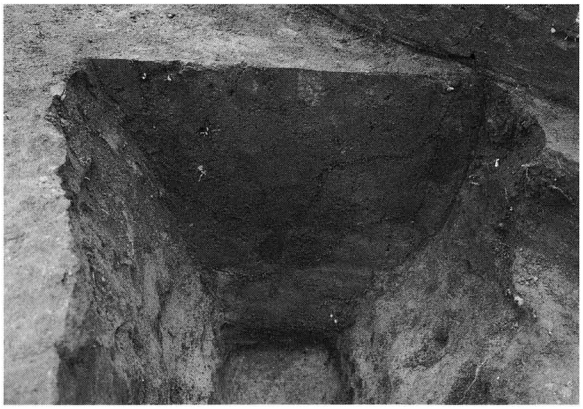
RD018断面（南から）

RD019断面（南東から）



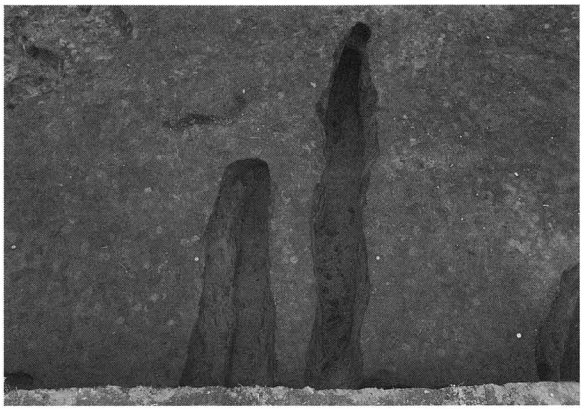
RD020・021平面（南から）

RD020断面（北西から）



RD021断面（北東から）

写真図版14　RD017土坑、RD018 ～ 021・025陥し穴状遺構



RD022・023平面（南西から）

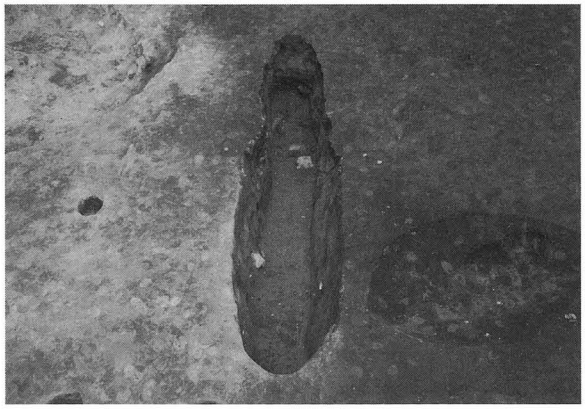
RD022断面（南西から）

RD023断面（南西から）

現地公開風景

RD024平面（南西から）

RD024断面（北から）

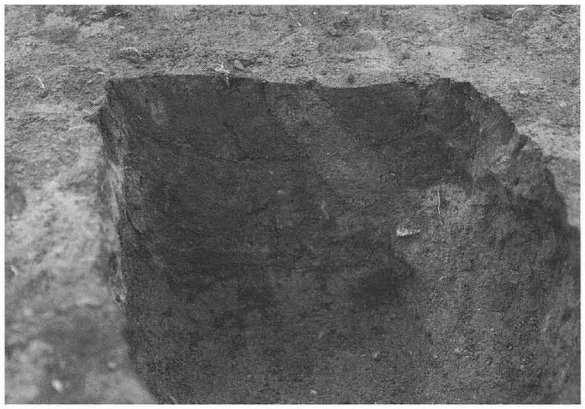


RD026平面（南東から）

RD026断面（南西から）

写真図版15　RD022 ～ 024・026陥し穴状遺構

RD027平面（南西から）



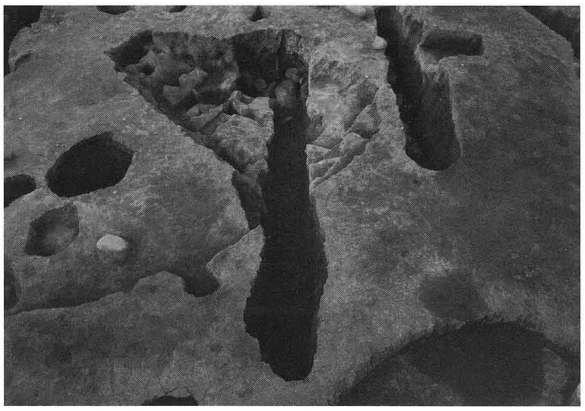
RD027断面（南西から）

RD028平面（南西から）

RD028断面（南西から）

RD029平面（南西から）

RD029断面（北東から）



RD030平面（南西から）

RD030断面（南西から）

写真図版16　RD027 ～ 030陥し穴状遺構

RD031平面（南西から）

RD031断面（北東から）

RD032平面（南西から）

RD032断面（南西から）

RD033平面（南西から）

RD033断面（南西から）

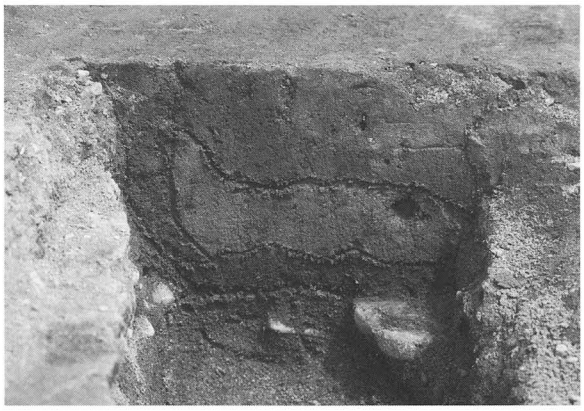
RD034・035平面（南から）

RD034断面（北東から）

写真図版17　RD031 ～ 035陥し穴状遺構

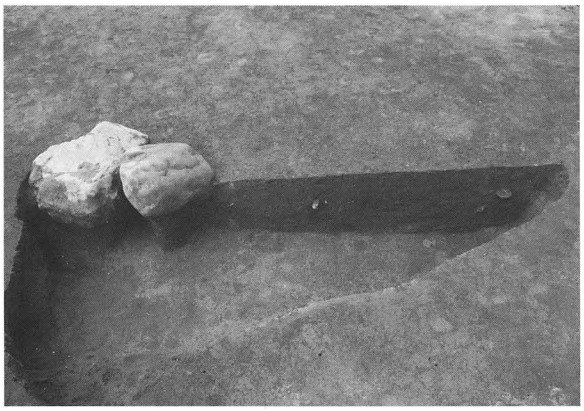
RD035断面（北から）

RD036平面（南から）



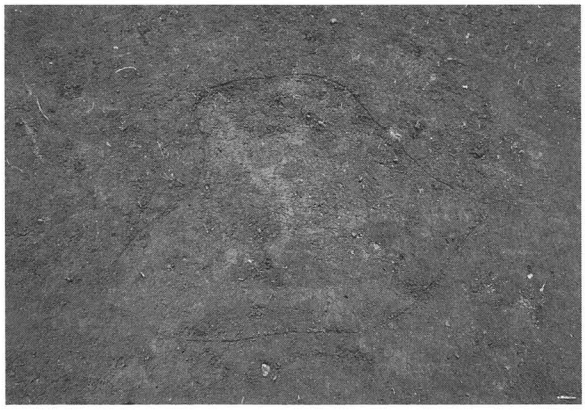
RD036断面（南から）

RD037検出状況（南東から）

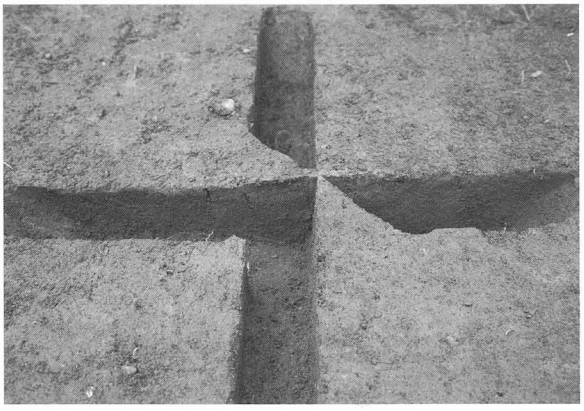


RD037断面（南東から）

RD037平面（南東から）



RF009検出状況（北東から）

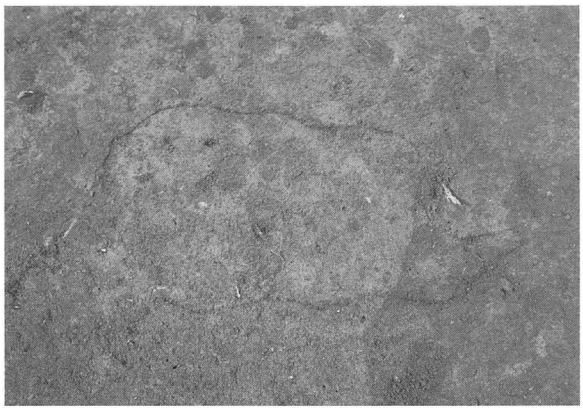


RF009断面（南東から）

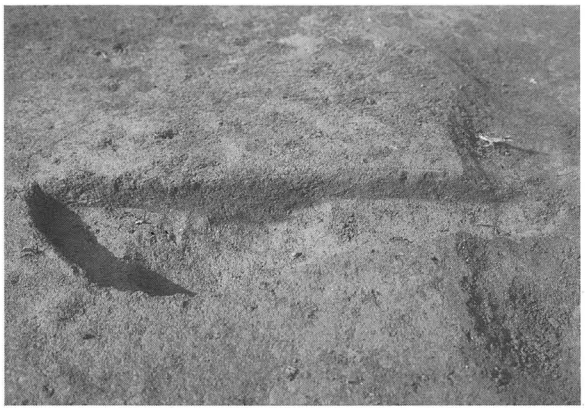
写真図版18　RD035・036陥し穴状遺構、RD037土坑、RF009焼土遺構

RF010平面（南西から）

RF010断面（南西から）

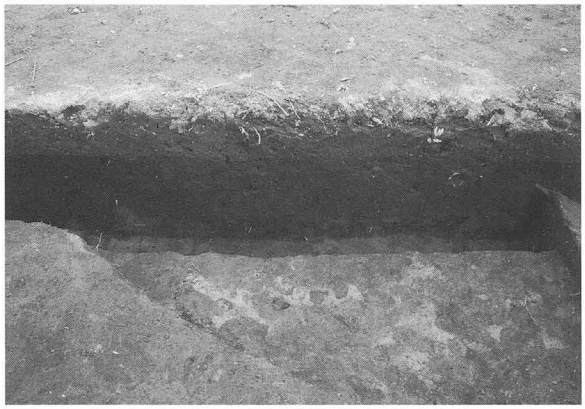


RF011平面（南西から）

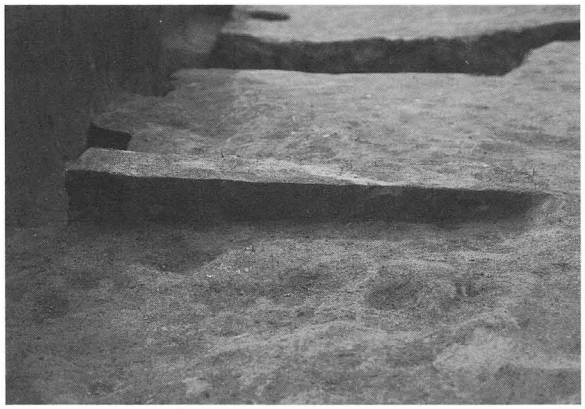


RF011断面（南西から）

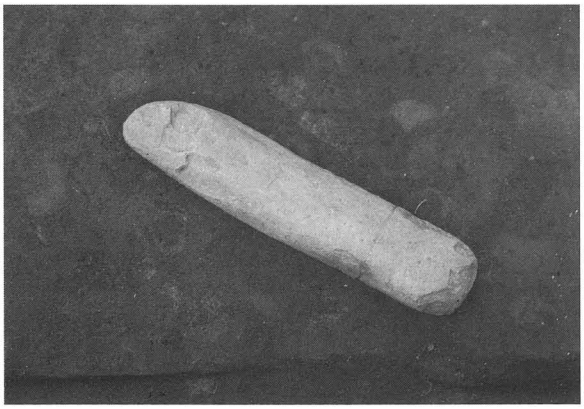
RF012平面（南西から）



RF012断面（北東から）

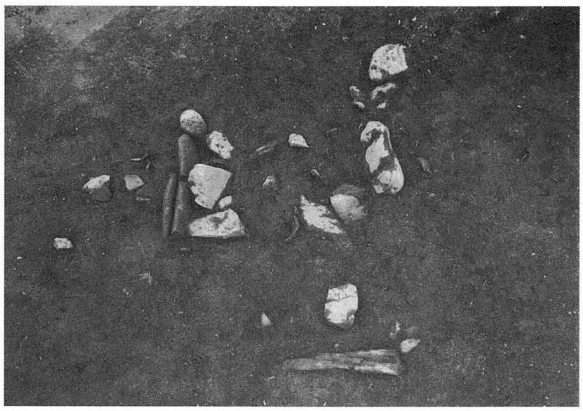


RF012断面（南東から）



RF012石棒260出土状況（南西から）

写真図版19　RF010～012焼土遺構



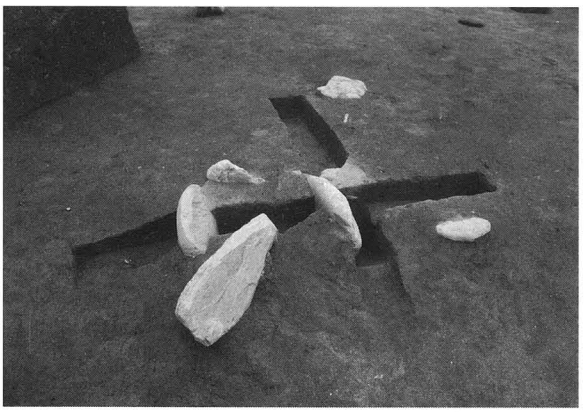
RH011検出状況（南から）

RH011断面（南から）

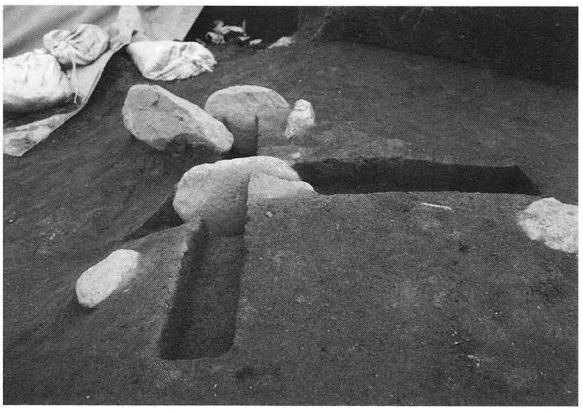
RH011断面（西から）

RH011掘り方完掘状態（南から）

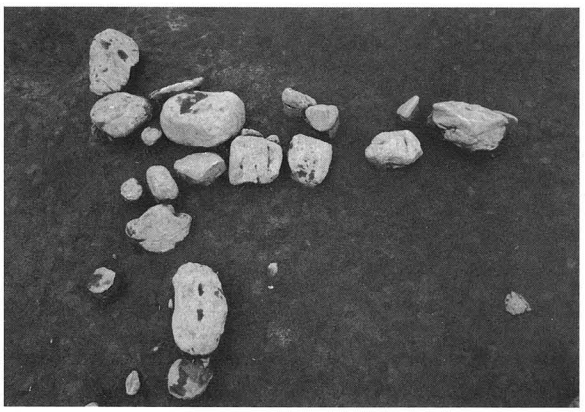
RH012検出状況（北西から）



RH012断面（南から）

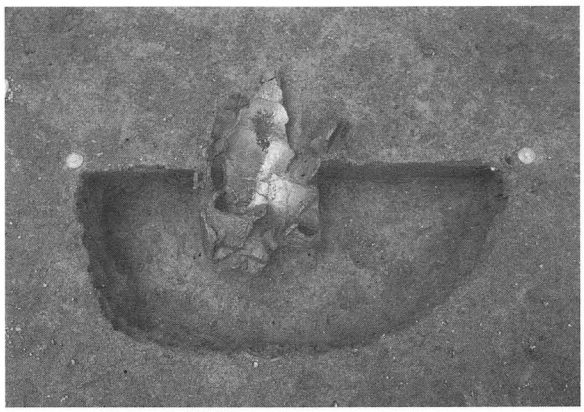


RH012断面（東から）

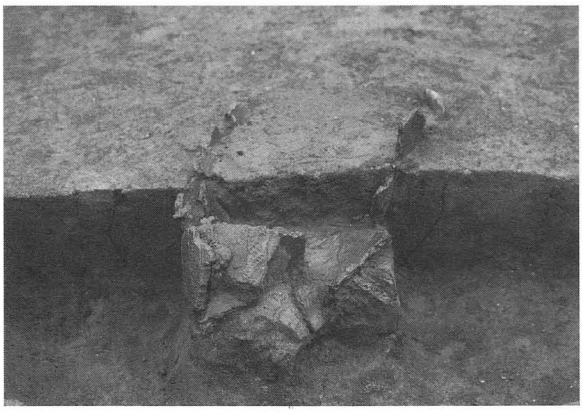


RH013平面（南から）

写真図版20　RH011・012配石遺構、RH013集石遺構

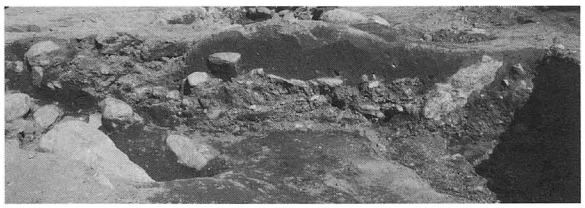


RP002平面（東から）



RP002断面（東から）

RG001平面（南東から）

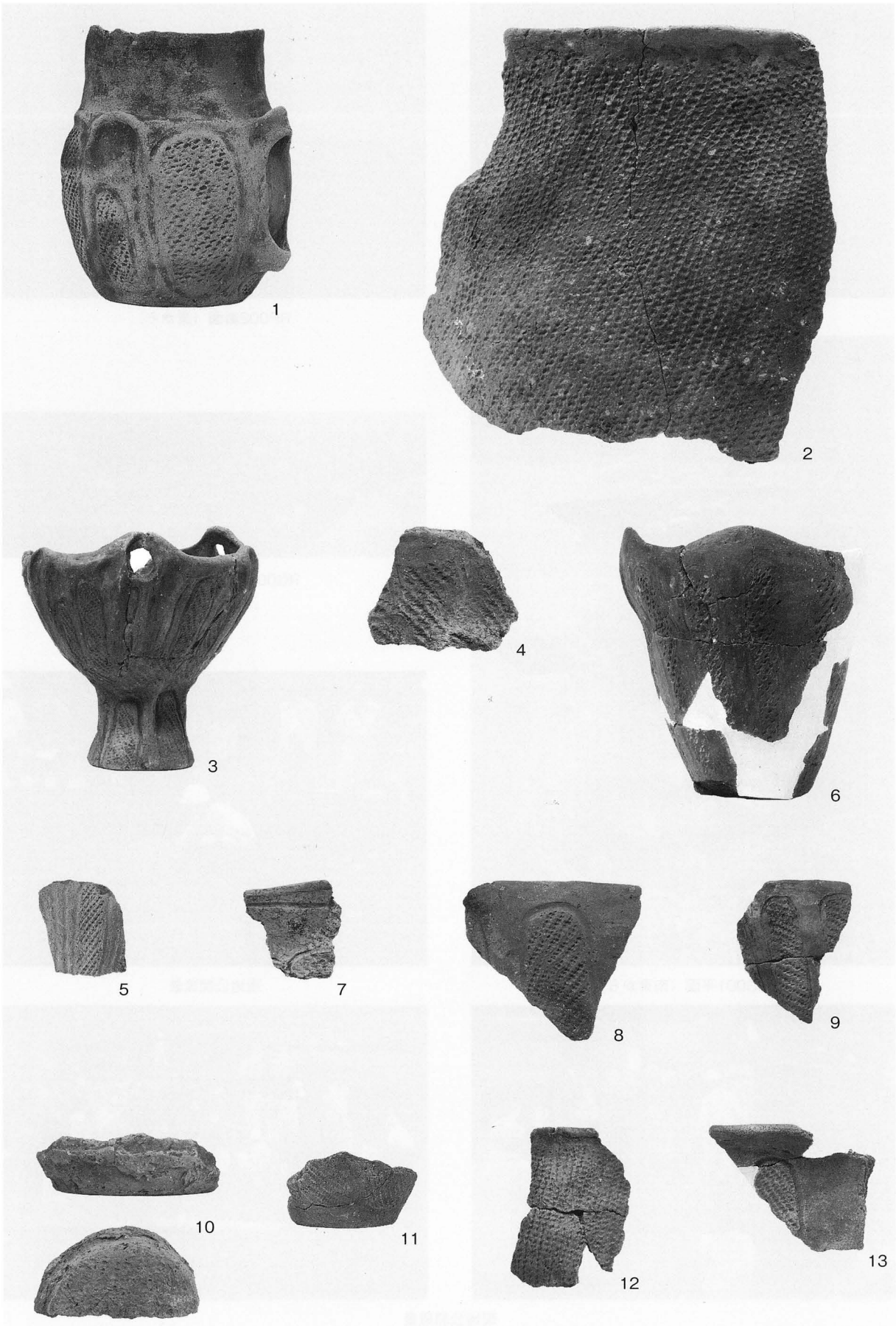


RG001断面（北西から）

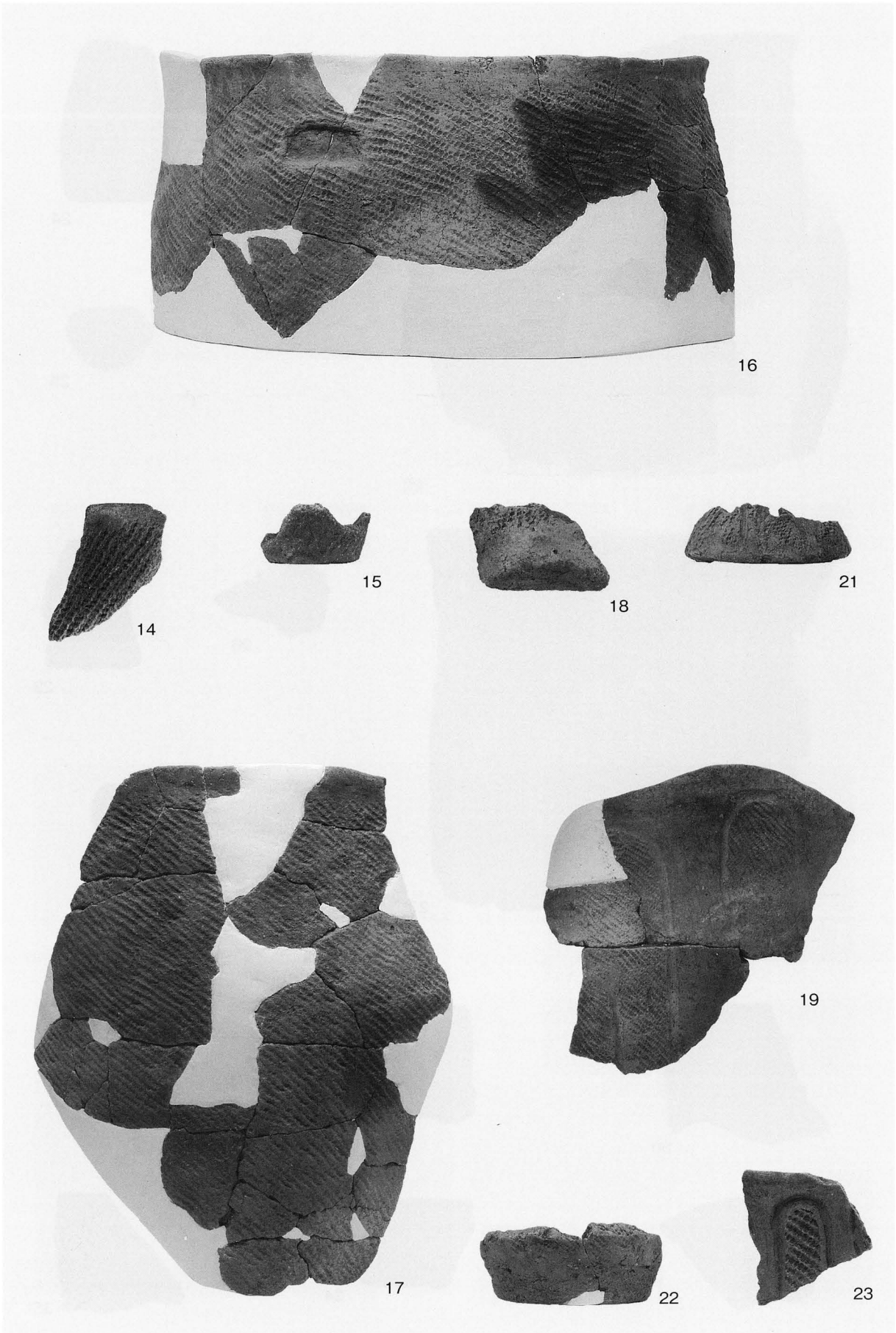
現地公開風景

現地公開風景

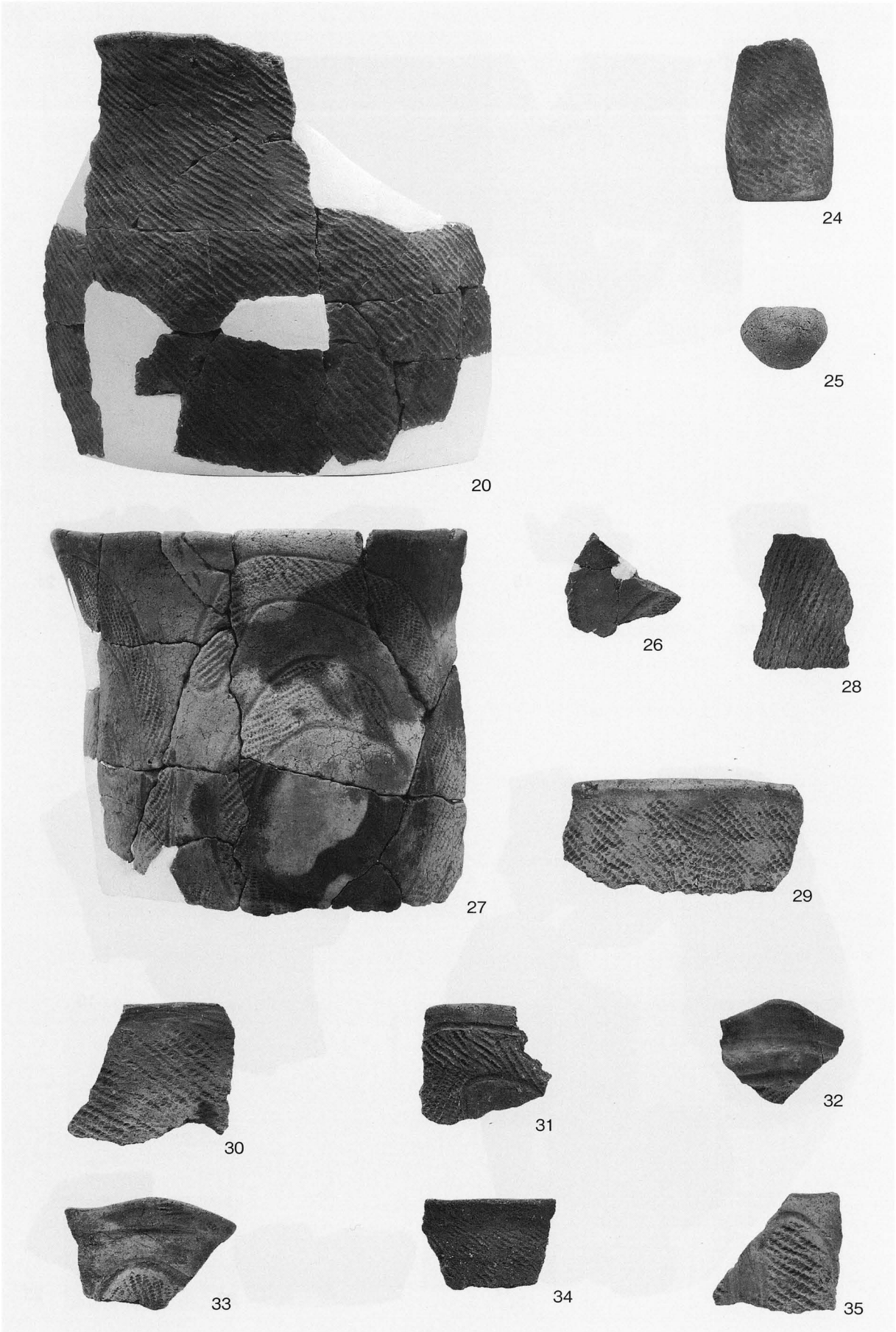
写真図版21　RP002埋設土器遺構、RG001溝、現地公開風景



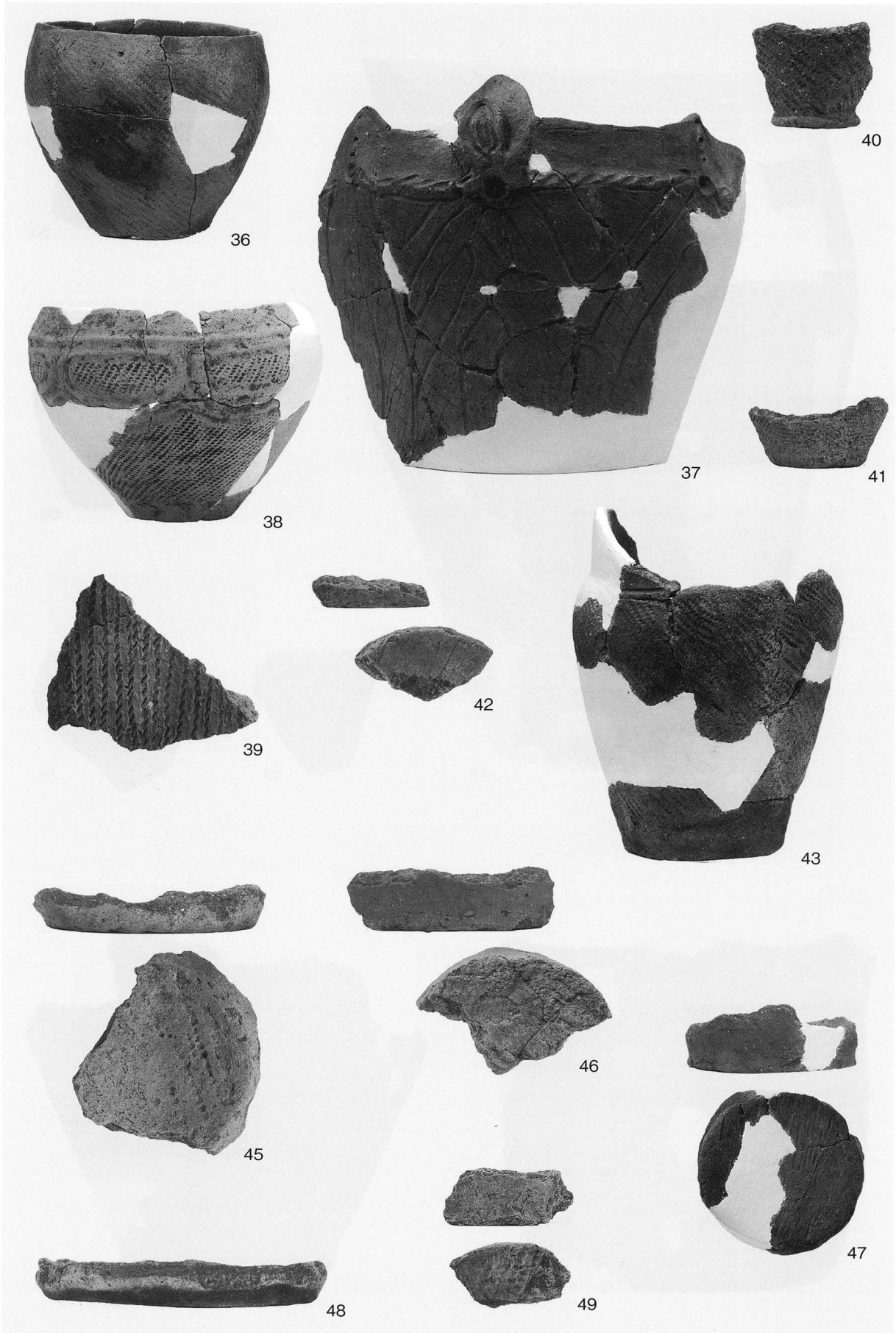
写真図版22　遺構内出土土器（1）



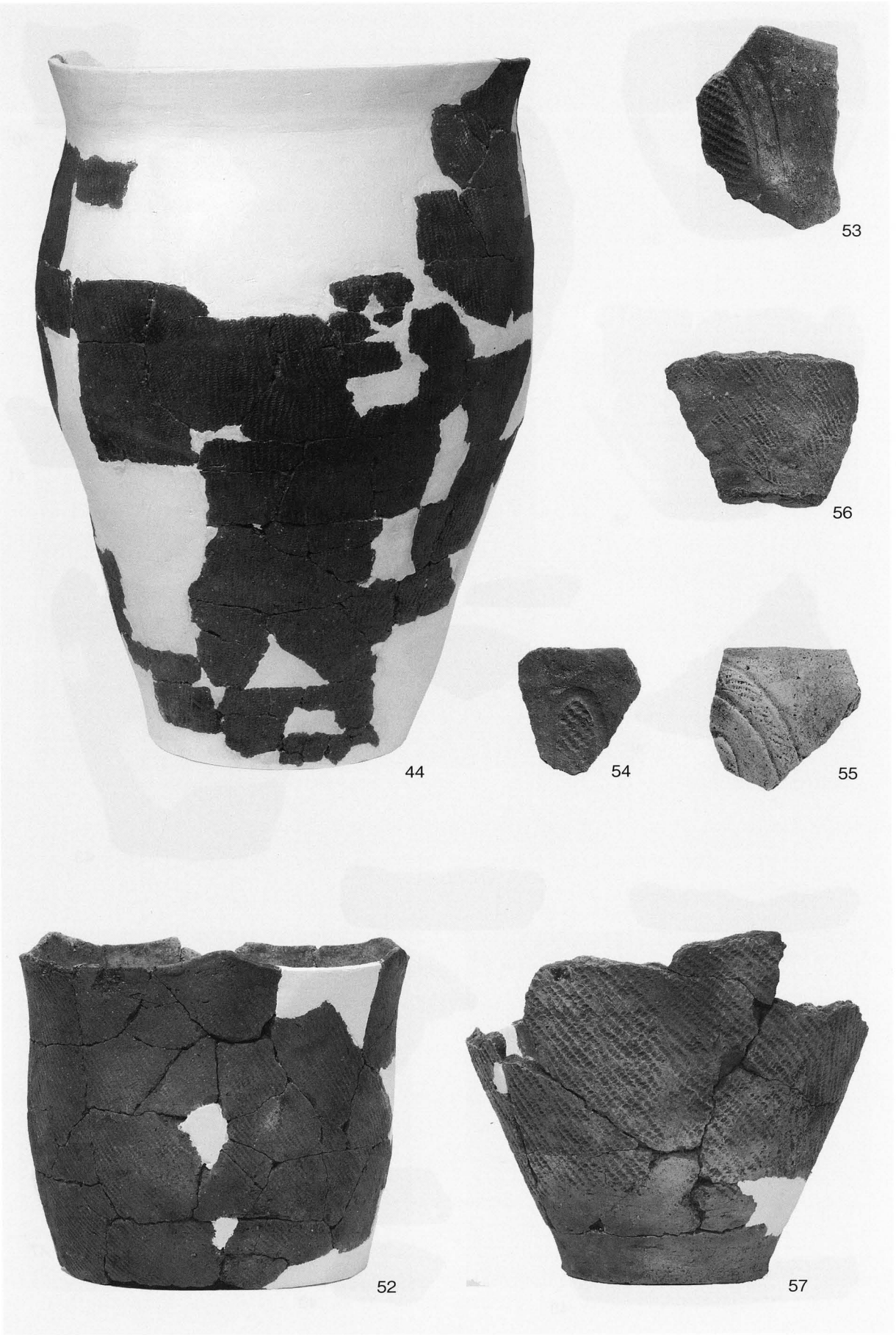
写真図版23　遺構内出土土器（2）



写真図版24　遺構内出土土器（3）

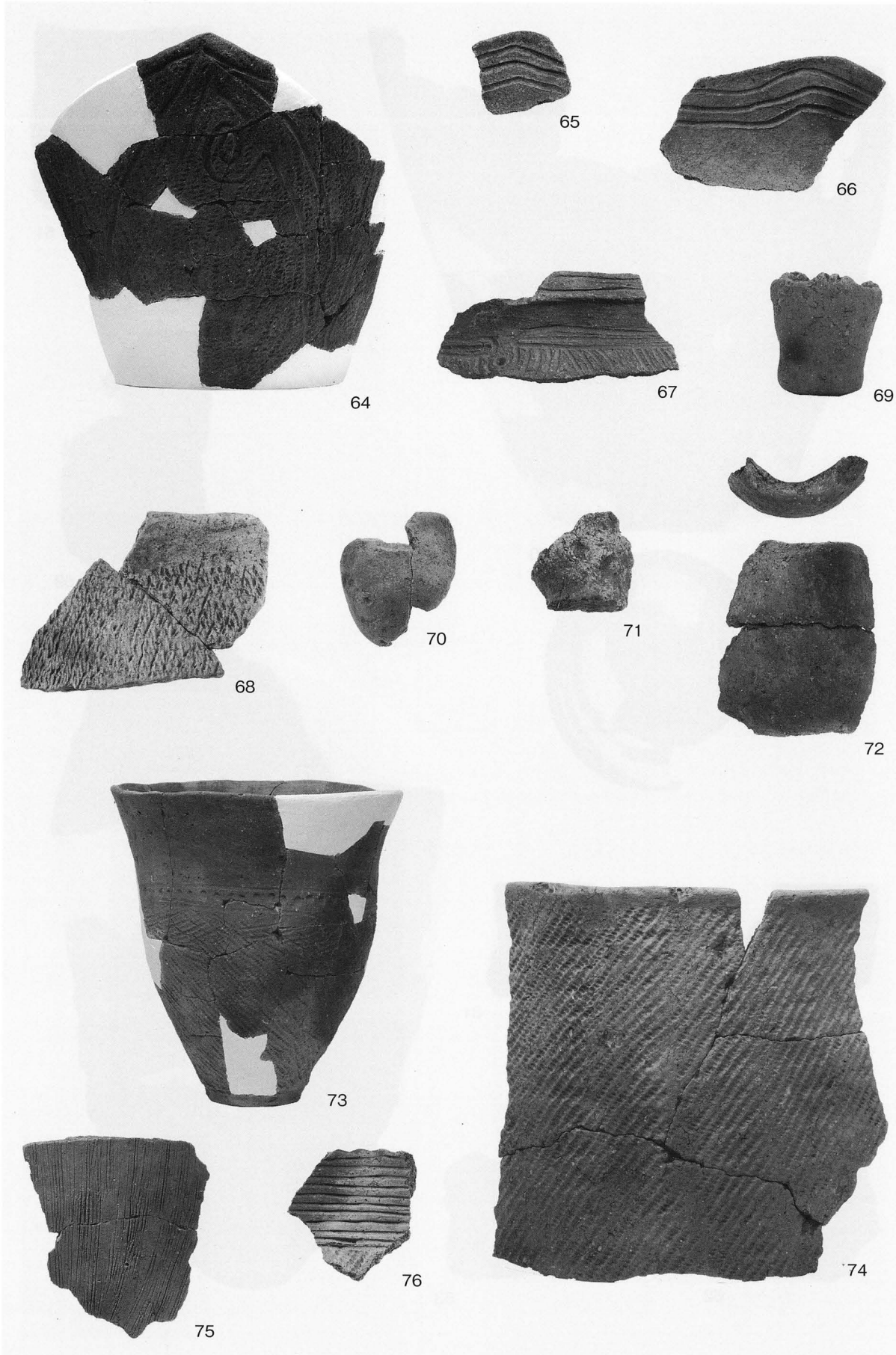


写真図版25　遺構内出土土器（4）

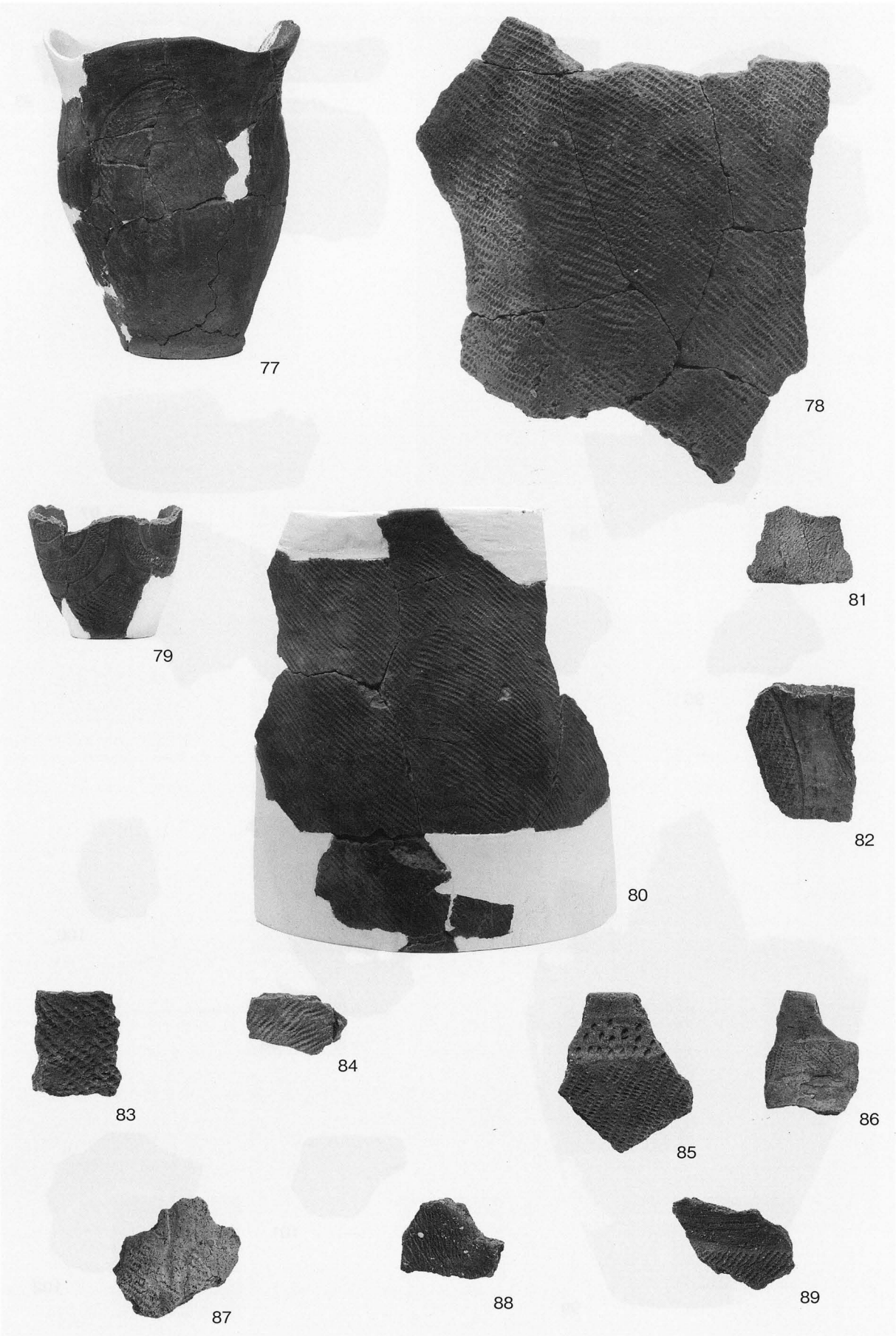


写真図版26　遺構内出土土器（5）

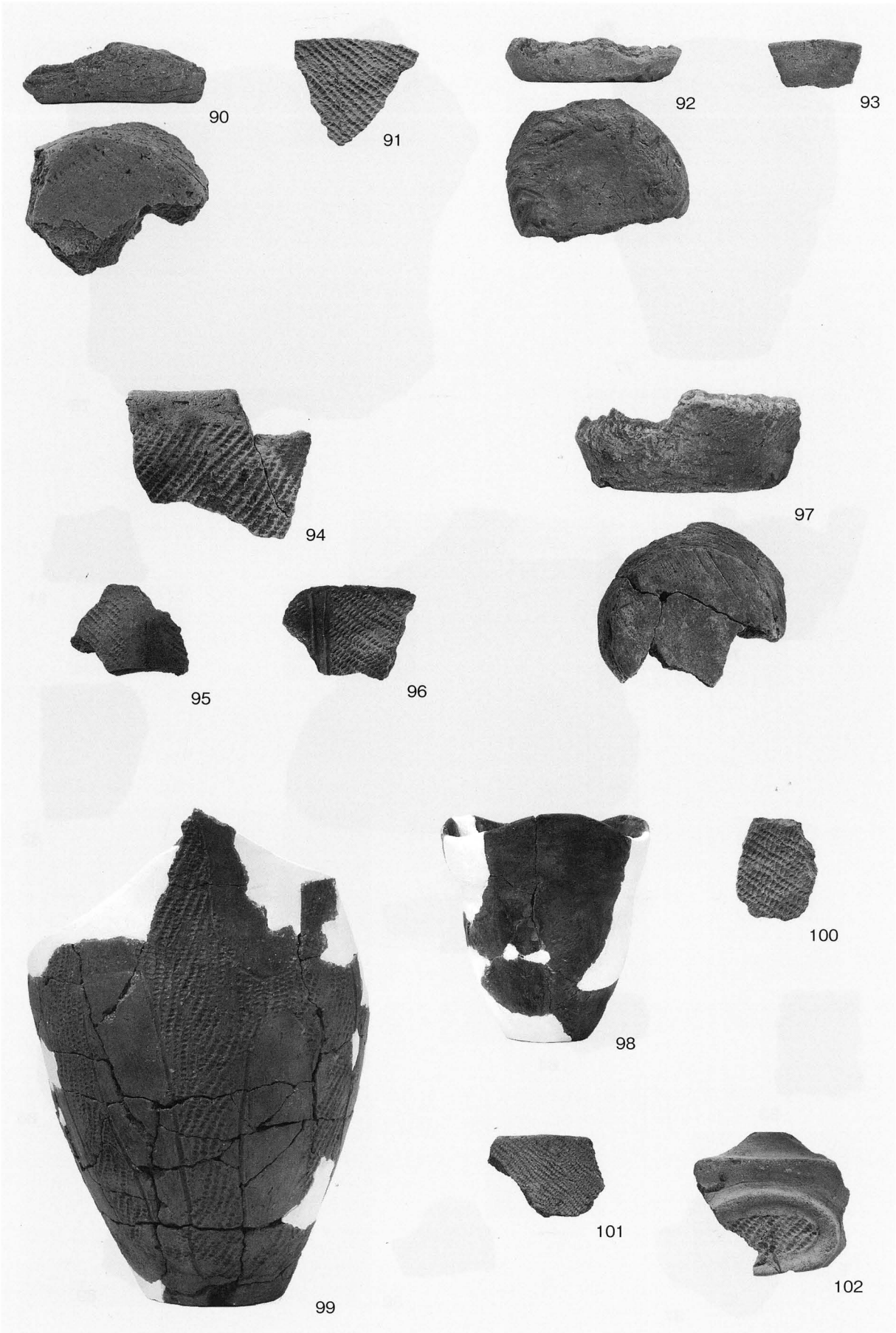
写真図版27　遺構内出土土器（6）



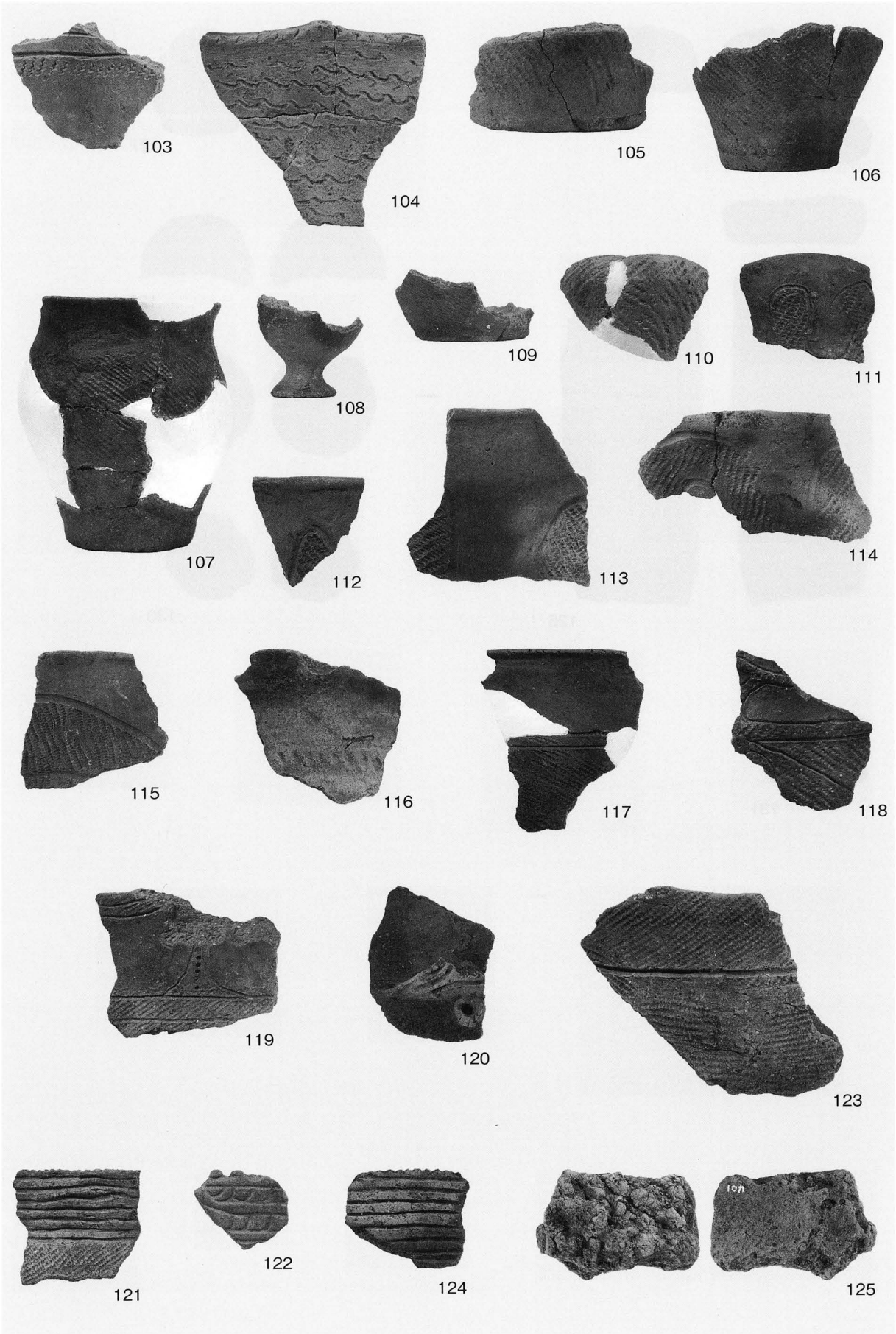
写真図版28　遺構内出土土器（7）



写真図版29　遺構内出土土器（8）

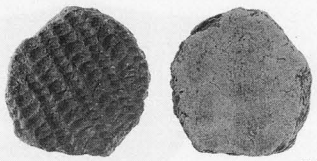


写真図版30　遺構内出土土器（9）



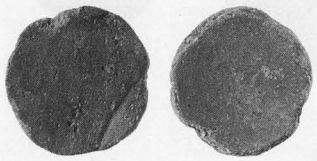
写真図版31　遺構外出土土器

126



127

128

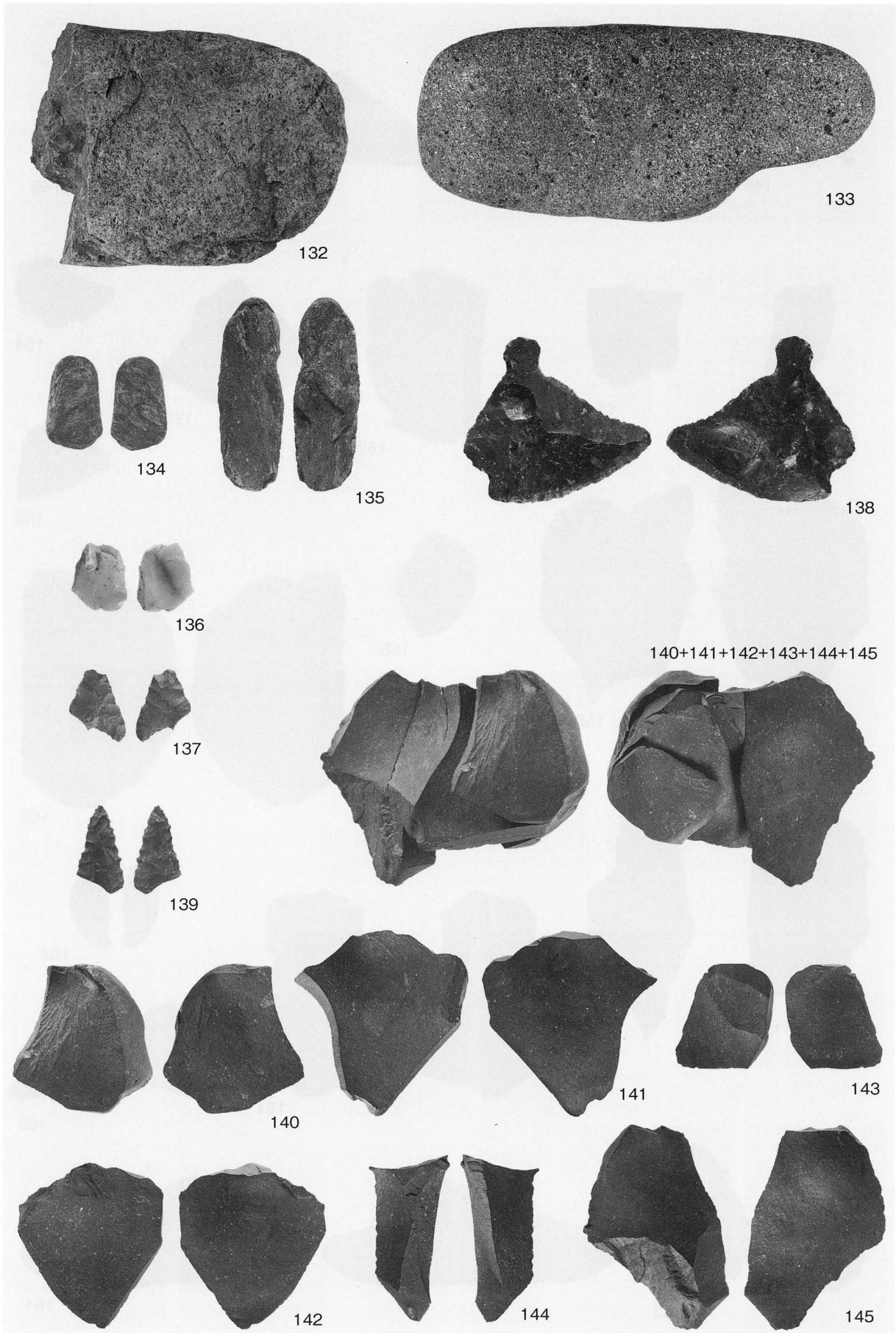


129

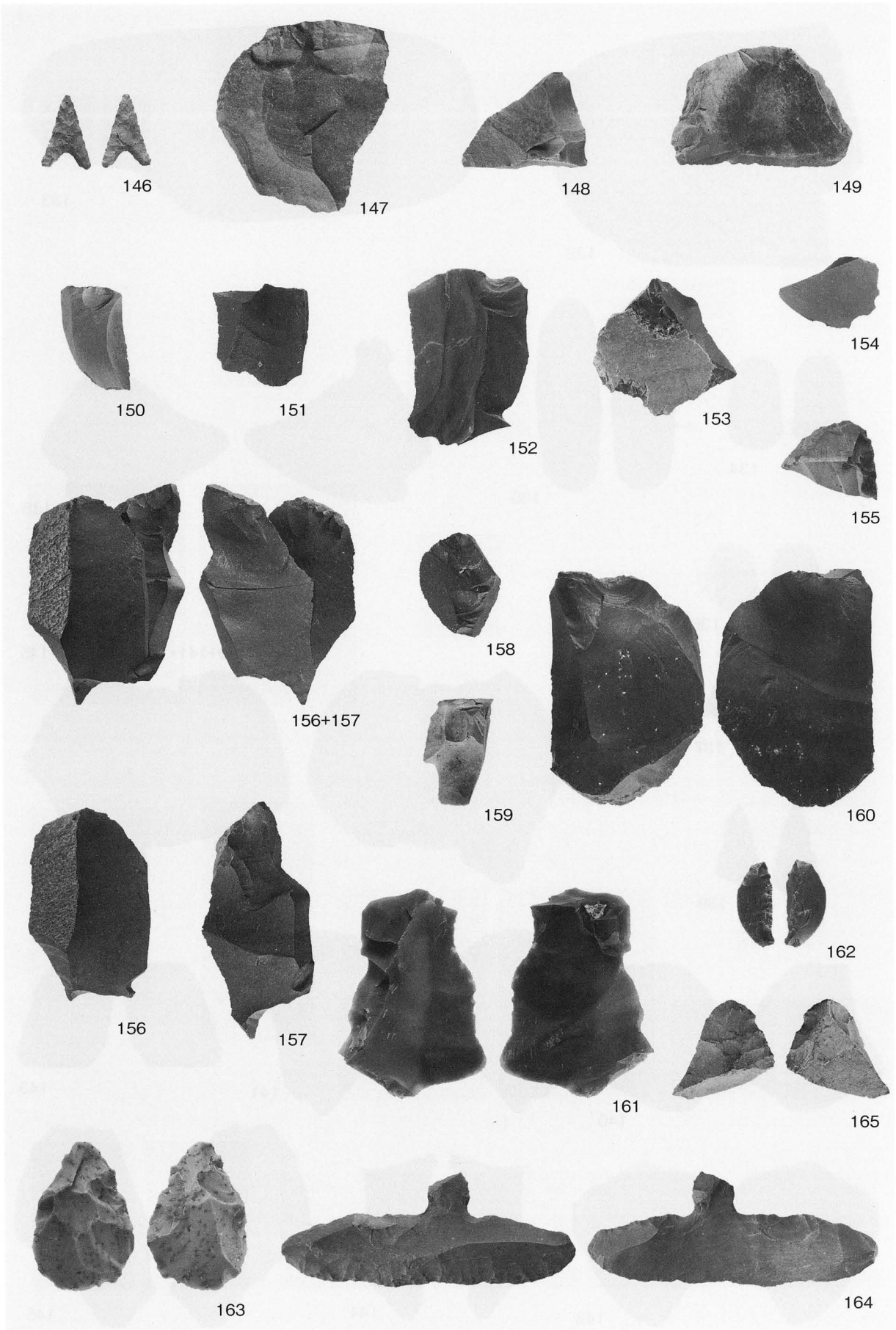
130

131

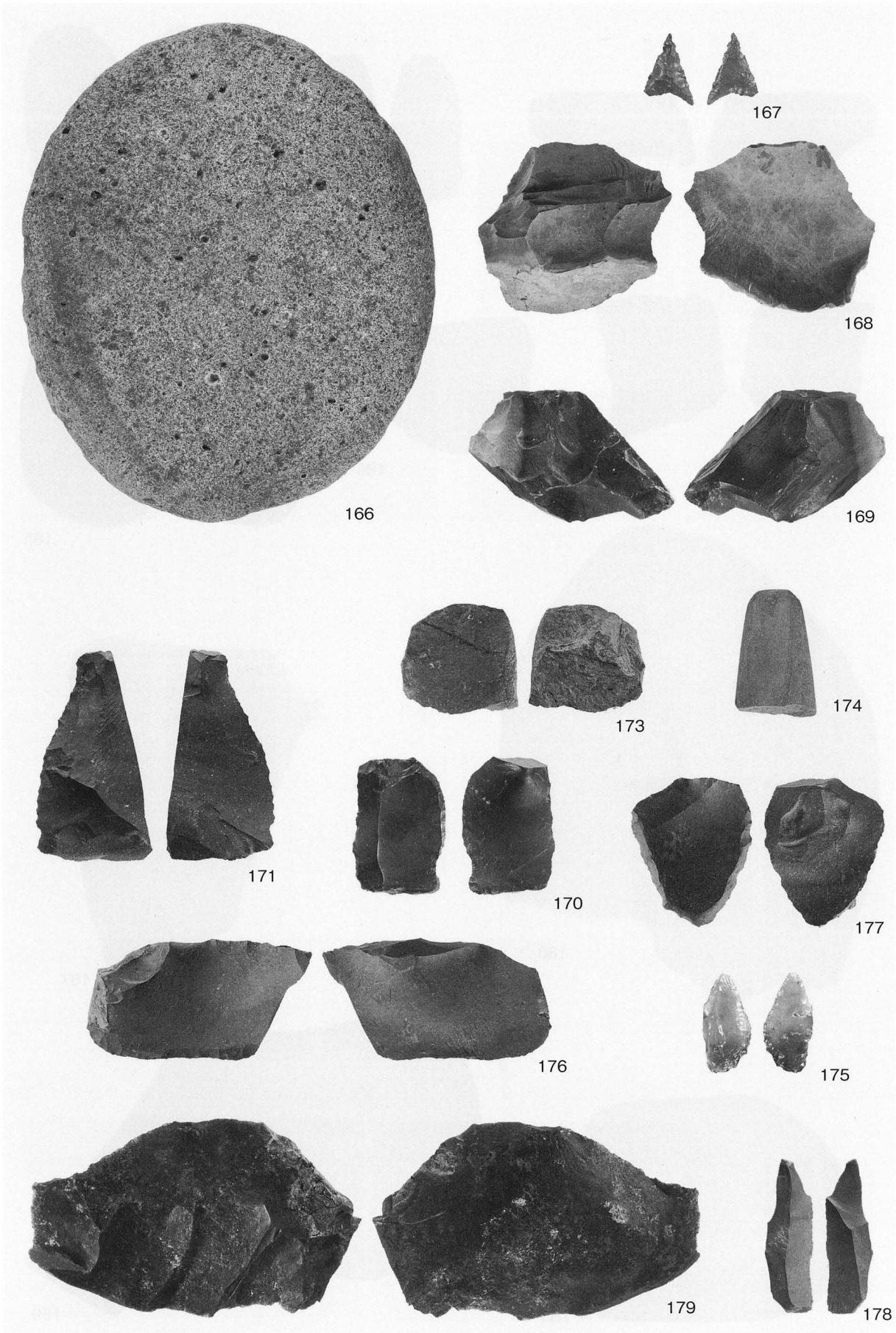
写真図版32　土製品



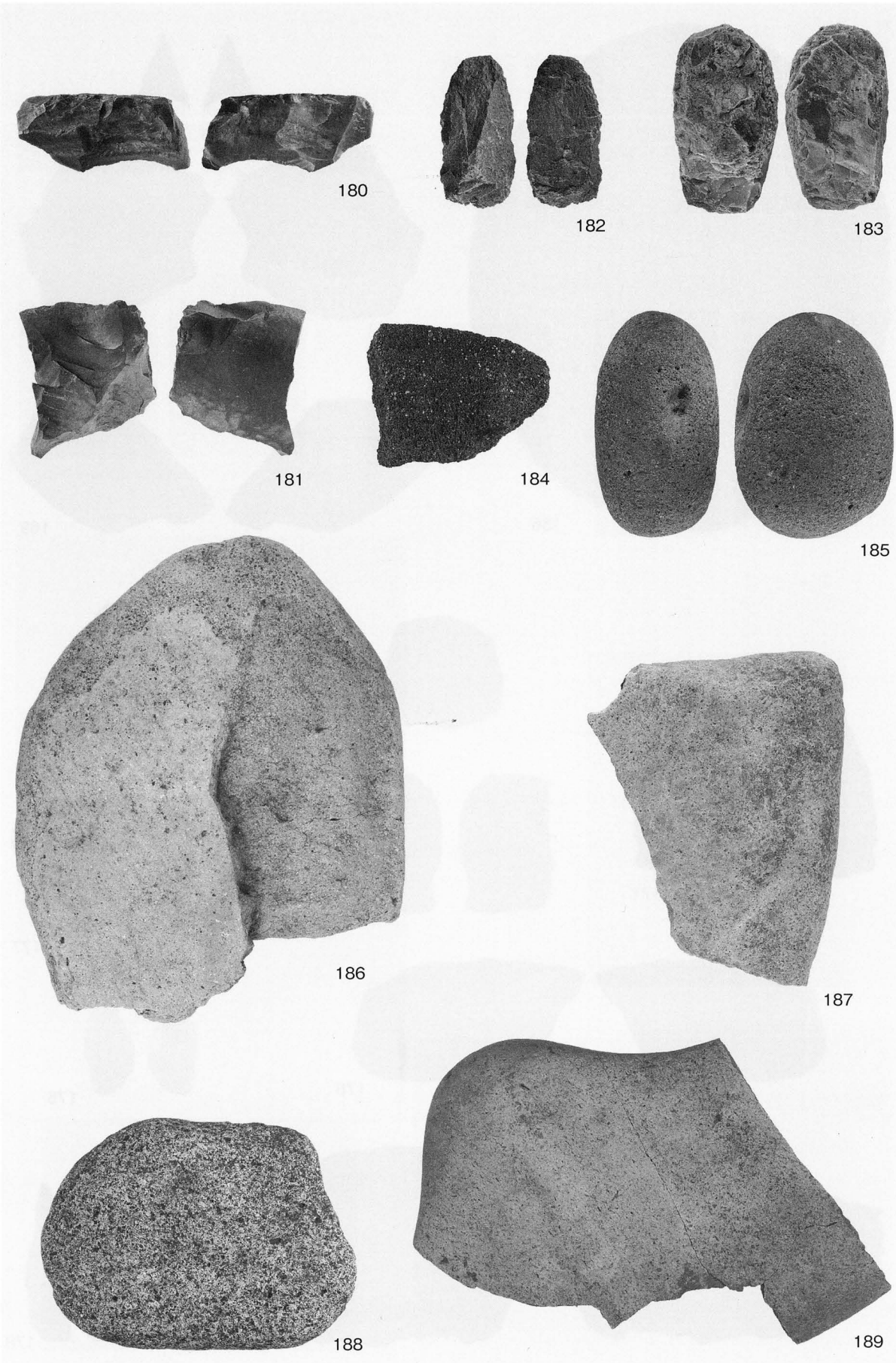
写真図版33　遺構内出土石器（1）



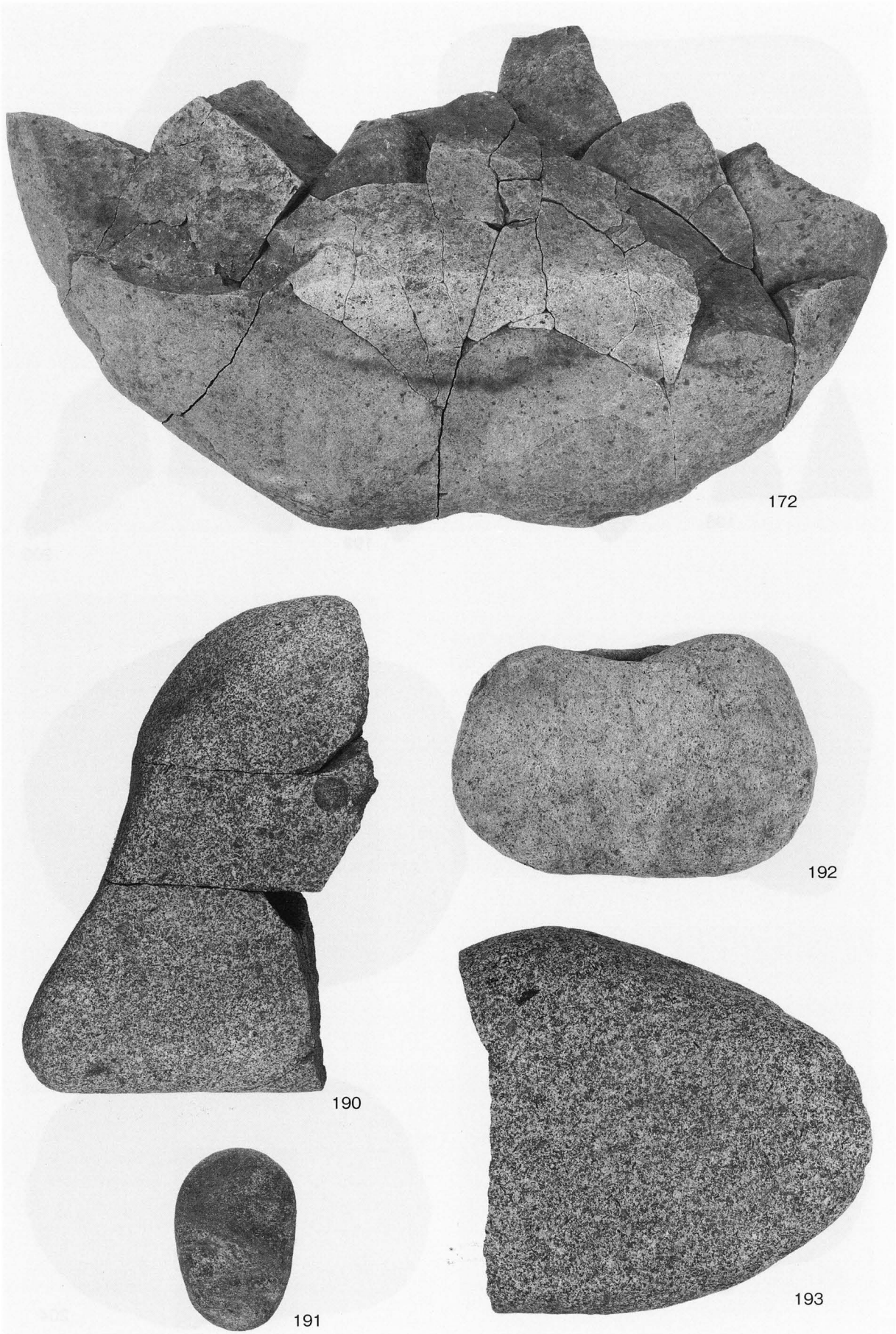
写真図版34　遺構内出土石器（2）



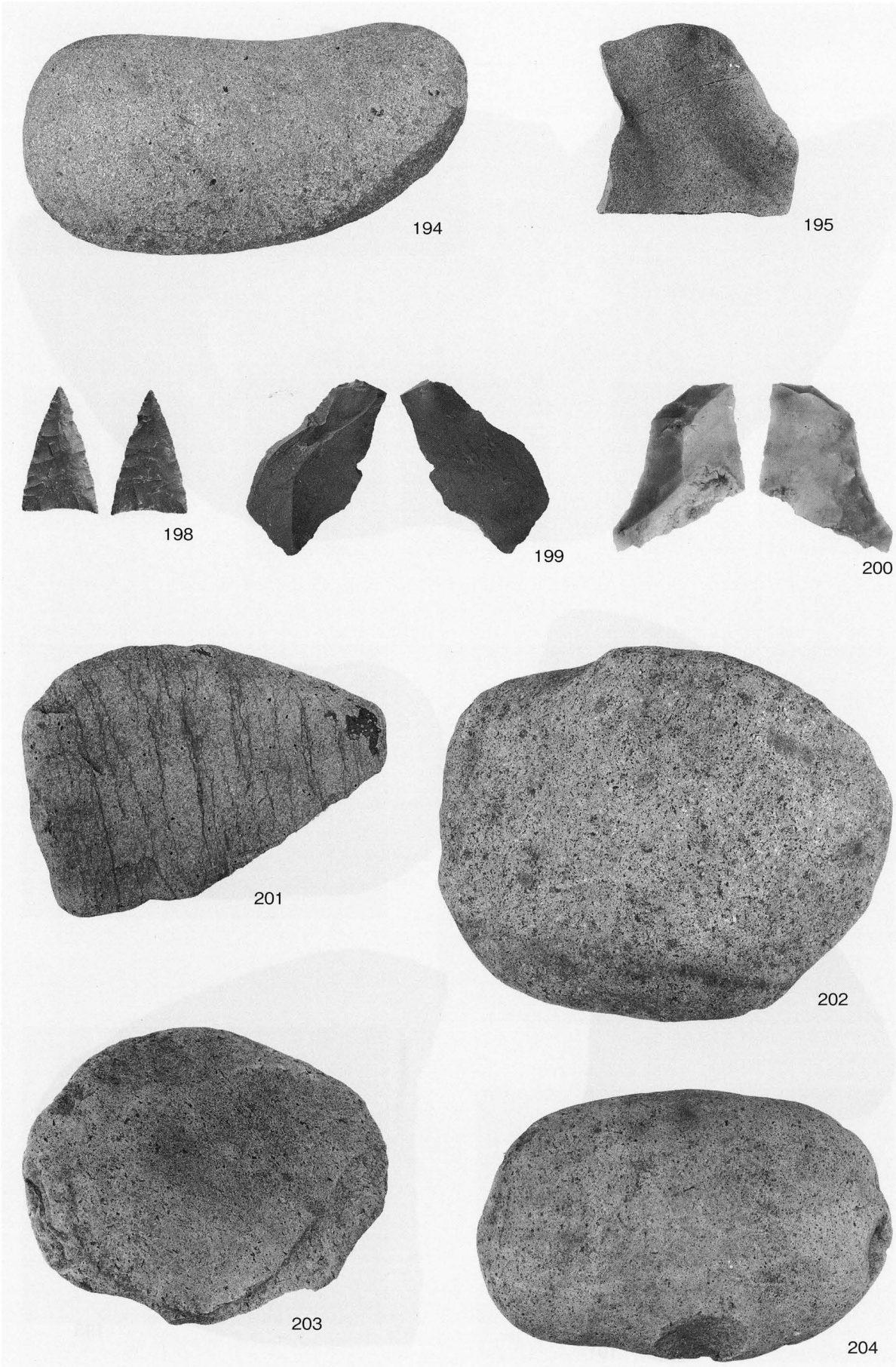
写真図版35　遺構内出土石器（3）



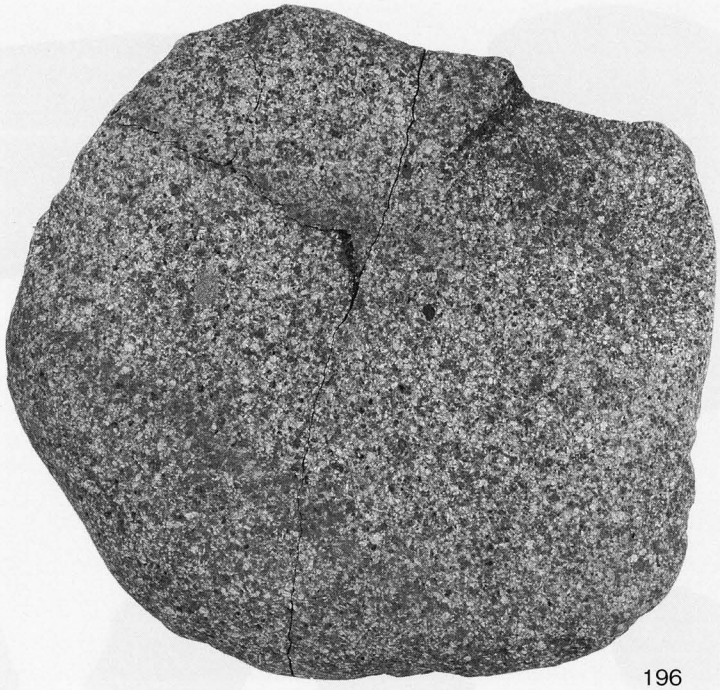
写真図版36　遺構内出土石器（4）



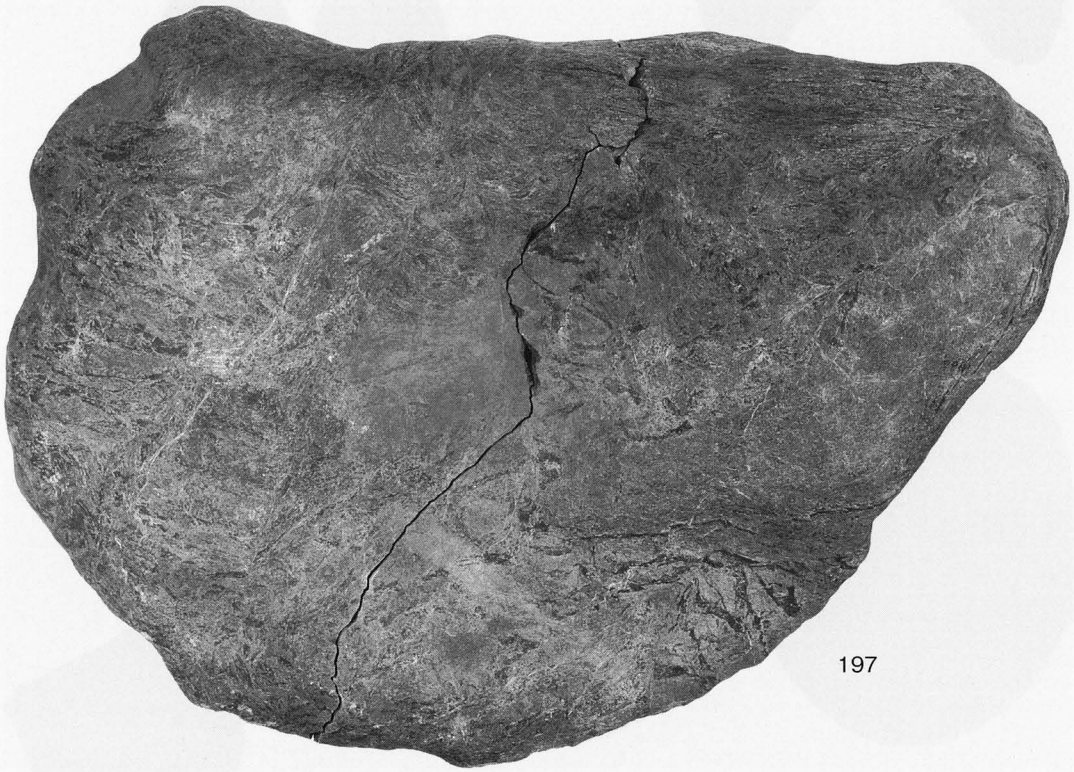
写真図版37　遺構内出土石器（5）



写真図版38　遺構内出土石器（6）

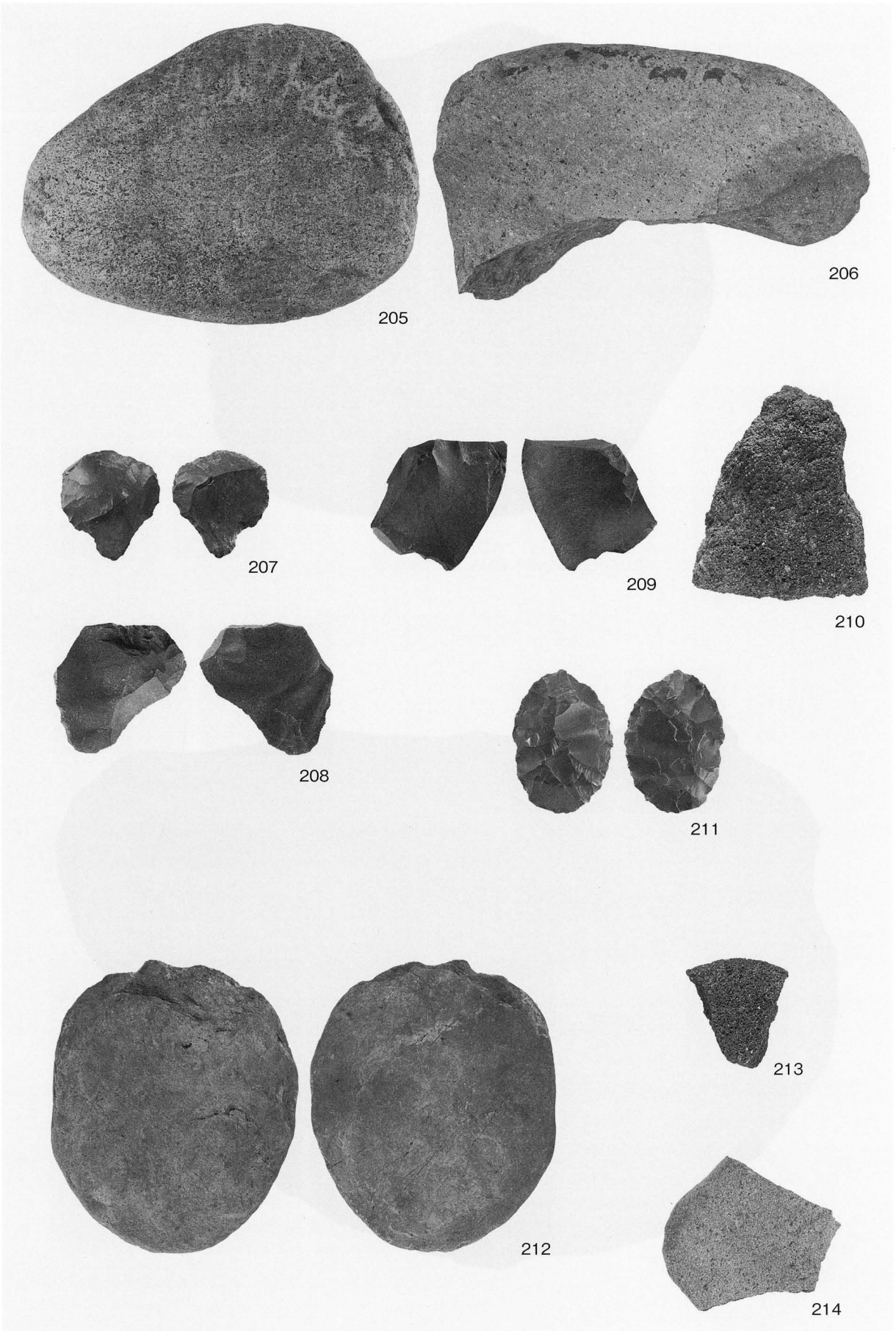


196

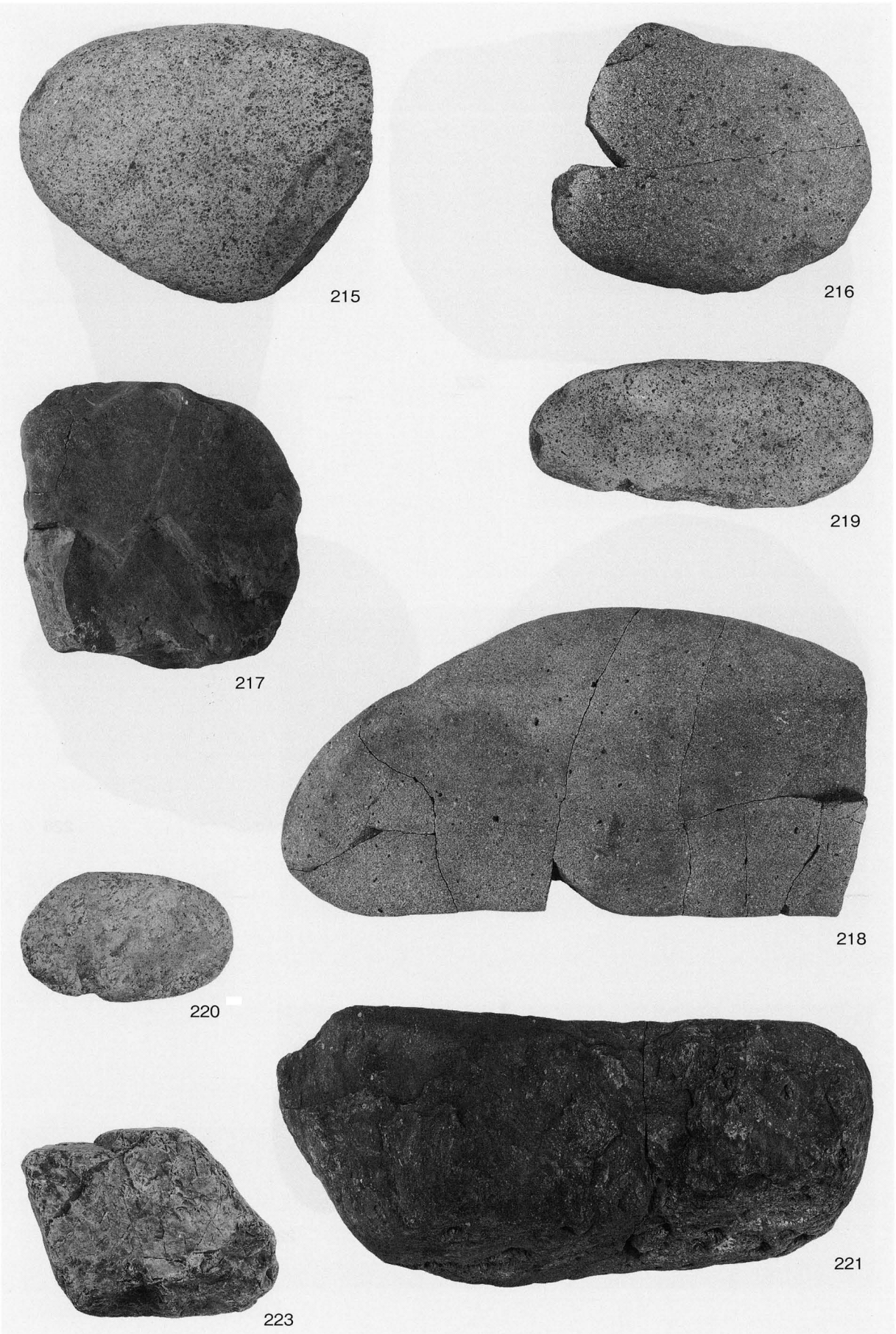


197

写真図版39　遺構内出土石器（7）



写真図版40　遺構内出土石器（8）

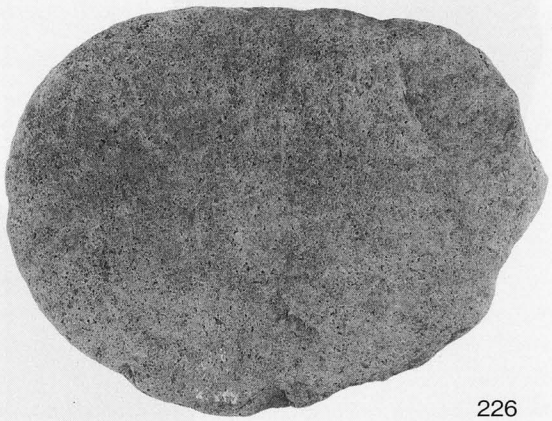


写真図版41　遺構内出土石器（9）

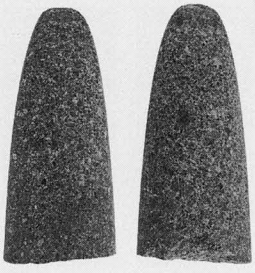
222

224

225



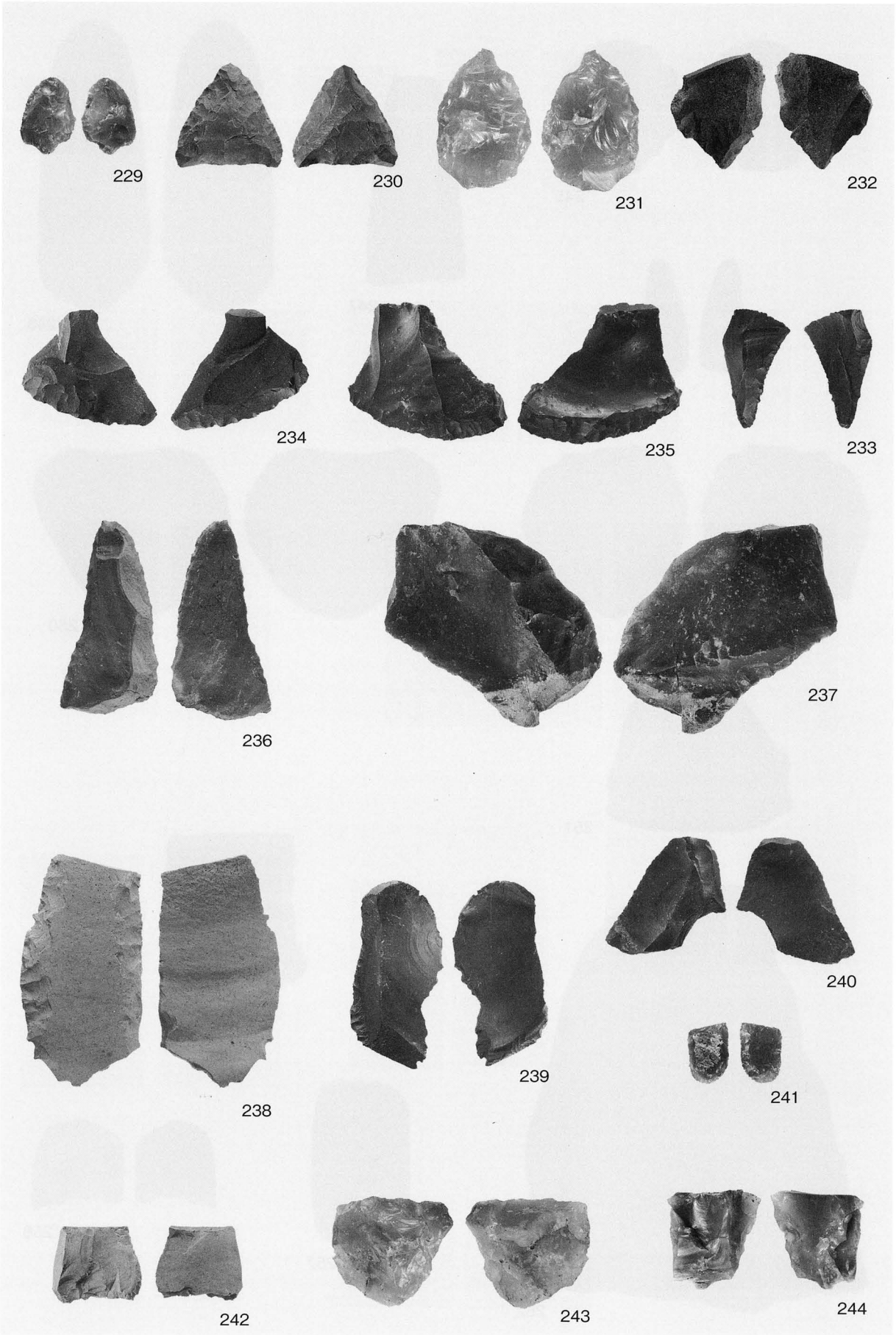
226



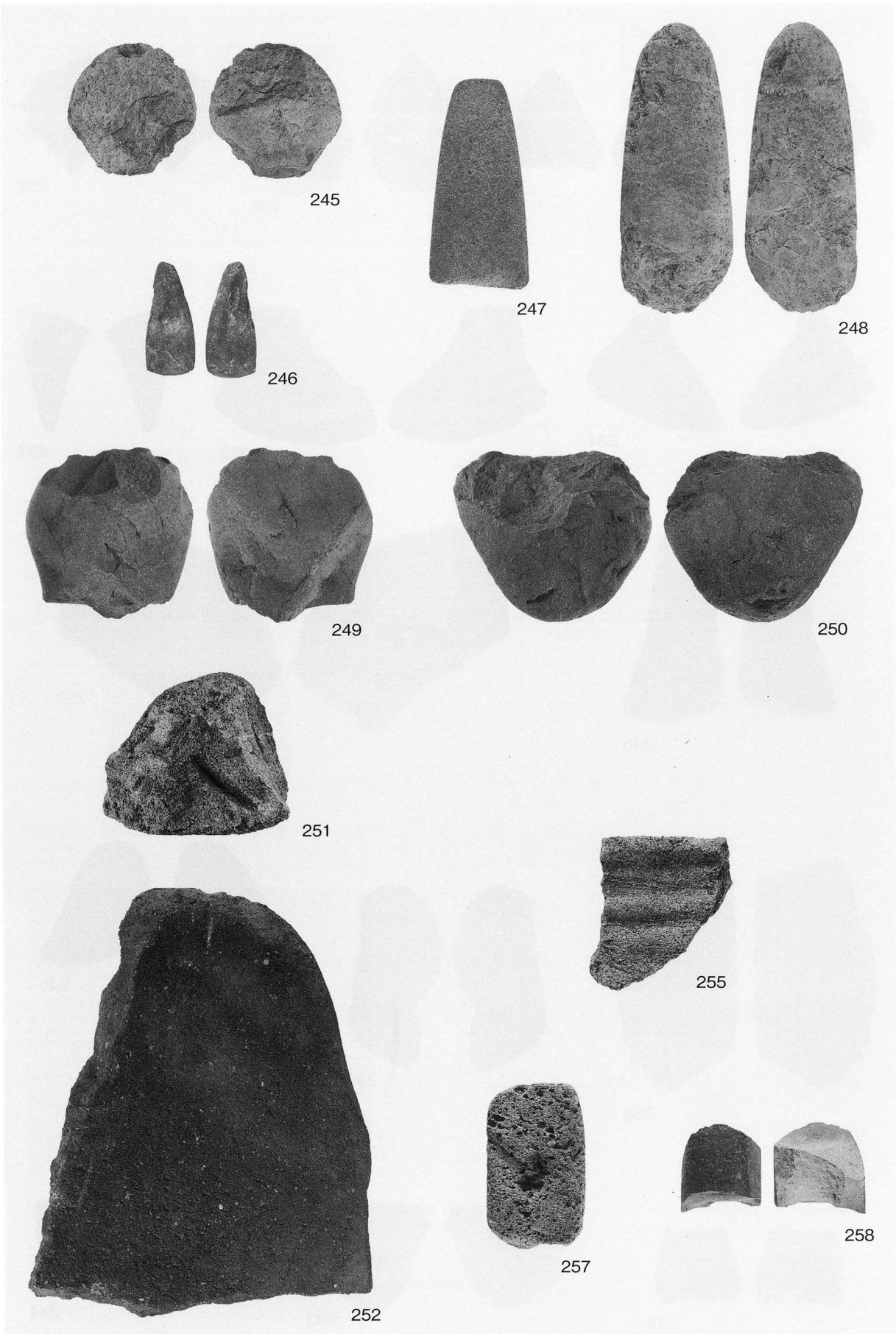
227

228

写真図版42　遺構内出土石器（10）

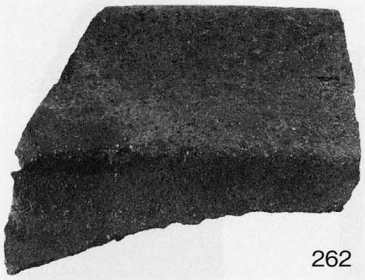


写真図版43　遺構外出土石器（1）



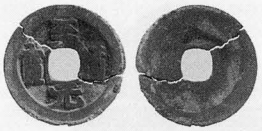
写真図版44　遺構外出土石器（2）、石製品（1）

写真図版45　石製品（2）



262

263



264

265

写真図版46　須恵器、陶器、銭貨、植物遺存体

報告書抄録

ふりがな	とちゅういせきだいさんじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	戸仲遺跡第３次発掘調査報告書
副書名	一般国道106号簗川道路起点部改良工事関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第559集
編著者名	丸山浩治・菅野紀子
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL (019) 638-9001
発行年月日	2009年12月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
戸仲遺跡第３次	岩手県盛岡市川目第４地割51-3ほか	03201	LE28-0232	39度40分25秒	141度13分45秒	2008.04.11～2008.06.17	1,500㎡	一般国道106号簗川道路起点部改良工事に係る緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
戸仲遺跡第３次	集落跡	縄文時代	竪穴住居　８棟 土坑　６基 陥し穴状遺構　19基 焼土遺構　４基 配石遺構　２基 集石遺構　１基 埋設土器遺構　１基	縄文土器・大コンテナ７箱 縄文石器・中コンテナ15箱 石製品９点 土製品６点 須恵器１点 陶　器１点 銭　貨１点	埋設土器の伴わない石組のみの複式炉を有する竪穴住居
		近世以降	溝　１条		

要約

戸仲遺跡は、ＪＲ東北本線盛岡駅の南東約8.7km、北上川支流の簗川によって形成された河岸段丘上に立地する。標高は190ｍ前後で、現況は水田、畑地、原野である。本遺跡第１・２次調査区は、今次調査区の北西側に位置する。

今次調査区は、国道106号南側の法面下から簗川右岸にあたり、最低位の河岸段丘端部（上段）と旧河道（下段）に分けられる。上段部分では、縄文時代中期後葉～末葉の竪穴住居８棟と、重複関係から竪穴住居より古期の構築と判断される陥し穴状遺構が規則的な配置をもって19基検出された。竪穴住居は当該期特有の複式炉を有するもので、埋設土器の伴わないすべて石組の形態である。

調査結果から、簗川に極めて近い地点に縄文時代中期後葉～末葉の集落が存在することが明らかとなったが、第１・２次調査区において当該期の遺構はほとんど検出されていない。時期による選地の違いを示す事象と考えられる。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第559集

戸仲遺跡第３次発掘調査報告書

一般国道106号簗川道路起点部改良工事関連遺跡発掘調査

印　刷　平成21年12月21日
発　行　平成21年12月24日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　岩手県盛岡地方振興局土木部簗川ダム建設事務所
〒020-0817　岩手県盛岡市東中野字沢田94－1
電話（019）652－8822

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番地1号
電話（019）654－2235

印　刷　(株)橋本印刷
〒020-0015　岩手県盛岡市本町通1丁目15番29号
電話（019）652－1354

©（財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009